第7号の刊行にあたって

アジア現代女性史研究会代表　藤目ゆき

研究会の2011年度年報『アジア現代女性史』第7号を、ようやくお届けできることになりました。

本号は、韓国の梁東淑さんと金貴玉さんからご寄稿を頂きました。また、研究会が取り組んでいる「冷戦時代の女性運動とアジア」に関する研究の成果の中から、二つの特集を編みました。一つは、「ドー・アマー　ビルマ人民の母と呼ばれた女性」、もうひとつは「WIDFの朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち」です。

ドー・アマー（1915年～2008年）は世界的に著名なジャーナリスト・作家であり、1953年にコペンハーゲンで開催された国際民主女性連盟（WIDF）の世界女性大会をはじめ、さまざまな国際会議にビルマを代表して出席・発言しています。本号では、ドー・アマーと長年にわたる交流のあった南田みどりさんにドー・アマー像について執筆して頂きました。また、これとあわせてドー・アマー自身の手になる随筆の邦訳やドー・アマーの生涯の年譜、世界女性大会での発言、そしてさまざまなメディアに掲載されたドー・アマーに関する記事などの邦訳を参考資料として掲載しました。ビルマでは2010年11月以来、総選挙とそれに続くアウンサンスーチー氏の軟禁解除、2011年の国会開会、アウンサンスーチー氏と政権との「対話」、一部政治囚の釈放といった一連の出来事が続き、NLD（国民民主連盟）は2012年4月に予定されている議会補欠選挙にアウンサンスーチー氏を含む候補者を立てる方針である、と報じられています。今後のビルマの行方を、私たちも注意深く見つめてゆきたいと思います。民主主義を追求し続けたドー・アマーの生涯を知ることは、折々のニュースで報じられる表面的な出来事でなく、その背後で営々と積み重ねられてきた、民主化を求めるビルマ民衆の苦闘を理解する手がかりになるでしょう。

「WIDFの朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち」は、国際民主女性連盟（WIDF）が朝鮮戦争中に北朝鮮へ派遣した調査団に光をあてる試みです。朝鮮戦争下の米・韓軍による虐殺の真相究明・過去清算は、韓国における民主化運動を背景として韓国の民間団体・学術団体が共同して追求し、盧武鉉大統領時代には本格的な国家的事業の一部になりました。李明博大統領の下で事業の後退があったようですが、米・韓軍による民間人虐殺の事実を再び覆い隠すことはとうてい不可能なことでしょう。2011年にソウルの新市長に選出された朴元淳氏は、1980年代から人権派の弁護士・民主運動家として著名でしたが、朝鮮戦争下の米・韓軍による虐殺事件の真相究明と賠償請求の公論を喚起した先駆者の一人でもあります。このように韓国で朝鮮戦争を民衆の経験から洗い直す事業が進展している一方、他の西側諸国では、「朝鮮の虐殺」をめぐる新しい研究はほとんどありません。そこで本号の特集では、1950年代が「女性史の空白」であったように扱ってきた冷戦的な枠組み自体を問い直すとともに、ジレット・ジーグレーとモニカ・フェルトンという調査団に参加した二人の女性をとりあげています。この特集が、女性史の中でも滅多に語られなかった、冷戦の壁を越えようとした女性たちの活動に迫る一歩になればと念じています。

2012年1月23日

目次

第7号の刊行にあたって （藤目ゆき） —1

特集1 ドー・アマー ビルマ人民の母と呼ばれた女性

ルードゥ・ドー・アマーとは何者か （南田みどり）——6

資料1.『母の昔語り』第3巻 序文 —19
2. ビルマの若い娘たちの民族服 —19
3. 年譜 —21

補足資料：権力に対して真実を語って —28
訃報 —34
信念と勇気をもったビルマ人文筆家 —36
コペンハーゲン世界女性大会の発言より —40

特集2 WIDFの朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち

【特集趣旨】WIDFの朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち
ー鉄のカーテンを越えて （藤目ゆき）——44

地図 —51

朝鮮戦争国際女性調査団のフランス人団員 （松田祐子）——52

モニカ・フェルトンとWIDFの朝鮮戦争真相調査団 （藤目ゆき）——70

参考資料1. 朝鮮民主女性同盟のメッセージ —97
2. 平和賞受賞 —98
3. インタビュー —99
4. 小冊子 —104

【特別寄稿】 論文／エッセイ

解放後の独立促成愛国婦人会の組織と活動に関する研究 （梁東淑）——110

写真／新聞記事 —144

私たちは戦争の東アジアではなく平和の東アジアを望む （金貴玉）——146

執筆者紹介 —155

アジア現代女性史
Contemporary Women's History in Asia

アジア現代女性史研究会
CAWA(Association for the Study of Contemporary AsianWomen's histoy and Gender)

特集 1

ドー・アマー　ビルマ人民の母と呼ばれた女性

ルードゥ・ドー・アマーとは何者か

南田みどり

ルードゥ・ドー・アマー(1915－2008 以下ドー・アマーと略す[1])は、筆者と交友の最も長い部類に属するビルマ作家である。本稿は、アジア現代女性史 8『ベトナム女性史』において 1973 年版序文[2]に引用された、ドー・アマーによるベトナム女性の人民戦争への連帯発言に着目した同書監修者の藤目ゆきからの依頼で執筆したものである。

本稿は、筆者の個人的体験におけるドー・アマー像を概観する「体験的ルードゥ・ドー・アマー」と小論「言論統制の中のルードゥ・ドー・アマー」から成る。巻末資料 1 として、彼女の晩年の息遣いがうかがえる口述筆記[3]による『母の昔語り』第 3 巻序文(2007 年 10 月)を、資料 2 として、随筆「ビルマの若い娘たちの民族服」(2006 年 10 月)を、資料 3 として、年譜(2006 年)を訳出のうえ添付している。

なお本誌に、ビルマ国外のメディアによるドー・アマー論も掲載されるため、本稿は記述的重複を避けることをこころがけた。

体験的ルードゥ・ドー・アマー

1 邂逅

ビルマ式社会主義という名の軍事官僚独裁政権下(1962－88)に、筆者は二度ビルマを訪れた。いずれも観光ビザで許される 7 日間の滞在であった。初めて訪れた 1977 年末、ヤンゴンから空路バガンに飛び、シャン州のタウンヂー在住の詩人マウン・ティンミャイン（インレー）の一家と合流してマンダレーに向かった。彼は、筆者の研究を物心両面で支えてくれた 10 年来のペンフレンドであったが、彼が当時シャン州を本拠としていたビルマ共産党の同調者で、中国から流れる同党のラジオ放送の愛聴者であったことは、このときまで知らなかった。手紙は開封・検閲され、電話は盗聴される可能性がある。直接会っ

---

1 ビルマの人名に姓はなく、名の前には冠称が来る。年配者あるいは社会的地位の高い女性には「ドー」を、男性は「ウー」を、親しい間柄あるいは若い女性には「マ」を、男性には「マウン」をつける。なお、男性はその中間的冠称として「コウ」も使用する。また、名には誕生曜日に属する文字を使用するため同名者が多く、作家や芸術家等は冠称の前か、名の後の（ ）内に、出身地や学位等を示す語を用いることが少なくない。「ルードゥ」は後述のように、彼ら夫妻の出版した新聞・ジャーナル名である。

2 [レ・ティ・ニャム・トゥエット 2010:pp.18]を参照されたい。

3 彼女のゆったりと丁寧なマンダレー調の語り口は、晩年まで変わらなかった。彼女は 2004 年 6 月から読み書きが困難な状態となり、口述筆記が検討されていた。[南田 2005:pp.89]も参照されたい。

て話すことだけが確実な情報となる。その状況は、昔も今もあまり変わらない。

彼が面談の手配をしてくれたのは、いずれも急進的な作家たちであった。筆者が研究してきた元共産党書記長の作家テインペーミン(1914－78)[4]も、彼らにとっては裏切り者の「修正主義者」であった。

彼の案内でマンダレーの「ルードゥ＜人民＞」社[5]を訪れた。同社の階上は一家の居宅で、一階は左手にドー・アマーの書斎が、右手に夫ウー・ラ(1910-82)の書斎があった。筆者はまずウー・ラの書斎に通され、第二次大戦中彼と親交があった高見順の文学的政治的評価について語った。次にドー・アマーの書斎に通されるや開口一番、「夫婦喧嘩中なんですのよ。部屋が左と右に分かれているのは」と彼女は冗談を言って、筆者の緊張をほぐしてくれた。この訪問に際しては恩師から、あの夫妻は、細君のほうが過激ですから気をつけなさいと注意されていたのであった。

まずドー・アマーは、日本の政治情勢に大変関心を寄せ、筆者にさまざまな質問を浴びせた。一方、ビルマ式社会主義の現状を不本意とする筆者の発言にも耳を傾け、「今は過渡期ですからね。でもこの国で、誰にでもそのように正直に自分の意見を言わないほうがよろしいわよ」と微笑んだ。後年作家ニープレー＜小さな弟＞[6]となる末っ子ニェインチャン＜平和＞にも紹介された。彼ら3人がその8ヵ月後、1年余も拘束されることになるとは知る由もなかった。

2　友情・連帯

次にマンダレーに行けたのは15年後、新たな軍事独裁政権・国家法秩序回復評議会支配下の1993年であった。テインペーミンもマウン・ティンミャインもウー・ラも亡くなり、ニープレーは獄中だった。筆者は短編集[7]の翻訳に向け、作家マウン・ターヤ[8]に新進気鋭の作家の紹介を依頼しており、「ルードゥ」社に9名ばかりの作家、評論家が集められていた。我々は、文学のみかビルマの現状についても自由に語り合えた。同社は、言論統制下における文学的解放区さながらであった。これは、軍事政権傘下のメディアが跋扈し、文学界が分断されがちなヤンゴンでは見られない光景で、ドー・アマー率いる「ルードゥ」社を要とする文学関係者の結束の賜物であった。

---

4 その政治的立場の変遷については[南田 2010a]の解説などを参照されたい。

5 以下＜　＞内には、ビルマ語名称の日本語訳を示す。彼らの出版社の現在の名称は公式には「チーブワーイエー＜発展＞」社で、印刷社名は「ルードゥチーブワーイエー」社である。資料3の年譜の1967年の項に記されるように、『ルードゥ』紙は廃刊処分となったが、マンダレーでは従来どおり彼らの社屋を「ルードゥ」社と呼ぶ者が多い。

6 1952年に生れ、マンダレー大学地質学科卒業後出版業を手伝い、1985年から短編を書き始めた。1989年から99年まで獄中にあった。その短編「蓄音機回しの物語」(1989)は[南田 1998:pp.181-190]に収録される。

7 [南田 1995a]を参照されたい。ヤンゴンとマンダレーの作家7名ずつ計14名の短編14編を収録した。

8 1930年に生まれ、1999年10月タイを経てアメリカに亡命した。邦訳は『路上にたたずみむせび泣く』(南田訳 1982 井村文化事業社) のほか、[南田 1995a:pp.139-150]には短編「生類解放」(1988) が収録され、序文も寄せている。また[南田 1995b,1996b]は、彼の検閲で不許可となった作品を含め1989年の3編を収録するとともに、言論統制の現状にも言及している。

さらに 1995 年、2 冊目の短編集[9]の翻訳にあたり、マンダレーを訪れた。以前ウー・ラの書斎であった広間に、30 名余の作家たちが集った。ドー・アマーは冒頭の挨拶で、「本日 8 月 9 日は、長崎に原爆が投下された日です」と述べ、反戦平和と真の友好を強調した。彼女は、この短編集に序文も寄せた。その中で彼女は、戦争が終わっても「資本の論理による弱肉強食は続く」と述べて、軍事政権主導の「開放経済」を暗に批判した。また、第二次大戦終焉近く、日本の敗残兵をビルマの人々が哀れみ、その命を救ったエピソードが多数存在することに触れ、そのような事実を掘り起こして本に編むよう提案もしている[10]。

その後 1997 年から 2007 年まで、筆者は毎年 8 月に欠かさずドー・アマーに会った。話題は日常生活からビルマ情勢まで多岐にわたった。印象的な話題としては、ウー・ラの密かな抗日活動や、彼と高見順との友情、テインペーミンの長編『ストライキ学生』[11]の主人公が思いを寄せる戦闘的女子学生のモデルがドー・アマーであったことや、彼女がテインペーミンの求愛を拒んでウー・ラを夫に選んだという興味深い昔話まで飛び出した。

また、アウンサンスーチーについてドー・アマーは、当初その政治的力量に疑問を投げかけていたが、1998 年夏には、「現在のビルマで彼女ほど勇気があって粘り強い人を知り

---

9 [南田 1998]を参照されたい。18 名の短編 18 編を収録した。

10 [南田 1998:pp.2-4]を参照されたい。

11 1936 年のラングーン大学学生ストライキは、学生自治会機関誌における当局批判の論説に対する学生処分に端を発し、女子学生 10 名を含む 700 名の学生が大学を出てシュエーダゴン・パゴダにこもった。『ストライキ学生』は、ストライキ解除に反対して孤立する学生指導者を主人公として、この事件をルポルタージュ的手法で小説に再現し、1938 年に上巻が、1939 年に下巻が出版された。 ドー・アマーのストライキ参加時の回想は、[南田 2007:pp.61]を参照されたい。

ません」と、その評価に変化が生じていた[12]。2002年秋、遊説中のアウンサンスーチーがマンダレーで真っ先に訪れたのは、ドー・アマーのもとであった。アウンサンスーチーが襲撃され拘束されたディベイン事件[13]の三ヵ月後の2003年8月、襲撃現場へ向かった筆者は、途上で立ち寄った女性医師宅で、二人が手を握り合っている興味深い写真を見せられた。女性医師の夫は、事件後拘束されたまま不在であった。

慰安婦問題についても、ドー・アマーと語り合ったことがある。日本軍が創設したビルマ軍は日本占領期(1942-45)に、日本軍に倣ってビルマ軍専用慰安所をヤンゴンに開設した[14]。筆者は慰安婦問題研究者から、ビルマ女性の元慰安婦が見つかった場合、その補償問題等で支援してくれるビルマ側のしかるべき人物を探してほしいとの依頼を受けていた。彼女の紹介で、2002年、ヤンゴンの中華街の奥にひっそりと住まう元慰安婦の中国女性とも話ができた。だが支援については、相応の年配と地位の女性作家や女性知識人に打診しても、「ビルマ女性はそのような経歴を恥とするから名乗り出るはずもない」「慰安婦はもともと売春を生業としていた女性だから同情に値しない」等々といったはかばかしくない反応が多かった。その中で、協力を表明したのはドー・アマーのみであった。件の研究者の元慰安婦探しも、あと一歩のところで中断させられたままとなった[15]。

3 旅立ち

2004年以降、ドー・アマーと会うのは、マンダレーから車で2時間北東に走った高原の町ピンウールィン（メーミョ）の彼女の別宅においてであった。3月から10月まで、夏季から雨季まで、乾燥地帯のマンダレーの厳しい気候を避け、生きながらえる彼女の姿からは、死への覚悟が見て取れた。その覚悟は、VOAやBBCなど海外のビルマ語放送番組からの電話取材に応えるという形でも現れた。彼女を逮捕すれば民衆の怒りが高まるから、軍事政権は彼女を逮捕できないのだと、人々はささやきあっていた。言論統制下の国内で生じている深刻な事実を、人々は海外からのラジオ放送で初めて知るのであった。ドー・アマーは、耳が遠くなって日常の会話は不自由するが、電話ならよく聞こえて取材に応じることができるのだと笑っていた。2006年8月は居間で車椅子の彼女と話したが、2007年8月は寝室で話した。「今度いつ来られます？また来てくださいね」と言われたのが最後であった。

2008年4月、夢の中に華やかな衣装の若々しいドー・アマーが現れた。その数日後、彼女の死を知った。ビルマ仏教徒にとっては、死は終わりでなく、新しい転生への旅立ちである。8月にマンダレーで会ったニープレーは、その夢を母が別れの挨拶に訪れたのだと解釈してくれた。その後筆者に観光ビザが出なくなった。マンダレーに戻れたのは、2011年8月である。「ルードゥ」社玄関傍の書店で、ニープレーから最新の書籍を寄贈され、

---

[12] [南田 1999:pp.107-108]では本名を出さず、「息子が獄中にある女性反骨作家」の発言として紹介した。

[13] 2003年5月30日、遊説中のアウンサンスーチーと支持者が、ビルマ中部のディベイン村付近で翼賛団体に襲撃され、死者負傷者多数を出し、彼女はそのままヤンゴンへ護送された後、自宅軟禁となった。[南田 2004:pp.104-105]も参照されたい。

[14] [南田 1997:pp.190-191]を参照されたい。

[15] [林 1999]、[森川 2000,2002a,2002b]を参照されたい。

裏手の「ルードゥ」図書館で日本占領期の出版物を閲覧し、ちょうどその日に亡くなったドー・アマーの妹の自宅にもお悔やみにでかけることができた。筆者と「ルードゥ」社との絆は、そう簡単に断ち切られそうにもない。

言論統制の中のルードゥ・ドー・アマー

はじめに

第一次クーデターによる 1958 年から 2 年間の軍政、第二次クーデターによる 1962 年から 26 年間のビルマ式社会主義政権、第三次「クーデター」による 1988 年以降の軍事独裁政権のもとで、ビルマの言論出版界は長期にわる言論統制に呻吟してきた。息長く執筆したドー・アマーも、その例外ではない。本稿では、彼女の晩年の著作活動の一端をとおして、彼女と言論統制とのかかわりをとらえる。

まず、彼女の晩年の著書とその周辺から、軍事政権下の検閲状況をあきらかにする。続いて、国外のメディアの一部で批判的にとらえられる彼女の女性問題に関する発言を取り上げ、現代ビルマのメディアの問題からその発言の意図するところを読み解き、従来の評者とは異なる観点から、ドー・アマーの今日的意義を明らかにすることを試みる。

1 『83 歳 83 言』は語る

1.1 検閲期間

1999 年 8 月、ドー・アマーの 83 歳の誕生日を記念して、チーブワーイエー社より『83 歳 83 言』が出版された。同書には、1950 年代から 90 年代までの出版物から抜粋した彼女の 83 点の発言が収録された。それは、1.序文からの抜粋 11 点、2.著書からの抜粋 35 点、3.新聞雑誌等ジャーナリズムからの抜粋 37 点から構成された。

発行の日付が記される見開きの次のページには、「本書は母の 83 歳の誕生日を記念して出版したものである。しかし、諸般の事情から、今般ようやく出版の許可が出たことをご理解いただきたい」との出版者による断り書きがある。見開きに記される出版者名は、ウー・ニェインチャンすなわち、釈放されたばかりのニープレーである。同書の出版が、彼女の誕生日の 1998 年 11 月 29 日前後に意図されたにもかかわらず、9 ヶ月も遅延したことの意味するところは、以下のように考えられよう。

ビルマ国内で書籍を出版するには、事前に情報省検閲局へ原稿を提出することが義務付けられている。検閲に要する期間は、数ヶ月から 1 年半以上まで、提出物の内容によって非常に差がある[16]。1998 年 11 月の出版を意図するならば、検閲所要期間を見込んで早めに原稿を提出しておく必要がある。同書に収録された抜粋の最新の日付は、1998 年 7 月である[17]ことから、原稿が 1998 年 8 月には検閲局に提出されていたと推測すれば、検閲

---

[16] [南田 2001c]のビルマ語版は 2006 年に出版されたが、検閲には 1 年半余りかかり、21 編中 2 編が削除され、その他削除修整箇所多数であった。[南田 2006b:pp.138-139][南田 2010b:pp.37-48]も参照されたい。

[17] 『ミャーナッマウン＜キューピット＞』誌掲載記事で、[Amar1999:pp.35]を参照されたい。

におよそ1年を要した勘定になる。出版者はそのことを読者に伝えようとしたのである。

1.2 削除箇所

検閲の痕跡は、同書に収録された83点の発言のうち、灰色に塗りつぶされたものが5点存在することからもうかがえる。これらが検閲不許可による削除部分である。検閲は、古くは日本占領期に始まるが、社会主義時代に強化された[18]。削除された5点は、社会主義時代の70年代の発言が2点、軍事政権時代の90年代の発言が3点である。軍事政権下では、出版済みのものを作品集として新たに編む場合も、再版する場合も、再度検閲がなされる。5点の灰色箇所は、過去に検閲を通過したものが、1998年の検閲で通過しなかった事実を提示する。それは、1998年に検閲がさらに強化されていたことを物語る[19]。

ところで、同書の灰色箇所を含む83点の末尾には、出典箇所がページ数とともに明示される。それを参照すれば、読者は削除部分の内容を知ることが可能となる。たとえば、同書14ページの削除部分は「『母の昔語り』1997年8月154ページより」とされる。そこで、その部分を参照すれば、以下のような文であることが判明する。

「このような事態で、このような段階までが予測される問題を、時代のせいだとか時代の波だとか言って、手を拱いているべきでしょうか。わたしは、社会的に考えても静観すべきでないと思います。学校、青年組織、教師・保護者が、宗教的社会的見地から話し合うべきです。この状況が不適切であるなら、それに反対し、その事態を押し止めるべきだと考えます。もしも、何も言わず、事態を押し止めようとしないならば、大変なことになるでしょう」[20]

この一文は、随筆「時代のせいだと言って傍観しますか」の末尾の部分である。ここでドー・アマーは、昨今の青少年の「退廃」状況を批判する。さらに、その結果としての若年女性の望まぬ妊娠や中絶を、時代のせいだと傍観せず、宗教的社会的見地から予防のために行動すべきだと主張する。1997年には検閲を通過したものが、1998年には削除されたという事実は、検閲の急速な強化を物語る。

1999年以降、検閲で不適当な箇所が見出されると、刷りなおしか、差し替えとなった。それ以前に見られた黒塗りや、糊付けや、破り取りをはじめとして、同書に掲載されたような灰色箇所も、出版物から基本的に姿を消した[21]。1999年8月発行の同書は、かろうじて検閲強化の痕跡を提示する貴重な歴史的証言録としての役割を果たしたのである。

2 『ルードゥ・ドー・アマー90歳記念作品集』は語る

2.1 出版に至る経緯

検閲とのせめぎあいの中で、著作を出版し続けたドー・アマーを他者が語ることも、言

---

18 この時期の検閲強化状況については、[南田 2010b:pp.53]注22前半を参照されたい。
19 90年代の検閲強化や作家の逮捕等については、[南田 2001b:pp.98-100]を参照されたい。
20 [Amar1997:pp.153]を参照されたい。同書は過去の雑誌掲載評論を再録したもので、この随筆は1983年9月発行の『タウンピャウントゥエーラー<森羅万象>』誌に掲載された。
21 [南田 2001b:pp.99]を参照されたい。

論統制下では慎重さを要する行為とされる。『ルードゥ・ドー・アマー90 歳記念作品集』は、2005 年 11 月、ドー・アマー90 歳の誕生日に向けて、彼女に深く傾倒する女性作家ミチャンウェー[22]が編集し、その夫の経営する出版社が出版したものである。

冒頭の出版者から寄稿者たちへの謝辞によれば、90 歳の誕生日に何を贈ればよいかとの出版者の問いに、ドー・アマーは 90 歳を記念する書籍の出版を提案した。そこで出版者が、90 歳を祝う 90 編の原稿を集めることを企画したという。謝辞に続き、ドー・アマー直筆の編者への書簡、彼女とウー・ラの写真、本稿に資料 3 として添付した年譜、彼女の他の筆名[23]、1936 年に彼女に寄せられた 2 編の詩[24]が掲載される。

続いて、108 名 108 点の詩や随想や絵画等が収録される。うち 7 編は故人 7 名の過去の著作からの抜粋であり、残る 101 編は現役の作家・詩人・学者・ジャーナリスト・風刺漫画家等の書き下ろしを中心とする。

---

[22] 1953 年生まれで、1984 年から海洋短編小説を書き始める。その短編集『真珠貝』は、2000 年度ミャンマー連邦民族文学賞を受賞している。[南田 2001c：pp.56-67]に短編「麻酔薬」(1998)が収録される。

[23] 年譜と筆名のリストは[Win Tint1995]からの転載で、年譜は 1996 年以降が補足される。なお同書『ルードゥ・ドー・アマーの生涯と著作』は、1995 年段階でのドー・アマーの詳細な著作リストを収録する。出版物の見開きに 1991 年ごろから掲載を義務付けられる軍事政権のスローガンが見られないことから、同書が彼女の 80 歳の誕生日を祝うために参集した者に配布した部内資料であることがうかがえる。

[24] 高名な詩人ゾーディー（1907－90）とミントゥウン（1909－2004）によるものであり、共に 3 月 9 日付けで、36 年ストライキのさなかに寄せられたと思われる。

日付が付される最新の随筆は2005年1月である。検閲に要した期間は、前述の書と比べやや短い。それを検閲緩和によるものと結論づけるには、一考の余地がある[25]。内容的にも、前述書と比べかなり抑制の効いたものとなっていることは、考慮に入れるべきであろう。以下に、彼らが語るドー・アマーの評価を提示する。

2.2 他者の語るドー・アマー

彼らが語るのは、第一に、ドー・アマーのジャーナリストとしての側面である。彼女は、大戦直後から1967年まで、『ルードゥ』ジャーナルや『ルードゥ』紙を基盤に進歩的論調を展開した。ただ、同書では、海外メディアにおけるほどには、この側面が直截的に強調されることはない。たとえば、「人民の立場に立ったジャーナリスト」[26]といった控えめな賞賛に止められる。

第二に、彼女のノンフィクション作家の側面である。ジャーナリストとしての筆を封じられた1967年以降、彼女はビルマ伝統文化尊重・保護の立場から多数の著作を著した。内容は、伝統芸能や美術工芸や文学芸術や大衆文化まで多岐にわたる。これについては、彼女の国民に対する「民族と風俗習慣を愛してほしいという熱意」[27]を賞賛する発言をはじめとして、言及する人々は少なくない。

第三に、彼女の著作に1960年代より顕著に現れるようになった口語文体である。これについてはたとえば、「母さんの特筆すべき能力のひとつは、、、、その文体が生粋の口語体となっているのです。見掛け倒しの物まねの口語体ではありません。本当に純粋な口語なのです。そばにやってきて腰掛け、話しかけられているような類の、耳に心地よく入ってくるような言葉の、生粋の口語体で、ビルマの国でこれほど純粋な口語体を、これ以外に私は読んだことがありません」[28]といった賞賛がなされる。

第四に、翻訳家としての側面である。彼女が、海外の進歩的作品や、後年はアジアの文学も翻訳したことについては、少なからぬ言及がなされる。

第五に、彼女の人となりである。彼女が私利私欲を捨て、他者のために「平和と民主主義に基づき」[29]執筆したことなどが、控えめに賞賛される。一方、作家たちの個人体験の中の「文学の母」としてのドー・アマー像は、数多く語られる。彼女による物心両面での援助で、多くの若い書き手たちが励まされ、成長していったことや、彼女の著作に啓発され、努力して作家となったケースがこもごもに語られるのである。

同書における彼女への評価と、海外のメディアにおける評価を照合すれば、国内で言及することが困難な部分は、ジャーナリスト時代の彼女の政治的発言や、息子たちと共産党との関連に関する事実、近年ではエイズ対策関連での彼女の活躍などであることが判明す

---

25 注16を参照されたい。2006年出版書籍の検閲には1年半を要している。
26 作家ダゴン・ターヤー（1919生れ）による。[Mi Chan Way 2005:pp.35]を参照されたい。
27 歴史学者トウラ(1943生れ)による。[Mi Chan Way 2005: pp.44]を参照されたい。
28 詩人マウン・カインラッによる。[Mi Chan Way 2005:pp.145]を参照されたい。これは夫ウー・ラをはじめとするいわゆるマンダレー派作家たちが60年代に巻き起こした「話すように書く」運動の一環であった。
29 ジャーナリストのミャンマーアリン・タンニュン(1926-2009)による。[Mi Chan Way 2005:pp.37]を参照されたい。

る。国内のメディアでドー・アマーの全貌が明らかにされるためには、今しばらく時を要するであろう[30]。

3 ルードゥ・ドー・アマーさらなる評価

3.1 ドー・アマー女性を語る

上述の評価に加え、いまひとつの評価を提示しておく必要がある。彼女を「導きの星」とする女性作家タンミンアウンは、彼女の著書『母の昔語り』[31]をビルマの若い世代の女性たちに「文化的慣習」の種を植え付ける庭師の役割を果たすととらえ、ドー・アマーを「模範的母親指導者」と称える[32]。すなわち模範的な母たるドー・アマーの、若きビルマ女性に対する指導的役割が評価されるのである。

ドー・アマーのビルマ女性観を『83歳83言』から拾えば、以下のようにまとめられよう。第一に彼女は、ビルマ社会に存在する男女平等を強調する。すなわちビルマには、周辺諸国におけるような、封建的家父長制も結婚持参金制度も女性を家庭に閉じ込める風習もなく、社会的労働においても男女は平等に活動してきたと述べる[33]のである。

第二に彼女は、家庭建設における女性の役割を強調する。すなわち、女性に伝統的に定められた義務である 1)調理、2)家庭の維持、3)出産育児、4)親舅姑の世話は、家庭の安定に不可欠であり、家庭の護持安定が人間社会の護持安定につながると述べる[34]。

したがって彼女は、「Living together などという、夫でもなく妻でもない間柄の男女が同居するという西欧諸国の退廃的な風習を、私たちの社会に導入しようとする作品などは耐え難いものです」[35]と、家庭建設の枠に収まりきらない男女の関係を、「西欧的退廃」と

---

[30] 本稿はドー・アマー存命中の検閲状況を考察するものであるため参考文献に入れていないが、2010年5月、チーブワーイエー社よりルードゥ・ドー・アマー追悼集『国民に愛されたルードゥ・ドー・アマー』が発行された。『90歳記念作品集』と比べると、寄稿数は56編と少なく、年譜もない。内容的に『90歳記念作品集』を踏襲しているが、匿名の筆者もいることを付け加えておく。

[31] 資料1も参照されたい。1巻は83年9月から97年2月まで雑誌に掲載された40編を収録し、97年8月7日の夫ウー・ラの命日を記念して97年8月に出版された。2巻は97年3月から2000年7月まで『カリャー』誌に掲載された同名のコラム39編を収録し、2000年11月に出版された。3巻は2000年8月から2007年3月に同誌掲載の58編を収録し、2007年10月に出版された。3巻の収録点数が多いのは各編が短いためである。彼女の体調の変化がうかがえる。

[32] [Mi Chan Way 2005:pp.59]を参照されたい。タンミンアウンは1953年に生まれ、短編集『形なき集積』で2002年民族文学賞を受賞した。その短編「生成流転」(1993)が[南田 1998:pp.167-178]に収録される。

[33] [Amar1999:pp.4]を参照されたい。1991年の発言である。

[34] [Amar1999:pp.2]を参照されたい。1987年の発言である。

[35] [Amar1999:pp.31]を参照されたい。1995年の発言であり、結婚の中の愛を描くことを拒否する女性作家ジューなど一部の作家の作品を批判したものと思われる。ジューについては[南田 2001b:pp.108-117]の短編、[同 pp.91−92]の解説、[南田 2001c:pp.298-306]に寄せられた彼女の解説などを参照されたい。同解説は、女性を束縛する規範と、それに抗うビルマ女性の勇気について書かれるが、ビルマ国内の刊行物に発表されたものではなく、日本の読者のために書き下ろされたものである。

して全面的に否定する。

また彼女は、若い女性の身持ちの固さ、すなわち処女性を重視する。すなわち、「仕事を持つ娘さんたちは、自分の身を自分でお守りなさい。一族の名誉をお守りなさい。自分の身を守ることは、生来の権利で、誰しも守る権利があるのです」と述べるのである[36]。

このようなドー・アマーのビルマ女性観の意味するところを、以下に考えたい。

3.2 「文化的慣習」護持への執念

ビルマ女性に関する問題は次のようにまとめられよう。一般に、ビルマ女性の社会的地位は、高いといわれてきた。それは仏教徒慣習法に保障される結婚や財産相続における男女の比較的平等な条項等を根拠としたものであった。しかし、その一方で仏教徒慣習法には、男性のみが複数の妻を持つことを許容する条項が存在し、仏教における最高の境地である涅槃に到達するには男に生れて出家しなければならない。ゆえに、来世で男として転生することに望みを託し、女性のエネルギーは現世で功徳を積むことに向けられてきた。ビルマ女性が模範的母や妻として家庭作りや経済活動にまい進し、賢女たらんと努めたのは、そのような内なる男性優位思想のなせるわざであった。模範的賢女像は、仏教経典に数多く見られるのみならず、1950年代から60年代に活躍した旧世代の女性作家の小説でも主流を占めていた[37]。70年代以降になって、「男性に寛容で女性に厳格な二重基準」の支配する[38]ビルマの世間の中で呻吟する女性像が、かろうじて女性文学で形象化されるに至っている。

このような中で、政治的には常に先進であったドー・アマーのビルマ女性観は、旧世代の女性作家たちの思考の枠組みを越えるものとならなかった。この点についての批判は、国外のメディアにおいて見られるものの、国内においては皆無である[39]。なぜなら、言論統制下の国内において、「伝統文化維持装置である規範再生の拠点としての家庭」[40]の建設に異をとなえることは、好ましからざる発言として危険を伴うからであった。

伝統文化護持は、ビルマ族の伝統的仏教文化至上主義を掲げる軍事政権のスローガンのひとつである。彼らは、すべての書籍の見開きに印刷されるスローガンで、伝統文化護持の旗手であることをもって自任する[41]。さらに彼らは1996年に、仏教徒慣習法の保障する女性の権利を誇ったうえで、家庭という国家の基礎単位の向上を通して女性が国家建設に参加することを奨励し、女性翼賛団体の組織化に乗り出して、同年、全ミャンマー女性問

---

36 [Amar1999:pp.31-31]を参照されたい。掲載年は記載されていない。

37 [南田 1996c:pp.55-62]を参照されたい。

38 [南田 2006a:pp.117]を参照されたい。具体的にはビルマの世間の二重基準について、「女性の価値は処女性、純潔性、貞節に置かれ、妻の価値は家庭維持能力を基準に作られる。性的嫌がらせの被害者が軽蔑され、買う男より売る女が軽蔑される…」などを挙げている。

39 国外の批判の一例は本誌収録のミンジンの発言にあるように、「ビクトリア朝倫理」「保守的」「厳格」というものである。一方国内ではメディアには登場しないが、若い作家や詩人たちの一部からの聞き取りから、批判が存在することも筆者は確認している。

40 [南田 2006a:pp.117]を参照されたい。

41 スローガンは[南田 2009a:pp.122]注28を参照されたい。そのうち「社会四目標」は①全民族の精神と品行の向上、②民族の尊厳と出身地の尊厳を高め文化遺産と民族的特質を消滅から守る、③愛国心の昂揚、④全民族の健康維持と教育向上とされる。

題委員会を結成した。その傘下に結成された全ミャンマー女性問題活動委員会文化部門の活動目的は、国家による「市場経済」導入にともなって流入する外国文化の影響からビルマ女性を守ることとされ、具体的には、第一に、ビルマ女性の愛国心の涵養、第二に、自国文化擁護精神の育成、第三に、伝統遺産保護精神の育成、第四に、外国文化影響撲滅運動の実施が挙げられている[42]。

ドー・アマーの「文化的慣習」護持への執念は、はからずも軍事政権の女性対策と奇妙にも符合する結果を生んだ。そこで以下に、彼女の執念の意味するところを、その服装に関する発言を通して考えてみたい。

4 正当なる伝統文化の継承者は誰か？

4.1 服装とメディア

ドー・アマーの晩年の 2006 年のメッセージである資料 2「ビルマの若い娘たちの民族服」で、彼女は、若い女性が民族服を着用せず、下半身にさまざまな長さのスカートや、腹部が露出するズボンを着用し、上半身にはひも付きタンクトップを着用して胸から上を露出させることを、「自堕落・放埒」「品位の欠如」などと批判する。そしてそれは、「西洋女性と競いたい」娘たちが、そのように装えば「現代的」になるととらえたために生じたものだと述べる。彼女は、その背景として考えうるものについて深追いせず、慨嘆で結ぶ。これは、1998 年に削除された前述の「時代のせいだと言って傍観しますか」の結びと比べ、かなりトーンを落とした論調となってすらいる。

はたして、これが書かれた 2006 年に、ビルマの若い女性の服装は上述のようなものとなっていたのであろうか。それが事実であれば、軍事政権が、女性団体を通して奨励した、外国文化の影響から女性を守るための、愛国心や自国文化擁護精神の育成や、外国文化影響撲滅する活動が功を奏さなかったことになる。

この期間の服装状況は、およそ以下のようにまとめられよう。一般の民衆の服装は男女ともロンヂー姿がまだ多く、その傾向は地方に行くほど著しい。また、小中高では生徒も教員も白のブラウスに緑のロンヂーを着用する。一方、大学は従来制服がなく、教員のみが民族的服装の着用を義務付けられていたが、2000 年代に入り、大学生たちの間に、T シャツ、ジーンズ、ミニスカートの着用が増加する中で、2004 年 8 月 16 日より、大学生にも民族服着用が義務付けられた。ただし、学外での塾通いなどでは、民族服を着用しない学生は多い[43]。

若者のファッションを先取りするのがメディアであるとすれば、厳酷な検閲のもとでメディアに何が起こっているのかにも、目を配っておく必要がある。総合月刊誌『マヘーティー＜王妃＞』誌の掲載写真を例に取り、ドー・アマー晩年の 10 年における検閲の基準の変遷を見ておきたい。

同誌 1997 年 1 月 1998 年 12 月合併号（pp.34-39）では、ビルマ人女性歌手へのインタビュー記事で、上半身ならびにジーンズのでん部と幅広の裾の部分が黒塗りとなった。

---

[42] 女性翼賛団体については[南田 2009a:pp.114-118]を参照されたい。
[43] [南田 2005:pp.92-93]を参照されたい。

2000年3月号(pp.132)では、ゴールデングローブ賞受賞を報じる記事で、"SEX AND THE CITY" 主演女優4名のうち3名のソワレの上の肌の露出部分が黒塗りとなった。その後、露出度を規制したまま、グラビアに西欧風の服装は増加していく。2004年1月号(pp.28-35)より、ビルマ人女性歌手のジーンズ姿や、ふくらはぎまでの丈のスカート姿が掲載され始め、2008年4月号(pp.21,23,50,51)に、ミニスカート姿や胸から上を露出させた女優が登場する[44]。一方ファッション月刊誌『Beauty』誌 2007年 12月号(pp.15, pp.55-57,pp.110-111,pp.134)では、ページ数のない広告欄も含めて、胸から上を露出したドレスの女優や広告モデルがすでに登場している。

このように、雑誌に登場するファッションは、10年間で露出度の規制が「緩和」されてきた。しかし、グラビアの規制「緩和」に反比例するかのように、文章に対する検閲は強化されている[45]。それは、この「緩和」が見せかけに過ぎぬものであることを物語る。

4.2 ファッション規制「緩和」の意味するところ

見せかけであれ、これら規制「緩和」の意味するところは何であろう。華やかな西欧風ファッションでグラビアを飾ることは、出版界の内実を知らない読者には、時代の流れが進歩発展し、ビルマが近代国家に生まれ変わったかのような印象を与える。それによって、軍事政権のマイナスイメージが払拭される効果を生む可能性がある。それだけに、これが見せかけの規制緩和であることを熟知する作家や出版関係者への締め付けは、容赦なく継続するのである。

さらに「緩和」は、購買力を持つ富裕層の子供たちの、ファッションに関する購買欲を掻き立てる。それによって彼らの関心を政治・社会からそらし、彼らをさらに政権側に取り込む[46]効果を生む可能性がある。ここで言う富裕層とは、ファミリービジネスにまい進する軍幹部の家族ならびに彼らと結託した事業家らの階層をさす。軍事政権の最も恐れるのは、自らの勢力圏の内部分裂なのである[47]。

このように軍事政権は、検閲においてダブルスタンダードを使用してきた。それは、現

---

44 [南田 2010b:pp.33-34,51]も参照されたい。

45 注16の例のほか、2006年のマンダレーにおける朗読会禁止事件[南田 2008:pp.105]、同年の『バダウプィンティッ<新しき青龍木の蕾>』誌 12月号発行差し止め事件[南田 2007:pp.63]、2008年1月の詩人逮捕事件、2月のジャーナル休刊事件などをはじめとする多数の言論出版活動への弾圧[南田 2009b:pp.70-71]など枚挙にいとまがない。

46 2007年秋の僧侶に対する弾圧時にはこれらの階層の子供たちがネットで意思表示をしたといわれる。なお、ビルマの若い女性のすべてがドー・アマーのいう「行き過ぎた」ファッションに身を包んでいるわけではない。とりわけ、雑誌グラビアで見られるファッションの若い女性には、富裕層の子供たちのほか、ホテルのディスコ等に出入りする売春女性も含まれる。場を提供する者も買春者も軍事政権と親しくつながる富裕層である。ドー・アマーのいう「行き過ぎた」ファッション批判の背景にはそのような実態もある。売春女性とファッションについては[南田 2010b:pp.51]の注9も参照されたい。

47 軍事政権は、そのスローガンのひとつで示される「我等の重大事項三点」の第一点で国家の分裂阻止を挙げる。しかし軍の内部でも、脱走兵が多数存在し、刑務所に収容された者のほか、密林深く単独活動中の者もいるということを近年の聞き取り調査の過程で耳にしている。

代に始まったことではない。すでに社会主義時代から、社会主義建設に貢献する作品を育成するはずの事前検閲が純文学に厳しい目を光らせる一方で、大量の娯楽恋愛小説の出版を許し、現在に至ってきたからである[48]。

たしかに、昨今の規制「緩和」による雑誌グラビアのファッションの「西欧化」テンポには、読者の目を見張らせるものがある。しかし、彼らが見せかけの「緩和」に腐心すればするほど、「緩和」と彼らの外国文化撲滅運動、自国文化護持運動との矛盾は増大の一途をたどる。政権側がそのスローガンを、すべての出版物の見開きに印刷し、TV で放映し続けても、ダブルスタンダードを用いる限り彼らが伝統文化の正当な継承者として尊敬される見込みはない。そのような中では、ドー・アマーのような人物こそが真の愛国者として、伝統文化の正当な継承者として浮上するのである。外国文化の流入から若者を守る倫理的防波堤としてのドー・アマーの役割を、心あるビルマの人々は尊重せざるを得ないことになる。

晩年のドー・アマーは、伝統文化を武器としてたたかう賢女であった。彼女には、エスニック・グループや農村部の女性の視点に立って、国外で難民や移住労働者を含むビルマ女性の権利について発言し続けるナン・ローラーウンの言うような、「ビルマ女性に関して深く根ざした文化的社会的規範、誤った女性観に注目しそれを変革する」[49]ことへの視点が欠落していた。しかし、このような彼女の限界は、彼女個人に帰すべき問題ではない。それは、内戦の時代、ビルマ式社会主義という名の軍事官僚独裁の時代、市場経済導入を前面にたてた軍事政権の時代を通して、合法地帯と非合法地帯、あるいは国内と国外に分断されて生きたビルマ女性の過酷な受難の連続のなかで、総合的に吟味されるべきであろう。それは、彼女の著作の丹念な読み取りの上に改めて検証されるべき課題である。

おわりに

2010 年の「選挙」とそれに続くアウンサンスーチーの解放、2011 年の国会開会、アウンサンスーチーと政権との「対話」、一部政治囚の釈放などの一連の出来事は、民主化への道が緒に就いたとの印象を世界に与えている。しかし、国境付近の民族的少数者居住地域における戦闘やレイプは頻発し、民衆の生活状況にさしたる変化はなく、苦しみや不安は依然として払拭されていない。今後も行方を注視する必要があろう。

「民政移管」後も軍の支配の色濃いビルマで、彼らのダブルスタンダードの欺瞞を暗に告発するドー・アマーの著作の数々は、当面まだまだ威力を発揮して生き続ける。伝統文化の正当な継承から伝統文化の中の規範の見直しへ、そして規範の見直しと民主主義との共存へ向かう一連の作業は、次世代が担うべき課題となるはずである。

---

[48] [南田 2001b:pp.89-90][南田 2010b:pp.53]注 22 を参照されたい。

[49] [タナッカーの会 2007:pp.414]を参照されたい。なぜ女性の「地位が高い」国に長期の軍事独裁政権が継続するのか、女性を抑圧する規範と軍事政権長期化との関係については、[南田 2002:pp.243-244]を参照されたい。

＜資料１＞
『母の昔語り』第３巻　2007年10月発行
序文

『母の昔語り』とのタイトルで母さんが書いた随筆も、これで３冊になります。第一巻を出した97年８月７日は、ルードゥ・ウー・ラの15回忌。「ウー・ラの文学的功績をしのんでこのささやかな本を出したのです」と、その出版に至る事情について、そこで述べています。

「『母の昔語り』第二巻は、第一巻の３年ばかり後に出しました」と著者の序で述べてあり、2000年に出版しています。

第一巻当時は、わたしの随筆が40編収められました。第二巻もわたしの随筆が39編められました。この第三巻には、もはや第四巻が出版できる見込みがないため、59編を収めています。

この２ヶ月近く、ドー・カリャー[50]が発行する『カリャー』誌に「母の昔語り」のコラムが書けなくなっています。これから先も書ける見通しはあまりありません。版元に損失を出させてしまいました。母さんは92歳と３ヶ月になっているのです。ドー・カリャーは、母さんがもう書けないということは、まだ公けにしていません。ですから気の毒にドー・カリャーは、締め切りが来ても母さんの随筆が到着していなければ、以前書いたものの中から手ごろなものを探して、毎号掲載しています。そして母さんのところへ、原稿料だといっていつもどおりに送金してくれるのです。彼女がなぜそんなことをするかといえば、母さんの随筆が掲載されないと、『カリャー』誌の愛読者から、母さんは具合が悪いのですか、もう書けないのですかと、たずねられるのだそうです。ですから彼女は、そんな問い合わせから解放されたくて、以前のものを探して掲載しているのだといいます。それとて、母さんは彼女のところだから書いていたのです。ほかのところには、ずいぶん前から書けなくなっています。それが老いというものです。老いには、どんなに逆らっても勝てません。

自分のコラムですから、愛着はありますよ。自分なりの立ち位置で、自分の眼前に展開する、見るに耐えぬことがらのすべてから、若い人々を守る防波堤のつもりで書いてきたのですから。13年にもなれば、やはり愛着はあるのです。

ルードゥ・ドー・アマー

＜資料２＞
ビルマの若い娘たちの民族服　　『母の昔語り』第３巻 pp.159-160
『カリャー』誌2006年10月号より転載

ビルマの女たちの民族服について語る場合、やはりそれはあってしかるべきでしょうか。

---

50 カリャー（ウェイザー・テイッパン）は1938年生まれで、1969年から短編小説を書き始め、長編単行本は100冊を超える。1985年『カリャー』誌を創刊し、多くの作家を育ててきた。ミステリーのベストセラー作家でもある。短編「こちらから見れば白　あちらから見れば黒」（1992）を[南田 2001c:pp.199－209]に収録している。

なくてもよいのだとお思いでしょうか。やはりあってしかるべきだというならば、下半身にタメイン[51]を着用することは定めるべきでしょうね。インド女性ですと、サリーが彼女たちの民族服ですもの。

このことは、今問題にせねばならないことです。民族服がやはりあってしかるべきか、もうなくしてほしいのかということを、論議せねばなりません。なんとならば、今、時代の先端を行く娘さんたちは、腰にタメインを巻かず、スカートやズボンをはいているからです。スカートというのは、タメインにあらずして、タメインもどきの衣服です。スカートで腰は覆われます。でもそれは、タメインのようにすっぽり覆い隠す安全な衣服ではありません。スカートの中には膝上までしかない短いものがあります。ひざ下までの丈のスカートもあります。太ももあたりまで切れ込みの入ったスカートもあります。中には、真後ろが割れたスカートまであります。今どきのビルマの若い娘さんたちがはくスカートには、太ももあたりまでの丈の短いスカートまで出回っています。大胆なひとたちがはいています。けれども、横が割れたのや、後ろが割れた長いスカートなら、大胆にもたいていのビルマの娘さんがはいている姿が見られます。

上半身はとなると、胸から上には何もありません。母さんたちの昔の頃は、女はタメインを胸元で締めたままで[52]人前になど出られませんでした。今や、胸から下を覆っただけで、胸元の上の部分は丸出しのままで、小指の半分ほどの細い紐を肩に吊るすだけ。それで衆人環視の中を往来しているのですから、場所をわきまえのないにも、ほどがありますよ。はるか祖先の昔から、母さんたちビルマの女たちには、「恥は命であがなう」という座右の銘がありました。恥をかかないことが命より値打ちがあるという言葉です。ですから、若い娘さんたち自身が気をつけるだけでなく、娘さんたちの保護者監督者ともども力を合わせて、正しく導いてやってほしいものです。

それから、タメインとスカートの違いについて、母さんは少し言っておきたいのです。タメインは、はいて動き回っているうちに、汚れや破れができてしまったら、その場所を折り込んで[53]はきなおすことが出来ます。汚れを隠すことができるのですね。スカートはズボンと同じで、どこが汚れようが破れようが、そこをたたみ込んではきなおすことなどできません。ですから、隠すということができないのですとも。

さらにいまひとつ、ビルマの娘さんたちがズボンをはくことについても、言っておきたいのです。険しい山野へ旅に出かける場合に動きやすいのがズボンですから、そのようなときにはくことについて、母さんは何も言いたくありません。でも、今どきの、都会のビルマの娘さんたちのズボン姿には、母さんはあっけにとられてしまいます。おへそを出してはいているのです。上着が短めですから、ズボン姿で背を丸めると、何色の下穿きをは

---

51 女性用のロンヂーで、筒状の布の上部に黒の折込用部分が取り付けられている。筒の片側に体を入れ、ゆとりの部分を前でたたみ、上部を腰の中にたくし入れる。男性用はパソウと呼ばれ、両側のゆとりの部分を真ん中で結んで端布を腰の中に入れる。

52 水浴時には上着を脱いでタメインを胸元まで巻き、そのまま体を洗った後、上から新しいタメインをかぶって、下から古いタメインを脱ぐ。水浴スタイルで人前に出ることははしたないとされる。

53 タメインの柄は一様であることが多く、後ろ前もない。前でたたみ込む部分をそのつど変えることが可能である。

いているかまで見えて、たとえ家族の男たちの前であっても慎むべきはずの見苦しい有様を露呈していると聞きます。母さんたちのビルマの伝統的習慣では、娘さんたちの着る衣服は、「品位がある」という看板をかかげねばなりませんでした。装いを自堕落だとか放埒だとかいったものにさせてはなりませんでした。今や、わざわざ自堕落放埒な装いが選ばれ、身につけられているのです。母さんたちビルマの女には、隠すべきものがあります。やってよいこととよくないことがあります。どれがどれだか区別できないなら、母さんたちにこっそりお聞きなさい。今や、一部の若い娘さんたちは、隠すべきものを極めて露出したがっている状態にあります。これを時流に乗っている、現代的だと思っているのでしょうか。

このことでは、わが東洋と西洋は反対です。西洋の若い女性たちには、何はさておき男を魅惑する力が備わっていることが重んじられます。わが東洋はそうではありません。わが東洋の女たちは、西洋の女たちとは違います。わが東洋女性は、自分に備わった真の能力資質を用いて、やるべきことがあればそれをやることができます。その点で、我々東洋女性は西洋女性より優れています。あなた方若い女性が西洋女性と競いたいなら、その点を自覚するだけで十分だと言いたいのです。

現代、一部の娘さんたちは、母さんたちとものの見方がずいぶんかけ離れています。たとえば、母さんたちが生まれてこの方受け継いできた考えは、「おへそ」というものが、女が露出すべきものではないということでした。しっかり隠しておかねばならぬものなのです。現代の娘さんの中には、このおへそをあらわにするだけではなく、金銀宝石で飾る人もいるといいます。限りない驚きです。彼女たちの父親もこれを見て何も言わないといいます。そこで、責められるべきはこの偉大なる時代なのでしょうか。大胆にも度を過ごすようになった人々なのでしょうか。それとも母さんが長生きしすぎたことなのでしょうか。もはやわからなくなりました。

＜資料３＞

ルードゥ・ドー・アマーの人生と文学　年譜

『ルードゥ・ドー・アマー生誕90年記念寄稿集』2006年11月 pp.10-16

1915 － マンダレー市ゴンダン地区にて、ウー・ティンを父、ドー・スを母として 11月29日月曜日に誕生。12人兄弟の第4子で本名はアマー。

1920～23 － 中華地区女子民族学校で2学年まで就学。

1923～31 － 同校廃校のため第3学年から第9学年までABM学校にて就学。

1931～33 － マンダレー中央女子学校にて10学年を修了。

1933～35 － マンダレー・カレッジにて化学・物理・数学を専攻。

1936 － ヤンゴン大学文学部第3学年に進級。インヤー寮読書愛好会書記長。第二次学生ストライキに参加。『オーウェー＜孔雀の鳴き声＞』誌、『チーブワーイエー』誌、『バーマ』ジャーナル等に小説、随筆等を執筆。チーブワーイエー・ウー・ラと知己を得る。『チーブワーイエー』誌にペンネーム「キンレーウィン」「ミャミズー」等で執筆。

1937 － 文学部4学年の卒業試験で不合格となり退学。ミャンマー紙店を開店。

1938 － Maurice Collis "Trials in Burma"を『ビルマ国内で取り調べた事件』との題で翻訳出版。

1939 － 11月13日チーブワーイエー・ウー・ラと結婚。

1940 － Maurice Collis "Sandamala"を『サンダーマーラー』[54]との題で翻訳し、2巻に分冊して出版。

1942～44 － 第二次大戦中カバイン村[55]に疎開し、出版事業を継続。

1945 － 6月、『ルードゥ』ジャーナルを創刊。副編集長を務める。Ashihei Hino "War and Soldier"vol.4 "Wheat and Soldier" を『麦と兵隊』[56]との題で、Wanda Wasilewska "The Rainbow"を2巻に分冊して『虹の色』の題で翻訳出版。

1946 － 4月19日『ルードゥ』紙を創刊し編集部に入る。「パギン・アウンナイン」[57]のペンネームで「政治討論」のコラムを担当。

1947 － ルードゥ・ウー・ラとともに、独立のためにリーダーシップを発揮する反ファシスト人民自由連盟（パサパラ）の論調を支持する立場から論陣を張る。

1949 － 『ルードゥ』紙と『チーブワーイエー』の印刷機が設置された建物がダイナマイトで爆破される。Gunther Stein "The Challenge of Red China"を『共産中国の挑戦』との題で2巻に分冊して翻訳出版。

1950 － 1949年4月24日以来停刊の『ルードゥ』紙を11月1日に復刊。1946年5月以来休刊の『ルードゥ』ジャーナルを8月1日に復刊。ホーチミン大統領の伝記を出版。

1953 － 世界民主女性会議（コペンハーゲン53年6月7日）、世界平和会議（ハンガリー・ブダペスト53年6月15日）、第二回世界青年学生祭典（ルーマニア・ブカレスト53年7月25日）に出席。Archie John Stone "In The Name of Peace"を『平和へと』との題で翻訳出版。ルードゥ・ウー・ラが第5条[58]違反で逮捕されたため『ルードゥ』紙論説を担当。

1959 － 3月12日『ルードゥ』紙ひそかに停刊処分。

1960 － 5月10日『ルードゥ』紙再刊。

1962 － 2月3日エアロフロート便開通式にジャーナリスト代表として招待され、モスクワ訪問。帰途東ドイツ、チェコスロバキア、中華人民共和国訪問。

---

[54] 英国人画家とシャン族王家の血筋の娘の愛を描くものだが、娘の母サンダーマーラーは、深窓にありながら世界情勢に通じ、流暢に英語を話し、深い教養を備え、仏教教義を極め、易学にも長ける。[南田 2007:pp.60-61]も参照されたい。

[55] マンダレー郊外にあるこの村には1942年4月末にタキン・ソウ、タキン・ヌ、テインペーミン、チョーニェインが集まり、アウンサンの伝言に基づいて今後の抗日闘争の方向を協議している。[南田 2001a:pp.50-51]も参照されたい。

[56] これについては日本占領期の1944年に、すでにチーブワーイエー出版社から第一巻出版の事実がある。日本占領期に出版された事実を出したくないためか、別の理由が存在するのか不明である。[南田 2010c:pp.116]も参照されたい。

[57] パギンは父を意味し、アウンナインは男性名である。すなわち男性名を筆名にしたということである。

[58] 1950年発効の緊急事態法第5条は、公序良俗、あるいは国家安全を破壊、または企図した個人・集団を対象とする。

1963 － ヨーロッパ紀行を『社会主義の国々へ』との題で書籍として出版。C.Wright Mills "Listen Yankees"を『おおヤンキーたち』、Anna Lewis Strong "Cash and Violence in Laos"を『金と武器』との題で翻訳出版。

1964 － 『国民に愛された芸術家たち』を出版。この著書により1964年サーペーベイマン＜文学殿堂＞賞[59]を芸術関係部門で第一位獲得。

1966 － Edgar Snow "The Other Side of the River"を『立場の異なる中国』との題で2巻に分冊して翻訳出版。

1967 － 7月7日『ルードゥ』紙廃刊処分。「アウンバラ」「ポウ・セイン」「セインカドン」[60]らについての書籍を執筆出版。

1969 － 『シュエーヨウ・バガレー』を2巻に分冊して出版。風刺漫画家バガレー[61]の『金の一振り風刺漫画』へ補遺・序文執筆。

1970 － 『シュエーマン・ティンマウン』[62]を出版。3月3日、マンダレーのクンターヤー論文発表会で「ビルマの絵画事業」との論文を口頭発表。

1971 － マンダレーのダンマベイマン＜仏法の殿堂＞で「今日のビルマの祝祭」との題で論文口頭発表。

1972 － マンダレー国際図書年論文発表会で「世界最大の書籍」との論文を口頭発表。

1973 － 『アニェイン』[63]を2巻に分冊して出版。『世界最大の書籍』出版。

1974 － 『世界最大の書籍』をタントゥン博士[64]が "The World's Biggest Book"の題で英訳出版。

1975 － 『黄金の孔雀の羽根ペン評論集』出版。

1976 － 『タキン・コウドーマイン先生』[65]出版。8月19日『ハンダーワディー＜モン族の王国名＞』紙の「土曜の文学サークル」論文発表会で「伝記文学」を口頭発表。

1978 － 8月21日、ルードゥ・ウー・ラ、息子ニェインチャン（ニープレー）とともに1年1ヶ月1日間拘禁される。

---

59 ビルマ首相を会長とするビルマ翻訳文学協会が、1948年独立の年に出版された長編小説を対象に授与したのが最初である。現在は民族文学賞として存続している。

60 アウンバラ（1881－1913）は伝統芸能の一ジャンルであるザッ（舞台劇）における女形役者であった。彼と組んだポウ・セイン(1882－1952)は歌舞の才と容姿に恵まれ、1910年に一座を結成し、斬新な装置や振り付けで野心的な舞台を展開し、30年代の演劇黄金時代を築いた。セインカドン（1875－1930）は12歳より舞台に立ち、1890年より一座を組んで全国を巡業し、王子役で人気を博した。

61 1892－1944。風刺漫画のほか、映画俳優や監督も兼業した。

62 マンダレー生まれのザッの役者で、第二次大戦直前から名を成した。

63 ビルマ伝統芸能の一ジャンルの名称である。マンダレー王朝時代宮中で生まれ、女性の座唱とソロ舞踊から成ったが、植民地時代、歌手、踊り子、楽団、道化を加えて発展した。仏塔祭や喜捨祭など地域・個人・集団の祭事の出し物として上演され、現代に至る。

64 1923年生れのビルマ有数の歴史学者で、2005年11月ドー・アマー90歳の誕生日を祝う集まりに出席した日の夜、マンダレーで急死した。

65 1875－1964。戯曲作家、新聞記者、愛国詩人として名を馳せる。日本占領下で枢密顧問官、戦後ビルマ世界平和評議会議長、作家協会会長を務め、1954年スターリン平和賞を受賞している。

1979 － 8月22日、拘禁から解放され、Chester Ronning "A Memoir of China in Revolution"を『わが回想　革命中国』の題で翻訳出版。
1982 － 8月7日、43年間連れ添ってきた夫ルードゥ・ウー・ラ死去。
1984 － 3月4日、マンダレー大火でチーブワーイエー出版社、印刷所、用紙倉庫、書籍倉庫が燃焼。
1985 － 11月29日、満70歳となり、この年以来アマラプラ[66]のタウンレーロン寺院にて誕生を祝う会を毎年開催。『チンドゥィン川から大海へ』を出版。
1989 － 5月27日、『国民に愛された芸術家たち』出版25周年をアマラプラのタウンレーロン寺院で開催。『ビルマの古典音楽』『アフリカ短編小説集』出版。
1990 － ルードゥ・ウー・ラとの共著『煙草と人間』出版。
1991 － 『ダナ<資本>』誌に連載した随筆をまとめて『マンダレー人たち』の題で出版。
1992 － 『ヤナンティッ<芳香>』誌に「ザンブーディーパ・アウントゥン」[67]のペンネームで国際関係の随筆を掲載。『タイ短編小説集（1）』出版。
1993 － 雑誌等に掲載した随筆をまとめて『王都マンダレー・マンダレー・私たちのマンダレー』出版。『タイ短編小説集（2）』出版。
1994 － 『仏法のともし火となった僧正たち』出版。『黄金の孔雀の羽根ペン随筆集』を日本で翻訳出版[68]。訳者土橋泰子（ビルマ名ドー・インインミャ）新宿書房2780円。79歳誕生日を記念して『私の若い頃の自伝』出版。
1995 － マンダレー市中央民族学校同窓生主催第75回「民族の日」[69]75周年記念誌編集長を務める。『世界最大の書籍』第5版出版。
1996 － 『世界最大の仏像』出版。
1997 － 『ビルマ現代絵画』『タウンレーロンから神の島へ』『国民に愛された芸術家たち』[70]『母の昔語り1』出版。
1998 － 『83歳 83の言葉』出版。83歳誕生日の会をアマラプラのタウンレーロン寺院で開催。
1999 － 『南アジアの窓』出版。
2000 － 『母の昔語り2』出版。
2001 － 『若き頃より馴れ親しんだ夫へ』出版。
2002 － 『金と武器』ヤンゴンのヨンチーチェッ<信念>出版社より第2版。『煙草と人間』ヤンゴンのスィッテードー<王の兵士>出版社より第2版。『12の祭りの物売りたち』出版。

---

66 マンダレーの南西11キロの地点にあり、1783年から40年間王都であった。
67 ザンブーディーパ<閻浮提>は仏教的宇宙の須弥山の周囲にある島との意味のほかに、娑婆世界との意味もある。アウントゥンは男性名である。
68 [ルードゥ・ドー・アマー1994]を参照されたい。
69 1920年のラングーン大学第一次学生ストライキを記念して太陰暦のビルマ暦第八の月ダザウンモン月黒分10日（太陽暦の11月ごろで毎年日は変わる）に祝われる国民の祝日である。
70 原文のまま。1964年の著書の再版と思われる

2003 － 『ビルマ国内で調べた事件』ヤンゴンのティーハヤダナー<獅子の宝>出版社より第3版出版。

2004 － 『チンドゥィン川から大海へ』マンダレーのチーブワーイエー社より第2版。『虹の光』ヤンゴンのティーハヤダナー出版社より第2版。『随筆集　書店に出入りする人々考』ヤンゴンのサーオウッゼー<本市場>出版社より出版。

参考文献

ビルマ語

Amar, Ludu Daw,1997,"Ame She Zaga", Kyibwaye Press, Mandalay.

— 1999, "83-hnit 83-khun", Kyibwaye Press, Mandalay.

— 2007, "Ame She Zaga" Vol.3, Kyibwaye Press. Mandalay.

Beauty(edited), 2007, "Beauty", No.94, Dec., Yangon.

Maheti(edited), 1997/1998, "Maheti", No.157 Dec.,+Jan., Yangon.

— 2000, "Maheti", No.183, Mar. Yangon.

— 2004,"Maheti", No.229, Apr., Yangon.

— 2008, "Maheti",No.280, Apr., Yangon.

Mi Chan Way(edited), 2005, "Ludu Daw Amr Hnit 90 Ahmattaya Zaga Sazumya", Kama Yinkwe Press, Yangon.

Win Tint, 1995, "Ludu Daw Amar Bawa hnit Sapay Yetswemya", Kyibwaye Press, Mandalay.

日本語

タナッカーの会，2007,『軍事政権を生きる女たちの声　女たちのビルマ』(藤目ゆき監修、富田あかり訳) 明石書店.

林よし子，1999,「ビルマで調査したこと」『女性・戦争・人権』第2号、行路社、pp.190-198.

南田みどり,1995a,『ミャンマー現代短編集』(編訳) 大同生命国際文化基金.

— 1995b,「マウン・ターヤの犬たち」『世界文学』1、大阪外国語大学世界文学研究会、pp.169-211.

— 1996a,「95年夏「ミャンマー」— アウンサンスーチー「解放」の波紋—」『世界文学』No.83, 世界文学会、pp.92-94.

— 1996b,「寒い国から帰ってきた作家たち」『世界文学』2、大阪外国語大学世界文学研究会,pp.263-299.

— 1996c,「ビルマ—賢女幻想の呪縛からの解放を求めて」『地球の女たち』大阪外国語大学女性研究者ネットワーク、嵯峨野書院、pp.54-63.

— 1997,「アウンサンスーチー　孔雀は飛翔するか」『アジアの女性指導者たち』筑摩書房、pp.179-220.

— 1998,『ミャンマー現代短編集2』(編訳) 大同生命国際文化基金.

— 1999,「文学以前の文学事情—98年夏のビルマ事情—」『世界文学』No.89, 世界文学会、pp.106-109.

— 2000,「1999年ビルマ文学事情—民族文学賞授与式周辺—」『世界文学』No.91, 世界文学会、pp.112-116.
— 2001a,「2000年のビルマ—作家と作品舞台をたずねて」『世界文学』No.93, 世界文学会、pp.49-53.
— 2001b,「ビルマ文学」『東南アジア文学への招待』段々社、pp.79-126.
— 2001c,『ミャンマー女性短編集』(編訳) 大同生命国際文化基金.
— 2002,「ジェンダーと女性 —小説が語るビルマ女性の性と生—」『講座 東アジア近現代史6 変動の東アジア社会』青木書店、pp.217-248.
— 2004,「2003年ビルマ断章—過去と現在のはざまで—」『世界文学』No.99, 世界文学会、pp.102-107.
— 2005,「2004年ビルマ—混迷の風景—」『世界文学』No.101, 世界文学会、pp.89-94.
— 2006a,「ビルマ女性はどのように語られてきたか：ビルマ女性に関する邦語文献」『アジア現代女性史』第2号、アジア現代女性史研究会、pp.112-131.
— 2006b,「虚構をしのぐ現実の中で—2005年ビルマ—」『世界文学』No.103, 世界文学会、pp.136-141.
— 2007,「時の流れのはざま—ビルマ報告 2006—」『世界文学』No.105, 世界文学会、pp.59-63.
— 2008,「9月事件のあとさき—ビルマ報告2007—」『世界文学』No.107, 世界文学会、pp.103-110.
— 2009a,「雑誌『女性問題』に見る小説の役割について」『大阪大学世界言語研究センター論集』第1号、大阪大学世界言語研究センター、pp.113-140.
— 2009b,「ビルマ報告2008 もの書く人々とサイクロンのあとさき」『世界文学』No.109, 世界文学会、pp.67-83.
— 2010a,『テインペーミン短編集』(編訳) 大同生命国政文化基金.
— 2010b,「短編小説の語るビルマ文学の最前線」『EX ORIENTE』Vol.17, 大阪大学言語社会学会、pp.29-58.
— 2010c,「日本占領期におけるビルマ文学—小説の役割を中心に—」『大阪大学世界言語研究センター論集』第3号、大阪大学世界言語研究センター、pp.109-136.
森川万智子, 2000,「ビルマの「慰安婦」・性暴力被害」『「慰安婦」戦時性暴力の実態 II 中国東南アジア・太平洋編』緑風出版、pp.314-335.
— 2002,「あと少しで被害者発見です ビルマ慰安婦調査2001年12月」『草の根通信』第352号、pp.4-5.
— 2002,「産みの苦しみでしょうか ビルマ被害者にたどりつけず」『草の根通信』第355号、pp.6-7.
ルードゥ・ドー・アマー, 1994,『ビルマの民衆文化 語られたパゴダと微笑みの国』(土橋泰子訳) 新宿書房.
レ・ティ・ニャム・トゥエット, 2010,『ベトナム女性史 フランス植民地時代からベトナム戦争まで』(藤目ゆき監修、片山須美子訳) 明石書店.

本稿は、平成 21 年度から 23 年度の日本学術振興会・科学研究補助金、基盤研究(C)「ビルマ文学史における日本占領期」における研究成果も取り入れている。ビルマ国内の文学関係者の協力にも感謝を捧げたい。

＜補足資料＞

■ルードゥ・ドー・アマー：権力に対して真実を語って
Ludu Daw Amar: Speaking Truth to Power

ミン・ジン
2002年10月
The Irrawaddy（『イラワジ川』），Volume. 10 Number. 8

ビルマの最もよく知られた女性ジャーナリストで社会批評家であるルードゥ・ドー・アマーの人生を概観してみたい。アマーというビルマ語は「強さ」（the strong）または「固さ」（the hard）と訳すことができる。これはビルマの最も尊敬を受けている女性の一人であり、11月で87歳を迎えるルードゥ・ドー・アマー（Ludu Daw Amar／彼女はAmahと表記することを好む）にふさわしい言葉だ。大衆に対して／大衆のためにメッセージを発する能力をもった精力的な政治的反対者で左翼ジャーナリストであるルードゥ・ドー・アマーとその家族たちは、当局との間であまりにも多くのトラブルを抱えてきた。ドー・アマーは現在も継続的な監視下に置かれているが、彼女は権力に屈することは決してなかった。ルードゥ（人民）という敬称が示唆するように、ドー・アマーの存在意義は、人民の代わりに権力に対して妥協することなく真実を語ることにある。

「私はその第一印象を決して忘れないでしょう」－1995年以来ドー・アマーに四回面会したオランダ人ジャーナリスト、ミンカ・ネイハイスはその思い出を次のように語っている。「最初、彼女はとても痩せて見え、彼女の腕には腕時計が重過ぎるのではないかとさえ思われた。しかし、彼女がしゃべりだすと、その印象はすぐに消えうせた」。彼女のゆるぎないコミットメントと強さについてコメントを求めると、ドー・アマーは『The Irrawaddy』（『イラワジ川』）に対して次のように語った。「私は簡単にはあきらめません。しかも、不正義に寛容ではいられないのです。これが私の考え方なのです」。

彼女の伝記にある幼少期の逸話は、この強い精神のルーツを明らかにし、しばしば見過ごされてきた彼女の謙虚な一面をも示している。「母は私たちをむち打つとき、『泣くのはおやめ』と言うのです。きょうだいたちは私を除いて皆泣くのをやめましたが、私は痛かったので泣きました。しかし、泣けば泣くほど、私はむちで打たれたのです。母はどうやって私に痛みを感じさせなくしたでしょうか。実際、それは断固としたものでした。母と私の我慢比べとなったのです」。このタフな性格は、彼女が1936年にラングーン大学に入学した後、彼女をまず政治に引き寄せることになった。

イギリスに対する独立運動の期間、彼女はその勇気と美貌を日刊新聞に賞賛され、1938年にはすでにビルマの文学界に彼女の最初でかつ後世に残る印を刻印することになった。国立学校の学長で後に1947年にビルマの独立のヒーローであるアウン・サンと共に暗殺されたウー・ラザクは、ドー・アマーにモーリス・コリスの書物『ビルマでの試練』(Trial in

Burma）をビルマ語に訳すことを提案した。出版者は、月刊の青年向け雑誌『Kyipwa Yay』（進歩青年）を発行し、ラングーンで出版社を経営していたウー・ラであった。翌年にドー・アマーの夫となったウー・ラの援助を受け、翻訳はたちまち成功し、二ヶ月間で初版の3000部が売り切れとなり、すぐさまその倍の数が増刷されることになった。

ウー・ラが妻とともにマンダレーに移住すると、ドー・アマーの文学活動はより活発となった。その作品のほとんどは英語の小説の翻訳だったが、彼女の真の情熱はジャーナリズムにあった。第二次世界大戦の終結後、ウー・ラは、ドー・アマーを編集助手として、隔週刊の雑誌『ルードゥ』（人民）を発刊した。1946年には二人は『ルードゥ・デイリー・ニュース』を発刊した。その政治的論評と分析は植民地支配反対の熱望と闘争のための重要な声となった。そこから、ドー・アマーはルードゥ・ドー・アマーという名前を得ることになった。しかし、ビルマが1948年に独立を達成したそのわずか一年後、マンダレーのルードゥ出版社は爆弾で瓦礫の山となった。

「当時、マンダレーではよく政権が変わった」－ドー・アマーはそう説明する。「軍部はルードゥ紙を共産主義者に共感を寄せているとみなしており、そこで政府軍は建物を爆破したのです」。彼らは彼女の家を取り囲み、子どもたちと二人の妊婦を含む、家にいたすべての者を強制的に外に連れ出した。その後、兵士たちは銃を構えた。「午前中のことでした。彼らは私たちにマシンガンの照準を合わせ、私たちを皆殺しにすると脅しました」とドー・アマーは当時を思い出して語っている。勇敢にも彼女は決然として立ち上がり、兵士たちに説明を要求した。地域の僧侶たちやその他の人々が彼女たちの釈放を懇願し、軍隊は何の危害も加えずに立ち去った。

独立に続いて発生した内戦は急速に強まり、権力の蛮行も激しくなった。『ルードゥ』は新しい事務所で再刊されることになり、ドー・アマーも不正義に対する活発な反対を再開した。国内の平和を呼びかけ、世界の出来事を分析する彼女の記事は、とりわけ進歩的な青年たちに歓迎された。50代の作家ニィ・セー・ミンは「国際政治についてのドー・アマーの確固とした分析は、私たちの目と耳を開かせた。彼女の政治的見解は私たちの賞賛を得た」と当時を思い出して語っている。

1953年、コペンハーゲンでの世界民主女性会議、ブダペストでの世界平和会議、ブカレストでの世界青年祭典に参加することで、彼女の政治活動は国際舞台にのぼることになった。同じ年、五人目の子どもが生まれた直後、彼女の夫が政府によって拘束され、三年半にわたって投獄されることになった。今ではドー・アマーの編集責任は倍化することなり、子どもたちを叔母に預けざるを得なくなった。

子どもたちを直接に元気づけることはできなかったが、ドー・アマーは彼らの生活になんとか影響を与えようとした。彼女が子どもたちに与えた推薦図書のリストには、『チャップリン自伝』、『ローマ帝国衰亡史』、そして国際的な環境意識を高めた独創的な作品である『沈黙の春』があった。彼女はその他にも Thakin Kodawhmaing の作品のようなビルマ古典や Khitsan の革新（20世紀前半のビルマ文学の現代化）をもあげていた。

「母は『こうしなければならない』とか『そうしてはならない』とはめったに言いませんでしたが、自分の行動でそれを示しました」とドー・アマーの次男ポー・タン・ジャウンは語る。「三人の兄弟の誰も酒も飲まず、タバコも吸いません。しかしそれは両親がそうするなと言ったからではなく、自分たちの行動によってそれらが良くないものであること

を私たちに納得させたのです」。

1950年代後半までに、彼女の長男ソー・ウィンは母の範に習い学生会で政治活動を活発におこなうようになり、1963年にはビルマ共産党（CPB）とともに武装闘争に加わるために地下に潜行した。その後ポー・タン・ジャウンが政治活動を理由にマンダレー大学を退学処分になると、軍事政権はそれぞれがみな破壊活動分子である疑いがあるとして家族全員を標的にするようになった。ドー・アマーは当然にも自分の息子たちの生活が危険にさらされることを心配するようになったが、悔やんだりはしなかった。違法な政治活動への関与を理由に1966年に懲役6年の刑を受けて下獄したポー・タン・ジャウンは、「両親は私たちの信念に決して異議を唱えなかった。政府のエージェントのことを耳にすると、気をつけるように言うだけだった」と言っている。

1967年、政府はルードゥ紙を発行禁止にした。ポー・タン・ジャウンが投獄されているあいだに、ソー・ウィンはCPBの粛清によってジャングルのなかで殺された。多数の死者を出したこの粛清は、軍によってCPBとそのシンパに対する最も強力なプロパガンダ攻撃として利用された。ポー・タン・ジャウンは釈放された後、ソー・ウィンに何が起こったのかを説明し、その粛清を謝罪するドー・アマー宛ての手紙をCPBのある指導者から受け取った。「私が母にその手紙を手渡すと、彼女の目から涙がこぼれ落ちた。母は私に『お父さんと私はこのことについては話さなかった。何も起こっていないふりをしていただけ』と言った」と彼は語った。数年後、ポー・タン・ジャウンは兄の歩みを追ってCPBに参加した。軍はそれに応えて1978年に彼の両親と弟のコー・ニェイン・チャンを逮捕したが、ドー・アマーの反抗精神は揺らぐことがなかった。

一家の政治的激動のなかでも、ドー・アマーは作家Thakin Kodawhmaing、漫画家シェ・ヨーとバー・カレー、パフォーマンス・アーティストのシェ・マン・ティン・マウンその他の人物の経歴の調査に多くの時間を捧げ、賞を受賞し今では現代の古典とされている『人民が愛する芸術家』など多くの文学作品を生み出した。彼女はまた、『ビルマの非演劇的パフォーマンス（Anyien）』や『現代演劇（Thabin）』、その他にも文化的アイデンティティーの問題に焦点をあてたビルマの古典音楽や絵画についての作品などを書いた。

しかし、ドー・アマーは単なるノスタルジックな伝統主義者ではなかった。彼女は料理を楽しみ、花や田舎の市場に愛着をもっていたが、ハリウッド映画やディズニーのアニメも好んだ。そして、ビルマの歴史的文化財の業績をあげることが彼女の著作のすべてではなく、彼女は現代ビルマ文学とそれ以前とを分かつ革新的な話法の先駆者でもあった。彼女はまた、性教育を唱導し、現代ビルマ社会における女性の不払い労働の貢献について声を上げて告発する点での開拓者でもあった。

ルードゥ・ウー・ラは1982年に亡くなったが、ドー・アマーは孤独な寡婦として取り残されはしなかった。友人や称賛者が彼女の揺るぎない高潔さと人を鼓舞する著作のまわりに集まった。1985年の70歳の誕生日からは、国中の作家や支援者が毎年マンダレーに集まり彼女に敬意を払うことになった。

ドー・アマーの人気にもかかわらず－あるいはむしろそのために－彼女の家族は打ち続く政治的苦境に耐えてこなければならなかった。ニー・プー・レーというペンネームで著名な短編作家であるコー・ニェイン・チャンは政府に逮捕され、10年の懲役刑を受けた。彼は違法団体との接触の容疑で逮捕されたのだが、多くの人々は彼の家族の政治的血統と

彼の風刺作品が拘束の理由だと信じている。

1944年以来、ドー・アマーの著作はコミュニティーの結束の崩壊、社会的責任、ビルマにおける文化的退廃の否定的影響－彼女はその理由の幾分かは1988年の軍事クーデター後の経済の歪みと都市への大量の中国人の移民にあるとしているーに向けられている。彼女は続き物の記事『Amay Shay Sagaa』（母が言い習わしてきたこと）で、伝統的な服装を捨て、大量の飲酒やギャンブルの習慣を身につけ、広告が宣伝する最新の流行を追い求める若者たちのライフスタイルの変化を批判している。

「私たちは誇りをもって私たちの雑誌で定期的にドー・アマーの作品を発表してきました。彼女のよく練られた著作は、ビルマ文化の本質を代表しているからです」と雑誌『Kalaya』の出版社ドー・カリャーは語っている。ドー・アマーはまた、HIV/AIDSなど敏感な問題についての進歩的な公開討論をおこなうよう呼びかけてきた。しかし、「検閲委員会は彼女のAIDSについての記事を印刷して出版することを認めませんでした」とドー・カリャーは残念がった。

それにもかかわらず、ドー・アマーの後期の著作は伝統的な社会的文化的価値の喪失を嘆き、ビルマの女性に対してくりかえしビクトリア朝倫理を説くなど保守的な傾向を帯びるようになった。「私たちは彼女をビルマの偉大な女性として称賛します。しかし、女性の権利のために活動する女性活動家として、彼女の厳格な意見については不満に思うところもあります」亡命先を拠点にしたビルマ女性同盟のリーダーであるマー・シュェ・プィン（Ma Sue Pwint）はそう語っている。抑圧的政権と無慈悲で不正な市場に対するドー・アマーの応答は、全般的に民族主義的(nationalistic)、自民族中心主義的(ethno-centric)、宗教中心主義的（religious-centric）な地平の枠内にあった。伝統的アイデンティティーの再興を呼びかけるなかで、彼女はしばしば多民族社会ビルマのなかで民主的政策を育むために不可欠な市民を基礎にした政治と市民の責任を認識できないことがあった。

しかし、進歩的政治と現代の文化的傾向の文脈だけでドー・アマーの最近の著作を解釈することは、誤読をおかすことになる。60年以上前に初めてペンを執って以来、彼女は衰弱し続ける社会経済状況と絶え間ない政治弾圧という環境のなかでたゆみなく活動してきた。彼女はかつての王都でビルマ独立のシンボルであるマンダレーの歴史と文化の擁護者である。50歳代のベテラン・ジャーナリストであるルードゥ・ウー・セイン・ウィンによれば、ドー・アマーは伝統的なビルマ文化のアイデンティティーと尊厳の頑強な擁護者である。不正義と闘い、沈黙への恫喝を拒絶し続けてきたその人生によって、彼女は生ける抵抗のシンボルとなったのである。

「当局に踊らされてはならない」－ルードゥ・ドー・アマーへのインタビュー
"Don't Dance to the Tune of the Authorities" An Interview with Ludu Daw Amar

『The Irrawaddy』の編集助手ミン・ジンは最近、87歳のルードゥ・ドー・アマーに、彼女の人生経験や最近のビルマの報道の状況についての見解を尋ねた。彼女はまた、中国人移民、女性の権利、少数民族の権利など社会的政治的な問題についても意見を述べた。以下はその抜粋である。

Q: あなたはジャーナリストとしての人生を選びたかったが、その能力を生かす仕事をすることを許されなかったので、焦点を伝記的作品やその他の記事に向けることになったといっています。若い人々は今日、あなたを社会批評家あるいは道徳的指導者とみなしています。あなたご自身はご自分のことをいかなる者だと考えていらっしゃいますか？
A: 新聞に記事を書いていたときには、私は社会的政治的な問題に十分な注意を払うことができていました。その後、新聞の廃刊を強制され（1967年）、20年間続けてきた仕事をやめなくてはならなくなりました。今ではもう新聞に書くことはできませんが、それでも特定の社会的問題や報道が目に留まったときにはそれについて書いています。私の報道本能は私の作品のあちこちにその影響を与えています。しかし、私はやはり新聞ジャーナリストであったと主張したいと思います。当時は自由に者を書くことができたのです。

Q: 新聞編集の経験者として、現在のビルマの報道の状況をどのように評価していますか？
A: 状況は次のようなものです。私たちはどのような報道もかつてのようにはすることはできません。報道の自由はありません。報道監視委員会の制限は極めて厳しいものです。つまり、私たちが書きたいように書くことができないのです。そういうわけで、私は罪を問われないもの、民族文化について書くようになったのです。

Q: ビルマでは現在、雑誌出版が急速に広がっていますが、優れたジャーナリズムが長期にわたって育まれる見通しについてはどのようにお考えでしょうか？
A: 見通しはよくありません。ビルマのジャーナリズムの切れ味は鈍くなっています。新しい優れたジャーナリスト集団は、私たちが自由に新聞を発行できるようになったときにのみ現れると思います。現在、いかなるジャーナリストも真の新聞ジャーナリストであるとは私は思いません。

Q: あなたは民族間の友情を育む意図をもってタイとアフリカのいくつかの短編小説を翻訳していらっしゃいます。多くの人々は最近のタイとビルマのあいだの激しい論争は、ビルマ政府が発行する新聞の無責任な記者による反タイ王政の記事が原因だと考えています。民族間の友好を促進しようとしてきた作家として、いかがお考えでしょうか？
A: これはジャーナリストの責務に反するものです。それだけでなく、この一群のジャーナリストたちは軍司令官の言いなりになってその命令を唯々諾々と実行しているのです。しかしながら、これが今日のビルマのジャーナリストの唯一の類型なのです。自由に書き、独自の考えや意見を表明しようとするジャーナリストのグループもいます。しかし今日、ジャーナリストたちは自分の意見を自由に書くことができないのです。当局に踊らされない私たちのようなジャーナリストは、広くメッセージを受け取ろうとして私たちが書くもののなかで創造的でなければなりません。それはとても難しいことです。

Q: あなたはある記事のなかで、現在を「Lampang の時代」（裕福な中国人ビジネスマンの時代）と呼んでいます。近年のマンダレーにおける大量の中国人の移民についてどのよう

にお考えでしょうか？
A: 私たちはまるで雲南（省）の－中華人民共和国ではなく－宣言なき植民地にいるように感じています。雲南はまさに私たちの玄関口にあって、私たちがドアを開けるやいなや、雲南の人々はまるでマンダレーが自分たちの国であるかのようにどっと流れ込んできたのです。

Q: 女性の権利運動は世界中で力をつけています。いくつかの国では、不公正な社会制度の不均衡を是正し、女性を支援しエンパワーするために、アファーマティブ・アクション政策を実施しています。このようなモデルはビルマに適用できるでしょうか？
A: 私たちビルマ女性にはそうしたものはまったくありません。それを目標とすることさえできません。私たちの国には女性の権利どころか、人権そのものがないのです。これが実際の状況です。

Q: あなたは過去にビルマの少数民族についていくつかの記事を書いていますが、その最近の状況についてどのようにお考えですか？
A: かれらは私たちと平等であるべきです。

Q: 少数民族はビルマが独立を達成して以来、平等を享受してこなかったとお考えですか？
A: そうです。（少数民族とビルマ人が）平等であったことはありませんでした。

Q: あなたの息子たちは皆、政治に参加し、大きな犠牲を払い、自らが信じるところのものを表明するために大きな代償を払ってきました。あなたは彼らの政治への参加をやめさせようとしたことはありますか？あるいは、そうしなかったことを後悔していますか？
A: 後悔はありません。人民はその国の状況が要求するとき、政治に関与するのです。私の子どもたちは若いときに政治に参加しました。かれらがそうすべきだと思ったからです。私たちは独立のために闘わなければならず、半世紀以上も内戦を耐えてきました。こうした状況のなかでは、政治家や政治的活動家をつくりだすことこそ政府に対する回答なのです。人間は人間であり、不正義を知ったとき、それに反対して声をあげるようになります。そして、声をあげたために鞭打たれ、逮捕されることで、かれらは政治家あるいは活動家になるのです。それが、私が目撃してきたことです。同じように、政府はあなた方を若いときに政治的活動家にさせたのではありませんか。ですから、私は子どもたちに関して後悔も満足も感じていませんが、起こるであろうこととしてそれを受け入れてきました。

Q: 個人的な質問ですが、キン・ニュン将軍があなたに誕生日プレゼントとしてボールペンを送ったとか、ドー・アウン・サン・スーチーもあなたに敬意を払ったとか聞いたことがあるのですが、これらの噂は本当ですか？
A: ええ。キン・ニュンは私に敬意を表してお金とかボールペンなどのプレゼントをくれましたよ。数回そうしたことがあったと思います。ドー・アウン・サン・スーチーも使者を送ってきました。

Q: ビルマ中から示されているあなたへの称賛についてどのように思っていますか？
A: とりたてて思うことはありません。
（このインタビューはビルマ語でおこなわれ、それを英語に翻訳した）

■訃報

ルードゥ・ドー・アマー

指導的な反体制作家として彼女はビルマの民主化のために闘った

アンナ・アロット
ガーディアン紙 2008年4月12日（日曜日）

近年、11月29日が近づくと、作家、ジャーナリスト、芸術家はビルマ全土からこの国の文化的中心地であるマンダレーに向かい、ある僧院の敷地内に集まるのが常となっていた。そこでかれらは作家で出版者、活動家であるルードゥ・ドー・アマーの誕生日を祝うのだった。彼女は92歳で亡くなった。イギリスの植民地支配に反対するラングーン大学での学生ストライキに参加した1930年代中期以来、彼女は書くこと、あるいは闘うことを決してやめなかった。

多くの人々にとって、この僧院の敷地に集まるということは、ビルマの軍事政権に対する反対の意思を示す手段であった。あいにくそれは、軍の情報部門が反体制派の名前と顔を把握する機会でもあった。ネ・ウィン将軍がその後約半世紀にわたってビルマを軍事独裁下に置くことになるクーデターを起こした1962年以来、ドー・アマーはそれに反対し続けてきた。彼女と彼女の家族は大きな代償を払った。

ドー・アマーはタバコの商いで財産を築いた上流階級の家族の12人きょうだいの第四子として生まれた。マンダレーのアメリカン・バプテスト学校と国立高校で教育を受けた後、彼女はマンダレー中等学校とラングーン大学で科学を学んだ。

1936年、ラングーン大学で彼女は学生ストライキに参加した。彼女はまた出版活動も開始した。1938年には、彼女はイギリスの公務員モーリス・コリスの評論『ビルマでの試練』（Trial in Burma）を翻訳した。1939年、彼女はジャーナリストであるウー・ラと結婚した。彼は1933年にラングーンで左派雑誌『Ludu Kyi-bwa-yay』（進歩）を創刊していた。かれらは二人でマンダレーに「Kyi-bwa-yay 出版」を設立した。

1942年、イギリスの支配は崩壊し、ビルマは日本軍の手に落ちた。二人は『Ludu Kyi-bwa-yay』の発行を続けながら、マンダレー北部に移り住んだ。ドー・アマーは火野葦平の好戦的な日本のベストセラー作品『麦と兵隊』を翻訳したが、抵抗運動にも関与するようになった。1945年春までに日本軍はビルマから去り、その年の夏にはウー・ラはドー・アマーを編集助手として雑誌『ルードゥ』（Ludu／人民）の発行を開始し、それは1946年には日刊紙『ルードゥ』（Ludu Thadin-sa）に引き継がれた。1948年にビルマがイギリスからの独立に向かって動き出すと、二人の名前には「ルードゥ」が冠せられるようになった。

しかし独立からまもなくして、二人のラディカリズムに敵愾心をもっていた軍は、出版社を瓦礫の山とした。かれらの家族たちはすんでのところで逃げ延びた。

1953年、ドー・アマーはソビエトが支援するコペンハーゲンでの平和会議とルーマニアでの青年会議に出席した。他方、彼女の夫はビルマ共産党（CPB）に鼓舞された学生の抗議行動に関与したとして有罪を宣告され、反乱罪で懲役3年の刑を受けた。ドー・アマーは5人の子どもたちを育てながら、1957年にウー・ラが釈放されるまで『ルードゥ』紙の出版を続けた。しかし、その2年後、政府は新聞を14ヶ月間の停刊に処した。

クーデターから5年後の1967年、政府は『ルードゥ』紙を廃刊処分にした。ドー・アマーはその著作を政治から文化や歴史に切り替え、戦前のビルマの歌い手や演劇者に焦点を当てるようになった。

軍事政権の登場とともに、ドー・アマーの長男と次男を含む多くの学生たちが学生活動家となった。長男のソー・ウィンは山岳地帯の密林に向かった。1968年、彼はそこで中国の文化大革命の影響を受けたCPB内の粛清で殺害された。次男のタン・ジャウンも学生活動家で、1966年から1972年まで投獄され、1978年に再逮捕される間際で逃れてCPBに参加し、後に雲南に亡命した。このCPBの指導的メンバーは再び母と会うつもりはない。この逃亡劇が起こると、軍の情報部門はウー・ラ、ドー・アマー、かれらの末っ子を13ヶ月間拘禁した。

かれらは1979年に釈放された。ドー・アマーはビルマの私営の月刊誌に書き、政府系の出版物に書くことは拒絶したが、出版社は印刷業でなんとか維持された。目先の利くある女性実業家が彼女の多くの記事を書籍のかたちで出版した。

1982年、ウー・ラは亡くなった。ドー・アマーは出版社の経営を続けたが、1984年の乾季に火事がマンダレー中心部を襲い、「Kyi-bwa-yay出版」の印刷設備、書籍製作室、新聞売り場は灰燼と化した。幸運にも彼女の家、図書室、新聞保管庫は無事だった。

5年後、38歳になった彼女の末っ子が懲役10年の刑を受けた。彼はThayetに投獄されたが、ドー・アマーや彼の妻、その3人の子どもたちがそこに面会に行くためには丸二日間がかかった。

他方、1990年代、政府は観光客のための街の「美化」計画の一部として、墓地をマンダレーのはるか郊外に移転させはじめた。そこでドー・アマーは1998年に、ビルマ経済崩壊のなかで貧しすぎて死者の埋葬もできない人々を支援する相互扶助協会「Byamazo lu-hmuyay Athin」を設立した。当初、マンダレーの軍のトップは憤慨し、この活動を妨害したが、後に－この活動は明らかに必要性があったので－それを認め、他の都市でもこの計画が模倣された。

ドー・アマーは2003年に「Kyi-bwa-yay 出版社」のすぐ裏に小さな建物を建てた。彼女の生涯にわたって集めてきた蔵書がそこに収められた。これはマンダレーで、過去半世紀で初めての誰もが利用できる図書館となる。90歳代になってもドー・アマーは月刊誌に記事を書き、すくなくとも一年に一冊は小さな本を出版した。

私が初めてドー・アマーに会ったのは、1970年代のことだった。仏教的価値を信奉する

伝統的ビルマの代弁者となり、より民主的で人間的な社会、自由に正直に書くことできる社会をめざす闘いによって反政府派の象徴になった彼女に対する私の第一印象－知性、思慮深さ、やさしさ－はその後も変わることはなかった。

私たちは1980年代と1990年代にも会い、最後に会ったのは2005年1月のことだった。彼女の90歳の誕生パーティーへの出席をビルマ政府に妨害されたことは、深い悲しみの源となっている。しかし、私は3年前に会ったときの「私たちは人間として扱われることを願っているだけなのです」という彼女の最後の言葉を思い出す。彼女は二人の息子、二人の娘、6人の孫を残して他界した。

－ルードゥ・ドー・アマー、作家・活動家、1915 年 11 月 29 日生まれ、
2008 年 4 月 7 日　死去

■ルードゥ・ドー・アマー　－信念と勇気をもったビルマ人文筆家

2008年7月4日
Myint Zan

ドー・アマー
1915年11月29日、ビルマ・マンダレー生まれ
2008年4月7日、ビルマ・マンダレーで死去

人々に尊敬されていた優れたビルマ人作家ルードゥ（「人民」）・ドー・アマーがビルマのマンダレーで92歳で亡くなった。彼女はその生涯の歩みによって国中の人々から尊敬されていた。ドー・アマーはその著作によってだけでなく、文学、政治、文化に関する、彼女が人民のものであるべきと信じる立場からする勇気ある発言によって、人々から愛され、尊敬された。

ドー・アマー（「ドー」(Daw) はビルマ人女性につける敬称で、およそ英語の「Ms」に該当する）は、とても若くしてビルマの文学界、そして政治のシーンにその名前を刻んだ。ラングーン大学で学んでいるとき、彼女は1936年2月の第二次学生ストライキとして知られる大学当局およびイギリス植民当局に対するストライキを牽引した学生リーダーの一人となった。ストライキの二年後の1938年、彼女は最初の著作となるモーリス・コリスの『ビルマでの試練』(Trials in Burma) の翻訳を出版した。彼女は大学時代にマウン（「若者」(lad) を意味する敬称）－後のウー・ラ（「ミスター・ハンサムの意」）という名の一人のジャーナリストと出会った。かれらは1939年に結婚し、そのすぐ後にウー・ラは、ビルマの文化的首都でドー・アマーの故郷であるマンダレーに移った。二人は戦争時および、さまざまな理由で投獄されていた時期を除き、ルードゥ・ウー・ラが1982年に亡くなるまで

の約40年間、マンダレーで生活し働いた。

1950年代初期からラとアマーの二人は、ルードゥ（人民）という敬称をつけて知られるようになった。それは、ウー・ラとドー・アマーが終戦直後の1945年に共同で創刊した雑誌－後に独立した日刊紙になる－の名前に由来する。ルードゥ（Ludu）は英語で「The people」と訳されているが、ビルマ語では通常このthe people の訳語には、「その国の市民」（citizens of the country）を意味する「Pyithu」があてられている。Luduというのは、「人民大衆」（masses of people）とでも訳すことができる、より口語的で、ある意味でより戦闘的な用語である。1946年、二人は国内外の諸事件に関して左翼的な論陣をはるルードゥ・デイリー・ニュースペーパーを創刊した。それは、1967年7月に当時の革命政府によって永久に廃刊にされるまで、マンダレーで最初の－そして後には唯一の－民営の新聞であった。

ルードゥ・ドー・アマーは、あまりにも大きな困難を勇気と忍耐をもって耐え抜いてきた。1950年代には、夫のウー・ラが扇動罪で三年の懲役刑に処せられた。この期間、彼女は育ち盛りの子どもたちの面倒をみつつ、ルードゥ紙を経営した。

ルードゥ夫妻の確固たる左翼的見解は、少なくとも二人の子どもたちには、よりラディカルな方法で引き継がれたようだ。ドー・アマーの長男ソー・ウィンはラングーン大学の学生時代の1963年に「地下に潜り」、共産主義者たちと合流した（ビルマ共産党－CPB－は1939年に結成された。ビルマ独立直後、CPBは地下に潜行し、1948年3月に非合法化され、現在に至っている）。悲しいことに、CPBの司令部があったペグ山での「内部粛清」で、1968年にソー・ウィンは殺害された。ドー・アマーの次男ポー・タン・ジャウン（「鉄の仲間」）

は、1966年から1972年まで約6年間（無実の罪で裁判もないまま）投獄された。1976年8月、再逮捕されるすれすれのところで、ポー・タン・ジャウンはなんとか逃げ延び、CPBに合流した。母と息子はその後会うことはなかった。ポー・タン・ジャウンと接触した嫌疑で、ルードゥ夫妻は投獄され、ドー・アマーについては－彼女が私に語ったところでは－1978年から1979年にかけて「一年と一ヶ月、一日」投獄された。彼女の末っ子ニェイン・チャン（作家のニー・プー・レー）は、父と同様に扇動罪で有罪を宣告された。ニェイン・チャンは亡くなった彼の父が1950年代に投獄されたときよりも権威主義的な政権の下、より過酷な条件のなかで、父の二倍以上の日々を監獄で過ごした。

ルードゥ紙には夫妻のそれぞれのコラムがあった。「(私が) 書きたいことの寄せ集め」(Motley of things that [I] want to write about) と題されたウー・ラのコラムは、内容とトーンの双方で「揺れ動く世界の諸事件についての論評」(Comments on the Moving World Events) と題するドー・アマーのコラムよりもイデオロギー色が少なく、ソフトだった。1960年代中期、ルードゥ紙の論説、とりわけドー・アマーのコラムはジョンソン政権のベトナム政策を弾劾し続けた。ドー・アマーは同国人で当時の国連事務総長であったウ・タントに対しても「容赦」せず、ベトナム紛争の解決に向けた取り組みにおけるウ・タントの「偏向」(もちろんアメリカ寄りの) を非難した。

文筆家としてのドー・アマーの貢献は、政治問題にとどまることはなかった。1964年、彼女は主にビルマの文化的中心地マンダレー出身のビルマの歌い手や芸術家について入念で有益な研究である著作『人民に愛された芸術家たち』(rtistes Loved by the People) で国内の文学賞を受賞した。1967年7月にルードゥ紙が廃刊に追い込まれた後、彼女の著作の方向性は、それ以前の政治問題に集中したものからビルマ文化に関する話題に、そして彼女が70歳代、80歳代になってからは社会問題へと移行した。彼女は1964年以後も引き続いてビルマ文化のさまざまな側面についての著作を出版し、多くの重要な貢献をおこなったが、政府エリートが授与する国内の文学賞を二度と受賞することはなかった。彼女自身を含めて彼女の家族のほとんどの政治的見解や立場が当局に受け入れられなかったという事実は別にしても、その第一の理由は、(少なくとも当時は) 不自然で、(ある意味で) エリート的な文語的あるいは公式的な文体よりも、親しみやすい「口語体」を用いるという、1967年ごろに物を書き始めて以来の彼女の信念にもとづく立場によるものだった。

過去四半世紀、彼女が亡くなる直前まで、国中から数百人の人々が、ドー・アマーを讃えるために、毎年11月29日にマンダレー近くの僧院に集まった（彼女の最後の－92歳の－誕生日祝いは、彼女の娘の家でおこなわれた。当局が公共の場所での彼女の誕生日を祝うことを許可しなかったので、個人の家で行われることになったのだった)。ドー・アマーは晩年には愛情と敬意をこめて単に「アメイー」(お母さん) と呼ばれるようになった。おそらく時には、そして少なくとも何人かからは、ほめすぎと思われる言葉を受けたが、彼女はいつも控えめで穏やかだった。私は10年前に、おそらくは作り話だが、当時の国家法秩序回復評議会の委員の一人が彼女の誕生日祝いに高価なペンを（直接ではなく代理人を通して）渡したが、彼女はそれを投げ捨てたという、という話を読んだことがある。2004年

初めに約15年ぶりにドー・アマーに会ったとき、この件について彼女に尋ねた。彼女は気取らず穏やかに、それは真実ではなく、「そうしようとは思わなかった」と語った。しかし、彼女は亡くなる数週間前に至るまで、印刷メディア（彼女は90歳になっても口述で文章を発表し続けた）や外国のラジオ局とのインタビューを通して、様々な問題についての自分の考えをつねに語り続けた。

アメイー・ドー・アマーは長生きをしたので、その長く生産的で人を鼓舞する人生のなかで、多くの友人、同世代人、時には（おそらくは）自分より若い仲間に先立たれた。その全生涯を通して、彼女は先輩者、国際的人物を含む同世代人、そして自分よりも若い人々に対する様々な追悼文を書いている。彼女が追悼文を書いた国際的人物には、バーナード・ラッセル（1872-1970）やイタロ・カルヴィーノ（1923-1985）がいる。2003年ごろ、彼女の友人や同僚たちは彼女の追悼文を集め、「（旅立っていった）人々の思い出についてのエッセイ」とでも訳せる題をつけて出版した。

ビルマ人現代詩人ティン・モウ（1933-2007）が2007年1月22日に亡命先のロサンゼルスで亡くなったとき、ドー・アマーはボイス・オブ・アメリカおよびイギリス放送協会（BBC）とのインタビューで、（彼女の表現によれば）「無用な老女」である自分は死んでいないのに、ティン・モウは（彼女によれば「全盛期」であったのに）73歳で死ななければならなかった、と嘆き悲しんだ。彼女はもはや書くことができなくなったので自分は「無用」になったとほのめかした。（しかし実際には、亡くなる数年前まで彼女は娘への口述という形で「書き」続けた。それがいくぶん困難になるのは亡くなる数ヶ月前のことだった）。

しかし、アメイー・ドー・アマーが自分は「無用な老女」になったと言うのは、自分を卑下しすぎることであったろう。尊敬されるべき年齢ではあっても、「無用」では決してなかった、と私たちははっきりと言うことができる。実際、彼女の人生は残された私たちを大きく鼓舞するものであったし、彼女を失ってわたしたちは本当に寂しく思う。

ドー・アマーがその文学的政治的キャリアをスタートさせた70年以上前の1936年2月のラングーン大学での学生ストライキの頃だと思われるが、後にMinthuwn（1909-2004）という名で知られるようになるもう一人のすぐれたビルマ人文学者が、彼女に手書きの詩を送っている。私の翻訳ではそれは次のようなものだ（この詩は堅固さを意味する彼女の名前「アマー」をその原点として、また忠告として使っている）。

曲がった道は「まっすぐな」道ではない
無気力は堅固さではない
不正が正しさにまさるようにさせてはならない
堅固さを無気力にさせてはならない

アメイー・ドー・アマーの生涯は、彼女がその名の通りの堅固さをもって生きてきたことを示して余りある。実際、優しさにあふれ確信に満ちたその生涯は、その死を悼むすべ

ての人々を励まし、その勇気の源となってきたのだ。

ミン・ザン　Dr. Myint Zan
マラッカ・マルティメディア大学法学部教授
マレーシア

（以上３編　翻訳：池田高巌）

■ビルマ　　ダウ・アマー夫人（ジャーナリスト）

コペンハーゲン世界女性大会（1953年６月）の発言より
出典　世界婦人大会代表報告会中央準備会編『平和と幸福のために－世界婦人大会報告・決議集』（五月書房、1954年）

ビルマでは、女は、農業労働者や、軽工業労働者や、苦力や、家内労働者や、手工業労働者や、売子や、行商人として、やとわれています。女性で、技師や裁判官や役人になっているものは、一人もありません。

女はひじょうに低い賃金しかもらえません。労働省でつくった統計によりますと、八百の工業企業にいる婦人労働者のうち、その二割一分は、五十ルピー以下の月給しかもらっておらず、五割一分が、五十ルピーから八十ルピーのあいだの給料をもらっている状態です。ラングーンのあるゴム工場では、女たちは、一日わずか一ルピーから一ルピー半の賃金しかとっていません。これは、男子労働者の平均賃金の半分です。農村では、この状態はもっと悪くなります。農村の中流家庭では、二頭の牛馬、いいかえれば約十エーカーを耕すだけの牛馬しかもっていず、生きてゆくに十分の作物をつくることもできません。

豊かな階級にぞくする女たちも、同じように、独立した生活をすることはできませんし、役人の妻には、じぶんの国の政治生活、公共生活に参与することがゆるされておりません。若い娘たちが、奴隷として売り買いされるという例も、まだのこっています。妻には、離婚する権利がありながら、離婚しようとおもう女はごくまれです。男には多くの妻をもつ権利があり、この妻たちは、虐待されたとか棄てられたとかしなければ、たいていのばあい自由をとりもどすということはありません。

全国で、人口は一千七百万にのぼりますが、それにたいして、一九五二年末には、国家の補助による母子施療所は百八、公共の産院は一つ、母子病院は二つ、附属療養所は一つしかありません。

一九五二－五三年度予算では、四億八千六百九十万ルピー、すなわち、国の全資金の七割が軍事目的にわりあてられています。

軍備や、いわゆる国防なるものに、これほど巨額の資金をついやしながら、ビルマ政府は、国境周辺の国民党の侵略者たちをおいはらうこともできなかったのです。

アメリカ政府は、日本に六百の軍事基地をもち、台湾を航空母艦として利用するだけで

は足りないで、今日では、新中国を破壊し、アジア全土を戦争陣営にだきこもうという目的で、ビルマを軍事基地化しようとたくらんでいます。

現在、ビルマの婦人たちは、民族独立のための国民全体のたたかいをおこないながら、同時に、じぶんたちの権利のためにもたたかわなければならないということを理解しています。また、世界中で、平和のために力強いたたかいがおこなわれているということも、ビルマの女性は知りました。いまビルマの女は、平和と、独立と、婦人の権利をまもるためのじぶんたちの闘争が勝利をおさめるように、統一のためにねばり強い、断固とした努力をはらっています。

特集２

WIDF の朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち

【特集趣旨】

WIDFの朝鮮戦争真相調査団に参加した女性たち

―鉄のカーテンを越えて

藤目ゆき

WIDFの朝鮮戦争真相調査団

朝鮮戦争最中の1951年5月、国際民主女性連盟(Women's International Democratic Federation、以下、WIDFと略称)がその加入団体である朝鮮女性同盟からの呼びかけに応えて組織した国際調査団が北朝鮮を訪問している。

WIDFは、1945年11月26日より12月1日までの6日間にパリで開かれた国際女性大会(40ヵ国、850人の女性が参加)によって創立された、女性の権利と子どもの幸福・平和と民主主義・民族独立を追求する国際NGOである[1]。

調査団にはヨーロッパ、アジア、太平洋、アフリカ、南北アメリカの、「国連軍」参加国をふくむ東西両陣営の17ヵ国から、女性たちが参加した。調査団報告書の日本語版・英語版のそれぞれの表記によれば、名簿は次のとおりである。

ノラ・K・ロッドNora K. Rodd(カナダ)　団長
リウ・チンヤンChair; Liu Chin-yang (中国)　副団長
イダ・バッハマンIda Bachmann(デンマーク)　副団長

---

[1] WIDFは1945年創立大会(パリ)以後、70年代前半までに48年(ブダペスト)、53年(コペンハーゲン)、58年(ウィーン)、63年(モスクワ)、69年(ヘルシンキ)、75年(東ベルリン)と、国際女性大会を開催した。また、他の国際NGOと共同して多くの重要な国際集会を組織した。55年の世界母親大会(ローザンヌ)、60年の国際女性デー50周年記念集会(コペンハーゲン)、欧州諸国女性の平和・軍備撤廃集会(サルツブルク)、1962年の軍備撤廃集会(ウィーン)、66年の児童保護国際会議(ウィーン)、70年の欧州の安全と協力に関する会議(イースタード)及びアジア・アフリカ・ラテンアメリカの女性問題に関する国際会議などである。WIDFは、1972年に国連総会が1975年を国際女性年と指定するにあたっては、経済社会理事会を通じて推進力となった。平等・発展・平和を柱とする国際女性年の民間ベースの世界大会はWIDFのイニシアティブのもとに75年10月東ベルリンで行われた(140ヵ国1600人の代表参加)。日本の女性団体はWIDFから1949年6月にアジア女性会議(北京)への参加を呼びかけられたが、占領下であり参加できなかった。占領期の日本では日本民主婦人協議会や婦人民主クラブが国内でWIDFと結びつきをもった。独立後の53年、WIDFの大会に日本最初の代表団が参加し、同年結成の日本人団体連合会が1957年10月にWIDFに正式に加盟した。柴山恵美子「国際民主婦人連盟[英]Women's International Democratic Federation(WIDF)」岡崎次郎編集代表『現代マルクス＝レーニン主義事典』上、社会思想社、1980年、618頁

ミルセ・スヴァトソヴァ Misuse Svatosova （チェコ・スロバキア）　書記
トレース・ソエニト・ヘイオリゲルス Trees Soenito-Heyligers （オランダ）　副書記
モニカ・フェルトン Monica Felton（英国）
マリア・アヴシヤンニコワ Maria Ovsyannikova （ソ連）
バイ・ラン Bai Lang（中国）
リ・ケン Li Keng（中国）
ジレット・ジーグレル Gilette Ziegler（仏）
エリザベタ・ガロ Elizabeth Gallo （伊）
エヴァ・プリースターEva Priester （豪）
ヒルデ・カーン Hilde Cahn（東独）
リリー・ヴェヒター Lilly Waechter（西独）
ジエルメ・アンネヴァツ Dr. Germaine Hannevard （ベルギー）
リ・チケ Li Thi Que（ヴェトナム）
カンデラリア・ロドリゲス Candelaria Rodriquez（キューバ）
レオノル・アギアル・ヴァスケス Leonor Aguiar Vazquez （アルゼンチン）
フアトマ・ベン・スリマン Fatma Ben Sliman （チュニジア）
アバシア・フオイデル Abassia Fodil（アルジェリア）
カーテ・フロレン・ヤコブゼン Kate Fleron Jacobsen（デンマーク）　オブザーバー

彼女たちは1951年5月16日から27日にかけて調査を行い、その結果を報告書『朝鮮：私たちは弾劾する－1951年5月16日～27日の朝鮮における WIDF 委員会報告』(Korea: We Accuse : report of the Commission of the Women's International Democratic Federation in Korea, May 16 to 27, 1951）にまとめた。その報告書は英、仏、露、中国、朝鮮の5カ国語で作られ、24カ国語に翻訳されて数千万部が発行された。すべての国連機関と全代表、世界中の政府、膨大な数の個人と団体に送付され、朝鮮戦争停戦のための国際世論の形成に深甚な役割を果たした。この国際女性調査団の取り組みは、女性の国境を越える連帯によって冷戦の壁を両側から破り、戦争の災禍を地上から取り除こうとした重大な試みであった。

この国際女性調査団に参加した女性たちは、どのような人たちだったのか。どういう経緯でなぜ朝鮮戦争戦場まで出かけたのか。朝鮮で何を感じ、どう考えたのか。自分の見聞や思いを自国に帰ってからどのように人々に伝えたのか。その反響はどのようだったのか。本特集は、その手がかりを得るために企画した。17ヵ国20名（オブザーバーをふくめると21名）にのぼる女性のうちわずか2人しか取り上げることができなかったし、その2人についても書くべきことを書き尽くせたわけではないが、これを第一歩としてさらに研究を続け、他の女性たちにも光をあてたいと念じている。

これは、ささやかではあっても、すこぶる重要な一歩になるだろう。なぜなら、この女性国際調査団は、その果たした役割の大きさに比して、世界の女性史叙述のなかでほとんど扱われたことがないからである。以下、このようなテーマに取り組むにいたった背景や経過、関心の所在を明らかにしておきたい。

韓国で進展した朝鮮戦争前後の民間人虐殺に関する調査・研究

私がWIDFの国際女性調査団に関心を抱くようになったのは、朝鮮戦争開戦から50周年にあたる2000年が近づいた頃のことであった。当時、韓国では1980年代から90年代にかけての民主化運動を背景として朝鮮戦争前後の米・韓軍による民間人虐殺問題に関する調査・研究がめざましく進展し、90年代末には東アジアの冷戦と国家テロリズムを問う国際シンポジウムが台北(1997)、韓国の済州島(1998)、沖縄(1999)、韓国の光州(2000)で連続して開催されるなど、長く歴史の闇に封じ込められていた冷戦体制形成期の反共国家テロリズムが明るみに出されはじめていた。私が韓国のカン・ジョング教授による報告から「小さな戦争」という概念を知ったのもそのときのことである(2)。

朝鮮戦争は一般に、1950年6月25日に勃発し、1953年7月27日の休戦協定まで続いた戦争を指すものと理解されている。だが、その「大きな戦争」が始まる以前に、1948年に米軍政下の南朝鮮における単独政府樹立に反対する民衆の二月ゼネスト・済州島四・三蜂起があり、米韓軍・右翼暴力組織と南朝鮮民衆勢力との間の暴力的な衝突によって実質的に「小さな戦争」が始まっていた。済州島では大韓民国成立後の1948年秋から49年にかけて数万名の島民が「焦土化作戦」によって殺され、また済州島以外でも48年10月の麗水・順天事件、1949年12月の閔慶虐殺事件のように、民間人が国家テロで殺害される多数の事件が起きた。「大きな戦争」、つまり全面戦争としての朝鮮戦争が始まると、韓国軍や韓国警察が「国民保導連盟」の加盟者や収監中の政治犯や民間人など少なくとも20万人あまりを殺害した。さらに、米軍が避難民を射殺した老斤里事件や韓国軍が部落住民を殺害した居昌事件をはじめ数々の民間人虐殺事件が発生し、朝鮮戦争停戦までに南朝鮮の民間人死傷者数は99万名を超えたという(3)。

米韓軍が民衆に虐殺・蛮行を働いたというこれらの事実は韓国で長らくタブーであった。が、民主化と過去清算を求める韓国の人々の努力がこのタブーを打破し、盧武鉉大統領時代(2003年2月 −08年2月)には「真実・和解のための過去事整理基本法」も制定され、朝鮮戦争期の民間人虐殺の真相究明が本格的な国家事業の一部になった。李明博政権が08年に発足してからは過去清算事業の後退が指摘されているが、朝鮮戦争前後の米・韓軍およびそれらに後援された右翼テロリスト組織による民間人虐殺・蛮行をなかったもののように再び覆い隠すことはとうてい不可能なことである。

このような韓国社会の動向にふれ、日本現代史の研究者として無関心でいられなくなった私は、国際民主法律家協会、国際科学者委員会、そしてWIDFがそれぞれ朝鮮戦争下の北朝鮮に送った調査団による報告書の日本語版を復刻・編集し、『国連軍の犯罪−女性・民衆からみた朝鮮戦争』(不二出版、2000年)と題して出版した。同年発行の『女性・戦争・人権』第3号に私が寄稿した「国際女性調査団がみた朝鮮戦争」(126〜148頁)は、WIDFが調査団を派遣した背景、報告書の内容、同時期の南朝鮮の状況についてまとめたもの

---

(2) 国際シンポジウム「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『済州島シンポジウム報告集』1998年、姜禎求「朝鮮戦争と良民虐殺」アジア共同行動日本連絡会議編集発行『資料集 朝鮮戦争と良民虐殺』2000年

(3) 朴元淳「冷戦時期のアジアにおける人権侵害とその賠償問題−韓国での虐殺事件と賠償の経験」、「東アジアの冷戦と国家テロリズム」日本事務局編集発行『台湾シンポジウム報告集』、1997年、221〜226頁

である。また、拙稿「冷戦体制形成期の女性運動ー占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争」（三宅義子編『日本社会とジェンダー』明石書店、2002年、159〜186頁）には、WIDFの調査団報告書を日本で最初に邦訳・出版した日本民主婦人協議会について書いた。当時連合国占領下であった日本では、朝鮮戦争勃発とともに日本全土が国連軍基地として利用されるようになり、反戦運動への弾圧は激化した。『血のさけび』を頒布した活動家たちはたちまち摘発され、逮捕・投獄された女性もいた。

2004年に発足したアジア現代女性史研究会にとって、「朝鮮戦争と女性」は常に大きな関心事であった。2008年1月には、明石書店のアジア現代女性史シリーズ第6巻として金貴玉著／永谷ゆき子訳『朝鮮半島の分断と離散家族』を出版した。同年発行の『アジア現代女性史』第4号は金貴玉の協力を得て「朝鮮戦争と女性」を特集している。また2010年発行の第6号は朝鮮戦争を背景に駐韓米軍基地周辺に形成された「基地村」の問題を特集し、「基地村」の女性たちを支援する韓国の市民団体による報告書を翻訳・掲載した。

女性史の空白

このような経過が示しているように、私たちの「朝鮮戦争と女性」に関する研究や出版はもっぱら朝鮮戦争に関する韓国における研究成果によって励まされてきた。換言すれば、日本や欧米で書かれた女性史を読んでも、「朝鮮戦争と女性」といった関心が喚起されるような先行研究に出会うことはできなかったということである。

朝鮮戦争は第二次世界大戦後の世界のありようを規定した大規模な国際戦争であり、「国連軍」として参戦した国家は16ヵ国を数える。それは、西側だけで戦争当事国が16ヵ国にのぼるということである。また、朝鮮戦争最中にトルーマンが原爆の使用もありうると宣言したために核戦争の危機感が広がり、核兵器に反対するストックホルムアピールには世界中で5億人が署名を寄せたといわれる。

だが、そのように世界史的に重大な意味を持つこの戦争は、欧米の女性史叙述において興味の対象からは外れてきた。朝鮮戦争に派遣された女性国際調査団の活動は、これまで女性史上で意義あるものとして扱われていない。冷戦が朝鮮戦争というピークを迎え、西側諸国で赤狩り旋風が巻き起こされた1950年代は、西欧・米国、そして日本といった西側諸国の女性史叙述において長らく空白にされた時代であった。あたかも1950年代は見るべき女性運動が存在しなかった、書く価値のない時代のように見失われてきたのである。

1950年代の女性史の空白は、それ自体がまことに大きなテーマだと言える。リサ・タトルが1986年に刊行した『フェミニスト事典』は渡辺和子の監訳によって1991年に邦訳書が明石書店から刊行され、女性問題や女性史を学ぶために非常に有用な図書として人気を博し、今日まで版を重ねている。しかし、そこには前述の女性国際調査団に参加した各国の女性たちの誰一人としてとりあげられていないし、そもそもWIDFという巨大な国際女性組織自体が、項目に入ってすらいない。

ジル・リディントンのイギリス女性平和運動史

このような女性史の空白を考えるために、ジル・リディントン『魔女とミサイルーイギリ

ス女性平和運動史』(白石瑞子・清水洋子訳、新評論、1996年、原著は"The Road to Greenham Common-Feminism in Britain since 1892", 1989年)は興味深い。リディントンは女性史の空白に関連して、「50年代はフェミニストの政治活動が中断された時期だった。だから、この時代に成長した女性はフェミニズムの活動を受け継いでいなかった(中略)。私には女性全体があまりにも死んでいるように見え、そんな状況から逃げ出したいと思った。年上の女性の大半は私にそう思わせた」というシーラ・ローバトム『女の意識、男の世界』("Women's Consciousness, Man's World, Pelican, London", 1973年)の一節やデール・スペンダー『いつも女の運動があった20世紀』("There's Always Been a Women's Movement This Century", Lonfon, Pandra Press, 1983年)の「1960年代以降の女性運動の担い手である私たちは、前の世代の女性たちの運動を無視してきた。これは全く愚かなことである」「彼女たちの活動が知られていないのは、60年代の私たちのせいである」というくだりを紹介している。スペンダーは同書でドーラ・ラッセルを取り上げ、冷戦期に関する叙述はわずかだが、鉄のカーテンを越えて団結しようとした女性たちの存在を肯定的に指摘し、今日ではほとんどそれを知る人がいないと述べている(189頁。Spenderの原著ではp.123)。

『魔女とミサイル』は、このような英国女性史叙述の展開をふまえて女性平和平和運動史を跡づけようとした著作である。にもかかわらず、1950年代初期にドーラ・ラッセルが英国政府による世界平和評議会に対する妨害を非難したことやWIDFに関与した事実に少し言及があるものの、WIDFの活動それ自体は無視されている。50年代の女性平和運動は三段階に区分され、第一は、原爆実験の脅威に女性協同組合ギルドが警告を発した1954〜57年、第二は58年に始まった「核兵器廃絶キャンペーン」(CND)とCND女性団体の活躍期、第三は核兵器実験という現実的恐怖によって新しい女性団体が次々と生まれた61年前後である、という(188〜192頁)。すなわち、リディントンの認識においてイギリス女性の平和運動は朝鮮戦争停戦翌年の1954年に始まるのであり、朝鮮戦争時代のWIDFの活動は平和運動や女性運動として意味あるものとは考えられていなかったのである。

旧西側諸国においてWIDF研究が乏しい理由としては、1950年代のWIDFが社会主義諸国の女性団体と強く結びついていたために欧米のリベラル・フェミズムによって無視されがちであったこと、そこから「1950年代は女性運動の空白時代」という誤認が生じたこと、また1960年代以後の中ソ対立や1980年代末のソ連・社会主義の崩壊などを背景にWIDFが次第に弱体化していったことなどが挙げられるであろう。

だが、たとえばモニカ・フェルトンのように国際的に有名であった女性については、女性史の観点から本国での研究がいくらかあるのではないか。そのような期待をもって、私は2009年にはイギリス、また2010年にはフランス、ベルギー、オランダ、ベルリンを訪問した。しかし、そこで調査団に加わった女性たちに関する一次資料やWIDFに関する資料を集めることはできたものの、WIDFやWIDFが朝鮮に派遣した調査団について関心のある女性史研究者に会えずじまいであったのは残念なことであった。

ウエンディ・ポジュマンとフランシスカ・デ・ハーン

が、思いがけないところから新しい研究が生まれていることを知ることになった。2009年9月、フランシスカ・デ・ハーンが「トランスナショナルな女性組織に関する西欧歴史叙

述における冷戦パラダイムの継続：国際民主女性連盟の事例」‘Continuing Cold War Paradigms in Western Historiography of Transnational Women's Organisations: the case of the Women's International Democratic Federation (WIDF)’と題する論文を『女性史評論』（Women's history review. 19(4), Sep 2010, pp 547-573）に発表し、これまでの西欧歴史叙述において世界女性史にすこぶる大きな役割を果たしたWIDFとそれに関与した女性たちの姿がほとんど叙述されずにきたことを主題とし、その理由を西欧と米国の女性史叙述における「冷戦的思考枠組みの継続」であるとして批判したのである。

ハーンはブダペストのセントラル・ヨーロピアン大学教授で、『オフィスワークのジェンダーと政治学：オランダ1860-1940』（アムステルダム大学出版局、1998年）、『ケアリング・パワーの勃興：英国とオランダにおけるエリザベス・フライとジョセフィン・バトラー』（共著、アムステルダム大学出版局、1999年）などの著書があるジェンダー研究者である。彼女は、19世紀から20世紀にかけての中欧、東欧、南東欧の女性運動・フェミニズム伝記辞典の共同編集者であり、『アスパシアー中欧、東欧、南東欧女性・ジェンダー史の国際年報』（2007年創刊年）の創立編集者でもある。

ハーンが「継続する冷戦的な思考の枠組み」として指摘したことは、第一に西欧・米国中心のフェミニストと自認する女性たちが自らを「政治的に中立」だと思いこんでいること、第二にWIDFは鉄のカーテンの向こう側の存在で、西欧の女性運動とは何の交流もなかったと思いこんでいること、第三にWIDFやその加入組織は「共産主義者」であり「フェミニスト」ではないと思いこんでいることである。これらの思いこみの結果、西欧系の国際女性組織ばかりがとりあげられ、WIDFが知られないままになってきたとするハーンの批判は、私がぼんやりと抱いていた印象や疑念の本質を解き明かすものであった。

ハーンはWIDFにかかわった様々な女性たちを具体的にとりあげて、米国下院の非米活動委員会の活動、すなわちマッカーシズムのなかでWIDFがどのように政治的に排除され、それがいかに「政治的に中立」を自認する欧米フェミニストたちの思考の枠組みに寄与したかを解明した。また、WIDFをソ連と共産党の命令に従っただけの女性の集まりに過ぎないかのように描く手法に対して、女性史の具体像をもって反駁した。このようなハーンの視点と議論は、朝鮮戦争時代のWIDFの平和運動に関する直接的な言及こそないものの、WIDFが朝鮮に派遣した調査団を考察するために多大に参考になり、励ましとなる。

ハーンがWIDFを研究していると知らせてくれたのは、ウエンディ・ポジュマンである。彼女が日本婦人団体連合会会長であった櫛田ふきの名前の発音を問い合わせてきたとき、私は「WIDFについて研究している人と知り合ったのは初めてです」と嬉しい驚きを感じながら返事を書いた。その返信にポジュマンがハーンの名を知らせてくれなければ、私がハーンの論文に気づくのはもっと遅くなっていたことだろう。そのポジュマンもまた、WIDFの有力団体であったイタリア婦人同盟に関する研究を最近まとめて、朝鮮戦争当時イタリア婦人同盟が展開した反戦運動にも言及している（“For Mothers, Peace and Family: International (Non)-Cooperation among Italian Catholic and Communist Women’s Organisations during the Early Cold War,” Gender & History 23, no. 2 (August 2011): 415–429.）

これまで私は南東欧女性史についてほとんど知らず、米ソ冷戦の終焉後もなお朝鮮半島の南北分断が続き、米軍の駐留が続いているアジアの状況から、「冷戦構造の継続」を考えようとしてきた。が、ベルリンの壁が崩壊してもなお「冷戦的思考枠組み」が継続していると

いうハーンの指摘を知り、南東欧の女性史の一端にふれてみて、自分がこれまで「ヨーロッパ」あるいは「欧米」と総称される世界について、その内部のヒエラルキーや異なる歴史経験について無知だったことを遅まきながら自覚し、冷戦的な秩序・思考からの解放を志向する女性史研究者がそこにもいることを発見して嬉しい驚きと新しい希望を感じている。冷戦の壁を破ろうとした（している）女性たちの努力はしばしば権力からの迫害を受けた（る）し、また時に愚行と嘲笑されてきた（いる）が、1951 年に鉄のカーテンを越えて戦火の中の朝鮮に身体的政治的社会的な危険を冒して行った女性たちが世界各地にいたように、彼女たちの努力とそれを可能にした WIDF のような国際女性運動の真価を再評価しようとする女性史研究が新たに登場している。

今後の調査・研究

本号では調査団に参加した 21 人の内 2 人だけをとりあげたが、他の 19 人に関しては、ある程度人物像が分かる人もいれば、今日までほとんど何も分からないままの人もある。

調査団にオブザーバーとして参加したカーテ・フレロン・ヤコブゼンは、著名なジャーナリストで、反ファシズムの活動やベトナム反戦運動にも活躍してた人であり、帰国した年に Nord-Korea. Rapporter fra et hærget land（北朝鮮：破壊された国からの報告）を出した。エヴァ・プリースターもジャーナリストで、同年にウィーンで Ein Augenzeugenbericht vom großen Vernichtungskrieg （とてつもない絶滅戦争に関する目撃者の記録）を出版した。彼女たちの著作を読み解くことで調査団の活動がいっそう立体的に理解できるようになるだろう。

また、自国に戻って解職や起訴、投獄といった迫害を受けたという意味で、本号でとりあげたフェルトンの他に、西ドイツのリリー・ヴェヒターとキューバのカンデリア・ロドリゲスについての調査も進めたい。

他にもさまざまな角度から、WIDF の調査団への興味はつきない。例えば、調査団にはフランス人のジーグレルと共にフランス植民地主義からの解放を求めて闘うアルジェリア・チュニジア・ベトナムの女性たちも参加していた。国際女性運動における新旧宗主国・新旧植民地の女性どうしのつながりはどのようなものだったのだろうか。あるいはまた、中国の女性団体は WIDF の有力団体で、調査団の訪朝に特別の役割を果たしたが、それは中国で公的に、また私的に、どのように記録されてきたのだろうか。調査団に直接・間接に関与した女性は多数いたので、中には健在な人もいるのではないか。調査を急ぎたいものである。

WIDF の真相調査団の取り組みは、17 ヵ国からの参加、24 言語への報告書の翻訳という世界的取り組みであっただけに、調査団の全体像をとらえるのには言語力が必要不可欠である。今後、いっそう広く言語・地域の専門家に協力をお願いし、調査を進捗させたい。

【地図】　WIDF 調査団が訪問した朝鮮北部

調査団全員が訪問した場所：新義州・南市・定州・安州・順川・順安・平壌

調査団がグループに分かれて訪問した 4 地方

江原道：元山・文川など

中国（リウ・チンヤン）・ベルギー・イタリア・チェコの代表

慈江道：介川・熙川・江界・満浦など

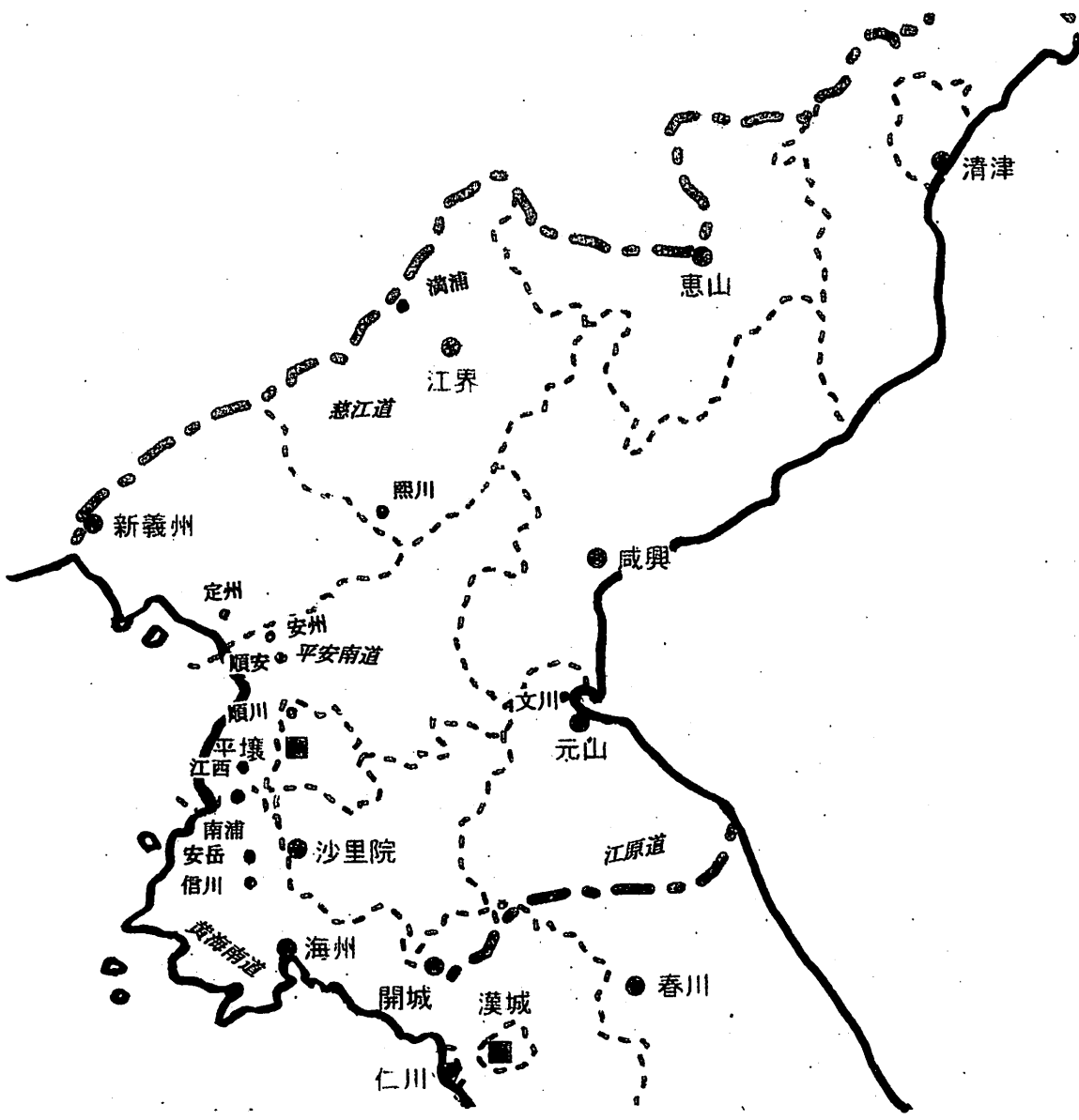
東独・西独・中国（バイ・ラン）・オランダの代表

黄海南道：安岳・信川など

オーストリア・中国（リ・ケン）・キューバ・カナダ・ソ連・英国の代表

平安南道：南浦・江西など

フランス・チュニジア・アルジェリア・ベトナム・デンマークの代表



朝鮮戦争国際女性調査団のフランス人団員[1]

松田祐子

はじめに

朝鮮戦争最中の 1951 年 5 月、国際民主女性連盟[2]から派遣された 17 カ国 20 人からなる調査団が北朝鮮を訪れ、戦闘の状況を実際に見、現地の人々に話しを聞いた。その報告書は『私たちは弾劾する：国際民主女性連盟委員会報告　1951 年 5 月 16 日から 27 日の朝鮮』というタイトルで、5 カ国語（英・仏・露・中・韓）で作成され、国連をはじめとする世界中の女性機関・人権機関に送られた。日本でも『血の叫び』として翻訳されたが、ただちに発禁処分となり、訳者は逮捕されている。内容は、アメリカ軍と李承晩軍がいかに非道で残虐な行為を行っているかを示し、告発するものである。アメリカ軍による爆撃、大量虐殺の様子、死亡者、破壊された家屋などの細かな数字のデータ、人々の訴えが書かれ、多くの写真が掲載されており、読む人の感情に強く訴えるものとなっている[3]。

調査団を派遣したのは、国際民主女性連盟という国際的な組織であり、団員の国籍は 17 カ国に及ぶ。しかしながら、この研究にとって、フランス社会とフランス人団員の意識、国際民主女性連盟とフランスの女

---

[1] 本稿は、藤目ゆき氏の研究「国際調査団が見た朝鮮戦争」の一環である。したがって、その目的と内容は、その研究課題「国際調査団に参加した西欧の女性たちがどのような人たちで、どのようにして調査団に参加し、どのように感じ、考えたのか。また自分たちが見たものを自国でどのように伝え、どのような社会的反響を受けたのか」に沿っている。

[2] 現存する国際組織である。

仏語表記：Fédération démocratique internationale des Femmes(FDIF),

英語表記：Women's International Democratic Federation(WIDF).

[3] *Corée, Nous accusons : Rapport de la Commission de la Fédération Démocratique Internationale des Femmes en Corée du 16 au 27 mai 1951,* Imprimerie specile de l' Union des Femmes Françaises.

この報告書の復刻と内容の解説は、藤目ゆき氏によって発表されている。

藤目ゆき「国際調査団のみた朝鮮戦争」『女性・戦争・人権』第 3 号、2000 年。

――（編集・復刻・解説）『国連軍の犯罪―民衆・女性からみた朝鮮戦争』不二出版、2000 年。

性組織とのつながりはとりわけ重要な検証点である。というのは、連盟の会長がユジェニー・コトンという名のフランス人女性であり、さらに幹部にフランス人が多かったこと、また、当初、国際民主女性連盟の本部はパリにあったからである。報告書のタイトル『私たちは弾劾する（Nous accusons.）』は、ドレフュス事件の際のエミーユ・ゾラの告発文『私は弾劾する（J'accuse.）』と、第二次大戦中にフランスの対独協力を告発したアンドレ・シモーヌの同タイトルの本[4]を彷彿させる。

本稿では、国際民主女性連盟という組織の成立した背景と朝鮮戦争調査団に加わったフランス人団員ジレット・ジーグレーがいかなる人物だったのか、また彼女が何をどう感じたのかを、彼女の書いた小説をもとに、当時のフランス社会の状況と重ねてあわせて検証していきたい。

1．国際民主女性連盟とフランスの女性組織

国際民主女性連盟は、1945年11月26日から12月1日にかけてパリで開催された国際女性会議において創設された。初代会長はフランス人ユジェニー・コトン、書記長もフランス人のマリー＝クレール・ヴァイアン＝クチュリエである。採択された連盟規約には、「反ファシズム、民主主義の確立、国際平和、子供の幸福、女性の地位向上」がかかげられ「人種、国籍、宗教、政治思想に関係なく、女性たちが団結する。それによって、市民として、母親として、労働者としての女性の権利を勝ち取り守るために、また子どもを保護し、平和と民主主義と国民の独立を確立するために、ともに働く組織である」と書かれている[5]。

国際民主女性連盟は、1946年1月から国際連合に対して、代表が総会に参加する資格を繰り返し要求し[6]、1948年、国際女性委員会[7]、国際女性連合[8]に続く三番目の女性の組織として、経済社会理事会における「カテゴリーB」の地位を得た。それによって、女性の条件委員会にオブザーヴァーとして参加し、資料や報告を得ることができるようになった。また、女性の条件委員会の同意を得て、会期中に発言が許されることになった[9]。

1958年4月、ユジェニー・コトンはインタビューに答えて、「1939-1945年の戦争を引き起こしたのは、ファシズムでした。このため、国際民主女性連盟の創設者たちは、世界の民主主義を強固にするために働く決意を表明しました。・・・平和を求める時、女性たちは、第一に子どもたちの生活を安全にすることを考えました」と話している[10]。

---

4 アンドレ・シモーヌ（羽田三吉／島谷逸夫訳）『私は弾劾する』東邦出版、1971年。

5 Fédération Démocratique International des Femmes (edité par), *Eugénie Cotton* , 1967, pp.97-98 .

6 ROUSSEAU, Renée, *Les femmes rouges: Chronique des années Vermeersch,* Alvin Michel, 1983, p.83.

7 Conseil international des femmes (CIF)：1888年創設。

8 Alliance international des femmes (AIF)：1902年創設。

9 Chronique ONU-Un bref aperçu des droits des femmes de 1945 à 2009：
http://www.un.org/wcm/content/site/chronicle/cache/bypass/lang/fr/home/archive/issues2010/empoweringwomen/briefsurveywomensrights?ctnscroll_articleContainerList=1_0&ctnlistpagination_articleContainerList=true

10 Women's International Democratic Federation Records, 1945-1975：

このような規約や談話からは、この団体は平和のための、とりわけ女性と子供を守るための組織であり、なんらかのイデオロギーと関係しているようにはみえない。ところが当時、西側からは共産党の団体であるとして否定されていた。また事典には、あえて「なんらマルクスレーニン主義的色彩のあるものではない」と断り書きがつけられている。当初パリにあった本部は、1951年にフランス政府によって追い出され、ベルリンに引っ越しを余儀なくされている。このような見解に対して、ユジェニー・コトンは、「共産党の活動家がいたので、アメリカの新聞は共産党に支配されているとしたのだ」と話している[11]。しかしそれだけなのだろうか。国際民主女性連盟はどのような経緯で生まれ、またどのような活動をしていたのか。

1945年2月、ヤルタ会談が開かれ、連合国とソ連が合流して、戦後の国際秩序が話し合われた。その翌月の国際女性デー（3月8日）に、ロンドンで国際的な女性の会合が開かれた。この時、国際的な女性の連帯組織を作ろうと考えたのが、国際民主女性連盟誕生のきっかけであると言われている。フランス共産党書記長の妻であり、この女性連盟の活動を実質的に動かしていたジャネット・ヴェルメールシは「イギリスの共産党の書記が私たちに国際的なレベルで女性たちのために何か作ることを提案した。私はこの考えをうけ、党にソ連の女性たちがこのような計画を始める気があるかどうか尋ねるように求めた」と話している[12]。この会合に出席していたフランス代表のなかに、国際民主女性連盟の初代会長となるユジェニー・コトンがいた。

当時コトン夫人は、すでに公平無私な優れた女性としてよく知られていた。セーヴル女子高等師範学校を出た物理学者であり、キュリー夫妻やピエール・ランジュヴァンとも親交があった。第二次世界大戦以前に、母校であるセーヴル女子高等師範学校の校長になっており、開かれた考えを持ち、女子教育を推し進めていた。戦争中は、ヴィシー政府[13]によって職を追われ、レジスタンス活動を支援した。彼女の息子は共産党員であり、彼女自身も共産党の支援者であったが、党員証は持っていなかった。彼女が会長に選ばれたのは、最上のブランドイメージを持っているからであった。そのイメージは、共産党員でないことによってさらに補強された。しかし会長は肩書だけでしかなく、実質的な決定をくだしていたのは、事務局のジャネット・ヴェルメールシとそれを補佐するクロディーヌ・ショマであった。ジャネット・ヴェルメールシは「私は党の中で女性を担当しながら、国際民主女性連盟の執行委員会にいた。前面に出ていたのは、コトン夫人、フランソワーズ・ルクレルク、マリー＝クロード・ヴァイアン＝クチュリエである。私たちは、もっと内側の役割を果たしていた」と述べている[14]。

このように、国際民主女性連盟の創設には、複数のフランス人女性が重要な役割を果た

---

http://asteria.fivecolleges.edu/findaids/sophiasmith/mnsss294_main.html

[11] ibid.

[12] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, pp.46-47.

[13] 1940年6月の休戦協定よって、フランスの北半分はドイツ占領下におかれ、フランス政府機関は南部のヴィシーに移転。1944年8月の解放まで、ペタンが率いた対独協力政権がヴィシー政府。

[14] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*,p.63.

している。彼女たちはフランスの共産党系女性団体、フランス女性同盟[15]のメンバーでもあった。フランス女性同盟は、レジスタンスの女性委員会を起源として1944年11月に創設された。コトン夫人は、この組織の創設者の一人であり、会長でもあった。フランス女性同盟のめざしていたのは、「平和、生活状況の改善、女性の政治参加を促す」である[16]。機関誌『フランス女性』には、1945年4月14日と15日に行われたフランス女性同盟の会議に集まった女性たちが、国際的に連携する大きな連盟をつくる準備をしていたことが書かれている。したがって、1945年の年末に世界大会を開催することが、党によってあらかじめ決められていたようである。世界大会のための準備委員会の責任者が、コトン夫人によってフランス女性同盟から選ばれた。参加を呼び掛ける冊子が世界中に発送され、1945年11月26日に40カ国、850人の女性が参加した国際女性会議が開催された[17]。国際民主女性連盟の会長と書記長が選ばれ、この二人の他にも、執行委員に4名のフランス人が選ばれた。この数はソ連と同数であった。代表団は熱狂のなかで規約を採択し、ジャネット・ヴェルメールシは、この出来事を素晴らしい思い出として語っている[18]。

2．冷戦期の国際民主女性連盟

1947年3月12日、トルーマン・ドクトリンによって冷戦の開始が告げられた。同年6月5日マーシャルプランが発表される。これはアメリカの援助によるヨーロッパの経済復興計画であり、それによって共産主義を封じ込めようというものだった。それに先立つ5月、フランスでは共産党閣僚更迭が行われていた。7月、ソ連圏に属さないヨーロッパ16カ国がパリに集まり、マーシャルプランの受け皿として、ヨーロッパ経済協力機構（OEEC）が発足した[19]。ソ連側は、東ヨーロッパがアメリカの勢力圏になることを怖れて、マーシャルプランへの参加を拒否。1947年9月、ポーランドでソ連・東欧・仏伊の9カ国の共産党代表による秘密会合が開かれ、ソ連は社会主義陣営の団結を力説した。10月5日、アメリカの積極的なヨーロッパ支援策に対抗してコミンフォルムが設立され、東欧と仏伊共産党に対するソ連の支配が強化された。仏伊の共産党には、アメリカの援助による経済再建を妨害し、西側の関心を東欧に向けさせないことによって、東欧におけるソ連の勢力圏固めを支援することが求められたのだ。フランス共産党は、レジスタンス以来、政権内にいて非共産党勢力との協調路線をとってきたのだが、それは階級闘争の放棄であると批判され、方針転換を余儀なくされる。フランス共産党のトレーズ書記長は「自己批判」を行い、政権の一員としての役割を捨て、労働者を基盤とする「社会の弱者」を保護し、その利益を代弁するという役割を優先させる。11月と12月には、共産党に支配された労働総同盟（CGT）がフランス各地で大規模なストライキを展開し、暴動や騒擾がおこった。しかし非共産系の組合がストライキを拒絶しはじめ、秩序が戻ると、フランスの政

---

15 Union des femmes françaises(UFF). 1998年にFemmes solidaires（女性の連帯）に名称変更し、現在はフェミニストの団体として活動している。
16 Condition féminine en France depuis 1900 à nos jours: http://aventure-des-femmes.rmc.fr/
17 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, pp. 47,57 ; Femmes solidaires(edité par.), *Résisiter c'est créer 60 ans de femmes solidaires :Clara Magazine*, 2005, p.5.
18 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.63.
19 渡辺和行・南充彦・森本哲郎『現代フランス政治史』ナカニシヤ出版、1997年、p.160.

権は右傾化していった。共産党は「外国（ソ連）の政党」として、孤立化していくことになった[20]。とはいえ、共産党がレジスタンスの中で獲得した「祖国を救った英雄」という栄光の遺産を捨てることはなかった。

一連の冷戦の始まる文脈において、国際的な平和運動が次々と生まれた。フランス女性同盟も、危機への解決策として平和主義を前面に出していく。間違っているのはすべて扇動者である敵のほうであるとし、同時に、自らはアメリカ帝国主義という新しいファシストに対してレジスタンスを続ける犠牲者として、姿を現した。自分たちこそが、真のフランス人、愛国者、民主主義者、共和主義者であり、アメリカによる植民地化と闘わなければならないとしたのである。

すでに述べたように、国際民主女性連盟のめざしたものは、ファシズムの撲滅、民主主義と平和の確立、女性の状況の改善、未来の子供たちの幸せである。国際的な協調に興奮し、友好的な雰囲気に心を動かされた多くの女性たちが、連盟の活動に賛同した。しかし国際民主女性連盟のソ連代表ニナ・パポヴァの報告では、「民主主義」という言葉は「ソ連のもの」という意味であった。彼女は、ソヴィエト連邦があらゆる領域で男女の平等を実現したと説明し、ソ連市民の英雄的行為の正当性を確認し「ソ連の女性たちは体制の民主的な精神の中で自分たちの力を積み上げている」と述べる[21]。国際民主女性連盟は、1948年の国際女性デーに、次のように呼び掛ける。「ソヴィエト連邦の女性たち、あなた方の祖国の力と威光がさらに大きくなるように。なぜなら、あなた方は平和と民主主義、自由と民族独立の最も強固な城壁なのだから[22]。」

冷戦の開始にともなって、国連で地位を得る運動は、そこに最大の場を占めようとするソ連の目的に動かされたものになる。ニナ・パポヴァは「私たちは、国連の陣営の中に、軋轢と不和の種を蒔く反動的な要素のあらゆる試みに反対して力強く立ち上がることをすべての国の女性たちに勧告する。・・・私たちは、国際民主主義の前衛の派遣隊として無数に存在している」と発言する[23]。1948年8月、ワルシャワで開催された平和のための「知識人」の世界会議において、コミンフォルムは国際闘争を展開する。そのときのフランスの代表の中にイレーヌ・ジョリオ＝キュリーとユジェニー・コトンがいた。これ以降、国際民主女性連盟は、共産党にコントロールされる国際運動として重要な役割を果たすことになる。連盟は共和国と平和の防衛に大勢の女性たちを動員し、300万人の署名を集めて国連に提出した[24]。

一方、西側も、平和のための国際運動を組織する。1947年4月26日から5月2日にかけて、カトリックによって主催され世界28カ国が参加した「世界母親運動」創設会議が開催された。平和運動は、母性主義の特徴を持つことが多い。というのは、息子たちを奪った戦争に当然反対するであろう母親たちを取り込むためである。カトリックの側のモデルとなる母親像は、愛によって全てを家族に与える犠牲的母親である。自分は何も持た

---

[20] 同上 p.161、渡邊啓貴『フランス現代史―英雄の時代から保革共存へ』中公新書、1998年、p.33.
[21] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.60.
[22] *Ibid.*, p.84.
[23] *Ibid.*, p.60.
[24] CHAPERON, Sylvie, *Les années Beauvoir (1945-1970)*, Fayard, 2000, p.127.

ず、何も求めないで、できるだけたくさんのパン、平和、愛情を子供に与える母親こそが重要であり、尊重され、評価されると訴えた。その会議では、実際には根拠がないにもかかわらず、共産主義を家族の解体をもたらすものとして誹謗するキャンペーンがおこなわれた[25]。

フランス女性同盟は、すぐさま、共産主義者は家族と母親の擁護者であると反撃する。共産主義者の母親モデルは、勇気ある母親、子供たちを救うために危険にたちむかう母親である。機関紙『フランス女性』には次のように書かれている。「戦争の扇動者たちは、優しく柔和な母親たちが子供を守るためには、ライオンの心と爪を持っていることを知らねばならない。」それ以降、共産党の平和運動は、すべて母親の言葉をとおして発せられることになった。「共和国の敵は私たちの子どものパンを危機に陥れている」「女たちよ、私たちの家庭を守ろう」といった表題がつけられ、「ママ、私を守って！」と書かれた乳児の写真が掲載される[26]。1948 年の国際民主女性連盟の会議で、「フランスの母たちは決して自分の息子をソヴィエト連邦に対する戦争のために与えない」という誓いが言われ、このフレーズは、その後、様々な機会で何度も繰り返された[27]。

西側は、1947 年 9 月末、国際民主女性連盟の設立に対抗して、52 カ国を集めて「平和のための世界協約」会議をパリのユネスコ本部で開催した。「個人は神聖」「平和のために働くことは全女性の義務」「物質的・精神的生活水準の上昇」の 3 原則がうたわれた。主催はオーリオル夫人とビドー夫人であった。ジャネット・ヴェルメールシは、アメリカに結びついた「世界協約」を主催したビドー夫人を、国際的な反動運動の頂点にいると告発し[28]、「国際民主女性連盟に対抗するために、長い間死んでいたフェミニストの古い運動を生き返らせ、それを作り出そうとする試みではないのか？」と、反動とフェミニズム運動を結びつけて批判した。党の平和委員会の役割は資本主義諸国の政府に対する闘いにあり、国際民主女性連盟は情熱的にそれを推進した[29]。

1950 年 3 月 16 日から 19 日にかけて、国際民主女性連盟は、ストックホルムで開催された「平和のパルチザン世界会議」に参加した。そこで有名な「軍備撤廃と原子爆弾禁止のアピール」（ストックホルム・アピール）がだされた。フランス女性同盟は、委員会を設置して署名活動を開始する。ストックホルム・アピールは、1950 年末に 4 億とも 5 億ともいわれる署名を集めた。そのうち約 950 万はフランス人の署名とされている[30]。

しかしながら 1951 年 1 月、国際民主女性連盟は、フランス政府によって、世界労働組合連盟や世界民主主義青年連盟とともに解散を命じられる。モスクワへの服従を非難されたのである。国際民主女性連盟は本部をパリからベルリンに移し、東西の緊張の中心地ベルリンで、ドイツの再軍備に反対して立ち上がり、ソ連以外の占領当局の陰謀に抗議し、「民主的」国家として、ドイツ再統一を宣言する。そしてドイツの女性に、平和のパルチ

---

25 *Ibid.*, pp.115,117.

26 *Ibid.*, p.116.

27 *Ibid.*, p.128 ; ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.275.

28 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.83.

29 CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, pp.126-127.

30 CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, p.130.

ザンに加わるように呼び掛けた[31]。

女性たちの国際平和運動は、戦争直後には地域や利害を超えて協力しあっていたのだが、冷戦はその状況を変えた。この時期に最も活発に活動したのが、国際民主女性連盟であった。例えば、朝鮮におけるアメリカの帝国主義侵略に対する大衆抗議をコーディネイトし、アルジェリアとベトナムにおけるフランスの植民地反対闘争と連帯のキャンペーンをおこなった。また、インドシナへのアメリカの侵略、中東へのイスラエルの侵略行為に反対し、スペイン、ポルトガル、ギリシャ、ラテンアメリカ諸国の民主主義を支援し、南アフリカのアパルトヘイトに対する闘争を助けるなどの活動をおこなった[32]。しかし、1954年4月、国際民主女性連盟は、冷戦に結びついた政治団体であるという理由で、国連の諮問の地位を失った。ところがこれは反民主主義的とみなされる手続きによっていたので、敵・味方の双方から抗議の声があがったが無駄であった[33]。

女性たちの運動が平和的共存に戻るのは、スターリン死後の雪解けの時期である。1955年7月、ローザンヌで開催された「世界母親大会」には、66カ国から1000人以上が集まった。開会の辞を述べたユジェニー・コトンの演説には共産主義への言及はなく、母性主義に基づく世界の平和が呼びかけられている[34]。しかし国際民主女性連盟が国連における地位を回復するのは、1967年6月まで待たなければならない。国連に復帰後、この連盟は女性のために決定的な貢献をおこなった。1972年に国際女性年を提案し、1975年世界女性年を記念してメキシコで開催された国連の世界女性会議に参加し、東ベルリンでの世界会議の発起人となった[35]。

3．朝鮮戦争国際女性調査団

平和のための闘いを訴えるにあたって、具体例としてたびたび繰り返されたのが、朝鮮の悲惨な状況である。朝鮮戦争について、アメリカ合衆国は、北軍に領土を攻撃された南朝鮮が国連軍の援助を要請したとするが、共産主義者は、アメリカに売られた南朝鮮がソ連の影響下にある平穏な北朝鮮を攻撃したとする。フランスは国連軍の一員として朝鮮に軍隊を派遣する。当時のフランスは、政治的・社会的にどのような状況であったのか？

朝鮮戦争は世界的な特需景気をもたらしたが、フランスでも1950－51年ごろは輸出が増大し、投機的インフレによって物価が上昇、高度経済成長の時代が始まっていた。50年3月に、フランスはアメリカとの相互防衛援助条約を結び[36]、1951年4月に、欧州防衛共同体（EDC）構想が始まった。これはソ連の脅威に備えた西ドイツ再軍備の必要性と同時にその脅威の抑止の解決策として考えられたものであった。さらに同年、欧州石炭鉄鋼共

---

31 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*,pp.142-143.

32 http://encyclopedia2.thefreedictionary.com/Women's+International+Democratic+Federation+WIDF

33 Chronique ONU-Un bref aperçu des droits des femmes de 1945 à 2009, op.cit..

34 CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, p.130；ユージェニエ・コットン「平和をきずくもの」『婦人公論、1955年9月、pp.48-55.

35 http://encyclopedia2.thefreedictionary.com/Women's+International+Democratic+Federation+WIDF

36 渡邊啓貴、前掲書、p.35

同体（ECSC）が結成された。しかしフランス人の目には、これはアメリカ資本主義の市場拡大であり、アメリカの植民地化の開始にみえた。EDC 構想はアメリカの軍事力に基づく北大西洋条約機構（NATO）への複雑な感情と結びついていた。フランス国内に外国が指揮する司令部が置かれ、フランス人立ち入り禁止の軍事基地があることは、フランス人の感情を害していた。51 年初め、アイゼンハワーが初代 NATO 軍司令官としてパリに到着すると、全国で「アメコー帰れ」の落書きが見られ、反対デモが吹き荒れ、保守派もフランスがアメリカ合衆国の従属的地位に置かれることに抵抗した。しかし実際には、政府は親米であった。52 年 5 月、NATO 軍司令官としてリッジウエイが着任すると、再び「アメリカの占領」に対する抗議デモが沸き起こったが、政府はデモを組織した共産党に対して厳しい弾圧をおこなった。これに対しては、作家のヴェルコールや哲学者サルトルら共産党とは距離を置いていた知識人までも「黙ってはいられない。黙っていることは共犯だ」と声をあげ、「ファッショ的」であると非難した[37]。

このような社会的背景のなか、国際民主女性連盟は 1951 年 5 月 6 日から 27 日にかけて 20 人の女性からなる調査団を北朝鮮に派遣した。彼女たちの調査報告は、6 月 20 日から 24 日にかけてソフィアで開かれた国際民主女性連盟の執行委員会で検討され、次いで『私たちは弾劾する』と言うタイトルで、フランス女性同盟によって刊行された。「はじめに」で述べたように、そこにはアメリカ合衆国の兵士がおこなったとする略奪、破壊、拷問、大量殺人が写真入りで詳細に記録されていたので、反アメリカの大論争が生じた。原子爆弾の脅しがあったことにも触れられており、それに反対するストックホルム・アピールが沸騰した。

ジャネット・ヴェルメールシは、フランス女性同盟の機関誌『フランス女性』の中で「女性たち、母親たちよ、この小さな朝鮮人、ベトナム人の目を見よ。彼らは苦痛と非難を負わされている。なぜこんなに苦しまなくてはならないのか」と訴える。子供たちが脅かされていること、無垢の人たちが死と苦痛に襲われていることに強く心を揺さぶられた女性たちは、戸別訪問をし、地区委員会をつくり、子供をつれて街頭や市場に出て署名を集めた。1951 年 3 月 11 日に開催された軍備撤廃のための女性の国民会議には、共産党の新聞によると、2 万人とも 3 万人ともされる女性たちがフランス全土から集まった。イレーヌ・ジョリオ＝キュリー、クロディーヌ・ショマ等の著名人が壇上にあがり、「軍備縮小、朝鮮とベトナムの戦争反対、ドイツの再軍備拒否、スターリンの平和主義提案、貧困と失業の撲滅」を、「自分たちが産み育てた命を守りたい」母親たちに訴えた[38]。平和のための催しや会合が何度も行われ、国際民主女性連盟の女性たちは精力的に活動した。

ところで、この報告書に書かれていることはすべて真実なのだろうか？フランスの研究者ルネ・ルソーは「朝鮮の事件は偽の情報に基づく大量動員のとりわけ顕著な例である。朝鮮がこの戦争で被害を受けなかったのではない。その逆である。戦争は 1953 年まで続き、この国を荒廃させた。しかし、敵である資本主義は、アンクル・サム[39]のなかでしか具体的に表現することができなかったので、左翼の党は特定の傾向のある情報提供者によ

---

37 同上、p.63
38 ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, p.146 ; CHAPERON, Sylvie, *op.cit.*, p.129.
39 アメリカ合衆国政府の比喩。

って与えられた説明を採用したのだ」と述べている[40]。「偽の情報」とするのは言い過ぎであるとしても、一方的で偏った情報である感は否めない。

女性たちの活動は、朝鮮戦争の激化にともなって、アメリカ人は細菌兵器を使用しているというさらに不快で恐ろしい非難を帯びたものになる。1952年、フランス女性同盟はこのテーマで国際女性デーを準備した。「アメリカ軍基地の廃止、平和政策を実行する政府」を要求して、アメリカ兵にアメリカの母への手紙の形で書いたビラをまいた[41]。4月には、強烈な衝撃を与える膨大な量のビラを印刷する。眠っている赤ん坊の上に飛びはねる蠅や蜘蛛の影が二重写しになっている写真である。これは、アメリカが細菌戦を行っているとする朝鮮戦争のイメージであった。「ゆりかごの上のペストとコレラ」、「凶悪なこの犯罪をやめよ！」と見出しが付けられ、写真の横には、「最も恐ろしい病気を運ぶ昆虫をまき散らす2000の爆弾が中国と朝鮮の上にアメリカの飛行機によって投げ入れられた。ペストに汚染されたおもちゃや食糧が腹をすかせた子どもたちの食べ物として投げ入れられた。子どもたちは恐ろしい苦しみのなかで死んでいる。私たちの子どもは脅かされている。政府はその犯罪を放置したままである。フランス女性同盟は、ただちにこの犯罪者どもに警告するよう、全ての女性、すべての母親に呼びかける」と書かれている。ビラの下の部分には、1952年3月末に、オスロで開催された世界平和会議事務局によって開始された細菌戦反対アピールを掲載し、ニューヨーク軍縮委員ジュール・モシュ氏、国際連合、トルーマン大統領、フランス駐在アメリカ大使および領事、議員たちへ「抗議の波」を送るように訴えている[42]。フランス人の多くは自国内にアメリカの基地が存在していることに不満を抱いていたので、この呼びかけに積極的に応えた。平和運動を支持する女性たちは、5月にリッジウエイ将軍が来た時、フランス共産党によって組織された大規模なデモに加わった。

国際女性調査団に参加したジレット・ジーグレーによる小説『江西（カンセ）の殺人』[43]の最後の場面に描かれているのは、このデモの情景である。次はジーグレーの人物像とこの小説に

[40] ROUSSEAU, Renée, *op.cit.*, pp.144-145.
[41] *Ibid.*, p.149.
[42] *Ibid.*, p.150.
[43] ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, Les Editeurs Français Réunis, 1953.

ついて考察する

4．ジレット・ジーグレーの人物像

国際民主女性連盟が派遣した朝鮮戦争調査団に加わったフランス人団員、ジレット・ジーグレー（Gilette Ziegler）とは、いかなる人物だったのか？現在では、彼女に関する情報を見つけるのは難しいが、1970年代には、ジャーナリスト、小説家、歴史家としてよく知られていた。フランス国立図書館のカタログには彼女の著作が20作載っており、そのうち小説は8作である（最も古い著作は1935年、最も新しいものは1979年出版である）。残念ながら日本語で読める著作はないが、唯一、マリー・キュリーとイレーヌ・キュリーの手紙を集めた『母と娘の手紙』の「まえがき」部分は、ジレット・ジーグレーが書いたものである。彼女はこのキュリー親子の往復書簡出版の際の編集もおこなっている。訳者あとがきには、ジレット・ジーグレーについての5行ほどの解説があり、「ドキュメンタリー編集の非凡な感覚がみられる」と書かれている[44]。

1958年に出版された『唯一の証人』[45]に挟まれていたビラのなかの著者紹介文は、「ジレット・ジーグレーはニースで生まれ、国立古文書学校を卒業した古文書学者である。戦前は古銭学研究を専門としていた。ドイツ占領下では、レジスタンス組織で働き、バス=ザルプ地方で『持つ（*Tenir*）』というタイトルの小さな地下新聞を編集した。解放後はジャーナリストとなり、東洋の諸国、とくに『朝鮮戦争』（1951）、そして『中国』（1952）についてのルポルタージュを書いた。小説、『私はP.S.F.にいた』（レジスタンスの出来事）と『江西の殺人』（朝鮮の悲劇）の作者」と書かれている。

『私はP.S.F.にいた』[46]は、彼女が北朝鮮を訪問する前の1950年に出版された小説である。この本の「まえがき」には、ジレット・ジーグレーのポートレートが次のように描かれている。著者はジャーナリストで百科事典編纂者のピエール・アブラアムである。

> 「彼女の肖像を描くとしたら、次のような形容詞を使わなければならないだろう：美しい、気品のある、エレガント、良い香り。・・・別の言葉で言うと、アカデミックで、因習的な小説にでてくる失われた上流社会のヒロインの姿、つまり、もしあげるとすればポール・ブールジェの小説のヒロインである。そして、もしこの申し分のない若い女性と話しをすることになったとしたら、彼女はポール・ブールジェの世界の人物よりもずっと思慮深く、読書家で、仕事を持っていた—そう、働いていたのだ—避けられていた事（おそろしい！）をしていたと知るだろう。・・・ある日、あなたの目の前で、このポール・ブールジェのヒロインが、何か新しい現代的なもの、つまりエレンブルグの『パリ陥落』あるいは、アラゴンの『コミュニストたち』に類似するものに変化したことがわかるだろう[47]。」

ポール・ブールジェは、1900年ごろに活躍したフランスの作家である。ブルジョワ階級の家族と女性を題材にした心理小説を多数発表しており、そのヒロインは、結婚するまで

---

44 マリー&イレーヌ・キュリー著、西川祐子訳『母と娘の手紙』人文書院、1975年、pp.5-10、292.

45 ZIEGLER, Gilette, *Le Seul Témoin,* Julliard, 1958.

46 ZIEGLER, Gilette , *J'étais au P.S.F.* , Les Éditeurs français réunis, 1950.

47 ABRAHAM, Pierre, Présentation, *Ibid.*, p.3.

は父親の、結婚後は夫の庇護下におかれ、エレガントで貞淑、無為でいることによって社会的ステータスのシンボルの役割を担う女性たちである。例えばサロンを開き、ピアノをひき、召使いを采配するような上品で美しい女性の姿を思い浮かべるとよい。「働くことが避けられていた」と書かれている理由は、それが「階級からの脱落」を意味していたからである。女性が働くのは貧しい労働者階級だけとみなされていた時代であった。ジレット・ジーグレーの少女時代は、ボール・ブールジェの時代からは一世代隔たっているとはいえ[48]、まだ 20 世紀はじめの価値観が色濃く残っていた。ジレット・ジーグレーは、おそらく成人した後も、失われた上流階級の雰囲気を持つエレガントな女性であったのだろう。1932 年、彼女はフランス空軍の技術将校でありパイロットでもあったアンリ・ジーグレーと結婚している[49]。ただ、当時はまだ上流階級の女性が職業を持つことに否定的な社会であったのにもかかわらず、彼女は優秀な成績で古文書学校を卒業した後、1935 年に学位論文『中世のグラス市の歴史』[50]を発表し、文筆家として活動していた。

ところが、ちょうどそのころナチスが台頭し、ヨーロッパに戦争が近づいていた。1939 年 9 月、フランスは再び戦争に突入した。「奇妙な戦争」と呼ばれる戦闘のない数カ月の後、フランスはあっさりと敗北、占領地区と自由地区に分断された。その一方でドゴール将軍の「自由フランス」がイギリスからレジスタンスを宣言し、国内でもレジスタンスの地下活動が生まれた。1944 年のパリ解放後、戦争は終結するが、インドシナやアフリカの植民地で戦争が続き、冷戦がはじまった。ジレット・ジーグレーは、古き良き時代のブルジョワジーの娘として生まれ、このような社会の変化とともに成長し、やがて国内レジスタンス運動にかかわり、ジャーナリストとなり、朝鮮や中国にまで出かけてルポルタージュを書いた。さらに戦後から 50 年代にかけて、自分の体験に基づいた小説を次々と発表している。これらは、小説という形をとってはいるが、もともとの歴史学者としてのすぐれた分析力や推理力が生かされており、史料としても十分に役立つ時代の証言にほかならない。

例えば、『私は P.S.F.にいた』は小説であり自伝ではないので、主人公がジレット・ジーグレーであるとはもちろん言えないのだが、さきほど引用したピエール・アブラアムは、「ジレット・ジーグレーはニースで生活していたのだから、またマキ[51]のあったアントルカステルやプロヴァンスをたびたび訪れていたのだから、それについて話す権利はある」、「ジレット・ジーグレーが P.S.F.について話すとき、彼女は知っていることを話しており、彼女はそれを話す権利を持っている。また、彼女はレジスタンスの秘密活動、その紆余曲折、その危険を話す権利を持っている」と書いている[52]。タイトルにある P.S.F.とは Parti

---

48 筆者は生年月日を特定することができなかったが、結婚年と学位論文提出年から、1912 年前後の生まれと推察される。1981 年没。

49 'ZIEGLER (Henri, Alexandre, Léonard)', in *Who's who in France=Qui est qui en France : dictionnaire biograhpique*, Paris :Lafitte, 1953(1re éd.), p.1740 ; 'Henri Ziegler', in *Aéromed*, n°11, avril 2005, p.6. 注記：以上の文献では、Gillette のように T'が 2 つになっているが、掲載されている写真からみて同一人物である。

50 ZIEGLER, Gilette ,*Histoire de Grasse depuis les origines du consulat jusqu'à la réunion de la Provence à la couronne(1151-1482)*, A.Picard, 1935.

51 南フランスでレジスタンス運動の中心になった組織。

52 ABRAHAM, Pierre, op.cit., p.4.

Socialiste Français の略称なので、訳せば「フランス社会党」になるが、実質はド・ラ・ロック大佐がひきいたファシスト集団「火の十字団」の後身であり、現在のフランス社会党の前身、S.F.I.O（社会主義労働者インターナショナル・フランス支部）とは別のものである。物語の中で、ヒロインのエレーヌ・ヴェテルレは、この右翼の党員からレジスタンスの活動家に、そして共産党のシンパに変化する。ヒロインの道のりがジレット・ジーグレーの道のりそのものではないとしても、彼女は自分の理想、現実の世界の闘争、イデオロギーの葛藤を登場人物に託して語っているのは間違いない。

『唯一の証人』も同様の傾向をもつ小説である。この作品の背景は、戦争中ドイツに協力した人々と、抵抗した人々に引き裂かれていた不安定なフランス社会である。主人公は戦争で負傷し生きる気力を失っていた男である。彼は、偶然、左翼運動に工作員を潜入させ情報をさぐる闇の組織に入る。しかし生まれ故郷で家族や友人と再会し、自分のさせられている役割の曖昧さに気づき、その組織から自身を解放しようとする。この小説の解説には、「著者がこの奇妙な世界に似たものを経験して知っていることに衝撃を受ける。彼女は内側からその世界を描き、それらを突き動かす思想、それを分裂させる矛盾を表現している。」と書かれている。彼女自身、冒頭で、「この小説にでてくるすべての人物は架空の人である。生存しているあるいは生存していた人とのあらゆる類似は完全な偶然である[53]」と断り書きをつけている。登場人物は実在の人物に誤解される可能性があるということなのだろうか。

ジレット・ジーグレーは 60 年代以降、しばらく休んでいた中世史の研究を再開する。1963 年に『ルイ 14 世治下のヴェルサイユの舞台裏』、1965 年には、その続編である『ヴェルサイユの舞台裏：ルイ 15 世とその宮廷』、1967 年に『パリの秘史』などの歴史書を次々と発表する[54]。しかしその一方で、小説は封印する。

5．『江西の殺人』あらすじ

ジレット・ジーグレーは、帰国後ほどなく、朝鮮で見た出来事をもとに『江西の殺人』というタイトルの小説を書いている。この本は、既に述べたように、フィクションとして書かれている。したがって、実際の国際調査団に参加したフランス人女性は、ジレット・ジーグレーのみであり、また死亡した調査団の団員はいない。しかし小説では、調査団に参加したフランス人女性のひとりアニエス＝マリーは爆撃で死亡し、もうひとりエレーヌ・ヴェテルネ（『私は P.S.F.にいた』の主人公と同一人物）が調査団に参加した人物として登場する。しかし、彼女が実際に訪れた北朝鮮の江西の町での出来事を軸にストーリーが展開し、国際民主女性連盟の報告書の内容と重なる描写も随所にみられる。つまり、ストーリー展開はフィクションであったとしても、状況描写において、かなりの事実が描かれているとみてよいだろう。また、登場人物の会話や心理描写に、フランス社会の朝鮮戦争に対する心情やジーグレー自身の見解が反映されているのは間違いない。以下では、この小説のあらすじを紹介する。

プロローグ

---

[53] ZIEGLER, *Le Seul Témoin*, p.6.

[54] *Les coulisses de Versailles sous le règne de Louis XIV, R. Julliard, 1965 ; Les coulisses de Versailles : Louis XV et sa cour ; Histoire secrète de Paris.*

朝鮮戦争に派遣されたフランス軍中尉ピエール・レムリーは、戦闘の後、江西の町に入り、そこで、中国人によって埋葬される若い白人女性の死体を見つける。驚いたことに、彼女の手首には、「アニエス＝マリー・ジョルジン、スタニスラス通り、5番、パリ」と記された身分証明書がついていた。後に明かされるが、彼女は女性の国際調査団の一人であり、爆撃によって死亡したが、遺骸を運ぶ手段がなく、そこに残されていたのだ。ピエールは彼女の残した日記を読み、衝撃を受けるとともに、その日記を共産党活動家の兄を通じてパリの女性組織に託した。

第1部

主人公のレイモン・レムリーは、フランス南部の地方都市クゼのガラス工場経営者である。妻は末息子のラウルを生んだ時に死んだ。レイモンは妻の姉のシモーヌとともに、息子のジャック、娘のカトリーヌ、ラウル、そして「自由フランス」の闘士として戦死した兄の二人の息子エルヴァとピエールを育て、平凡だが満足して暮らしていた。戦争中はペタンの側にいて、レジスタンスに否定的だった。彼は、ジャックとピエールが成人して、インドシナと朝鮮の戦争の志願兵となったことを誇りに思っていた。ただ、ピエールの兄エルヴァは共産党の活動家になり、20歳でレイモンの家から出て行った。工場の近くにはアメリカの基地があり、「アメリカ人帰れ」の落書きがあったが、彼はアメリカ人がいなくなったら、共産主義者がやってくると思っていた。しかし、政治にかかわることを避けていて、彼の工場の労働者たちがストックホルム・アピールに署名することや、その他「モスクワの命令」を実行することを容認していた。

ある日、エルヴァから「ピエール、病気で送還。ニースのミモザ病院、会いたい」という電報がくる。ニースにはレイモンの愛人のロランスがいた。ロランスはもとレジスタンスの活動家で、レイモンとは違った考えを持っていたが、二人は政治の話を避けていた。ピエールは朝鮮で精神に異常をきたし、東京で二ヶ月間治療を受けた後、フランスに送還され、ニースのアメリカ人の病院にいた。しかし何も覚えていないということだった。レイモンは病院で、ピエールにはアメリカ人将校を殺した容疑がかかっていると知らされる。医者はフランスの志願兵のなかには、もともと問題のある若者が多いとほのめかす。ピエールは銃殺刑を逃れるために仮病をよそおっているのかもしれなかった。

エルヴァによれば、朝鮮の戦争は他の戦争と違って、大量の皆殺しだった。ピエールはそれに耐えられず気が狂ったのかもしれない。また彼は事件の前に兄に書類を送ってきていて、それをパリの女性組織に預けてあると話した。

第2部

朝鮮では、アメリカ軍が戦闘をおこなっていた。アメリカ兵のトッドは、共産主義者のテロに対して闘う十字軍に加わるという使命感に燃えて、北朝鮮の軍隊に志願した。しかし戦場では、女性も子供もキリスト教の牧師も大量に殺さなければならない。トッドはピエールの事件の時、酔いつぶれてその場で倒れていたらしい。

一方フランスでは、ストライキが頻発していた。レイモンは、アメリカ人将校に、工場でストライキがおこったら抑えるために手と貸そうかと提案される。工場の創業者であるレイモンの父親は、言葉が不自由な老人だったが、外国人が入って来るのに断固反対する。レイモンはストを一日だけ認め、労働者の賃上げに譲歩する。

レイモンはロランスに会う。彼女は、レイモンの友人が、共産党の新聞に掲載されてい

た朝鮮戦争の細菌戦の記事は作り話で、ナチの収容所の話も同じく作り話だと言うのを聞き激怒。レイモンとロランスは決裂する。ロランスは昔の仲間に再会したくなり、パリの女性組織を訪れ、彼女たちの演説に共感する。しかし結局、朝鮮の本当のことはわからないと思う。一方レイモンも、ピエールの残した書類を見るために、女性組織を訪れ、アニエス＝マリーの手記を手に入れる。

第３部

アニエス＝マリーは国際女性調査団の一員として朝鮮にはいり、戦争の状況を見、人々の話を聞き、それを日記に残していた。レイモンはこの日記を繰り返し読み、混乱する。

工場では、レイモンが賃上げを認めたために、同業者の工場労働者も賃上げを要求し、大規模な労働争議がおこっていた。そのとき、アメリカのトラックが来て群衆に突っ込み、一人死亡、二人が負傷するのをレイモンは目撃する。アニエス＝マリーの日記に書かれていた「タンク車が突っ込み、仰向けに横たわった人たちの上を通った」という言葉が重なって彼の頭をよぎる。新聞は「アメリカ人が襲われた」ので仕方なく轢いてしまったのだと主張するが、レイモンは労働者のために裁判で真実を証言する。賃上げを認めたことで、同業の経営者たちから恨みを買っていたレイモンは、はめられて取締役の名前だけを貸していた会社から横領容疑で告訴される。

レイモンには、様々な疑問が沸き起こる。インドシナ戦争はどうしておきたのか？朝鮮戦争は？どんな犠牲を払ってもそれを続けなければならないのか？どんな原則の下にアメリカの占領が必要とされているのか？共産主義者が真実をゆがめている事を非難する以外に答えはないのか？

ニースの病院から送り返されてきたピエールは、高熱をだして死にかけていた。レイモンに会うと、彼は朝鮮であったことを絶望的な狂乱状態で話す。しかし突然冷静になって、「つまるところ・・・僕たちはまさに殺すためにあそこにいた」とつぶやく。

レイモンが外に出ると、沢山の若者のデモが続いていた。彼は「ゴー・ホーム！アメリカ人は出ていけ」「朝鮮戦争をやめろ！ベトナム戦争もやめろ！リッジウエイ出ていけ！リッジウエイ、人殺し」と叫ぶ列に加わる。

以上が『江西の殺人』のあらすじである。次は、この小説のなかのいくつかの描写を検討する。

６．アニエス＝マリーの日記と登場人物の心理

アニエス＝マリーの日記の再現として書かれている第３部第１章は、国際民主女性連盟の報告書と重複するが、報告書には書かれておらず、それを補うことのできる描写もある。

例えば、彼女たちがどういうルートをたどって北朝鮮まで行ったのかがわかる。シベリアの上空を飛び、ノヴォシビルスクに寄港し、クラスノヤルスク、イルクーツク、バイカル湖を見て、チタで中国の飛行機に乗り換え、中ソ国境を超え、チチハル（斉斉哈爾）に寄港、ムークダン（瀋陽）に到着。アニエス＝マリーはそこで日記を書き始める。ここから旅はすべて夜に行われる。汽車でアントン（丹東）に向かい、そこから一本櫓の小さな漁船に乗り、明かりもつけずヤールー（鴨緑江）を渡り、北朝鮮国境の町シニジュ（新義州）に到着した。

また日記は、団員の構成についても触れている。すなわち彼女たちはヨーロッパ、アフ

リカ、カナダのほとんどすべての国からやって来ていて、カトリックもいれば、プロテスタント、ムスリムもいた。また東ドイツ、西ドイツから来た二人のドイツ人は共産党員だと思うと書かれている。あらゆる職業、あらゆる年代の女性たちであり、ベルギーの代表が60歳で最年長、日記を残したとされるアニエス＝マリーは最年少である。

アニエス＝マリーが調査団に参加したきっかけは、もう一人のフランス人メンバーであるエレーヌ・ヴェテルレにさそわれたからである。彼女は「少女のグループ」[55]に、「どんなふうに戦争が行われているかを見るための証人の派遣を頼んで来た」のである。エレーヌ・ヴェテルレは、「朝鮮で、アメリカ人たちはフランスでヒトラーのドイツがしたのと同じようにふるまっている」と言った。アニエス＝マリーは、ナチの下で人々が無気力にしているのを見ていたので、「こういうことに耳をふさいだままでいるのはよくない、不正義と闘わなければならない」と思って参加したのだ[56]。

それでは朝鮮の人々は彼女たちの訪問をどう受け止めたのだろうか？国際民主女性連盟の報告書には、人々が彼女たちに不信感を抱いた様子はうかがえない。しかしアニエス＝マリーの日記からは、必ずしも歓迎されたわけではないことがわかる。例えば、道端で小さな少年に出会った時、その少年が彼女たちを見るやいなや、恐怖のあまり震えているのをみて、「私たちヨーロッパ人の顔が、飛行機よりももっと彼を怖がらせたとわかった。・・・耐えがたいことです。この少年は私たちが彼を殺しに来たと思っているのです」と書いている。また、「私たちを獲物のように虐殺したのは白人だ。おい。私の子供はみんな死んだのだ。おまえのキリストがいるなら、なぜこんな残虐行為を許しているんだ」と責められる[57]。突然やってきた白人女性たちを見て、事情を知らない現地の人たちが恐怖をいだいたり反発したりするのは当然である。アニエス＝マリーの父親は戦闘で闘ったことを誇りにしており「祖国のために死ぬことができなければならない」と言っていた。しかし、彼女は、「敵をひどく苦しめ、女や子供を殺し、すべてを焼く」この戦争は、考えていたものとは違うことに気づく[58]。

ジレット・ジーグレーは履歴でみたように、もとはブルジョワ階級の出身であった。しかしレジスタンスの経験の後、左翼を支持するようになった。このようなジレット・ジーグレー自身の変化のきっかけを反映していると思われる場面は、レイモンの友人ドプレがロランスに「赤たちの最近の作り話は特におもしろかった」と、中国と朝鮮の細菌戦の記事がでっちあげだという話を切り出すところである。

ロランスは、細菌戦がすべて嘘だとはおもっていなかったが、「今回は、これは少しおおげさだと認めます」と冷静に答える。ところが、ドプレの次の言葉にロランスは仰天する。

「これらのアメリカの残忍さという嘘が、感受性の鋭い人の同情を引くために作り出されたと、何故私が考えるかわかりますか？有名な強制収容所からです。」「人々がレジスタントと呼んでいたこれらの詐欺師と共謀して、共産主義者たちがいままで試みた最もすばらしいこけおどし。つまり戦争中の一つの国が、陰謀を企てた人たちを収容

---

[55] 少女のグループというのは、フランス女性同盟のもとになった姉妹組織であるフランス少女同盟のことであると思われる。
[56] ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, pp.143-146.
[57] *Ibid.*, pp.150-157.
[58] *Ibid.*, pp.160-161.

し、彼らに限度を超える害を与えた。それがその国の権利だった・・・。もちろん、収容所の中で死んだ人たちもいた。空腹で苦しんだ人たちもいた。ドイツのすべてで同じだったように・・・。そしてそれをもって、死体置き場、ガス室、死の収容所という化け物のような冗談をでっちあげた[59]。」

ロランスにとって、人生のなかで価値のあるのはレジスタンスの思い出だけだった。

「取るに足らないものだ、私の一生は。のんきで空っぽの子供時代、喜びも苦しみもない結婚、いくつかの付き合い、娯楽、お金の心配、成功したり失敗したりした展覧会・・・。結局ゼロだ。あの占領の 4 年間、レジスタンスを除けば。そこで私は、漠然と友愛、集団活動への魅力を感じていた[60]。」

このように考える彼女にとって、レジスタンスを否定することは許しがたかったし、そう考える人の言うことはすべて嘘だと思われたのだ。この出来事の後、彼女は「彼（ドプレ）が、この（朝鮮戦争の）悲惨を嘘だというなら、おそらくそれは本当だろう。それは本当に違いない」と考えるようになり[61]、それを確かめるために、女性組織に向かう。

女性組織では、演者が、ナチの弾丸に倒れた女性たちの怒りをひきあいにだしながら、「アメリカ人たちは、爆撃で朝鮮のレジスタンスを打ち破ることができなかったので、伝染病を蔓延させることによって屈服させようとしている。・・・世界中の怒りによって・・・原子爆弾の使用を糾弾した多くの男女が細菌戦争をやめさせなければならない」と主張していた。ロランスは、衝動にとらわれていくのを感じ、そこにいた女性たちと一緒に拍手する。しかし彼女は細菌戦の存在の証拠を得ることはできなかった。彼女は自問する。

「結局、この話の証拠は何もなかった。伝染病はある。しかし荒らされた国では普通のことだ。私はもしかしたら納得させられるかもしれない。でも、もしマルク[62]がここにいたら、どう言うだろうか[63]。」

エレーヌ・ヴェテルレは、細菌戦が真実であると信じる理由として、アメリカ軍が残虐行為をしたと話していた。これを聞いた大勢の女たちから、ごうごうたる非難がおき、立ち上がり「人殺し！」と叫び声があがった。この様子を、ロランスはナチの占領下のニースの人々の叫びと同じだと感じる。しかし細菌戦の話は推測でしかなかった[64]。

病気になったロランスをエレーヌ・ヴェテルレが見舞いに来て、今のフランス政府は、ペタンの時代の対独協力者の政府だから闘わなければならないと力説する。ロランスは心を動かされるが、エレーヌの激しい怒りに燃えた目を見て、泣いてしまう[65]。彼女はエレーヌの激しさについていくことができない。

一方、主人公のレイモンの考えが大きく変化するきっかけは、アリエス＝マリーの日記である。彼はそれを繰り返し読んで、朝鮮戦争の現実に気づく。それでも拷問の話や生き埋めにされた話、戦車に轢き殺された話は信じ難かった。

「これら全部を誰がこの子供に語ったのか？どんな言語で？フランス語ではないはず

---

59 *Ibid.*, pp.121-122.
60 *Ibid.*, p.181
61 *Ibid.*, p.126.
62 レイモンの友人で、レジスタンス活動を通して左翼に理解のある医者。
63 ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, p.127.
64 *Ibid.*, pp.128-130.
65 *Ibid.*, pp.199-200.

だ。通訳が証言者たちの望むことを言わせることをできたのだろう。ヤンキーの兵隊たちが村を略奪し、女たちに暴行した。これはあり得る。しかし平然と体系的に大勢の市民を虐殺すること、それはないだろう[66]。」

と彼はつぶやく。それでもレイモンは、大戦中にドイツ人たちがやったことを思い返すと、兵隊は命令があれば、それに背くことはできないのではないかとも思えた。

「非人道的な命令、不正な戦争があり得ること、決められた時に従わなかったり、闘わなかったりすることを許容することができるだろうか[67]。」

結局、レイモンの考えは、デモの時アメリカ軍のトラックが労働者を轢き殺すのを見、自分がトラブルに巻き込まれることになってから、ぐらつき変化していくのである。

La Commission Internationale Feminine pour l'enquête sur les atrocités commises en Corée

Debout de gauche à droite : Eva Priester, Autriche; Ilyana Dimitreva, interprète URSS; Lala Flerovskaya, interprète URSS; Kate Fleron, Danemark; Abasia Fodil, Algérie; Hilde Cahn, Republique Démocratique Allemande; Li Kueng, Chine; Germaine Hannevard, Belgique; Candelaria Rodriguez, Cuba ; Bai Lang, Chine ; Trees Soenito-Heyligers, Hollande; Elizabetta Gallo, Italie; Miluse Svatosova, Tchécoslovaquie.

Assises de gauche à droite : Lilly Waechter, Allemagne Occidentale; Gilette Ziegler, France; Maria Ovsyiannikova, URSS; Li thi Quê, Viet-Nam; Nora Re[illegible] Canada, Présidente de la Commission; Pak Den Ai, Corée; Lui C[illegible]

国際民主女性連盟朝鮮戦争調査団団員と通訳。
前列左から二人目がジレット・ジーグレー。

国際調査団の報告書『私たちは弾劾する』を読んだ人の何人かは、レイモンと同じような疑問を持ったのではないだろうか？通訳はどういう人物だったのか、何人いたのか？実は、報告書の見開きに団員の全体写真が掲載されているのだが、そのなかに通訳として二人の女性が写っている。二人の国籍はソヴィエト連邦である[68]。彼女たちは本当に通訳なのか？朝鮮語ができたのだろうか？しかしそれ以外に通訳についての情報はない。調査団は「朝鮮女性同盟」の要請を受けて出かけているので、その組織の女性たちが付き添っていたのは確かだろう。彼女たちが朝鮮語からロシア語に訳し、さらにフランス語なり英語なりに訳したのだろうか？いずれにせよ、疑問は残る。証言にはニュアンスがあることをジレット・ジーグレーはほのめかしているように見える。

おわりに

国際調査団の女性たちがヨーロッパから戦時下の北朝鮮まで、危険をかえりみず出かけていった動機は何だったのか？もちろん、平和を訴えなければという純粋な気持ちはあっただろう。しかしそれのみで説明するのは難しい

---

66 *Ibid.*, p.162.
67 *Ibid.*, p.163.
68 *Corée, Nous accusons : Rapport de la Commission de la Fédération Démocratique Internationale des Femmes en Corée du 16 au 27 mai 1951*, p.1.

ジレット・ジーグレーに限って言えば、彼女を駆り立てたのは対独レジスタンスの記憶である。50年代はじめのフランスは、レジスタンス活動家がもてはやされた時代である。戦後復興をなしとげるために、ナチスドイツに抵抗した英雄的フランスという演出が必要だったからだ[69]。ジレット・ジーグレーにとっても、レジスタンスは人生において最も輝いていた時代だったのだろう。「レジスタンス、それは私にとって、侮辱されたり、あきらめたり、卑怯者になることを否定し、私が困難な使命を負っていれば、仲間たちの目に賞賛が浮かぶものだった」とロランスは言っている[70]。もし不正義があるのならば、ナチ占領下で自分たちが活動したように、それに対して闘わなければならない。何もしないのは共犯だ。そういう強い思いが、彼女を平和運動に向かわせたのは間違いない。

しかしそうは言っても、国際調査団に加わって激戦地の朝鮮まで行くのは、大変な決断である。おそらく、歴史家でありジャーナリストでもある彼女には、真実を知りたいという好奇心が強かったのだろう。現在では、女性ジャーナリストが戦争取材で活躍している話を聞くことも多いが、当時はジャーナリストであったとしても、女性が戦闘中の地域に取材に行くことなどほとんどできなかった。彼女は調査団に加わることによってのみ、実際に朝鮮を見て、話を聞く機会を得、そのルポルタージュを書くことができた。ただ、彼女は自分たちが自由に動き回っているのではなく、決められた場所を見て、決められた人の話を、決められた通訳をとおして聞いているのだということを理解していた。証言者は本当のことを話しているのか？アメリカ軍の兵士は本当にそれほど残忍なのか？どのような青年がフランス軍の志願兵になっているのか？彼女は、おそらく隠された事実があるのを感じていた。

結局、ジレット・ジーグレーは、国際民主女性連盟の活動に大いに共感し支援もしていたが、歴史研究者として、ジャーナリストとして、事実かどうか検証できないことを感情に動かされて書くことはできなかったし、人々に訴えることにもためらいがちであった。彼女の小説『江西の殺人』に描かれているのは、国際調査団の報告書には書かれていない戦争の複雑さ、理不尽さ、悲惨さ、不可解さである。

---

69 シモーヌ・ヴェーユ著／石田久仁子訳『シモーヌ・ヴェーユ回想録—20世紀フランス、欧州と運命をともにした女性政治家の半生』パド・ウィメンズ・オフィス、2011年、p.267.
70 ZIEGLER, Gilette, *Meurtre à Kang-Sé*, p.181.

モニカ・フェルトンとWIDFの朝鮮戦争真相調査団

藤目ゆき

（はじめに）

モニカ・フェルトン（1906年9月23日～1970年3月3日）は、1951年5月にWIDF（国際民主女性連盟）が朝鮮に派遣した女性国際調査団に参加した、唯一のイギリス人である。朝鮮戦争遂行中の英国国家に対する反逆罪に問われかねないこの行動によって、モニカ・フェルトンはスティーヴニッジ開発公社総裁という公職を追われたが、以後、平和運動の国際舞台で活躍するようになった。1956年にインドで開催された平和フォーラムに参加したのを契機に活動拠点をインドに移し、他界するまでインドで暮らした。その間、著述活動に従事し、"I met with Radzhadzhi"（1962）や "Child Widow"などを出版している。日本では岩波新書『あたりまえの女たち－世界の母親の記録』阿部知二訳、岩波書店、初版は1957年2月に発行）の著者として知られている。

『あたりまえの女たち』は、初版から27刷（1980年9月30日）まで15万5000部を出したロングセラーである。WIDFの呼びかけで1955年7月にスイスのローザンヌで「平和の擁護と子どもの安全と幸福とのための第一回世界母親大会」が開かれ、66ヵ国から代表が参加した。日本で母親大会が開催される契機になった、世界初の母親大会である。『あたりまえの女たち』はこの大会に参加した、あるいは参加できなかった世界各地の女性のハーストーリーをモニカが聴き取って書いたものである。母親運動は1950年代後半から60年代にかけて日本の女性運動において未曾有の大衆的な広がりをもち、日本社会に大きなインパクトをなげかけた。そのような母親運動や、あるいは国際的な平和運動や民族解放運動の動向に関心がある人、そして女性問題・女性史に興味をもつ人にとっても、同書は新しい世界

モニカ・フェルトンの肖像
出典：『あたりまえの女たち』

を希求する諸外国の「あたりまえの女たち」の生活と心情にふれ、国境を越える女性の連帯と運動の息吹にふれることができるユニークな図書であった。

が、『あたりまえの女たち』の著者で平和運動家だったという以上には、モニカ・フェルトンが平和運動に果たした役割、生い立ちやキャリア、インド移住後の活動といったことは日本ではほとんど知られていない。また、彼女の祖国である英国や朝鮮戦争に関連する研究が盛んな米国では、都市計画家として彼女が関与したイギリスのニュータウンや WIDF の調査団活動とその後に受けた弾圧などに言及する文献が多数あるものの、叙述は限定的で、人物像を明らかにするような研究は行われていない(1)。英国の WHO'S WHO はモニカの存命中にはいくらかの記述がみえたが、没後にはその記述も消えている。本誌の別稿でも述べたとおり、『フェミニスト事典』にも彼女の名はみえない。冷戦時代に鉄のカーテンを越えてアジアの女性たちに連帯したモニカ・フェルトンの存在は、これまでイギリス女性史叙述の中に正当な位置づけを与えられていないのである。

本稿はモニカ・フェルトンの訪朝前後までの歩みを追跡し、なぜ尊敬を集める高い社会的地位にあった彼女がその職を失う危険を顧みず戦時下の朝鮮を訪れたのか、そして朝鮮で何を考え、世界の人々に何を伝えようとしたのかを、調査団の公式報告書だけでは読みとれない個人の思い・人物像に接近して読み解こうとする試みである。それによって女性史叙述における「継続する冷戦的思考枠組み」では視野から外れてしまうモニカ・フェルトンの像を蘇らせ、女性史の視点から朝鮮戦争を考察する手がかりにしたい。

第1章　訪朝するまでのモニカ・フェルトン

第1節　生い立ち・修学・結婚

モニカは、1906 年 9 月 23 日に非国教徒の聖職者の家庭に生まれた。父はイングランド東南部にあるバッキンガムシャー州ハイウィコムの牧師 T. ロイド・ペイジ(Rev.T.Lloyd Page)である(2)。

モニカが通ったウィコム・ハイスクールは、1901 年にバッキンガムシャー州で最初の女子のための国立グラマースクールとして創立された。モニカが 11 才から 18 才、つまりハイ

---

(1)　都市計画史に関連してモニカ・フェルトンに言及したものに、John Allan, *Berthold Lubetkin, Artitecture and the tradition of progress*, RIBA Publications, 1992 や Bob Mullan, *Stevenage Ltd.: Aspects of the Planning and Politics of Stevenage New Town, 1946-78* , International Library of Society, 1980 などがある。
また冷戦政治史に関連して言及したものに、Joan Mahoney, "Civil Liberties in Britain during the Cold War: The Role of the Central Government;" *American Journal of Legal History* 53, 1989, John Jenks, "The Enemy Within: Journalism, the State, and the Limits of Dissent in Cold War Britain, 1950-1951", *American Journalism*, 18(1), 2001, pp.33-52, Ptrick Wright, *Passport to Peking; A Very Mission to Mao's China*, Oxford University Press, 2010 などがある。

(2)　生い立ちと学歴に関しては特に別註がない限り *WHO'S WHO* (London, Adam and Charles Black, 1956) p.370、"Orbituaray Dr. Minica Flton", *The Times*, 5 March, 'Dr, Monica Felton', witten by Paul Scott, *The Times*, 7 March、ウィコム・ハイスクールのホームページ (http://www.whs.bucks.sch.uk/),'を参照。

スクールに通うような年代であった時期は第一次世界大戦の戦中・戦後の時期にあたる。それは英国の女子中等教育の発展期であった。ウィコム・ハイスクールは創立時の1901年にわずか18人だけだった生徒が1922年までに300人の生徒を擁するようになっている。ウィコム・ハイスクールは創立当初、ハイウィコムのフロッグモアにあるクロックハウスに校舎があったが、モニカが生まれた1906年にベンジャミンロードに移転した。第一次大戦中にはその建物が軍事病院として利用されることになったので、その間学校は旧い校舎に疎開していた。モニカはハイスクール入学からしばらくはクロックハウスに、そして卒業する頃にはベンジャミンロードで学んだのであろう。

ハイスクール卒業後、イギリス南部のハンプシャーにある港湾都市サザンプトンのユニバーシティ・カレッジに進んだ。現在のサザンプトン大学の前身にあたるもので、修了者にはロンドン大学から学位が授与される。モニカはそのあとロンドン・スクール・オブ・エコノミックス（LSE）に進学した。LSEは、1895年にフェビアン協会のウェッブ夫妻、ジョージ・バーナード・ショー、ジョージ・ウォラスの4人によって設立された社会科学を専門とする大学である。モニカはLSEで博士号を取得した。モニカは後年、スティーヴニッジ開発公社総裁であった時期に、LSEのガバナーをつとめている。

モニカが青春時代に何を考え、どう将来を夢見ていたのかを知る手がかりが現在はまだ見つからない。が、彼女が二十歳前後の時期は19世紀半ばからの女子教育向上や女性参政権を求めて展開してきた英国のフェミニストたちの闘いの成果が表れてきた時期であり、1928年には女性参政権が実現している。モニカもまた新しい女性の生き方への夢をふくらませる若者であっただろう。

モニカがLSEを卒業した年は不明だが、1930年を前後する数年の間のことと考えられる。モニカは1937年にロンドン・カウンティ・カウンシル（LCC）に入庁するまでに、ロンドン大学個別指導クラス委員会や英国軍などで講師をつとめていたという職歴の記録がある(3)。その当時のイギリスでは、女性の高等教育への門戸はすでに開かれていたが、高等教育を受けた女性の選択しうる人生はまだきわめて限られていた。香川せつ子によれば、女性の職域拡大は遅々として進まず、卒業を前にした女子学生の選択肢は、事実上「教職に就くか、再び家庭の娘となるか」のいずれかであり、教職以外の大卒女子の就業率は、1930年の時点で事務職が10%、医師、ジャーナリズム、社会福祉職が各3%、公務員、図書館司書が2%であった。そして、いったん就業しても、キャリアの途上で「結婚か、仕事を続けるか」の新たな二者択一を迫られた(4)。モニカが結婚もし、公務員の職をも獲得したということは、当時の女性たちにとってたやすいことではなかったわけである。

モニカがいつ結婚したのかは分からない。結婚相手に関して今までに分かっているのは、姓がフェルトンだったこと、彼が少なくとも1930年代のある時期には共産主義に共感を抱いており、作曲家のマイケル・ティペットをふくめ、彼を知る人たちのあいだで「タンク」

---

(3) ルイス・シルキンが1946年12月17日にスティーヴニッジ開発公社に任命されたメンバーについて下院で報告した内容による。http://hansard.millbanksystems.com/written_answers/1946/dec/17/stevenage-development-corporation)

(4) 香川せつ子「女性の高等教育ーフェミニティへの挑戦と妥協」河村貞枝・今井けい編『イギリス近現代女性史研究入門』青木書店、2006年、91頁

と呼ばれていたこと、モニカと彼が、1935 年頃、ティペットと同じ時期にイギリス共産党のエミール・バーンズに会い、入党審査を受けたらしいということだけである[5]。

モニカの学歴の高さや夫婦そろって共産党への入党を考えたことがあったらしいという逸話から考えれば、フェルトン夫妻には思想的にも共感しあう関係があったということであろう。ただし、モニカのその後の公的生活は後述のとおり社会的に注目を浴び、その活動は国際的な舞台にも広がってゆくのであるが、夫のほうの存在感は限りなく無に近い。モニカは敬称で呼ばれるときには「フェルトン博士」か、そうでなければ「フェルトン夫人」と呼ばれたが、本当に夫がいたのかどうかも分からないほど、夫のことは本人も語らず、世間が噂することもなかった。死別したのだろうか、離婚したのだろうか。

第2節　LCC で働く

1937 年、モニカの人生はひとつの転機を迎えた。この年、彼女はロンドンのセント・パンクラス南西部から選出され、ロンドン・カウンティ・カウンシル(LCC)の労働党議員になったのである[6]。LCC は、首都ロンドンをカバーする自治体として 1889 年に発足した。日本では「ロンドン州議会」と訳されることが多いが、行政機構なので「ロンドン州庁」と訳したほうが分かりやすいかもしれない。が、本稿ではさしあたり LCC という略称を用いることにする。LCC は 1934 年から労働党が多数派を占め、37 年 3 月の選挙でも労働党の得票は過半数を超えた。モニカは第二次世界大戦を間にはさんで 46 年まで在任した。当時、労働党は 1918 年の党大会で採択した党の目的として規定した「生産手段の共有にもとづき・・・生産者に彼らの勤労の全成果を確保すること」という規約第四条がまだ生きており、モニカは社会主義政党としての労働党に積極的に参加したものと思われる。モニカが、ティペットがそうであったように、いったん共産党に入ったものの早々に離党したのか、あるいは共産党に入らずじまいであったのかは分からない。いずれにしても、1951 年に訪朝する時点でもなおモニカは労働党員であった。

1937 年の『タイムス』紙に、LCC に入った頃のモニカの様子を伝える記事がある。

一つは、1937 年 7 月 1 日の『タイムス』に載った、6 月 29 日付のモーリス・オバッチと連名による投書である。その文面はこのようであった。

「サミュエル・ホア卿（当時の内相－筆者注）の手紙と貴殿の本日の社説には、ファシストがセント・パンクラスのメインストリートで 7 月 4 日に行うと提案した行進に対して、地

---

[5] David Clarke, "Tippett in and out of Those Twentieth Century Blues: the context and significance of an autobiography", *Music & Letters* Vol. 74, No. 3, Aug., 1993, pp.399-411　ティペット（1905～1998）は 1935 年に入党したが、スターリン路線に反対しトロツキーに共鳴していたため、二、三ヶ月のうちに離党した。後に、ファシズムへの怒りをこめてオラトリオ「われらの時代の子」（A Child of Our Time）などの作品を発表した。エミール・バーンズ（1889～1972）は当時イギリス共産党の指導者の一人であった。

[6] LCC の選挙は 1937 年 3 月 4 日に行われ、セント・パンクラス南西部からは 4 人が選出された。労働党の得票は、モニカが 6260 票、オーバッチが 6202 票、保守党系の MR 党は、マシューズが 5595 票、ドノヴァンが 5558 票であった。"Labour's Increased Majority", *The Times*, 6 March.

区の労働党が禁止を奨励した動機について誤解を示されています。言論と民主主義的な集会の自由という原理に対する労働党の献身は変わらず揺るぎないものですが、内相がロンドンのイーストエンドで行進を禁じたのと同じ条件がセント・パンクラスにも平等に適用されるのです。

サミュエル・ホア卿が「セント・パンクラス区にはそのような特別な環境はなかった」と述べたのは、誤った情報を伝えるものです。セント・パンクラスにはホア卿が言うような、「人種的な迫害の記憶があるために特別に問題の扱いに神経質になる大勢のユダヤ人たち」もまた居住しております。のみならず、あらゆる様相の政治避難民が何世代にも渡って安息の地としてきた場所でもあるのです。セント・パンクラスは英国におけるユダヤ人の文化的生活の中心地であり、議会地区には、民族的性格をもつ複数のシナゴーグに加えて、ユダヤ人カレッジやウエストセントラル・クラブ（イギリス連邦最大）やその他様々な福祉団体や社会団体があるのです。

さらに、もしも選ばれたルートで行進が行われれば、公衆にかなりの混乱が避けられないと思われます。ファシストたちは、政治的示威行動のためには全く不向きで、これまで使用されたことのない、イスリッピ通り、ケンティッシュタウン・ロード、労働者階級の狭い通りで集合する、と声明しています。

これらの事実を前にすれば、サミュエル・ホア卿は熟慮により自身の決定を改める叡智をもって公衆の平和の壊乱を防ぐ適切な措置を講じられるものと存じます」[7]。

連名者のオーバッチはユダヤ人で、モニカと同様、1937 年にセント・パンクラス南西部から LCC 議員となった労働党員である。英国では不況を背景に 1934 年に英国ファシスト同盟（BAU）が結成され、盛んに反ユダヤ・キャンペーンを展開するようになる。ナチスドイツは 1935 年にドイツ再軍備を宣言し、翌 36 年にはラインラントに進駐していたが、イギリスの保守党政権はこれらの既成事実を追認する宥和的な態度をとっていた。BAU はドイツやイタリアのファシズムと結びつきをもち、37 年の選挙においても西ロンドン諸地区から BAU の候補が 6 人出馬し、当選こそしなかったものの 14～23%を得票していた[8]。モニカらの投稿は、地区で活動する労働党員として、このようなファシズムの台頭を背景とした反ユダヤ的示威行動に反対して行われたものであった。

1937 年 11 月 1 日の『タイムス』紙にもモニカの名がみえる。10 月 30 日にウエストミンスターの中央ホールでロンドン教員協会（LTA）と労働者教育協会（WEA）の主催する教育会議が開かれ、105 団体の代表が出席した。この会議は LTA や WEA がロンドンで展開した教育改革キャンペーンの一環であり、LTA や WEA は LCC が作る教育活動プログラム（1938 年～41 年）に小学校のクラス定員を 30 人にまで減らすことや運動場の拡張などを盛り込むよう提案していた。記事は、LTA 会長 H.W.ホーキンズや WEA の J.J.マロン博士、LTA 副会長 S.ヴァンダーフックらに続いて、少人数クラスの重要性に関して「WEA のモニカ・フェルトン博士」が発言したと伝えている。モニカは、その当時 WEA のメンバーで、労働者教育にも関与していたのである[9]。

---

[7] "To The Editor Of The TimeTimes",' *The Times*, 1 July 1937.
[8] Geoffrey Alderman, *London Jewry and London politics, 1889-1986*, Routledge, 1989, p.186.
[9] "L.C.C.Elementary SchookL", *The Times*, 1 November, 1937.

アーネスト・ミリントンの自伝によると、当時彼は労働党青年部で活動をする若者で、貧しいために大学進学ができない状態だったが、彼が住んでいたロンドン東部のイルフォードは WEA の支部活動が盛んであった。彼はモニカが指導する経済学のクラスに参加した。まだ 20 才そこそこの、新しい社会の建設という希望に燃えるアーネストにとって、モニカに与えられた励ましは忘れがたいものとなった。マルクス主義者であるモニカの指導は自分にピッタリであった、と懐想している(10)。

1937 年 5 月にチェンバレンが首相になると、ヒトラーに対するイギリス保守党政権の宥和政策に拍車がかかった。1938 年のミュンヘンにおける英仏独伊四ヵ国首脳会談においてはチェコのズデーテン地方をドイツに認めてしまう。英国政府が対独宣戦布告に踏み切ったのは、1939 年 9 月、ドイツのポーランド侵攻を受けた二日後であった。

このように第二次世界大戦が始まってゆく時期、モニカ・フェルトンは LCC において、その行政能力を認められ、入庁して一年にならない内に供給委員会の副議長となった。さらに 1939 年 5 月には、供給委員会議長に就任している。供給委員会はロンドン市民約 120 万人のために日々の食糧を確保し、LCC が管轄する病院、学校、公共的施設に適切な備品を供給することに責任を負う委員会である。モニカが議長になったとき、『モントリオール・ガゼット』紙（1939 年 5 月 22 日）は「ロンドンの新しい家計責任者　2500 万ドルの買い物法案」という見出しの記事にした。

「一年に 2500 万ドルでの家政というと、簡単な仕事に聞こえるが、32 才のモニカ・フェルトン夫人にとってだけは別だ。それは頭が痛いどころではない」。

こんな軽い調子で始まるその記事によれば、LCC で委員会議長という要職に就任した女性は最初がエヴリン・ロー、次は公園委員会の議長となったルース・ドールトンで、モニカが三人目だということであった(11)。

1939 年 8 月 2 日の『タイムス』紙は、カーテン用の布地や医薬品、運送備品の購入などについて供給委員会の支出報告書をモニカが提出し受理されたことを伝えている(12)。イギリスはその二ヶ月後にドイツに宣戦布告、翌 40 年 5 月、チェンバレンは退陣し、労働党も入閣してチャーチル戦時挙国一致内閣が発足し、総力戦体制をかためてゆく。

第 3 節　第二次世界大戦下の公務と著作

第二次世界大戦下には戦時予算が組まれ、軍需工場の増産、軍需工場や農場への女性たちの動員、日常用品の生産削減、疎開、配給制の導入が求められた。LCC 供給委員会もまた、英国が総力戦を戦い抜くための支えとなって困難な役割を果たさねばならなくなった。モニカは、41 年まで LCC 供給委員会議長をつとめた後、41 年から翌 42 年には軍需省の公務に就いている。軍需省（Ministry of Supply）は、軍への設備の供給を司る省として 39 年に設置された。また、42 年から 43 年にかけては下院のクラークとして働いた。英国史上、最初の女性クラークであるという(13)。モニカを下院国家歳出特別委員会で働くように推薦した

(10) Ernest　Millington, *Was That Really Me*?, Fultus Corp, 2006, p.8, p.138.
(11) *Montreal Gazette*, 22 may, 1939. http://news.google.com/newspapers?nid
(12) "New Clark of the L.C.C.", *The Times*, 2 Augst 1939, p.7.
(13) Bob Mullan, op.cit., p.307. および"Jobs for the Girlas Lie is Exposed", Daily Herald, 12 March 1949.

のは、ルイス・シルキンであった。シルキンは、1925年にLCCに入り、都市計画・住宅・公衆衛生委員会の議長をつとめた後、1936年の選挙で下院議員となり、戦時下には国家歳出特別委員会の委員をつとめていた。

1944年6月には米英連合軍によるノルマンディ上陸作戦が敢行され、フランス・ベルギー・オランダがナチスドイツから解放された。45年5月にドイツが降伏、続いて8月に日本が降伏する。このようにして第二次世界大戦が終結する前後、モニカは戦時下に軍需と民需の供給という公務に従事した経験をもとに二冊の本を出版している。

一冊は、『戦時下の英国における民需供給』(Civilian Supplies in Wartime Britain)というもので、モニカの執筆したものがイギリス情報省から刊行されている。生産問題・消費制限・食糧配給・衣料品・家具及び家事用品・消費者と生産者という章立てで戦時下の市民生活が活写されており、当時を知る貴重な史料である(14)。

もう一冊の『生きとし生けるすべてのものへ』("To All the Living")は、戦時下にモニカが書いた小説である。物語は主人公グリセルダが軍需工場に働きに来るところから始まる。軍需工場内のことがらは秘匿事項とされ、各地から集められてきた女性労働者たちは、守秘義務に違反すれば投獄・敵に情報をわたせば絞首刑だと脅かされている。工場医は配置されているが、健康診断は形だけにすぎない。工場には、夫が戦死して若くして未亡人になった女性や、爆薬の処理作業で健康を害してもそれを隠して働き実家に仕送りを続ける女性、劣悪で過酷な工場労働で病気になったり精神を病むにいたった女性たちやしっかりした権利意識を持つ女性、労働者仲間から頼りにされる、共産党の集会にも出かけるような中年の女性など、さまざまな女性たちが働いている。その群像が軍需工場で働く女性たちの現実を伝える横糸とすれば、縦糸は、上流階級の出身であるらしいのになぜか工場に働きに来たという謎めいた主人公グリセルダと工場の副監督モーガンとの交際である。やがて、工場では爆発の大惨事が起こる。軍需増産体制の悲惨な犠牲、婚約者の戦死、空襲による家族の死と、軍需工場で働く人々は次々に悲報に見舞われてゆく(15)。

この小説には、モニカが戦時下に抱いていた憤りや願いが表出しているようだ。社会主義政党としての労働党を支持する左派党員にとって、チャーチル戦時挙国一致内閣への労働党の参加とは、没階級的な愛国精神に発するものでもなければ、自国の勝利に究極目的を置くものでもなかった。総力戦争の遂行は、戦争終結後により平等な社会を構築する努力と一体のものでなければならないと考えられた。戦争遂行に必要とされ、実行に移された経済の計画的運営、国家介入や資源の総動員といった成果が、戦争終了後の社会主義的建設を用意するものになることが念願されたのである。だがチャーチル戦時内閣には副首相アトリーをはじめ、内相モリソン、労相ベヴィン、商相ドールトン（1942年以降）など労働党の指導的メンバーが入閣しており、44年頃にはすでに戦時内閣が推進する「計画経済」と、たんなる「計画経済」ではなく生産手段の公有化を掲げてきた労働党本来の社会主義へのビジョン

(14) 同書は1945年に初版、翌46年に同じく情報省から第二版が刊行された。また、大英帝国戦争博物館（Imperial War Museum）から1997年・2003年に復刻版が刊行されている。
Monica Felton, *Civilian supplies in wartime Britain*, reprinted in 2003 by the Department of Printed Books, Imperial War Museum.

(15) 初版は1945年3月8日までにロンドンの出版社ジョナサン・ケープから出版された。
Monica Felton, *To All the Living*, Jonathan Cape, 1945., 'To All The Living', *The Times*, 8 March.

との間に乖離が生じつつあった[16]。44 年 12 月に開かれた労働党大会では、選挙区で活動する地区の労働党員たちからドールトンらの提唱する政策に対する批判が噴出した。労働党のアイデンティティーが失われ、チャーチル戦時内閣の政策と変わるところがなく、総選挙に向けて有権者の支持が得られないとの批判である。モニカもまたこの大会で労働党が完全雇用と生産手段の公有化のための社会主義的政策を明示する必要を強く訴えた一人であった[17]。モニカが小説に描いた戦時下の産業動員における労働党の理想主義と現実の矛盾、その矛盾を背負わされる労働者たちの姿には、モニカが労働党に寄せていた期待と、理想と現実との落差に対する憂慮が投影されていたのだろう。

第4節　都市開発計画家としてのモニカ・フェルトン

労働党は党内の論争を経て、1945 年 7 月の総選挙に公益事業や基幹産業の国有化の公約を掲げて臨み、圧勝した。アトリーが首相となり、モリソン枢相、ベヴィン外相、ドールトン蔵相、クリップス商相らが構成する労働党内閣が発足した。戦時下に表れた労働党内の齟齬は解消されていなかったが、戦後初期には激しい不和が表立つことはなかった。

アトリー政権は 1945 年から 47 年にかけてイングランド銀行、石炭、民間航空、電信・電話、道路・鉄道運輸、電気といった一連の産業・サービスを国有化し、また同時期に、国民保険法や国民保健サービス法、国民扶助法などの一連の社会保障法を実現し、住宅問題にとりくむなど、福祉国家政策を推進した。とりわけ住宅問題は、1945 年の総選挙で労働党立候補者がもっとも有権者の関心をひきつけたテーマであった。モニカ・フェルトンの戦後の仕事もまた深くここに結びついてゆく。

アトリー政権下で都市・農村計画省の大臣に就任したルイス・シルキンは、ニュータウンを建設してロンドンの過密人口を郊外に分散させ、人々に公営住宅を供給する事業を検討するために 1945 年 10 月、ニュータウン特別委員会を任命した。この委員会による勧告に基づいて、46 年 8 月 1 日にニュータウン法が制定された。同法は、融資は中央政府が行うが、都市開発権は開発公社が行使して大規模なニュータウン建設を担うことを定めている。住宅問題の解決・ニュータウンの建設という重要国策を担う開発公社の役割はすこぶる重要であり、土地取得の権限を付与され、全計画・開発行為の責任を任されることになった。この法律に基づいて 1951 年までにスティーヴニッジをはじめとして 10 のニュータウンが誕生することになる[18]。

---

[16]労働党内の戦時下にあらわれた戦後構想に関する議論・意見対立については、山口育人「イギリス労働党の戦後世界構想」（『紀要（帝京大学短期大学）』第 31 号、2011 年 02 月、83～108 頁）および Stephen Brooke, "Revisionists and Fund Mentalists: The Labour Party AND and Economic Policy During the Second World War"（*The Historical Journal*, 32,1,1980, pp. 157-175）を参照。

[17] Brooke, op.cit., p.172.および *Report of the 43rd Annual Conference held in the Central Hall Westminster December 11th to December 15th, 1944*（Transport House,1944, p.164）を参照。

[18] ニュータウン建設に関しては Mullan, op.cit.および R・ランダウ著／鈴木博之訳『イギリス建築の新傾向』（SD 選書 91、鹿島研究所出版会、1974 年、17～38 頁）、菅一城「英国における都市開発と都市統治, 1945～1970 年－ロンドン都市圏の拡大とバジルドン・ニュータウンの建設－」（『社会経済史学』72-2、2006 年 7 月）、同「英国ピーターリー・ニュータウンにおける都市計画とその限界 : 1945 年-1955 年」（『三田学会雑誌』Vol.89、

モニカはニュータウン特別委員会委員としてニュータウン法の原案づくりの段階からこれに参画し、1946年10月から48年4月までの約1年7ヶ月、スティーヴニッジ開発公社で副総裁をつとめた。続いて48年4月から49年10月までの1年6ヶ月、ピーターリー開発公社総裁、そして1949年10月から51年6月まで、スティーヴニッジ開発公社総裁という要職を歴任する。開発公社のメンバーは都市・農村計画省が雇用する常勤公務員ではなく、全員が政府の任命による非常勤職である。高い学識と能力を備えた専門家として、年報は総裁が1500ポンド、副総裁が750ポンド、その他のメンバーは750ポンドを受けた(19)。モニカは都市開発計画家として才覚を発揮し、情熱を傾けた。ニュータウン政策は住宅や土地の国有化ではなく、開発権のみを国有化したのだが、開発公社の経営が民主的で平等な新しい社会を築く手がかりになることに大きな希望を抱いたわけである。

特に、炭坑コミュニティのニュータウン建設を担ったピーターリー開発公社の仕事には特別の思い入れがあったようだ。ピーターリーは英国で最も豊かな炭田の一つといわれるイングランド北部に位置するダラム地方の炭坑地域で、イージントンを中心に12の炭坑村に約8万人が住んでいた。貧しい家々が炭坑の灰燼が舞い臭気を放つ立坑坑口とボタ山のあたりに群がり、人々は店や文化的施設がある都市からは遠く孤立していた。大戦が始まる前から地域全体が炭坑産業の長引く不景気による失業と窮乏に苦悩し、水の供給や衛生施設の不備のため炭坑夫の妻たちの日々の苦労は大きかった。地域の人々は戦争末期から劣悪な住環境からの脱却をめざし、新しい町づくりを計画し始めていた(20)。

建築家バーソルド・リュベトキン (Berthold Lubetkin 1901-199) をピーターリーに招いたのはモニカであった。リュベトキンは1930年代前半までの活動によって既に名を知られた建築家であり、リュベトキンの活動とその基盤となった社会主義に根付く平等思想をモニカは高く評価していた。スティーヴニッジ開発公社副総裁の時期にも計画設計チームへの参加を呼びかけたが、イギリスの近代建築運動の無政治性に対する批判のためにリュベトキンは建築活動から距離をとるようになっており、モニカからの要請を二度も断ったという。が、モニカは決して諦めず、ピーターリー開発公社総裁になるとリュベトキンに重ねて建築計画の受諾を呼びかけた。ピーターリーが炭鉱の町で、労働者低所得者階級として発展してきたこと、戦前ピーターリーの一行がロシアの炭鉱街を訪れ、それを模範としていたこと、リュベトキンがロシア出身で、社会主義思想に共感していること、彼が戦前に労働者階級のための集合住宅建設や、スペイン反戦運動や反ナチス政治運動などに従事した人であること。情熱をこめて参加を呼びかけるモニカの説得でリュベトキンの心を動かし、忘れかけていたユートピア都市への希望、夢の実現への期待をかきたて、とうとう主任建築計画家としての参加を受諾することになったという(21)。

No.1、1996年4月、75～ 96頁）などを参照。

(19) 開発公社のメンバーの身分と支払われる年俸については下院議事録1951年6月13日。(HC Deb 13 June 1951 vol 488 cc2308-13 2308, http://hansard.millbanksystems.com/commons/1951/jun/13/stevenage-development-corporation#column_2308#column_2308)

(20) Monica Felton, "Britain's Model New Industrial Town: Peterlee", *Journal of the American Institute of Planners*, Volume 15, Issue 1, 1949, pp.40-43, Monica Felton, "Democracy in Town and Country Planning," *The Political Quarterly*, Volume 20, Issue 1, January 1949, pp.74-82

(21) 渡辺研司「Peterlee(ピーターリー)ニュータウン計画とバーソルド・リュベトキン ―

モニカはまた、開発公社による都市計画がその計画プロセスから民主主義が貫徹することによって生き生きとした新しい町作りが可能になると考え、地域住民が公式的にも非公式的にも計画と決定のプロセスに主人公として参画できるように情熱を傾けた。イージントンではニュータウン法制定以前から住民自身が新しい町作りを希望し、活発な議論を始めており、ピーターリー開発公社は地区調査のために炭坑夫の妻たちの協力を求めた。彼女たちが調査を担うことによって、回答を拒む住民はほとんどいないほどで、細やかで充実した調査が驚くべき速さで行われたという。この調査が土地の人々によって行われたという事実によって地域の人々のコミットメントはいっそう深まり、住民自身がますます自発的に町作りを考え、意見を交換し、住民集会で積極的で建設的な議論が盛んに行われることにになった[22]。このように住民が非常に早い段階からニュータウンを自分たちのタウンと感じ、自分たちがその未来に責任があると意識して計画に関与するようになったことにモニカはすこぶる高い価値を置き、誇りを感じていたようだ。

モニカがニュータウン建設に燃やした情熱、精力的な活動、強烈な指導力は周囲の人々に強い印象を与えた。「男たちのなかの巨人」[23]と呼んだ若い建築家もいた。ピーターリーを「ペトログラード」[24]と評した人もいた。

以上の通り、モニカは 1937 年から 46 年まで LCC のメンバーとして活躍した実績に重ねて、戦後の労働党政権下ではニュータウン開発公社の要職を歴任し、訪朝する 1951 年までにすでに都市計画家としての名声と高い社会的地位を築いていたといえる。

しかし、それはモニカが確立した名声と地位に安住し満足していた、ということではない。ピーターリーやスティーヴニッジにモニカが託していた希望は、1951 年の訪朝までにしだいにくじかれつつあった。モニカは朝鮮訪問記『だから私は朝鮮へ行った』に、朝鮮訪問を決心したときの心情を綴り、スティーヴニッジについて次のように書いている。

「1945 年、スティーヴニッジは新しいよりよい世界への私たちの希望の一部であった。これらの希望のほとんどは、すでに消え去っていた。そして、今スティーヴニッジの運命は世界の運命にかかっている、と私は確信していた」[25]。

これはいったい何を意味するのだろうか？

労働党内の新社会建設へのビジョンは早くも戦時下から差異が表出していたが、ニュータウン建設についても都市農村計画省と商務省の間には早くから見解の対立があった。ピーターリーに関しても開発公社が重視した新産業の誘致に対して商務省は否定的であり、モニカやルベトキンの開発計画は遅延を重ねることになった。1949 年 10 月、ピーターリーからスティーヴニッジ開発公社総裁へのモニカの異動が知らされた二週間後、ルベトキンは失意の

バーソルド・リュベトキン（Berthold Lubetkin）研究その４－」、日本建築学会大会学術講演梗概集、1998 年 9 月、http://ci.nii.ac.jp/naid/110004147883

[22] 註(20)に同じ。

[23] John Allan, "Berthold Lubetkin, Artitecture and the tradition of progress", RIBA Publications, 1992, p.452. イエーツ

[24] Robert B.Black, "Town and Country Planning in England's Northeast Section", *Journal of the American Institute of Planners*, Volume 15, Issue 3, 1949

[25] Monica Felton, "*That is why I went*", Lawrence & Wishart, 1953, p.11.

うちに辞職を申し出ている[26]。そして、労働党は50年2月の総選挙によって政権は維持したものの議席数を大幅に減らし、都市農村計画省大臣はシルキンからドールトンへと交替する。翌51年1月には、都市農村計画省は保健省と統合されて住宅・地方自治省となるが、大臣は引き続きドールトンがつとめた。

このような展開はモニカにとって希望の喪失につながる要素であっただろう。が、それらは、たんに都市計画に関する個別的な政策や人事異動による落胆ではなかったと考える。都市計画の展望もふくめて、冷戦の始まり、とくに朝鮮戦争への参戦以後、労働党政権の政策は冷戦に照応して変化しつつあったからである。

章をあらためて、先ず朝鮮戦争開戦以後のイギリスの政治状況をふりかえって「今スティーヴニッジの運命は世界の運命にかかっている」という言葉の含意を考察し、その後、モニカの訪朝の全体像について述べたい。

第2章　WIDFによる朝鮮戦争真相調査のための国際女性調査団

第1節　イギリスの朝鮮戦争参戦

1950年6月25日、朝鮮戦争が勃発する。米国は駐日米軍を即座に派兵し、ソ連が欠席中の国連安保理で北朝鮮非難決議をあげさせ、国連決議に基づいてオーストラリア、ベルギー、カナダ、コロンビア、エチオピア、フランス、英国、ギリシャ、ルクセンブルグ、オランダ、ニュージーランド、フィリピン、タイ、トルコが米・韓軍に加担して参戦することになった。内戦として始まった朝鮮戦争は、こうした国連軍の参戦によってとてつもない規模の国際戦争へと発展していった。

国連軍の主力は米軍および米軍が指揮権を持つ韓国軍であるが、英国は米国の要請を受けて早くも8月末に香港駐屯の2個部隊を韓国に派遣した。米国との同盟関係と大国の威信を尊重する英国アトリー政権の方針によって、英国は国連軍派遣を規定した1950年6月の国連決議に続いて38度線越境の基礎となった10月7日の国連決議をも支持し、朝鮮戦争の全過程を通して米韓軍に加担した同盟国の中で最大規模の軍隊を送り、戦闘にも重要な役割を果たした。兵員は2万7,000名規模が終始維持され、陸海空3軍からの派遣人員は合計8万1,084名に達した[27]。

英国は朝鮮戦争参戦によって、軍事支出の過重負担に悩むことになった。朝鮮戦争が始まるや、米国は英国に対して戦争協力を強く求め、軍事予算を60億ポンドまで増額するよう圧力をかけた。それは英国経済にとって重すぎる負担であったが、1950年10月に財務大臣に就任したゲイツケルは軍事費捻出に精力を傾け、51年1月には36億ポンドから47億ポンドへと軍事予算を増額する。英国歳入の14%にあたる莫大な金額であった[28]。ゲイツ

---

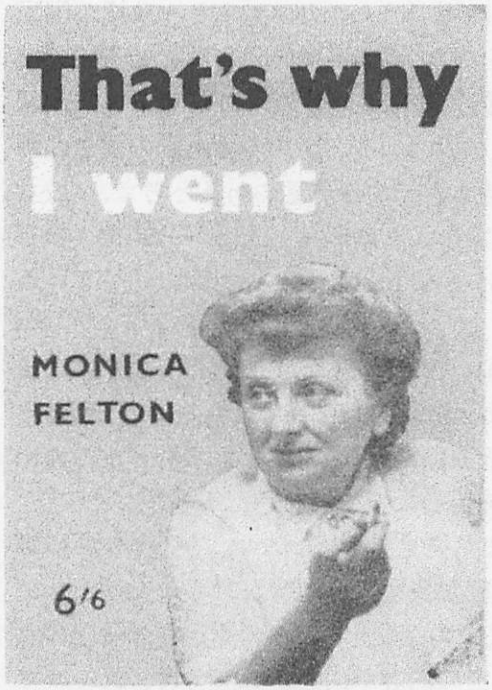
[26] Allan, op.cit., p.497, p.506.

[27] 在朝鮮米軍は、1951年6月で約25万3,000名、52年6月で約26万5,000名、53年7月では約30万2,000名であった。マイケル・ホプキンス「朝鮮戦争とイギリス－英米関係へのインパクト－1」 http://www.nids.go.jp/event/forum/pdf/2006/forum_j2006_09.pdf

[28] John Callaghan, *"The Labour Party and Foreign Policy : A History"*, Routledge, 2007, p.186.

ケルは軍事費調達のために、国民保健サービスに目をつけ、それまで無料であった眼鏡と義歯の一部有料化にふみきった。1946 年に制定された国民保健法によって誰もが保健サービスを保障される国民医療制度が創設されていたが、過重な軍事支出の矛盾がしわよせされることになったのである。保健大臣で労働党左派の指導者であったベヴァンはこの措置に憤り、51 年 4 月 21 日、抗議のために辞職した。当時ベヴァンに近かった商務次官ウィルソンもそれに続き、労働党政府は大きく動揺することになる。

モニカが WIDF から各国のさまざまな女性たちで構成する朝鮮戦争真相調査団への参加を呼びかける招待状を受け取ったのは、折しもベヴァンが辞任する直前のことであった。彼女はそれまで WIDF に関わったことがなかったが、迷うことなく、ほとんど即決で行くことを決心した。モニカの旅行記『だから私は朝鮮へ行った』は、こんな文章から始まっている。「招待状は 1951 年 4 月の第 2 週の初めに届いた。ためらっている時間はなかった。月末に一行はプラハで集合するからだ。それに、躊躇する理由は何もなかった。その機会はつかみそこねるのにはあまりに重要だった」[29]。



では、モニカはなぜ朝鮮戦争の真相調査がそれほどに重要だと感じたのだろうか。朝鮮戦争について、訪朝するまでのモニカはどのように感じ、考えていたのだろうか。

『タイムス』紙（1950 年 12 月 2 日）が伝えた、ロンドンで開かれた保育をめぐる集会の記事から、英国政府が朝鮮に軍隊を送り出し、巨額の戦費を支出する一方で、市民生活が緊縮財政の犠牲になっていることをモニカが憂えていたことの一端がみえる[30]。その集会とは保育全国協会が開催し、労働党政権下に戦後制定された国民健康法第 22 条を全面実施して就学前の子どものための保育園を助成することを決議したものである。この集会に出席したモニカは、「市民サービスが最も必要とされている時に進められている現在の緊縮経済キャンペーンに愕然とする」と、戦争のための福祉切り捨てに反対する立場を鮮明に述べている。現在、多くの家族には家がなく、これから家をもてるという希望もない。政党綱領がどうであれ、住宅問題が解決するのには長い年月がかかるのであり、保育園は多くの女性にとってまともな生活水準を維持して家族を養育し、生活するための唯一の希望である。1 才以上 5 才までの幼児を安心して預けることのできる良い施設がないのは社会サービスにおける最大の矛盾である。現職のスティーヴニッジ開発公社総裁であり、勤労者コミュニティの実情を知悉するモニカのこうした発言は、保育園を切実に必要としていた多数の母親たちを勇気づけたであろう。

このように国民生活を圧迫しながら戦争政策が進む一方、 朝鮮戦争の実情についてイギ

---

[29] 註 (25) に同じ。
[30] "Value of Nursery Schools", *The Times*, 2 December 1950.

リスの一般市民が確かな情報を得ることは難しかった。モニカは、1950 年秋以来、北朝鮮はもとより南朝鮮に関する報告さえ検閲が厳しくなり、市民が真実を知ることが難しくなったことを危惧していた(31)。アトリー政権が朝鮮に派兵している一方で、イギリス共産党機関紙『デイリーワーカー』とその特派員アラン・ウィニントンは朝鮮人民軍と中国義勇軍を支持して国連軍の侵略と暴虐を非難していた。ウィニントンは朝鮮人民軍の従軍記者として南朝鮮にも行き、米韓軍による民間人虐殺についても報道し、集団的に殺害された民間人の埋められた現場とされる場所の写真と記事をも発表していた。イギリス政府はこうした『デイリーワーカー』やウィニントンの報道について、国家への反逆として発行禁止や起訴をも検討していた(32)。実際にはこうした法的措置はとられなかったものの、一般市民にとっては戦争最中に何がプロパガンダであり何が真実であるかを見きわめるのは容易でなかった。

このようにして、WIDF の招待状が届いた 4 月頃にはすでにモニカはアトリー政権が国民に負担を背負わせて遂行する朝鮮戦争の意義に疑問を抱き、真実が覆い隠されているのではないかという危惧を深め、アトリー内閣への失望を感じていたのだろう。が、アトリー内閣に失望したとしても、労働党に絶望したのではない。彼女は、イギリスの労働党の強さの源は世界の出来事を常に事実に基づいて理解し見解を持とうとする熱意にあると考え、 彼女が訪朝して実情を把握して、プロパガンダではなく真実を人々に伝えることが労働党への寄与につながりもし、労働党の最良の伝統に従うことにもなると考えた、と後に述べている(33)。

モニカは、「スティーヴニッジの運命は世界の運命にかかっている」と確信していた。その言葉で表現されたのは、アトリー政権の政策の背景となった本質的な世界の変化、つまり朝鮮戦争に集約的に表れた東西冷戦の激化に対する危機感であり、希望をとりもどすためにはこの戦争の真実を見きわめる必要があるという直感だったのではないだろうか。

なお、モニカが受け取った WIDF からの招待状はまだ発見できていない。が、WIDF の調査団派遣の契機になったのは 1951 年 1 月 5 日付けで朝鮮民主女性同盟が世界の女性たちに向けて発信したメッセージであり、戦禍による朝鮮民衆の受難を訴え、国連軍参加諸国の女性たちに軍の撤収を求めている。WIDF の招待状にもその内容が何らかの形で含まれていたのではないか。参考として、その日本語訳を紹介しておく。 (97 頁＜参考資料 1＞参照)

第 2 節　国際女性調査団の訪朝

モニカは友人たちの協力を得て大急ぎでビザをとり、新しい服を買い、地図をひっぱりだして未知の土地に思いを馳せ、予防注射をし、そして 4 月 28 日に調査団の集合地プラハへと出発した(34)。

帰国予定は 5 月中旬である。モニカはそれまでスティーヴニッジ開発公社の仕事にほとんどの時間を費やしていたものの、総裁職は定時出勤を求められるものではなかった。3 週間余りの不在中に万事支障のないよう手配は整っていた。6 週間後の 6 月 7 日に下院の公聴会

(31) Monica Felton, "What I Saw in Korea", self-published, 1951, p.3.
(32) Lester H.Brune, ed., *The Korean War; Handbook of the Literature and Rsearch*, Greenwood Press, 1996, pp.102-103.
(33) 註(31)に同じ。
(34) *That's why I went*, op.cit., p.12.

が予定されていたが、その 3 週間前には帰国する予定なので、準備時間もふくめて時間はたっぷりあった。戦争の最中に鉄のカーテンを越えて旅し、敵国である北朝鮮・中国側と接触することで反逆罪に問われまいか、開発公社から追われるのではないかという心配は旅行前からないわけではなかった。それらを心配する友人たちに対して、モニカはそのようなリスクがあるとしても行く、という意志を告げている(35)。

当初は早々にプラハからモスクワへ移動し、すぐに極東へ向かえるはずだった。が、調査団員がそろってモスクワへ出発するには時間がかかり、チェコで 10 日あまりも足止め状態の有様で、旅程は大幅に遅れた。モニカはその 10 日あまり、チェコのあちこちを訪れて時を過ごした。デンマークからきたカーテ・フレロン・ヤコブセンやイーダ・バッハマンといっしょに、大戦下にナチスが破壊し、住民虐殺を行った炭鉱村リディツェをも訪れている。モニカにとって二度目の訪問であった。大戦後のリディツェ再建はファシズムに反対する国際的ネットワークの連帯課題となり、モニカもこの再建運動の一環として 1947 年にも訪ねたことがあったからである(36)。

やがて一行が集合し、団の編成や旅程などをめぐる話し合いが始まる。その時点で、調査団が調査を行う前に何らかの声明や合意書を作成することにモニカとカーテがはっきり反対している。調査団の団長には、最年長でカナダから参加したノラ・ロッドが選ばれた。北朝鮮だけでなく南朝鮮をも訪問することに関しても、その方向で意見がまとまった(37)。

一行はプラハからモスクワへ飛び、そこで WIDF の有力団体であるソビエト反ファシズム女性委員会と合流し、さらに極東へ向けて出発した。シベリアのノヴォシビルスクとチタでそれぞれ一泊した後、5 月 13 日に中ソ国境を越えて瀋陽に到着。瀋陽で丸二日滞在し、ここで中国人のリ・ケン、バイ・ラン、リウ・チンヤン、そしてベトナムのリ・チケが合流し、調査団の 20 人（オブザーバーを含めて 21 人）が全員そろうことになった(38)。

21 人が朝鮮に入ったのは、5 月 16 日のようだ。前日に列車で瀋陽を出発した一行は 16 日明け方に国境の中国側にある丹東に到着し、女性団体の本部がある寺院で休息した。夜になってジープで移動し、迎えにきた北朝鮮の外務省関係者や通訳たちとともにボートで鴨緑江をわたり、朝鮮側の国境の町・新義州へ到着した。

以後、5 月 27 日までの旅程は次のようであった。

5 月 16 日（木）　新義州の文化センターにて新義州市長の挨拶。新義州泊
5 月 17 日（金）　新義州で戦災孤児施設・市内の視察　平壌近郊の「本部」へ移動
5 月 18 日（土）　新義州に関する報告書に全員が署名
5 月 19 日（日）　延命寺跡や平壌郊外を視察
5 月 20 日（月）　「本部」に戻り、平壌に関する調査報告書の作成
5 月 21 日（火）　平壌に関する報告書に全員が署名
5 月 22 日（水）　21 人が 4 グループに分かれて、黄海道・平安南道・江原道・慈江道の視

(35) ibid., p.11.
(36) チェコ滞在については同前、pp.15-37.
(37) 同前、pp.35-36 および Kate Fleron Jacobsen, 'Mrs.Monica Felton', *New Statesman*, 7 July, 1951.
(38) シベリア欧米から中国滞在までは *That's why I went*, op.cit., pp.52-77.

察に出発。モニカ・フェルトンは黄海道のグループに参加

5月26・27日（日・月）　各グループと全体の報告書作成と署名

訪朝中の移動・宿泊の手配や土地案内は朝鮮女性同盟が行い、国際女性調査団が調査活動の本部として使える施設が平壌から15マイルほどの場所に用意された(39)。

モニカをふくめ、南朝鮮をも視察対象に含めたいというのが西側から調査団に加わった女性たちの当初からの強い希望であった。プラハでそう話し合われた後、モスクワではソビエト反ファシズム女性委員会の議長で調査団のソ連代表であるマリア・アヴシヤンニコワが、これをまるでお話しにならない愚かな提案として賛成しなかったので、調査団の結論は持ち越されていた。が、国連軍側からの空襲が引き続く国境を越え、気の遠くなるような移動の苦労を経て平壌に到着するころには、南朝鮮訪問を予定された滞在日数の中で実現するのは現実的に不可能だと調査団の誰しもが納得せざるをえなかった。また、モニカは英国人捕虜収容所の訪問を望み、朝鮮側はそれを承諾したが、実現のためにはさらに滞在の数日延期が必要であったため、これも諦めるしかなかった(40)。

調査団は、先ず新義州と平壌に関する報告書を5月18日と21日にまとめている。そのあと各グループが調査を終えると、全員でその結果を共有化し、グループ毎に署名した報告文を一つの報告書へとまとめあげた。こうして作成されたのが、報告書『朝鮮：私たちは弾劾する。－1951年5月16日～27日の朝鮮におけるWIDF委員会報告』である。

この報告書によれば、調査団は新義州に到着して以降、訪問したどの地域でも都市や町や村がことごとく破壊され、廃墟となっている有様を見て慄然とした。1907年のハーグ条約は、非軍事目標の無差別破壊を禁止している。しかし調査団は訪れた場所すべてにおいて、爆撃を受けた病院や学校、一般家屋、田園や田園地帯にある寺院などの残骸をその目で見ることになった。空爆は調査団の移動中も行われており、「灰の塊になってしまった町・生き残った住民が防空壕のなかに住む他ない町にさえ、なお爆撃は続いていた」。

団員たちは瓦礫をふみこえ廃墟をまわって被災状況を調査し、朝鮮女性同盟や人民委員会のメンバーの報告、一般住民による証言に耳を傾けた。多数の住民が低空からの機銃掃射による住民殺害、ナパーム弾や時限爆弾といった新兵器の使用、レイプや拷問、村の焼き討ち、集団虐殺といった米韓軍の占領下で行われた残虐行為を訴えた。調査団の車は旅行中しばしば途中の村々の住民に呼び止められ、村人たちから米韓軍から受けた被害の実態を詳しく話された。調査団が来ていると知って、自身や家族の受難を語るために駆けつける人々もたくさんいた。遠隔地から会いに来た人々のなかには50代の女性の一団もいれば、孤児施設で暮らしている子どもたちもいた。ひどく興奮して、泣きながら調査団員の手や着物をにぎりしめる女性たちもいた。群衆が調査団をとりまいて話を聞くよう求め、拷問によって受けた傷を見せ、虐待を受けたことや近親が殺されたことを語った。調査団はこれらの話を聞き取っただけでなく、占領下に獄舎として用いられた建物、獄舎に残された血痕や拷問道具、井戸や穴のなかに投棄された惨殺死体、多くの人々の身体に残る拷問の傷跡を自分の目で見た

(39) 朝鮮滞在については同前、pp.78-161.
(40) 同前、p.49, p.103-104, p.110 および 註（37）の出典に同じ。

(41)。

こうした調査を通して調査団が達した結論はこうである。

「米軍や李承晩軍が一時占領した地域では、占領期間中に数十万の市民、老人から子供までまじえた家族のぜんぶが、拷問され、打ち殺され、焼かれ、生き埋めにされた。そのほか数千数万人は、せりあうような監獄のなかで、飢えと寒さで死んでいった。これらの人々は、何の罪もなければ、取調も、裁判も判決のいいわたしもなく、監獄にぶちこまれたのである。これらの大衆的拷問と大衆的虐殺は、ヒトラー・ナチスが、その一時占領したヨーロッパでやったより以上のものである」(42)。

この結論は、ナチスドイツのファシズムを生き延びたヨーロッパの経験を前提として書かれたものであり、いかに調査団員たちが滞在中に見聞した朝鮮戦争の実相に激しい衝撃を受けたかが伝わってくる。

第3節　調査団のなかのモニカ・フェルトン

国際女性調査団の報告書は、一切の予断や偏見を排し、調査によって得た成果を滞在中に成文化するという方針に基づいて作成された。この方針は、モニカが特にはっきり意見を表明し、方向付けたものといってよい。モスクワに一行が集った時には、調査団が赴くにあたっての声明書や合意書のような文書を作ってはどうかという提案も行われていた。その際、前述のとおりモニカとカーテが強く反対し、真相調査団があらかじめ一定の考えや見解を持っているのであれば調査団の真価が疑われるとし、事前の文書作成を拒否している(43)。

女性調査団に参加した女性たちは考え方も経験も様々で、決して一枚岩ではなかったので、モスクワでもいくらかの気まずさが漂った。さらに、瀋陽では激しい批判の応酬が起きた。『だから私は朝鮮へ行った』は、調査に加わった個々人の表情や服装から発言や行動の様子まで生き生きと、時にはユーモラスに書いてあり、公式報告書では分からない等身大の女性たちの姿が描かれているのだが、この瀋陽でのできごとは特別に興味をかきたてられる内容である。

きっかけは、調査団団長のノラ・ロッドが瀋陽到着直後のレセプションで行ったスピーチであった。

「アメリカ帝国主義の侵略行為を暴露するために朝鮮へ行けることを私たちは全員非常に喜んでいます・・・欧米諸国からきた私たちは、自分たちの政府の政策を全くもって恥じています・・・」

ノラのスピーチに会場の人々が皆立ち上がって拍手している中、モニカとカーテは二人でノラのところへ行き、調査団が予断に基づいたものと受け取られるような発言はしないように申し入れた。ノラは驚きつつ、二人の趣旨を了解し、これが個人的な発言であって調査団

---

(41) 報告書『朝鮮：私たちは弾劾する－1951年5月16日～27日の朝鮮におけるWIDF委員会報告』の日本語版は、藤目ゆき編集・復刻『国連軍の犯罪－民衆・女性から見た朝鮮戦争』（不二出版、2000年）にも収録されている。また、この報告書の背景と内容について述べた論文に藤目ゆき「国際女性調査団のみた朝鮮戦争」（『女性・戦争・人権』第3号、126～148頁）がある。

(42) 前掲『国連軍の犯罪』264頁

(43) 註（40）に同じ。

を代表するものではないと表明すると約束をし、翌日の会議の場でその約束を果たす。モニカとノラはそれで安心したが、今度はソ連のマリアと中国のバイ・ランが怒り出した。ノラが言ったのは本当のことであり、欧米諸国の政府は戦禍による朝鮮民衆の受難に対する重い責任がある。それについて発言するのは自分たちの責務なのに、発言を邪魔するとは朝鮮民衆の苦しみに理解や共感がないからで、自分の見解を表明するという権利の侵害だ、というわけである。激しい非難を浴びたモニカは、頭に血が上り、「生まれてはじめて自分がロックフェラーかバーバラ・ハットンかなにかのように感じた」が、調査団は予断を排し、証拠に基づいて結論に到達すべきだという主張を譲らなかった。

会議の空気が緊張で張りつめ、ノラの提案で会議は一時休憩となった。すると、激論の最中に押し黙っていた何人かの女性がやってきて、モニカを囲み、同感や賞賛の言葉を浴びせるではないか。それでも再開した会議では彼女たちはやはり発言せず、紛糾が続きそうになる。そのとき、モニカが驚いたことに、マリアが立ち上がり、「真実を見つけるために朝鮮へ行くという目的は全員同じだから、今こそ団結の精神で協同しましょう」と宣言し、モニカとカーテに歩み寄ってキスをしたのである。さきほどまで二人を糾弾していた人もふくめて全員が割れんばかりの拍手であった。この「休戦」は、お互いの違いを理解し合った上で共通の目的のために力を合わせようという合意の成立であり、これ以後、21 人の女性たちはその共通ベースの上で協働することができた(44)。

フランシスカ・デ・ハーンも指摘しているように、WIDF について、共産党の政治に従属する女性たちによる一枚岩の集団だという思いこみが広範囲に流布されている(45)。筆者自身も、WIDF について「ソ連が後援した組織」だと言えば、それだけであたかも説明がついているかのように錯覚しているらしい人々に出くわしたことがある。が、瀋陽で女性たちがどんなふうに議論し、時には対立する意見を持ちながらどのように合意をつくっていったのかを知ると、そういった見方が、まさにモニカが排除しようとした「予断と偏見」によって真実から目をそらす態度にすぎず、WIDF の女性たちの実像と離れたものであるという感を強くする。

さて、このようにして調査団の共通ベースがしかれたが、カーテはあくまでも自分個人の責任において調査団に同行する、オブザーバーとしての立場を選択した。他方、モニカは調査団がさまざまな思想・信条・観点をもつ女性たちが真相究明という一点において協働して調査をし、全員が確認できたことのみを報告するという方法を強く望んでいた。調査団が報告書を作成するための編集係を決めるとき、『ソビエト・ウーマン』誌の編集者でもあるマリア、フランス人の作家ジレット・ジーグレル、ジャーナリストであるオーストリアのエヴァ・プリースターと中国のバイ・ラン、そして『自由デンマーク』誌の編集者でもあるカーテという、著述・出版のプロである 5 人が推薦されたのだが、カーテはオブザーバーに徹するとして辞退した。一方、モニカは東西の女性たちが理解し合えるかどうか試みる価値があると考えて、自から立候補して歓迎された(46)。

---

(44) *That's why I went*, op.cit., pp.65-71.
(45) Francisca de Haan, "Continuing Cold War Paradigms in Western Historiography of Transnational Women's Organisations: the case of the Women's International Democratic Federation (WIDF)", *Women's history review*, 19(4), Sep 2010, pp 547-573.
(46) *That's why I went*, op.cit., pp.71-72.

このようなモニカの存在は、調査団の活動に対する重要な貢献になったと考えてよいだろう。モニカが米国に次ぐ規模の軍隊を朝鮮に送っているイギリスから参加したということは、それ自体、特別に意味のあることであった。が、それだけではない。モニカは女性たちの間で常に率直に意見を表明し、この調査団の性格を、東側に偏した空疎なプロパガンダとは無縁の、多様な思想信条をもった様々な立場の女性の人道主義に基づく協働事業として貫徹するよう方向づけた。そのような事業であったからこそ、国際女性調査団による朝鮮戦争報告が世界の人々に影響を与える力をもったのではないだろうか。

第4節　朝鮮の虐殺を語る決意

本章の最終節として、モニカ自身はこのような調査団に参加して訪朝することによって、何を感じ、どのようにそれを受けとめたのかについて考察したい。

モニカが朝鮮で見た実情が、彼女が訪朝前に想像していたよりはるかに無惨なものであったことは間違いない。彼女は、この訪朝によって彼女たちが「文明の破滅」という言葉の真の意味を理解するようになった、と書いている(47)。そしてそれは東西冷戦の帰趨によって、世界が導かれかねない破滅の予兆でもあった。訪朝の全過程を通して、朝鮮における虐殺と蛮行に対してイギリスの一般市民にも責任があるという意識はひとときも消えなかった。空襲警報や爆音、女性や子どもの悲鳴、累々と重なる死体といった戦禍の記憶は、その後くりかえし悪夢となってよみがえり、モニカを苛むことになった(48)。

モニカの心を揺り動かし、いかに難しいことであろうとも世界にこの真実を伝えなければならないと決意させたのは、そのような戦争の実態であり、祖国の復興・生活の再建のために苦闘する朝鮮の人々との出会いであった。

調査団は訪れた各地で、住民たちから国連軍占領下の悲惨で苦痛と恐怖にみちた経験を語られた。その人々がたいてい、国連軍参加国から来たメンバーをふくむ調査団に対して敵意や反感を見せず、遠来の友を迎える態度で好意的に接し、真実を世界に伝えることができるという期待をこめて自分や家族や親しい人たちの経験を語り、戦禍の現実を訴えた。そうした人々の態度は、モニカもふくめ調査団員たちに深い感銘を与えている。

だが、時にはそうでないこともあった。モニカたちがインタビューをした女性たちの中には、イギリス軍に対する激しい怒りの矛先をモニカにぶつけてくる人たちもいた。ある朝鮮人女性は、こう泣き叫んだ。「イギリス人には心がないの？　イギリスには子どもがいないの？　自分の目の前で子供を殺された女の気持ちが分からないの？　」(49)

黄海道を視察した調査団員がそれぞれの見聞を互いに報告しあっていた時に、このできごとを報告しながらモニカは、涙がこぼれるのを抑えられなかった。

隣に座っていた朝鮮女性同盟員のユン・ヘインが泣いているモニカの肩を抱き、手を握った。ユンは、自分の感情を表に出さないと聞いていたイギリス人が涙していることに驚き、感動していた。

「本当に嬉しいの！」と、ユンは自分自身のことを語り始めた。「自分の感情を表すのを恐れるなら、どうやって世界の人たちがお互いを理解できるのだろう」とずっと不思議だっ

(47) 同前、p.143-144.
(48) 同前、p.166.
(49) 同前、p.150.

た、という。ユンの父親は満州国の役人で、ユンは東京に留学し、英語も日本で学んだ。日本敗戦後、母や兄弟姉妹は南朝鮮へ逃れた。父は北朝鮮で逮捕されたが、釈放後も北に留まり、平壌の大学で教えるようになった。ユンは父の釈放を待つために北に残り、そこで結婚し、解放された祖国のために働きたいと女性同盟に参加した。朝鮮労働党の党員ではなかったが、国連軍占領下に乳児ともども投獄され、乳児はその獄中で餓死した。南へ行った家族が無事でいるかどうか消息はまったく分からないという。でも、戦争が終わったらきっと生活を立て直し、家族がまたいっしょに暮らせる日が来るだろう、モニカがまた朝鮮を訪れたら家族にも会わせたい。そんなふうにユンは語った(50)。

そのあとに開かれた黄海道グループの解散会で、調査団は朝鮮の女性たちからの記念品として朝鮮銀で作った箸とスプーンを贈られた。結婚に際して夫から妻に永遠の絆のシンボルとして箸やスプーンが贈られること、戦争が始まると、戦争によって何が起きようとも大切な絆が切れないように、女たちはその箸やスプーンを埋めたり隠したりしたという。女性同盟の代表は箸とスプーンの意味をそう説明し、次のように言葉を結んだ。

「友人の皆さん。皆さんそれぞれに何かプレゼントをするために、私たちの気持ちを表現するのにこれ以上のものはないと思ったのです。私たちは皆さんに、特にイギリスからのゲストに、この贈り物は両国の民衆どうしの友情は永遠のものだというシンボルだと申し上げたいと思います」(51)。

この言葉は、特にモニカに贈られた。イギリス政府が朝鮮に派兵し、イギリス兵が占領下の虐殺・蛮行に加担していようとも、両国の平和を希求する人々どうしの友好は永遠に続く、という朝鮮人女性たちからの友情と連帯のメッセージであった。モニカにとってこのような女性たちとの出会いは大きな励ましになったことだろう。

このようにしてモニカは朝鮮の戦渦を世界に知らせるという決意を固め、朝鮮における虐殺を弾劾し、早期の停戦を実現させるための行動へ駆り立てられていった。

第3章　帰国したモニカ・フェルトン

第1節　解職

モニカがその決意を実行に移した最初は、朝鮮からの帰途、モスクワで飛行機の便を待っていた6月初めのことである。調査団の成果について話してほしいというモスクワ放送の依頼に応じて、モニカは原稿を書き、自分の声でそれを録音している(52)。そこで彼女は、いたるところ廃墟と化している朝鮮の現状、国連軍占領下の虐殺蛮行に関する遺族や生存者からの聴き取り、視察した強制収容所跡や殺された人々の埋められた場所について語った。そして、米軍のみならず英軍もまた朝鮮における虐殺・蛮行に加担しているとして非難された経験に言及して、モニカは朝鮮に派兵する国々の市民に、「本当の非難に値するのは、これらの行為に直接手をそめた兵士だけでなく、こうしたことが自らの名において行われること

(50) 同前、pp.150-152.
(51) 同前、pp.152-153.
(52) 同前、pp.165.

を許してきた私たち、普通の市民でもあるのです」[53]と訴えかけた。

モニカの旅程はここまでにすでに大幅に遅れてしまっていた。調査団の報告書をまとめあげたとき、下院で開催予定の公聴会までまだ2週間あった。まだ時間の余裕があると思われたのに、実際にはそうはゆかなかった。平壌近郊の本部から新義州に移動するだけで丸二日がかかり、鴨緑江の水位が下がっていたため船の手配ができず、朝鮮・中国国境を越えるために二晩を要した。ようやく瀋陽にたどり着くと、黄砂の嵐がふきすさんで、どの飛行機も離陸できなかった。瀋陽とシベリアのチタで、モニカはスティーヴニッジ開発公社の関係者や友人らに事情を伝えるためにロンドンへ何通も電報を送っている[54]。モスクワ到着後も、ロンドンへの便がないため三日間、留まらざるを得なかった。彼女がモスクワ放送のために録音をしたのは、その足止め状態の間のことであった。モスクワからワルシャワを経由してプラハへ、プラハからパリを経由してロンドンへ飛び、帰国したのは6月7日公聴会当日の夜であった。公聴会には4時間の遅刻であった[55]。

モニカは帰国するとその翌日6月8日に記者会見を開き、モスクワ放送のために録音した内容と同じように、朝鮮における国連軍の虐殺について話した。その翌々日6月10日にモスクワ放送からモニカの声明が流れる。この日の夜、モニカは二度目の記者会見をホルバーンで開いている[56]。

こうしたモニカの行動を知ったドールトンは、12日、モニカに対して12日限りでスティーヴニッジ開発公社総裁を解任すると通告し、それを公表した。

これを受けてモニカはこう声明している。「朝鮮について真実はすこぶる明白で、誰も私を沈黙させることはできません。私は真実を発見したために解職されました。朝鮮へ行ったのは、プロパガンダと真実とを見分けるチャンスを得たかったからです。事実は単純です。朝鮮の人々が自ら築いた生活が、ヒトラーやゲシュタポがユダヤ人に対して行ったこととしか比べられないような野蛮行為によって破壊されつつあるということです」[57]　以後、モニカはあらゆる機会をつくってこの証言を重ね、虐殺蛮行をやめさせ朝鮮の平和を実現するために国連が公式に調査を行うべきだと訴え、また、ふつうの市民たちこそが平和のために行動することが必要だと呼びかけた。

モニカはどのような言葉で市民たちに語りかけたのだろう。彼女が帰国翌月の末に自費出版した12頁の小冊子『私が朝鮮でみたもの』（What I Saw in Korea）には、それを推察させるページがある。それは次のような言葉で結ばれている。

「帰国後私が話をした多くの人が、朝鮮の人たちが生活を再建できるようにどんな援助が可能だろうかと尋ねました。平和交渉がうまくいっても生活が常態に復帰するには非常に長い時間がかかるでしょう。そこで衣料品の援助やその他の救済活動全般が莫大に必要になる

---

[53] HC Deb 14 June 1951 vol 488 cc2676-86 (http://hansard.millbanksystems.com/commons/1951/jun/14/mrs-felton-visit-to-korea)

[54] 電報に関しては、*That's why I went*, op.cit.,pp.163-164.

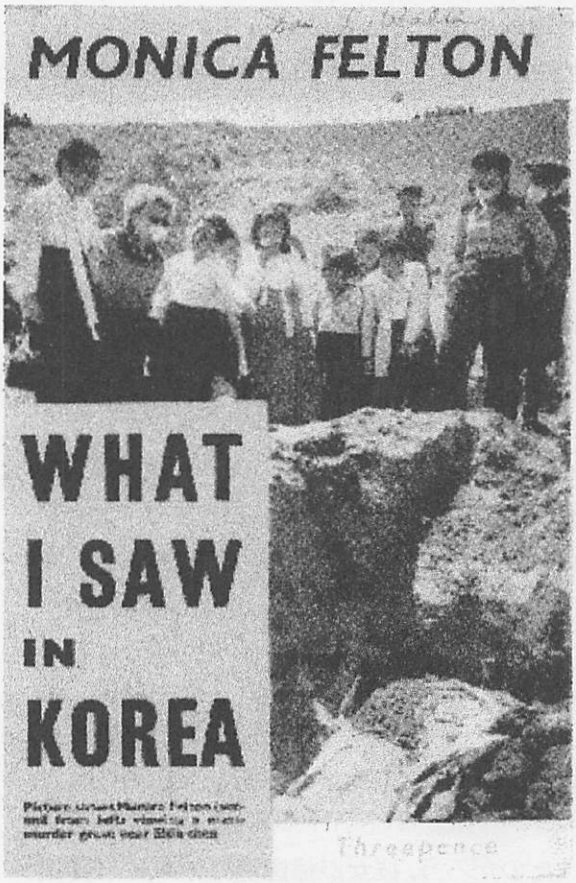
[55] 帰途については、同前、pp.162-167.

[56] "Stevenage to Korea" and "Brith Woman in Red Korea", *The Daily Mail*, 9 June 1951, "POW' s 'Peace' Committee, Claim by Woman", *The Daily Telegraph*, 9 June 1951.

[57] "Mrs.Monica Felton", *The Times*, 13 June

ことでしょう。私たちができる援助ははかりしれない大きな助けになるでしょう。

けれども私たちが万事を尽くして第一に見なければならないのは、先ず停戦協定が結ばれ、それが遅延なく発効され、一刻も早く真の平和が実現することです。真の平和によってこそ、朝鮮の人々は町や都市を再建し、荒廃させられた生活を再建することができます。そしてまた、真の平和こそが国際理解や他の国際緊張をつくりだし人類の未来を脅かす諸問題の解決のための新しいアプローチの土台を作る力になるでしょう。



人々が「私たちが個人としてできることは何でしょうか？」と尋ねるのは実に自然です。そしてその答えは「どんなことでもできます」なのです。

噂や偏見ではなく事実に基づく知性ある公論を創出することによって、私たちは永続的な土台の上に平和の構築、しかも早急な構築を確かなものにすることができます。そしてこれは万人の仕事です。政党や労働組合や女性団体その他の社会運動の活動家たちだけではなく、これまでどんな組織やグループに入ったことがない人たちも、お天気やなにかについて近所の人と今もおしゃべりしている人たちも、事実を知ればその事実を正当に用いる人たちは、圧倒的で決定的な世論の創出を助けることができます。このようにして、そして、このようにしてのみ、私たちは朝鮮の平和、ひいては全世界の平和の実現を確かなものにすることに参加できるのです」(58)

第２節　大逆罪

モニカが解職通告を受けた翌日 13 日、下院においてドールトンはモニカの解職を報告している(59)。彼は解職理由はあくまでも「何も知らせずに重要な公聴会に欠席した」こと、すなわち職務怠慢であり総裁として不適格と判断されるためである、と主張して譲らなかった。もっぱら職務上の問題であり、旅行した場所がアメリカのハリウッドであろうとフランスのリビエラであろうと処分は同じだ、とドールトンは断言した。

労働党のフレッチャー議員は、解雇理由はモニカが自分の意見を表明したことと無関係なのか、と問い質した。また、同じく労働党のマカリスター議員もこれが市民的自由に対する重大な攻撃と疑われかねないとし、モニカが何も知らせなかったというドールトンの説明が

(58) Monica Felton, *What I Saw in Korea*, 1951, awlf-published, printed by Farleigh Press Ltd, pp.11-12.

(59) *HC Deb* 13 June 1951 vol 488 cc2308-13 2308（http://hansard.millbanksystems.com/commons/1951/jun/13/stevenage-development-corporation#column_2308#column_2308）

事実に反すると指摘した。他方、保守党議員らは政府の要職にあるモニカの訪朝と声明を許し難い反逆とみなしており、マクドナル議員は露骨に「共産主義者ではないのか」と問い質した。ドールトンは、「そう考える理由はなかったし、そうだったとしてもそれは解雇理由ではない」と返答している。このように労働党・保守党の議員はそれぞれ全く別の関心から真の解職理由は何かと追及したが、ドールトンは両方に対して、解職理由は政治とは全く無関係で、モニカの公聴会欠席という職責不履行に尽きると繰り返した。

翌 14 日の下院[60]は、保守党議員による激烈な攻撃に終始した感がある。先ず保守党の C.S.テイラーが、モニカがモスクワ放送や集会で国連軍の行為を弾劾したことは利敵行為であり、大逆罪にあたると強く主張した。大逆罪とは国王に対する背信行為を行った罪であり、イギリス法における重犯罪の中で国王に対する反逆罪は特に重い。その反逆罪の中で最も重い罪が大逆罪である。大逆罪で有罪になれば、それは死刑を意味する。テイラーは、1351 年に制定された反逆罪法が「国王の敵に援助と安息を供与し、敵に味方すること」を有罪と規定しており、モニカの行為は正にそれにあたるというのである。さらにテイラーは、こう述べた。「私は深い責任感からこの問題を提起し、確信している。過去数週間数ヶ月間、私たちは血まみれの共産主義者が忠実でまっとうな社会党員だというふりをするのを見てきた。これらの血まみれの共産主義者のあまりに多くが我が国で高い地位に就いている。彼らが国王と国家に忠誠をもたず、国王の敵に励ましや安息を与えたり味方したりするのなら、彼らに対して最も抜本的な行動がとられるであろう。結論としてこう言わせてほしい。我々は朝鮮戦争で英国軍の行動を賞賛してきた。私たちは、栄光ある勇士グロスターだ。我々は米国の同盟者の英雄的な行動を賞賛してきた。英国民がこのような犯罪的なやり方で勇者たちを誹謗するのを許すことはできない」。

同じく保守党のフィッシャー議員も、モニカの声明は英米軍を侮辱して英米の良好な関係を損ない、英国政府と国連の政策に敵対して「我々が戦い、我が軍の兵士を殺している北朝鮮」を利すもので、対独戦下にドイツに行ってドイツのための宣伝した者と同じことであり、モニカは大逆罪で起訴されるべきだ、と断じた。

この大逆罪問題については、法務長官フランク・ソスキスが公訴局に照会して報告を求めた。その結果、モニカ・フェルトンの行為についていかなる刑法犯罪を構成する証拠も不十分であると認められ、大逆罪としての訴追はしないという判断にいたったことが 6 月 25 日の下院で報告された[61]。これと前後してスティーヴニッジ開発公社総裁の後任としてサー・トーマス・ビーニットが任命されている[62]。モニカの解職は、既定の事実とされてしまった。それが、英国政府と下院における「フェルトン問題」の決着であった。

第3節　ドールトンと議員たち

前節に、モニカの帰国から三週間ほどの政府と下院の動向を見た。本節では、その過程で

---

(60) 註(53)に同じ。

(61) *HC Deb* 25 June 1951 vol 489 cc109-10W (http://hansard.millbanksystems.com/written_answers/1951/jun/25/mrs-felton-inquiry)

(62) "Chairman Of Stevenage Corporation", The Times, 25 June, 1951, "Sucsessor for Mrs.Felton", *The Manchester Guardian*, 25 June 1951, "Sucsessor for Mrs.Felton", *The Daily Telegraph*, 25 June 1951.

解職宣告をした住宅・地方自治大臣ドールトン、大逆罪まで持ち出した保守党議員、モニカが属する労働党議員がそれぞれとった「フェルトン問題」の対応について考えてみよう。

ドールトンが終始一貫、解雇理由は公聴会欠席という職務怠慢によるものだと説明したことは前述した。が、そのような説明を本当に信じることができる人は本人もふくめて誰もいなかっただろう。労働党・保守党を問わず、モニカが朝鮮戦争における国連軍犯罪を弾劾した事実であることは火を見るより明らかであった。が、ドールトンにはあえて全く政治的な意味を帯びない手続き問題（無断欠席）だと説明することが保身と事態収拾に都合が良かったのではないだろうか。市民的自由の尊重を党是とする労働党の党員と国家への忠誠を居丈高に叫ぶ保守党議員の両方から浴びせられる非難を、両方ともかわすことができるからである。すなわち、不適格者を任命したのは前任者シルキンの責任であり、訪朝に関しては自分は一切知らされていない（ので責任はない）とすることによってドールトンは責任を逃れることができた。それはまたドールトンが良い感情を抱いていたとは思われないモニカをていよく追い払うこともできる、というおまけつきでもあった。

そして、両党の議員たちは、それぞれがそうしたドールトンの主張を「はぐらかし」であると知りつつ、しばしばそれを実際にそうだと指摘しつつ、結論としてはそれを容認し、それぞれに追及の矛先をおさめた。

保守党議員らが「血まみれの共産主義者」といった激越な表現を用いて労働党内の左派を非難し、万死に値する売国奴としてモニカを攻撃した理由は、モニカの語った内容が彼らにとって最も都合の悪い事実であったからではないだろうか。また、このようにしてモニカを攻撃することで労働党が「血まみれの共産主義者」の潜伏する、あるいはそれを許容する集団であるかのように攻撃することで労働党にダメージを与えようとする思惑もあっただろう。保守党議員たちは、声高に大逆罪を請求したが、法務長官がいったん不起訴を言明すると、それ以上あえて異議を唱えなかった。モニカをとんでもない売国奴と指弾して開発公社総裁という要職から放逐し、社会的に失脚させれば、実際に大逆罪にまで深追いする必要はなかったということだろう。

他方、労働党議員では、フレッチャーとシルバーマンが市民的自由を擁護する観点で短い発言をした他、マカリスターが遠慮がちにモニカのために無断欠席ではなかったと弁明した。が、彼もまた「貴方の意見には賛成しないが、貴方が自分の意見を言う自由は命をかけて守る」というボルテールの言葉を引用して市民的自由の理念を示すとともに、モニカの見解を支持してはいないと強調している(63)。フリーマンの場合、テイラーによる「血まみれの共産主義者」に死をもって報いよと言う激烈な演説の後に発言したのだが、保身以外の目的がありそうにない発言であった。彼はモニカの訪朝前に「真相調査団に加わって訪朝するので、帰国後に話を聴いてほしい、また貴方の意見も聞きたい」という手紙を受け取り、好

(63) フレッチャーは6月13日に、「解職は、彼女の見解の公表という権利には無関係ですか？」と質問した。マカリスターは、13日・14日の両日とも事実関係についてモニカの弁明をした。シルバーマンは、6月18日の議事録に「政治的な目的のためにいやしくも官職や刑法に売春させたり（prostitute）、自由抑圧の機動力にしたりするのを下院が認めないことを確認したい」という発言の記録がある。HC Deb 18 June 1951 vol 489 cc1-4 (http://hansard.millbanksystems.com/commons/1951/jun/18/mrs-monica-felton-visit-to-korea)

意的な返信をしていた。彼は、その事実がモニカへの同調とみられたくないとし、南朝鮮へ行くものと誤解したため好意的に返信したにすぎず、モニカと自分の見方の違いが分かった今ではもはや彼女から朝鮮の話を聴きたいとも思わないと弁明した。彼は発言の最後に、「実際、私はモニカとの関係を絶ちたい」とも述べている(64)。こうした下院での発言を見る限りでは、4人の労働党議員の最大の関心は市民的自由の擁護者としての自画像を守ることと「血まみれの共産主義者」の烙印から逃れることであったようだ。その後モニカは4人の協力を得て80人の労働党議員を招いて報告を行う私的な集会を開いたのだが、少なくともその時点で労働党議員の中からモニカが訴えかけた朝鮮戦争の停戦のための世論喚起につながるような建設的提案が行われた形跡はない(65)。モニカの解職撤回のために尽くすわけでもなかったし、モニカの訪朝の成果を成果と認めることもなかったのである。ドールトンが解職理由を非政治的なものだと強弁したことで彼らは市民的自由の擁護者としての面目が立ち、その解職処分に強い異議を唱えないことによって「血まみれの共産主義者」の同類とみなされる危険から身をかわしたのではないだろうか。

かくしてモニカは彼女が44才までに築いてきた社会的な名誉と地位、年俸1500ポンドの職を追われることになった。

第4節　モニカを支持した人々

それでもモニカは諦めなかった。彼女は解職後も自分が正しいと信じたことを言い続け、多くの人々がモニカに賞賛と共感、尊敬と感謝を表明した。スティーヴニッジ開発公社からの解職がモニカ・フェルトンにとって大きな打撃であったことは言うまでもない。が、それはモニカ・フェルトンの新たな出発でもあった。

それまで労働党員として地区で活動し、またLCCや下院、ニュータウン開発公社といった公務に従事してきたモニカは、さまざまな社会運動や社会団体に関与した経験があった。リディツェ再建運動のように、国際的な連帯活動に取り組んだ経験もあった。が、国際女性調査団への参加を契機として、それまで縁のなかった国内の女性運動や平和運動、そしてWIDFや世界平和評議会(WPC)といった国際組織とのつながりが生まれた。モニカが解職を通告され、大逆罪に問われかねないという窮地に立ったとき、モニカを支持し励ましたのはそのような新しく出会った人々であった。本節では当時の新聞各紙から浮かび上がる帰国直後の人々の反響を見てみよう。

イギリス共産党の機関紙『デイリーワーカー』は、下院で保守党議員たちがモニカを大逆罪で訴追するように請求した6月15日、ロンドンのハマースミス・タウンホールに800人以上が集まり、モニカに対する迫害に強く抗議したと報じている。そこでモニカは、朝鮮戦争停戦を訴え、「耳を傾ける人がいる限り、何度でもくりかえして声明し続ける決心です」と宣言し、喝采をあびたという(66)。

だが、いつもそうだったとは限らない。様々な集まりで多くの聴衆に語りかけるなかでは、

---

(64) 註(53)に同じ。

(65) "More than 80 MPs Hear Mrs.Felton'", *The Daily Worker*, 20 June, 1951, '80 MPs Hear Mrs. Felton", *Daily Telegraph*, 21 June, 1951, "Mrs. Felton Speaks to Labour MPs", *The Manchester Guardian*, 21 June, 1951.

(66) "Meeting Backs Mrs.Felton, Cheers 'End War' Call", *The Daily Worker*, 15 June, 1951.

嫌悪や悪意のこもった野次、罵倒、中傷にも直面したことであろう。帰国直後の記者会見以降、『デイリーワーカー』紙はモニカの声明や行動に惜しみない賞賛と声援を贈り続けたが、『タイムス』や『デイリーヘラルド』、『デイリーメール』といった一般紙も同様だったわけではない。モニカの「事件」に関する報道は帰国直後からセンセーショナルなニュースとして連日のように新聞各紙をにぎわせたが、一般紙の記事はおおむねモニカに対して冷淡で、嫌悪や冷笑を露わにする記事もあった(67)。

解職通告や大逆罪で起訴されるかもしれないという状況のなかでも、モニカは気丈に発言を続けた。それでも極度の緊張で心身ともに大きな消耗があったことだろう。6月18日にハイゲートで開かれた集会にモニカが来場できなかった理由について、ドーラ・ラッセルは、モニカが「朝鮮で経験したすべてのことと帰国後の極端な出来事に対する不安で全く神経が高ぶっており、体調を崩している」からだと説明している。この集会は北セント・パンクラスで結成された「戦争に反対する女たち」（Women Against War）が主催して200人以上が参加したもので、英中友好協会のW.J.S.エラービーが司会をした。集会で発言したデビーズ夫人とドーラ・ラッセルは、モニカの勇気を讃え、朝鮮戦争真相調査団の取り組みに感謝し、政府がモニカを解職にしたことを市民的自由の蹂躙として厳しく批判したが、この集会でも野次で会場が騒然となる一幕もあったという(68)。

6月21日には、スタンフォールドハウスとハンプステッド・タウンホールの二ヵ所で集会が開かれ、その両方でモニカが再び姿を見せた。『デイリーメール』紙によれば、タウンホールの会場は超満員で、窓枠に座る人、立ったままの人、会場からあふれて入り口付近に群がる人がたくさんいた。ハンプステッド平和評議会の主催したこの集会では、発言中の野次や妨害はなかった。それでもモニカが会場に到着したとき、ホールの外にいた群衆の中から「グッド・オールド・グロスター！」と叫んだ男もいた(69)。「栄光あるグロスター戦士」を非難するのは許せないという趣旨の怒声であったのだろう。

7月に入ると一般紙はモニカの動静をほとんどとりあげなくなるが、彼女を擁護する著名な英国女性たちの書簡やカンタベリーの主席司祭ヒューレット・ジョンソンの発言などは記事になっている。ドーラ・ラッセル、エヴァ G.R.テイラー教授、ジャネット・プラッツミルズ夫人ら18人の女性が連署して、首相とドールトンにモニカの解職について再考を促す書簡を公表したのは7月初旬である。その書簡は、モニカの見解に必ずしも同意するわけではないと断りつつ、解職は「傑出した勇気を示し、個人的な犠牲によって原則に身を捧げたひとりの女性に対する迫害」だと抗議して、こう批判した。フェルトン夫人は重責のポストに就く適任者として政府に任命されて就任していた。その彼女の性格や能力に何らかの変化があったとは考えられない。名誉ある公的地位に就く者がひるまずに自身の考えを発言するのは英国の伝統だが、彼女が解雇されたままなら、公職にある者は誰しも雇主たる当局が提供する見解以外は表明する自由がないということになる。意見表明を処罰することは民主主義の否定である、と(70)。

---

(67) 例えば、"Sevenage To Korea", *The Daily Mail*, 9 June, 1941, "Supporters of Mrs. Felton Heckled', *The Daily Telegraph*, 19 June, 1951.など。
(68) "Supporters of Mrs.Felton Heckled", ibid.
(69) "Mrs. Felton Speaks Again", *The Daily Telegraph*, 22 June 1951.
(70) "Mrs. Monica Felton, Women Ask Government to Reconsider Decision", *The Manchester*

ヒューレット・ジョンソンは、共産主義の目指すものはキリスト教と相通ずると考え、ロシア革命とソ連を支持して活動したことで「赤い司祭」として国際的によく知られていた。1950 年にはスターリン平和賞を受賞している。『タイムス』紙は、7 月 16 日のモスクワ放送でソ連の週刊誌『アガニョーク』に載った彼の発言が紹介されたと報じている。それによると彼は、「イギリスでは多くの人が、フェルトン夫人が朝鮮で見たことを人々に告げたために解職された事にショックを受けている」とし、「自分は、自分がソ連に関する真実を述べてカンタベリー大聖堂から解職されても驚かない」と話した。そして、モニカへの「報復」は「現在のイギリスの支配者たちが真実を恐れていること」を示すものだが、「米英軍による朝鮮の虐殺は非人間的で、正当化できるものではない。西洋の大国が原爆を製造しているのは防衛のためでなく、攻撃のためだ」と語ったという(71)。

以上に示したとおり、モニカは開発公社を追われ反逆者として非難を浴びた一方で、確かに耳を傾け、彼女の努力を支持し、尊敬や感謝を表明する人々に出会ったのである。彼女は、その人々のつながりを通して平和運動家として活躍してゆくことになる。

本節は帰国直後の反響をとりあげたが、それ以後の活動についてはあらためて別の機会に書くこととしよう。が、参考資料として、モニカのスターリン平和賞受賞についてソ連の女性が書いた記事、朝鮮再訪後にモニカがインタビューを受けた記事、イギリス国内でモニカが出した朝鮮戦争からの英国軍撤収を求める小冊子などを添付しておく。(参考資料 2・3・4)

(終わりに)

本稿は、モニカ・フェルトンが WIDF の呼びかけた国際女性調査団に参加して訪朝した経過、自分が朝鮮で見たものを帰国後に公表したことによって公職から解任された経緯を、モニカ・フェルトンの個人史に引き寄せてとりあげたものである。本稿は、彼女の軌跡と英国社会の反響を示すことによって、WIDF を「ソ連に後援された組織」の一語で片づける安易さや国際女性調査団の取り組みを「プロパガンダ」と一蹴してしまう怠慢さがいかに朝鮮戦争最中の派兵国に支配的であった冷戦思考に似通っているかについて、その一例を示すことができたのではないかと思う。

だが、モニカ・フェルトンという人物の伝記という意味では、本稿はまだ平和運動家フェルトンの「誕生」を書いたものにすぎない。WIDF の調査団への参加と報告書の作成はそれ自体重大な意義をもつ平和運動の取り組みであったが、これ以後モニカ・フェルトンは、スターリン平和賞の受賞、イギリスの全国女性集会 (National Assemblly of Women) の議長、朝鮮と中国の再訪、WIDF や WPC が開催した数々の国際会議と、国境を越え、鉄のカーテンを越えて、東奔西走してゆくことになる。そんな平和運動の一環として彼女は原水爆禁止大会のために来日してもいるし、平野義太郎らが平和運動のためにインドを訪れた際にはインドの平和主義者にひきあわせる役割を果たしもしている。

しかも、彼女の活動は WIDF や WPC への奉仕だけで完結していない。1956 年のハンガリ

Guardian, 4 July 1951.

(71) Dean of Canterbury on Korea, *The Times*, 17 July 1951.

一事件はそれまでソ連やソ連型共産主義に共感や好意を抱いていたヨーロッパの左翼勢力に衝撃を与え、自国の共産党や共産党系の大衆団体から距離を置いたり離反したりする人が増えたが、モニカもまたその一人であったようだ。インドに移住してからのモニカは、むしろ作家として、インドの民族運動指導者で原水爆実験の一方的中止論者であったラジャゴチャラパリの伝記執筆や著作の編集、また幼児婚と未亡人差別に苦しむインドの女性たちの苦難に立ち向かったスバラクシュワミの伝記を著すなど、著作活動に活躍した。このようにモニカ・フェルトンの生涯は女性史的な興味がつきないが、もはや本稿の紙幅はつきている。別の機会にあらためて書きたいと思う。

また、WIDFの朝鮮戦争調査団の研究という意味では、本稿はあくまでもモニカ・フェルトンにのみ焦点をあてており、他の20人の女性についてはごくわずかしか言及できなかった。彼女たちに関する研究は、これまで女性史の中でもほとんど行われていない。『アジア現代女性史』本号には拙稿とは別に、松田祐子氏によって、今日まで日本で全く知られていなかったジレット・ジーグレルに光があてられている。本号の特集がひとつのきっかけになって、さまざまな政治的見解・思想・信条を持ち、それぞれに魅力的な個性をもった21人の女性について関心が向けられるようになれば幸いである。そのような研究が発展することで、女性史の視点から朝鮮戦争を再考する研究やモニカ・フェルトンに関する研究もまた前進すると期待したい。

＜参考資料1＞　全世界の女性にあてた朝鮮民主女性同盟のメッセージ

世界の平和と人類の幸福をのぞんでおられる親愛な皆さま、私たちは寒風肌をさす廃墟の中でこの手紙を書いています。

6月のある美しい日の朝、私たちの平和な生活は爆弾のさく裂で破られました。幸福で自由な生活が営まれていた町や村の家々は廃墟になってしまいました。道路の傍には私たちの兄弟姉妹の死体が数限りなく横たわっています。都市の劇場やクラブやその他の文化施設は破壊され焼かれました。

森の小路にある一軒家が燃え、うっそうとした森が燃えています。村では鶏のなき声、犬のなき声も聞こえません。家庭で静かに仕事や建設の話をしていたのにいまではいたるところ怒りの炎が燃え上がり呪いの声が聞こえいたるところに憎しみと復シュウにもえた眼が光っています。

私たちは赤ンボウが殺された母親の乳ブサにすがっているのをみました。この赤ンボウはチウンフンネン山中のエンドンの谷間で暴徒のため銃殺された700名の兄弟姉妹の中でただ一人生き残った子でした。

私たちは200人以上の小学校の女生徒を銃殺した場所をみました。その河の岸辺には少女達のはきものが散らばっていました。

平安北道のサロクという一寒村で住民の約半分は殺されました。老母は銃殺される前、怒りの言葉をなげつけました。

私たちは恥しめられた姉達のうめき声やのろいの声を聞きました。姉妹の仲には恥にたえきれず、自殺した者も多いのです。

尊敬する母、妻、姉妹の皆さま。

私達はアメリカやイギリスやオーストラリアやニュージーランドやトルコやタイやその他の国の兵士の母や妻の皆さまに知っていただきたいのです。

私たちは貴女がたに向い、息子や夫達を朝鮮にやらないためにできるだけのことをして下さいと訴えます！私たちは朝鮮人民が勝利し、世界の平和を愛する諸民族が戦争放火者に勝利することをかたく信じています。

世界の婦人の皆さま、いっさいの侵略と戦争を憎み、平和と自由を愛し人類の幸福を望んでいられる親愛な姉妹の皆さま、私たちは今世界諸民族の平和と安全のために帝国主義の侵略に抗して闘っているわが国の人民に向かい、貴女がたが友好と支持を示されたことに対し、厚く感謝します。

戦争放火者はやっきとなって新世界戦争を準備し、わが国でやったと同じように全世界に血を流そうとしています。

20世紀のやばん人、戦争放火者が世界大戦を起すと脅迫している今、戦争の火の粉が貴女がたの家庭、父母兄弟姉妹にふりかからないとは誰も予言できません。

全世界の婦人の皆さま、私たちは貴女がたが平和擁護闘争の旗を今まで以上に高くかかげ、すでに朝鮮で新世界戦争の火の手をあげている帝国主義掠奪者に抗し、人類の幸福のため、私たちの子供の明るい未来のため貴女がたの陣列を一層固く結集するように訴えます。

朝鮮全国民主女性同盟を代表して

朴貞愛

李今順

(出典)『平和ふじん新聞』創刊号（1951年2月）

『平和ふじん新聞』は、当時WIDFの加入団体であった日本民主婦人協議会の機関紙である。

＜参考資料2＞ 平和賞受賞

1951年国際スターリン平和賞受賞者：モニカ・フェルトン

リディア・ペトローヴァ（要約）

12月21日、傑出した平和の闘士たちのリストである「諸民族間の平和強化のための」国際スターリン賞の栄えある受賞者リストに、イギリスの市民リーダーとして著名なモニカ・フェルトンの名前が加わった。

モニカ・フェルトンは、以前から国際民主女性運動の隊列に加わっているのみならず、イギリスにおいてその運動を拡大・強化し、その勇気と人民の大義への献身によって多くの人々から尊敬を集めている。

活発な市民リーダーでジャーナリストであるモニカ・フェルトンは、人民のニーズについて調査することが自分の第一の任務だとつねに考えてきた。彼女は社会問題に関する数多くのパンフレットや論文を書いている。労働党の一般党員たちはこの9年間、彼女をLCC（ロンドン州議会）に選出してきた。彼女は1945年以来、国会の委員会で活動し、またスティーヴニッジ開発公社の総裁を務めてきた。

国際女性デー委員会の招聘で1951年5月にWIDF（国際民主女性連盟）の一員として朝鮮を訪問したことで、彼女の名前はイギリスで一躍有名になった。イギリスを出発する前、フェルトンは友人たちに対して、自分が朝鮮に行くのはこの苦難のなかにある国についての真実を多くのイギリス人民が熱心に知りたがっているからだ、と語っている。

朝鮮において、モニカ・フェルトンは、侵略者たちがおこなった驚くべき血なまぐさい残虐行為の数々をその目に焼き付けた。彼女は「メイド・イン・グレートブリテン」と記された爆弾の破片が道端や破壊された家屋のなかに落ちているのを発見した。戦闘機が田畑で働く民間人を爆撃したときには、彼女はどぶ川に身を隠した。一人しかいない子どもをイギリス兵に殺されたある若い朝鮮人の母親が、イギリスの人々は赤ん坊を愛さないのかと問うたとき、彼女は泣き崩れてしまった。その日、虐殺された朝鮮の子どもたちの共同墓所の前で、彼女は帝国主義者たちが朝鮮で犯した残虐行為とこの戦争の真の原因について自分の国のすべての女性たちに語ることを誓った。

彼女はこの誓いを守り抜いた。朝鮮から戻ると、彼女は自分が目撃したことすべてを公然と勇気をもって著述した。破壊されていない町はひとつもなく、爆撃の被害を受けていない病院もひとつもない、と彼女は語った。彼女は多くの写真や手紙、その他議論の余地ない確実な資料をもって自分の発言を例証した。

フェルトンは5ヵ月間にわたって国中をまわり、イングランドやスコットランドの様々な都市で、毎週12回～15回の報告をおこなった。彼女は閣僚たちに報告書を提出した。彼女が発行したパンフレットはすぐに売り切れた。彼女は労働党の国会議員団の前でも報告をおこなった。体調がすぐれないにもかかわらず、彼女はイギリス人民に朝鮮についての真実を伝えるという気高き任務にすべての精力を注ぎ込んだ。

平和のためのモニカ・フェルトンの活動と帝国主義者たちがおこなっていることの暴露はイギリスの反動勢力の憎悪を呼び起こした。戦争挑発者たちは彼女を大逆罪（これに関する法律は1351年にまでさかのぼり、定められている唯一の刑は死刑である）で裁くことを要求した。

彼女はスティーヴニッジ開発公社総裁の職を解かれた。反動的な報道機関は、彼女を脅し、彼女の信用を貶めるためにあらんかぎりのことを行った。しかし、どのようなことも彼女を押しと

どめることはできなかった。イギリスの街を見ると、いま朝鮮が陥り、明日には全世界が投げ込まれるかもしれない荒廃がそこに迫っていることを想像してしまうと彼女は語っている。彼女の活動は、イギリスその他の広範な大衆が、平和は待っていてはならず、勝ち取られねばならないということを理解する手助けとなった。

イギリスの一般大衆は、この勇気ある女性を守るために立ち上がった。なぜなら、モニカ・フェルトンに対する迫害は、平和に対する直接の脅威であり、この国に残っている民主主義と自由に対する直接の脅威であることをかれらが知っていたからだ。何千通もの抗議書が政府に押し寄せ、他国でも何百万人もの男女が彼女を守るために立ち上がった。国際民主女性連盟は60ヵ国・9100万人の女性を代表し、フェルトンの活動が世界平和の大義にとって価値ある貢献であることを指摘しつつ、イギリス政府に対して力強い抗議書を送った。

こうした圧力によってイギリス政府は彼女に対する告訴を取り下げることを強いられた。反動勢力はモニカ・フェルトンを執拗に攻撃し続けたが、彼女は自分が一人ではないことを知っていた。何百万人もの一般大衆、世界で最も誠実な平和のための闘士たちが彼女と共にいるのだ。

国際スターリン平和賞を受賞したと聞いてフェルトンは、自分はただ誰もがするであろうことをしてきただけだ、と述べている。自分が朝鮮で見てきたものを見た女性ならば誰でも、自分と同じように行動するだろう。だから、この賞はイギリスのすべての平和の支持者たちの貢献に対する評価だと考えている、と彼女は語った。

出典： USSR information bulletin.v. 12, no. 13 (July 14, 1952). Embassy of Union of Soviet Socialist Republics., p.81.

（翻訳：池田高巌）

＜参考資料3＞ インタビュー

モニカ・フェルトンのインタビュー：ストップ・ザ・ウォー！

モニカ・フェルトンは1951年に朝鮮北部の状況を調査したWIDF（国際民主女性連盟）のイギリス代表である。イギリスに帰国して以降、彼女は報告書をつくり、活発に平和活動をおこなっている。その結果、彼女は政府機関であるニュータウン開発公社の総裁職を解任された。フェルトンはスターリン国際平和賞を受賞しており、1952年には二度目の朝鮮訪問をおこなった。

チャイナ・マンスリー・レビューは、さる10月に北京で開催されたアジア太平洋地域平和会議の際に、特別ゲストとして招待された彼女にインタビューをおこなった。インタビューのなかで、フェルトンは朝鮮北部の捕虜収容所への訪問や朝鮮人民によっておこなわれている闘争の印象について語っている。

Q：フェルトンさん、あなたは朝鮮で捕虜収容所を訪問しましたね。そのことについてお話ししてくださいませんか？

A：ええ、短い時間ですが第5収容所に滞在しました。鴨緑江に面した信じられないほど美しい場所で、背後には高い山が聳えています。私たちはフェリーで河を渡って収容所に行きました。ある村の3分の2が収容所にあてられていました。捕虜収容所の本部は村から約1マイル離れたところにあります。収容所の周りに鉄条網は張られていませんでした。捕虜たちはーアメリカ人、

イギリス人、コロンビア人、トルコ人などーいくつかのグループに分けられていましたが、皆が村のなかを自由に行き来していました。

Q：私たちはごくわずかですがアメリカ人捕虜の家族からの手紙を受け取っており、その多くが収容所での生活条件を尋ねています。あなたの印象はいかがですか？

A：捕虜たちは朝鮮式の家屋に住んでいます。とても素朴ですが、清潔です。彼らは床にマットを敷き、毛布と硬い枕で寝ています。長い間硬いベッドを使っていたが、いったんこれを使ってみると、悪くはないし健康にも良い、と彼らは言っていました。家にはある種のセントラル・ヒーティングがあるので、冬でも暖かく過ごせると思います。朝鮮はそれを取り入れた世界で最初の国です。家の大部分は地面から建てられており、キッチンは低い部分にあります。床を暖房するための通気管が家の残りの部分の下を通っています。

Q：捕虜たちは食料について何か言っていましたか？

A：ええ、言っていました。食料は十分で、うんざりするくらいだ、と。イギリス人捕虜のなかには、豚肉が多すぎていやになるくらいだ、と言う者もいました。砂糖の配給は一人一ヵ月あたり1．5ポンドです。タバコの配給もあります。

Q：捕虜たちは毎日忙しそうにしていますか？スポーツやリクリエーションの施設はありますか？

A：捕虜たちは球技チームをつくっています。釣りや水泳もしています。各収容所には図書館があって、マーク・トウェイン、ディケンズ、ソビエト小説、政治文学などが置かれています。強制的な政治講習はありませんが、報道や全般的諸問題についての短い会話は、独特の英語まじりの中国語でおこなわれ、必須となっています。

ある大規模なアングロ・アメリカンの研究グループが組織されており、そのようなテーマや会合をおこなう方法について公然と話していました。

Q：捕虜たちの扱いについてのあなたの印象はいかがでしたか？

A：中国人たちは非常に熱心に要求に応えようとしていました。例えば、私は捕虜たちの多くが家族に手紙を書きたがらないことを知りました。封筒に「アメリカの侵略に抵抗しよう」と印刷されていたからです。私がこのことを中国側に伝えると、彼らは私に感謝しました。後に私が捕虜たちから受け取った手紙では、封筒にはただ「エアメール」とだけ記されていました。

私が会ったほとんどすべての捕虜たちが、個人的な所有物、時計などを保持することを許されていました。収容所に向かう行進のとき、朝鮮人を家から追い出した結果だけれども、つねに避難所があったと言っていた捕虜たちもいました。この春に収容所を訪問した国際民主法律家協会のイギリス人メンバーのジョン・ガスターは、中国人に対して、中国側は捕虜たちを丁重に扱い過ぎており、アメリカ人やイギリス人の捕虜たちは自分たちに奉仕する人民を見下しがちであって、捕虜たちに自分で仕事をさせたほうがよい、と言っています。この夏、私はアメリカ人とイギリス人の捕虜たちが中国人から提供された資材で自分たちのクラブハウスを建てたことを知りました。

Q：あなたが話した捕虜たちは平和についてどのように思っていましたか？

A：彼らには自分たちの平和運動があります。この運動は昨年の春に始まり、アメリカ人将校を議長とし、イギリス人の兵卒が書記長をしています。捕虜たちが集まり、自分たちが平和団体をつくりたいということを確認し、この問題に関して他の収容所の捕虜たちとも会えるように朝鮮

政府の許可を求めました。彼らはすべての収容所からの参加で全体平和会議を持っており、現在では平和雑誌を発行しています。
私はこの平和運動で活発に活動している6人のアメリカ人捕虜、そして多くのイギリス人捕虜たちと話をしました。彼らは捕虜の多くが自分たちの見解を支持していると考えています。彼らは中国人から彼らに同意しない捕虜たちの反対理由を分析する方法を学び、現在では彼らとの関係は前よりも良くなっている、と言っていました。

Q：捕虜たちは休戦交渉について知っていましたか？
A：ええ、知っています。彼らは交渉の進展を非常によく追っています。彼らはそれはまやかしで、交渉がこれまで長期にわたって合意に達しなかったのは米国に責任があると思っています。私が話したすべての捕虜たちは、この戦争が米国と南朝鮮によって始められたことを確信していました。

Q：捕虜たちは何か不満を口にしていましたか？
A：ええ、手紙について不満を言っていました。以前はすべての手紙が中国平和委員会を通して送られており、遅くはあっも届くことは届いたそうです。しかし現在、すべての郵便は休戦交渉団を経由しており、届いていないようだ、と彼らは言っていました。私はイングランドで定期的に息子に切り抜きを送っているというあるイギリス人捕虜の母親と話しましたが、私がその息子に収容所で会ったときに話を聞くと、彼はそれをまったく受け取っていないのです…。イギリス人捕虜たちはとくに、彼らの郵便に「米陸軍将校」というスタンプが押されていることに腹を立てています。私は何人かの捕虜から彼らが出したり受け取ったりした手紙のリストをその日付とともに受け取ったので、彼らの家族たちと共に確認したいと思っています。
ある若いアメリカ人捕虜は、双方の合意にはっきりと記されていたにもかかわらず、どうして収容所が爆撃されたのか、と私に言い、「こうやって自分たちの仲間が殺されたり、負傷したりしてしまうのです…。　翌朝、収容所を離れて道を歩いている私を村の朝鮮人たちが見たとき、私は恥ずかしくなって地面に身を伏せました…。　どうしたらこうしたことをイギリスの人民に知らせることができるでしょうか？　私たちが帰国したらそのことを伝えますが、本当は今すぐにでも伝えるべきことなのです…」と彼は苦々しくつけ加えました。

Q：あなたは細菌戦について告白した米空軍兵士たちと話しましたか？
A：ええ、私はクイン中尉と会いました。とても気さくで好感の持てる人物でした。ご存知のように、彼はキリスト教徒です。最初、読むようにと何冊かの本を渡されたとき、それを見るのを拒んだ、と彼は私に言いました。ある日、彼はカンタベリーの司祭の「The Socialist Sixth of the World」という本を手渡されました。この「赤い司祭」の思考は彼を動揺させ、読まずにはいられなくなったそうです。読み始めると、彼は読むのをとめられなくなりました。この本とエプスタインの「未完の中国革命」（Unfinished Revolution in China）によって自分は考えることを始めた、と彼は言っていました。
彼は自分が関わった細菌戦に個人的な罪悪感をもっていたようです。彼は自分の心のなかの葛藤について話しました。というのも、彼はアメリカとアメリカ人を愛しており、「世界最良の場所」というほどアメリカに深い忠誠心をもっていたからです。しかし、彼は細菌戦への自分の関与を告白したことは正しいことだと確信しており、その結果を受け入れる心構えをしていました。
彼は、東欧の裁判では告白させるために薬や拷問がよく用いられたと本で読んだと言ったうえで、にやりとして「僕が薬を使われたり拷問をされたりしたと思いますか？」と私に尋ねました。彼は家族は自分の立場を必ず支持してくれると思っていました。

Q：今回朝鮮を訪問し、何か前回と違ったところはありましたか？
A：あります。私は朝鮮が二つの重要な点で変わったことに気づきました。第一に、物理的破壊の度合いがますます激しくなっていたこと、そして第二に、普通の人民の勇敢さは、最初の訪問のときも私の心を打ったのですが、それが静けさを帯びつつ、ますます強いものになっていたということです。
1951年には平壌はすでに廃墟と化していましたが、柱だけ残った建物が点在していて、それが避難場所になっており、郊外の小さな小屋にはたくさんの人が集まって住んでいました。しかし、最近の攻撃はきわめて激しく、今年は建物の柱さえ残っておらず、郊外のあばら家も粉々になっていました…。そうした「軍事目標」の跡には、ばらばらになったタイル、黒焦げになった材木、壊れた壷の破片、ぼろきれ、あるところでは壊れたおもちゃなどが残されていました。

Q：そうした最近の爆撃の影響はどのようなものだったのですか？
A：そうですね、9月16日の朝、私は前夜の爆撃でどうなったかを見に行きました。ある村のごく小さい家々に爆弾が投下されたのですが、そこはごくわずかでも軍事的重要性をもつ建物から遠く離れたところにありました。玉ねぎやキャベツの畑には爆撃による大きなくぼみができていました。
負傷者ーそのほとんどは女性や子どもたちですがーは病院に担ぎ込まれ、亡くなった人々はにわか仕立ての棺に入れられました。近くには他の死体や爆風でばらばらになった人間の手足がまだ置かれていました…。私はある老人に空襲のとき防空壕にいたかどうか尋ねました。彼は私を非難するように次のように言ったのです。
「他の人々が私が受けたような被害に苦しみ、私の手助けを必要とするかもしれないときに、どうして自分が防空壕にいることができただろうか」。
この68歳の農民は、今日の朝鮮の重要な一部分です。なぜなら彼は、決して挫けない人民の精神をかたちづくっている静かな勇気と断固たる決意をもった人物の典型例だからです。私はこうした精神の持ち主に朝鮮北部の至るところで会いました。

Q：このような人民の勇気ある態度の理由は何であると思いますか？
A：私は先に朝鮮人民の勇気は静けさを帯びていると言いました。この静けさというのは、絶え間ない爆撃にもかかわらず勝ち取られてきた成果のあらわれなのです。朝鮮における生活は今日、単に生き延びたというにとどまらず、前進しています。郊外では豊作で、被害を受けた家畜もすぐれた繁殖方法によってその代わりが見つかっています。
平壌でも新しい生活がひそかに進行しており、生産的な仕事や文化活動は爆撃を免れています。外では孤児となった子どもたちが治るまで手厚く看護されており、それは世界の手本になるものです。朝鮮の女性たちは、子どもの面倒を見ている女性であれ、病気がちの女性であれ、田畑を耕している女性であれ、ひとつの決意、未来への確信に満ちた強く快活な精神を示しています。朝鮮人民は最も崇高な意味でその勇気を示していまが、それは世界が黙認してはならない環境のなかでの勇気なのです。朝鮮にはびこっている恐怖は、知ってのとおり世界を破壊しうる恐怖なのです。朝鮮における戦争は、長く、あまりにも長く続いています。世界の人民が行動を起こし、それを終わらせるときがきているのです。

出典：'An Interview with Monica Felton — Stop the War', "the China Monthly Review", January 1953, pp.20-27.

（翻訳：池田高嶽）

＜参考資料4＞ 小冊子

朝鮮！～兵士たちを帰還させる方法～

著：モニカ・フェルトン
発行：英中友好協会

朝鮮で戦争が始まってから二年半になる。休戦の方法についてのソビエト連邦の提案が公にされてから一年半以上が経つ。それに先立つ一年間の戦争ですでに荒廃していた朝鮮の国土は、さらにこの一年半の間に自分の目でそれを見た人でなければほとんど信じがたいまでに荒廃した。この一年半の間に、数百人のイギリス兵と数千人のアメリカ兵が死傷した。イギリスの数万人の家族、そして数十万人のアメリカの家族が、戦線でたえず危険にさらされている多くの夫や息子たちの帰還を待ち望んでいる。数千人が二年あるいはそれ以上捕虜収容所に収容されている。

昨年の冬、イーデン氏を含む政治指導者たちは、クリスマスには兵士たちが帰還すると自信たっぷりに語っていた。それからもう一度クリスマスを迎えた。しかし、兵士たちは故国に戻っておらず、帰還の見通しはむしろ一年前よりもさらに暗くなったように思われる。

非難されるべき者は誰か？

昨年2月の時点で、休戦協定の締結を遅らせている問題は二つだけだった。一つは捕虜の本国送還であり、もう一つは北朝鮮の飛行場の査察であった。アメリカのニュース雑誌『タイム』1952年2月4日号は、「国務省は次のような問題への回答を準備するための政策立案者の『委員会』を設置した。その問題とは、これ以上コミュニストと平和を語ることに意味はあるのか？その答えが否であるならば、飛行場か捕虜か、どちらの問題でわれわれは決裂すべきなのか？というものだ」と報じている。

協定は飛行場の問題について合意に達した。おそらく国務省は捕虜の送還問題のほうは人々の感情を刺激しやすいと考えたのだろう。

17ヵ月間の停戦交渉の過程で、一方の国連軍を代表するアメリカと、他方の北朝鮮および中国義勇軍は一つを除いてすべての問題で合意した。その一つとは捕虜の送還問題であるが、実はこれに関する条項は協定の草案には存在していた。休戦協定草案の第51条は「この休戦協定が発効した時点で双方に拘留されているすべての捕虜は、できるかぎり速やかに釈放され、送還されなければならない」と述べている。休戦協定の他の62項目は草案に書かれただけでなく、実際に合意された。

しかし、中国と朝鮮が捕虜問題の解決を主張しているなかで、10月8日、休戦交渉のアメリカ代表団の代表であるハリソン将軍は突如として何の説明もなしに交渉は終結したと告げた。

ジュネーブ条約

中国と朝鮮が自らの立場とする捕虜送還に関する国際法はシンプルなものである。1949年のジュネーブ条約は特に次のように述べている。第118条「戦闘行為の停止後、捕虜は遅滞なく釈放され、送還されなければならない」。また第7条では「捕虜はこの条約によって自らに保証された権利を部分的であれ全体的であれ決して放棄するものではない」と述べられている。

アメリカ代表団は何ヵ月間にもわたって、この条約が彼らに要求している捕虜の送還ではなく、送還すべき捕虜とそうでない者を選択しうるようにすることを主張してきた。このアメリカの提案は国際法と長年にわたって確立されてきた国際的慣行に違反している。

『タイム』は11月9日の社説で、「数々の平和条約や捕虜の取り扱いに関する国際協定（1949年の最新の条約を含む）によって十分に裏付けられているこれまでの国際的慣行は、戦争終結後の捕虜の例外なき故国への帰還を支持していることを認めなければならない」と述べた。『デイリー・エクスプレス』は12月17日の社説で、「その条約（原注・ジュネーブ条約のこと）は『戦闘行為の停止後、捕虜は遅滞なく釈放され、送還されなければならない』と明確に述べている。この文言を前にして、イギリスとアメリカは中国がその送還を求めているすべての捕虜を手放さずにいることを正当化することができるだろうか」と書いて警告を発した。実は、現在の状況のような危険性は、ジュネーブ条約が最初に審議されたときから予見されており、この特定の条項を詳細に検討するために特別委員会が設置された。この委員会は、イギリスの代表団をも含むものであったが、現在の文言が捕虜の権利を最も良く表現していると主張した。

ジュネーブ条約で規定された文言は、捕虜自身の利益を規定するものだと常に理解されてきた。条約はそのように表現されてきたのであり、そうでなければ自分たちが拘留を望んでいる捕虜は合意によるものだと主張することはすべての交戦国に受け入れられているだろう、と『タイム』は指摘している。

法律上の問題はきわめてシンプルである。先の引用は、人道上の条件に関する問題は同様にシンプルであることを明らかにしている。言い換えれば、アメリカ政府はージュネーブ条約に署名した国の一つであるがーこうした提案をおこなうことで条約それ自身を侮辱しただけでなく、この違反が他の紛争当事国によって合意されない限り戦争を継続することを宣言したのである。それゆえ、アメリカ政府は、イギリスとアメリカの家族に押しつけられている苦難と痛み、そして朝鮮民衆に対してなされ続けている信じがたい残虐行為をもたらしている戦争の継続に完全な責任を負っている。

捕虜の取り扱いについての違いが、戦争を続けるために利用されている。しかし、この問題はまず戦闘の熱を冷ますことができればより穏やかに解決できるだろう。これが無条件即時停戦の要求の核心だ。この要求は11月6日に労働党を代表したノエル・ベーカー議員によって前面に出された。彼は63項目のうち朝鮮での交渉団によってすでに合意されている62項目にもとづく即時停戦を要求した。ノエル・ベーカー氏は、これは二段階にわたっておこなわれると提案し、「第一段階では、すでになされた合意にもとづいて停戦する。これで停戦を監視する実質的な協定がすべて解決される。第二段階では、捕虜の帰還についての協定がなされることになるだろう」と述べた。イギリスとアメリカの政府がこの提案を受け入れれば、朝鮮での戦争の終結に道を開くことになるだろう。

国連総会

10月、ハリソン将軍が休戦交渉を決裂させた二週間後、国連総会が開催された。11月には、インドの国連代表団を代表してクリシュナ・メーモン氏が捕虜問題に関する決議案を提出した。この決議案は中国と北朝鮮によって拒否された。彼らは、中国も北朝鮮も国連での討議に参加することを認められておらず、この決議案は違法・無効であり、またジュネーブ条約第118条違反を支持していると批判した。実際、この決議は朝鮮戦争をただちに終結させる方法を提議するものではなかった。

総会での討議の最終日にクリシュナ・メーモン氏によって修正されるまで、決議案の前文の末尾では、この提案は「即時停戦をもたらすだろう彼らの合意を求めて」中国人民政府および北朝鮮当局に送られるべきである、と述べられていた。

言い換えれば、中国と朝鮮がこの提案の条件ーアメリカの提案と同様のものーに同意しない限り、戦争は続くということである。これがインドの決議案の意味することである。

インドの決議案は、ジュネーブ条約が要求しているすべての捕虜の送還を求めていない。ジュ

ネーブ条約のシンプルな提案の代わりに、この決議案は捕虜の取り扱いについて、まず中立機関が、次いで政治会議が、そして最後に「国連」、すなわち戦争の当事者であるアメリカの司令部が取り扱うという煩わしいシステムを提起している。このような計画は捕虜に新たな屈辱と苦難をもたらすだけであろう。朝鮮と中国はこのような条件は拒否する以外にないと感じている。

インドの決議案が提出される前に、ソビエト連邦を代表してヴィシンスキー氏がすでに、本質的な点ではノエル・ベーカー氏の提案と同様であり、即時停戦と捕虜の送還を討議するための11人委員会の任命を呼びかける別の決議案を提出していた。ヴィシンスキー氏はさらに、この委員会はアメリカ、イギリス、フランス、ソ連、中華人民共和国、インド、ビルマ、スイス、チェコスロバキアおよび南北朝鮮の政府の代表で構成されるべきだと提案した。ソビエト連邦の決議案は否決され、インド案が可決された。そして、戦争は続くことになった。

アメリカ政府が、同等の地位と権利をもつことを認められているどの国の政府に対してであれ、ジュネーブ条約に違反することが許されるべきだという提案をあえておこなうことはありそうもないように思われる。アジアでは、まさに原子爆弾が西洋の人々には投下されなかったように、国際的な権威を侮辱するそのような方法はアジアの人々に対してのみ向けられるだろうと感じられる。おそらくそれは『タイム』が、先に引用したのと同じ社説で「国連が今、この公認された原則の正当性を攻撃するならば、それはおそらく間違っており、彼ら自身の捕虜の権利を損なうだろう。彼らがし続けなければならないことは、例外を設けることを追求することである」と書いた、アメリカの要求のなかにある固有の危険である。

ある国の都合にあわせて、長期にわたる注意深い交渉によって合意された国際協定が無効にされうるならば、国際法と国際秩序の維持はどうすれば可能だというのだろうか？

次は何か？

アメリカのように、武力が勝利をもたらすと想像することは、まったくの愚の骨頂だ。彼らの兵力にもかかわらず、戦争遂行のための最新の方式をもってしても、二年半にわたって彼らは前進をはばまれている。しかし、彼らは朝鮮の平和を求めるのではなく、なおも戦争の継続について考え、「勝利」について語っている。だからアイゼンハワー将軍は、彼の最近の朝鮮訪問の最後に、戦争の終結についてではなく「局面の回復」について語り、彼の話が「勝利」の計画と関係していることを認めつつ、「戦争を拡大する多大な危険を伴うことなしには完全な勝利をもたらす計画を練ることは困難である」と述べたのだった。また李承晩については、「私が話すべき名誉を受けた李氏について言えば、彼は偉大な指導者にとってのすべての資質を持っている」と言明した。李承晩自身はこの2人の紳士が朝鮮で話し合った内容を明らかにしている。すなわち、武力による朝鮮の統一である。アイゼンハワー将軍は戦争を中国に拡大することによって勝利を得られると信じているのだろうか？

12月11日、モルガン・フィリップス氏は労働党の関連団体に向けて声明を発表し、インドの決議を支持することを求めた。この決議はノエル・ベーカー氏が労働党の下院議員を代表して作成した提案－政府が採用するならば戦争の終結をもたらす提案－と明らかに矛盾していた。それゆえ多くの労働党員にとって、ノエル・ベーカー氏の提案の後でモルガン・フィリップス氏があらかじめ北朝鮮と中国には受け入れがたいと分かっている条件でのみ停戦を持ち出しているインドの決議に対して労働党関連団体の支持を要求するのは奇妙なことに思われた。モルガン・フィリップス氏の書簡は問題を混乱させるだけでなく、即時停戦の提案を拒否することによって戦争の拡大の危険性を増大させるものであった。アイゼンハワーとマッカーサーの会談および李承晩の声明は、それが彼らの「勝利」への道であると人々に思いこまようとしている。しかし、それはイギリス労働党の政策でもイギリス民衆の政策でもない。ますます広がる意見は、戦争が拡大されるべきではなく、終結されるべきことを要求している。

わが兵士たちは？

私は朝鮮に滞在している間に鴨緑江の捕虜収容所を訪れ、多くのイギリス人およびアメリカ人の捕虜たちと会って話をした。彼らはそれなりの条件で生活し、栄養も十分で、よく配慮され、注目すべきほどの自由を享受していた。私は収容所に長く滞在し、私的な会話に十分な時間を費やし、その結果、彼らの多くが家族に宛てて送った手紙のなかで表明していた見解の誠実さと真剣さを完全に納得した。朝鮮に派遣されるまで、国際問題についてはっきりした見解を持っている者は－もしいたとしても－ごくわずかだった。彼らは、自ら進んでにせよ、いやいやながらにせよ、戦うために派遣されたが、彼らが言われたのは集団的安全保障の原則ということだった。今では彼らは朝鮮民衆の生活と生命の破壊を強いられたことを通して、イギリスとアメリカの政府が自国の民衆に言ってきたことの欺瞞を学んだ。彼らの多くが、無為を強いられるなかで、国連憲章を勉強しており、この勉強によって彼らは自分や自分の同僚の捕虜たちが、合法的でなく道徳的正当性もない朝鮮民衆に対する侵略行為に参加させられたことを確信した。「われわれは最悪の理由の戦争に引きずりこまれた」と彼らは私に直截に語った。「故郷に帰ったら、われわれまず皆に真実を話して自分たちの経験を共有するだろう」。

「われわれが故郷に戻ったら…」。私は帰還についての彼らの見解が、まったくの自然なホームシックではない何かにもとづいていることに気付いた。彼らは再び家族に会うこと、子どもたちと遊ぶこと、くつろいだ家庭生活を味わうことを切望している。しかし、彼らは私に、まずしなければならないことはそれとは別のことだと繰り返し主張した。彼らの多くは、「この朝鮮での戦争は、公認の国際協定を破って開始された。われわれはここで話し、読み、考え始めるまで、そんな協定はまったく知らなかったし、国際問題がどのように扱われているかほとんど知らなかった。しかし、様々なことを理解できるようになって、われわれは捕虜問題の解決にはただ一つの方法しかないこと、すなわちジュネーブ条約を遵守し、これまでわが国が常にそうしてきたように例外なくすべての捕虜の交換をおこなうしかないことを知ったのだ」と私に語った。この問題への関心がいかに深いかは、それぞれボグナーリージスとボーンマスに故郷があるジョン・アンダーウッドとジョージ・リチャーズという２人の捕虜の手紙から見てとることができる。彼らは次のように書いている。「朝鮮戦争に関して、われわれは板門店での和平交渉がおこなわれるたびに、とりわけ最新の問題、すなわち任意の捕虜の送還という情勢に接すると、苦い失望の念を表明せざるをえない。交渉が始まったとき、われわれは解決にもっとも時間がかからない問題は、すべての捕虜の帰還の問題だと考えていた。しかし、これは最も困難な問題であるようだ。現在のわれわれの考えでは、速やかにこの戦争を終わらせようとする誠意がない者たちがいることは疑いない」。同じ収容所から五人の署名がある手紙が書かれている。「本当に親しい者以外は誰もわれわれのことに関心をもっていないのだから、この収容所では希望を失い、事態を傍観し、『われわれは忘れられてしまった』と言うことはとても簡単なことだ。このような状況を歓迎している者がいるのだ。もしわれわれが忘れられているならば、われわれを黙らせ、真実を覆い隠すことは簡単なことだろうから」。

これらの手紙は外交の言葉では書かれていない。しかし、その言葉は基本的には単純な問題の真の性格を覆い隠すために使われてきた手の込んだ偽装をはぎ取ることを学んだ－われわれも皆それを学ばなければならない－男たちの言葉なのだ。そして、捕虜にとって問題はまったくシンプルで、まったく明白である。彼らは故国で妻や子どもたちと暮らすことを切望しているが、自分の子どもたちは彼らに痛く苦い経験をもたらした世界とは異なり、戦争の恐れや戦争がもたらす苦難から解放された世界で育てなければならないと固く心に決めている。彼らはそのような世界はただ公認の国際法を基礎にしてのみ創りだすことができることを知っている。なぜなら、彼らは朝鮮の破壊が国連憲章を破ることによってのみ可能となったことを知っており、ジュネーブ条約を蹂躙することによっては真の平和の土台は決して築くことができないことを確信している

からだ。彼らの要求はシンプルなものだ。すなわち、故国に戻ることである。しかしそれは、平和な世界のうちに、国際法を承認することがすべての国の国家安全保障にとって第一の防衛手段であるような世界のうちに故国に戻ることなのである。

しかし、捕虜は自ら語ることができない。彼らはイギリスの民衆が彼らのために声を上げることを求めている。この戦争は速やかに終結させることができる。読者の皆さんや皆さんの友人たちが抗議の声をあげるなら、皆さんは彼らを助けることができる。工場やオフィスから、地域から、労働組合や協同組合から、そして皆さんがどの政党に属していたとしても、戦争の継続に抗議し、即時停戦を要求する決議を送ろう。このような決議が洪水のように送られれば、それは必ずや首相や地方議員を動かすだろう。このような圧力に逆らうことができる政府はないし、北朝鮮の第5収容所にいる装甲自動車隊兵士フォーセットと4人の同僚が書いているように、「最後にはわれわれが勝利し、このひどい紛争の終局はここ以外の場所からもたらされるだろう」。

原著：Monica Felton, "Korea!：how to bring the boys home", London：Britain China Friendship Association, 1953

（翻訳：池田高嶽）

特別寄稿（論文／エッセイ）

【特別寄稿】

解放後の独立促成愛国婦人会の組織と活動に関する研究

梁東淑

Ⅰ．はじめに

解放直後から1948年南北の国家建設までの時期は、韓国社会の各政治勢力が米ソ分割占領という条件下で自分たちの政治理念と路線を標榜しつつ新たな国家建設活動を展開した時期だった。新たな国家樹立をめぐって繰り広げられた左翼と右翼の政治対立は女性団体の組織と活動にも大きな影響を及ぼした。解放後、最初に結成された左右連合の女性団体である「全国婦女同盟」はこのような政治状況を背景に、左翼の「朝鮮婦女総同盟」、右翼の「韓国愛国婦人会」と「朝鮮女子国民党」に分離された。

初期の右翼女性運動を代表する韓国愛国婦人会と朝鮮女子国民党は、右翼政治勢力の勢力拡張を背景に信託統治反対運動に積極的に参加した。「独立促成中央婦人団」は右翼女性諸団体の信託統治反対運動の産物として結成された。米軍の進駐と信託統治反対運動、第1次米ソ共同委員会の決裂など一連の過程を経て、初期の右翼女性諸団体はふたたび「独立促成愛国婦人会（以下、独促婦人会）」へと組織統合し全国的な統一を図った。「全国女性団体総連盟（以下、女総）」の構成団体にも参加し組織を拡大した独促婦人会は、以降国際的な冷戦構図が深化する状況にあって、米国の対朝鮮政策、そして李承晩と「韓国民主党」勢力の支援を足がかりとして南側だけの単独政府樹立運動に積極的に参加した。

解放後の独促婦人会に代表される右翼女性諸団体は、米軍政期に新設された「婦女局」・「女子警察」とも協力体制を形成しつつ活動を展開した。しかしその過程は、左翼女性団体の勢力を弱化させていくと同時に、下層女性大衆の生存権的な要求を無視していく過程であった。さらに独促婦人会は、行政権力を媒介にして議会進出と立法活動にも参与したが議会進出には失敗した。その後、独促婦人会は南側単独政府樹立という政治路線を採っていた李承晩の政治活動を積極的に支持した。その結果大韓民国政府が樹立した後、独促婦人会は李承晩の官民合作を通じた全国民的な組織化事業を背景に、ソウル市婦人会と統合して「大韓婦人会」に再組織された。このように独促婦人会の結成と活動の変遷過程は、解放後の左右の政治勢力が相互に競合するなかで展開されたといえよう。

現代女性団体の原型はまさに米軍政期に作られたと言っても過言ではない。にもかかわらずこの時期の女性団体に関する研究はまったく不十分な状況だ。既存研究の大部分は左翼女性団体に関する研究に限定されているのが学界の実情だ。米軍政期右翼女性団体は国家権力機構と癒着して女性大衆の地位向上や権利・人権保障のための活動をするよりも、米軍政の多くの政策事業に動員される場合が多かった。このような女性団体の性格は、政府樹立後にいっそう強化された。独促婦人会は政府樹立後、大韓婦人会の母体となって第一共和国後半期（訳注：第一共和国は1948.8～1960.4. 李承晩は3代に渡って大統領に就

任した）の李承晩政権の独裁化が進むにつれて、婦女行政組織とともに独裁強化のための政治的道具へと転落した。女性団体の国家権力機構との癒着は、1960～70年代、朴正熙の時期のセマウル運動に女性を動員するところにまでつながった。したがって1950～70年代韓国女性団体の性格を理解するためには、その原型が作られた時期といえる解放直後の時期に関心を持たざるをえない。それがこの時期の代表的な右翼女性団体である独促婦人会に関する研究が必要な理由である。

これまでの解放後の女性団体に関する既存研究は、概して米軍政期に焦点を合わせた左翼女性運動団体と北朝鮮女性運動団体に関する研究がほとんどである。[1] しかし米軍政期の朝鮮婦女総同盟（後の民主女性同盟）を瓦解させるために尽力し、政府樹立以降には李承晩と自由党権力に従属して女性運動を歪曲させていったといえる右翼女性運動・団体についての研究はごく少ない。本稿の主たる対象になっている米軍政期の代表的な右翼女性団体である独促婦人会の組織と活動を独自の研究対象とした先行研究はほとんど無い状況だ。しかし独促婦人会を含む右翼女性団体を部分的に扱った研究はいくつかある。[2]

右翼女性団体に関する代表的な先行研究はムン・ギョンランとイ・ベヨンによって行われた。[3] 彼らは米軍政期の左右の女性団体運動に関して概括的な研究を試みている。そして米軍政と第一共和国の時期に婦女行政を担当した婦女局に注目したファン・ジョンミとチョン・ヒョンジュの論文[4]がある。さらに解放後の女子警察制の形成と活動を扱った研究もある。[5] 次に解放後の右翼女性運動指導者の議会進出と立法活動に関する諸研究がある。[6] そのほかにも1950年代女性運動に関する研究、女性の存在条件と生活に関する研

---

1) 金南植,『南労党研究 1』, トルベゲ, 1984；宋連玉,「朝鮮婦女総同盟－8.15 解放直後の女性運動」,『朝鮮民族運動史研究 2』, 青丘文庫, 1985；ムン・ギョンラン,『米軍政期韓国女性運動に関する研究』, 梨花女子大修士学位論文, 1989；イ・スンヒ,『韓国女性運動史研究：米軍政期女性運動を中心に』, 梨花女子大政治外交科博士学位論文, 1991；梁東淑,「米軍政期 朝鮮婦女総同盟の組織と活動研究」,『アジア現代女性史』創刊号, アジア現代女性史研究会(CAWA), 2005；キム・グァンウン,「解放直後の北朝鮮民主女性総同盟の状況と政治参与」,『史学研究』第77号, 韓国史学会, 2005.

2) 右翼女性団体は、右翼女性運動家の回顧録・評伝などでも多く扱われた。しかしそれらの資料は引用するとき注意せねばならない。団体結成や成員の個人的情報に関する事実確認作業なしに回顧録や評伝などで証言している内容をそのまま引用して現在研究されている場合もある。韓国婦人会総本部,『韓国女性運動略史：1945～1963 年まで人物中心』, 韓国婦人会総本部, 1986；秋溪崔恩喜文化事業会,『女性前進 70 年』, 秋溪崔恩喜文化事業会, 1991.

3) ムン・ギョンラン,『米軍政期の韓国女性運動に関する研究』, 梨花女子大修士学位論文, 1989；イ・ベヨン,「米軍政期の女性生活の変貌と女性意識, 1945～1948」,『歴史学報』150集, 1996;イ・ベヨン他,「韓国女性史定立のための女性人物類型研究Ⅳ(1945～1948)」,『女性学論集』第13集, 1999；イ・ベヨン,「韓国の女性生活と意識変化についての現代史的考察(1948～1970年代を中心に)」,『韓国近現代史研究』夏号第25集, 2003.

4) ファン・ジョンミ,「解放後の初期国家機構の形成と女性, 1946～1960：婦女局を中心に」,『韓国学報』第28巻第4号, 2002；チョン・ヒョンジュ,『大韓民国第1共和国の女性政策研究』, 梨花女子大史学科博士学位論文, 2004.

5) 梁東淑,「解放後の女性警察制形成と活動に関する研究（1945～1950)」,『韓国民族運動史研究』, 韓国民族運動史学会, 2009.

6) 梁東淑,「解放後の公娼制廃止過程研究」,『歴史研究』9, 歴史学研究所, 2001；ユ・スクラン,「光復後の国家建設過程での性不平等構造の形成：普通選挙法と制憲憲法作成過程

究、家族に関する諸研究と右翼女性人物についての研究で解放直後の女性諸団体を部分的に扱ったものもあった。[7]

以上の諸研究は主に米軍政期女性運動の全般的流れのなかで右翼女性団体を部分的に扱いつつ独促婦人会に言及している。のみならず右翼女性団体指導部の成員の議会進出過程と立法活動を、主にジェンダー関係を中心に追跡している。したがってこれらの先行研究では、第一に米軍政期の代表的な右翼女性団体である独促婦人会の組織体系と政治・社会活動の変化過程についての具体的な分析が不足している。第二に、独促婦人会の結成背景と組織過程が当時のいかなる政治的背景の中でなされたのかについての分析が足りない。したがって米軍政と李承晩勢力が女性団体をどのように活用したのかについての分析が不足している。第三に、代議制についての独促婦人会指導者たちの立場を充分に分析できず、右翼女性団体の議会進出と立法活動の歴史的意味と性格を究明することにおいて限界がある。

以上のような研究成果を基礎として、本研究は独促婦人会が結成される米軍政期から、独促婦人会が大韓婦人会に転化する政府樹立初期までを対象時期として、この時期の独促婦人会の組織結成と政治活動を分析しようと思う。

本研究はもっとも基本的な資料として、解放後に国内で発刊された各種の新聞と雑誌、そして女性関連新聞・雑誌・日誌・年表・文学書を活用した。特に独促婦人会機関紙『婦人新報』、婦女局の機関誌『新生活』は重要なものとして活用した。[8] 次に基本的な資料として『南朝鮮過渡立法議院速記録』と『国会速記録』、自叙伝と回顧録・評伝などの伝記的資料、そして法令集・統計資料集・諸女性団体が発刊した団体史を概観した資料集も活用した。国外の資料としては『解放直後政治社会史資料集』(チョン・ヨンウク編)、『米国CIC情報報告書(RG319)』,『OIR Report』(国史編纂委員会,『米国務部情報調査局(OIR)韓国関連報告書』)、『G－2 Periodic Report』(翰林大学アジア文化研究所,『駐韓米軍情報日誌』1～6巻)、『G－2 Weekly Summary』(翰林大学アジア文化研究所,『駐韓米軍週間情報要約』) などを参照した。

Ⅱ．独立促成愛国婦人会の結成

1．独立促成愛国婦人会の結成背景

を中心に」,『韓国政治学会報』夏号第39集2号, 2005；ユン・ジョンラン,「解放後の国家建設過程における右翼陣営女性の議会進出運動」,『歴史文化研究』第24集, 2006.

[7] シン・ヨンスク,「解放以後1950年代の女性団体と女性運動」,『女性研究論叢』15集, ソウル女子大女性研究所, 2000；李林夏,『1950年代女性の生活と社会的談論』, 成均館大博士学位論文, 2002；ペ・ウンギョン,「1950年代韓国女性の生活と出産調節」,『韓国学報』通巻116号, 2004；キム・ウンギョン,『1950年代の家族論と女性』, 淑明女子大博士学位論文, 2007；コン・イムスン,「スキャンダルと反共‘女流’名士、毛允淑の親日と反共の二重奏」,『韓国近代文学研究』第17号, 韓国近代文学会, 2008；チェ・ジョンスン,『朴順天の政治リーダーシップ研究』, 国民大博士学位論文, 2008.

[8] 『婦人新報』(1947.5.3～1947.12.31/1948.1～1948.12.) は2003年国会図書館、『新生活』は国立中央図書館にマイクロフィルムで保存されている。

(1)建国婦女同盟の結成と左右分裂

解放直後の開かれた政治空間を通じて、南韓では日帝時代に展開された多様な女性運動の流れと女性運動家たちが再登場した。組織的な活動を展開した女性運動は大きく3つの流れとして現れた。第一に日帝強占期の槿友会と1930～40年代の農民組合・労働組合で活動していた朝鮮共産党系列の女性運動、第二にキリスト教女性中心の民族主義系列の女性運動、第三に建国同盟傘下の婦女運動の流れである。

このように多様な女性運動の流れを代表していた女性運動家たちは1945年8月16日、新しい社会・国家建設のための女性団体結成を推進するために集まった。劉英俊、丁七星、李珏卿、兪珏卿、朴源炅、朴順天、黄信徳、朴承浩、盧天命、黄基成など30人以上の女性運動家たちはその場で「建国婦女同盟結成準備委員会」を結成した。そして黄信徳、朴順天、兪珏卿、許河白、朴承浩など5名の選考委員を選出した。続いて8月17日に解放後初の女性団体である「建国婦女同盟」発起総会を開催し、建国婦女同盟を結成するに至った。[9] 1945年8月17日、建国婦女同盟結成宣言文に掲げられた「朝鮮の完全な独立国家」問題は、解放直後の政治空間での左右の女性すべてに共通した課題であった。[10] 女性にとって「完全な独立国家」とは女性に対する抑圧のない男女平等が実質的に具現されている国を意味する。このために建国婦女同盟は新しい国家建設過程に積極的に参加することで「女性解放の大業を完成」することを期待した。

建国婦女同盟は委員長と副委員長に劉英俊、朴順天を選出した。総務部、財務部など9つの部署を置き、16人の執行委員を置いた。建国婦女同盟には女性運動に対する立場や日帝時代の行状に関係なく女性運動家がすべて網羅された。[11] 執行部の幹部のうち黄信徳を除く全ての人々が社会主義系列の女性たちだった。建国婦女同盟の実務が社会主義系列を中心に行われたものとみられる。建国同盟の一つの分身だと認識されていた建国婦女同盟に多様な女性運動家たちが集まった理由は、解放直後の建国準備委員会（以下、建準）の結成過程に見られるように、当時の一般的な政治状況が左右連合を構築しようとする雰囲気であったためである。[12]

だがしかし、建準の組織が拡大・改編される過程で朝鮮共産党系列の影響力が急速に拡大した。つまり建準は、最初は左右の穏健勢力による左右連合の性格を持って出発したが、穏健右翼の新幹会系列が脱退して建準は全左翼連合の性格へと変わった。そのような中で建準は自身の役割を独立国家樹立の準備機関と規定する一方で、概して社会改革を意味するものとみられる「進歩的民主主義」を自身が志向すべき路線と規定した。その後9月初

---

9) 『毎日新報』1945.8.17. 建国婦女同盟の綱領、宣言文、委員などが発表されているが、詳しい内容は以下を参照。民主主義民族戦線編,『朝鮮解放一年表』, 朝鮮解放年報出版部, 1946, 176頁.

10) 『女性文化』創刊号, 女性文化社, 1945.11, 9頁；シム・ジヨン,『解放政局論争史』1, ハヌル, 1986, 160頁.

11) 建国婦女同盟の中央執行部と具体的な幹部名簿は以下を参照。シム・ジヨン,『解放政局論争史』1, ハヌル, 1986, 160頁.

12) 建準の登場および拡大改編過程については、ホン・インスク,「建国準備委員会の組織と活動」,『解放前後史の認識』2, ハンギルサ, 1985, 62-91頁を参照のこと。

めには南韓の政局は、政府樹立を模索しつつ全国的組織網まで備えていきつつあった左翼主導の朝鮮人民共和国（人共）勢力と、これに反対して臨時政府奉戴を主張して結集した韓民党勢力に分かれた。[13]

このような全国的な中央の政府状況は、建国婦女同盟内部の状況を大きく規定し、三度にわたる左右の女性運動家たちの対立状況へとつながった。一度目は、建国婦女同盟準備会で左右の女性運動家たちが団体名称を決める問題をめぐって対立した。朴順天と黄信徳は『わが国はすでにあった国なのに今また「建国」はおかしい』と強く反対した。他方、社会主義系列の女性たちは建準と名称を統一すべきだと主張した。このような意見対立は結局社会主義系列の女性たちの主張が貫徹され、団体名称を建国婦女同盟と決定することで決着した。

二度目は、人共樹立を契機として右翼女性運動家が建国婦女同盟から大挙して脱退した。1945年9月6日、人共樹立の正当性に関して講演できる女性代表13人を選任してくれという建準の要請を朴順天は拒否した。朴順天は建準が人共を樹立しこれを公式化しようとする過程に建国婦女同盟は参加できないという立場だった。建国婦女同盟内の左右対立はこの事件を契機に高まり、右翼女性運動家が大挙脱退した。脱退した者たちは1945年9月10日、50人以上の会員とともに「韓国愛国婦人会」を結成した。[14] さらに任永信らは9月14日、李承晩勢力の支持基盤となる「朝鮮女子国民党（以下、女子国民党）を公式に創党した。[15]

三度目は、1945年末、米軍政の人民委員会弾圧と左右の政治勢力の継続する政治協商の失敗を背景に、建国婦女同盟内に最後まで残っていた朴順天などの右翼女性運動家らが建国婦女同盟を脱退した。朴順天を最後に右翼女性運動家は建国婦女同盟からすべて脱退し、建国婦女同盟内には左翼女性運動家だけが残ることになった。残された左翼女性運動家たちは建国婦女同盟を「朝鮮婦女総同盟」に再組織することになる。[16] 朴順天など右翼女性

---

13) チョン・ヘグ,『南北韓分断政権樹立過程研究』, 高麗大政治外交科博士学位論文, 1995, 25頁.

14) 『毎日新報』1945.9.13.

15) 『毎日新報』1945.9.14. 綱領と幹部名簿は以下の文を参照。史料上に様々に現れている。『朝鮮年鑑』1946.12, 朝鮮通信社, 349頁. 現在、女子国民党創党日に関する意見はまちまちである。まず女子国民党創党発起人大会を1945年8月17日、女子国民党創党大会開催を1945年8月18日と見る見解（イ・オクス,『韓国近世女性史話（下）』, 奎文閣, 1985, 137頁）、女子国民党創党日を1945年10月3日と見る見解（任永信,「私の履歴書」『承堂全集Ⅲ－承堂任永信博士文集Ⅱ』, 1976, 958頁）、1945年9月3日と見る見解（『朝鮮年鑑』, 朝鮮通信社, 1946）、1945年8月18日と明示している場合（国史編纂委員会「現代史年表」）、1945年9月14日と見る場合（『毎日新報』1945.9.14）。したがって女子国民党創党日は現在多くの文章で1945年8月18日、9月3日、9月14日、10月3日などと様々に引用されている。本論文ではもっとも正確な事実は新聞資料に基づいた情報だと見て、1945年9月14日を女子国民党創党日と表記する。ただし1945年9月14日付『毎日新報』は女子国民党が9月14日以前から活動してきていると言及しているが、ここから推測してみると1945年解放直後の8月から女子国民党は女子国民党の名前で活動してきて、9月14日女子国民党創党とともに党組織を公式化したものと見られる。

16) 婦総活動の詳細は以下の論文を参照のこと。梁東淑,「米軍政期 朝鮮婦女総同盟の組織と活動研究」,『アジア現代女性史』創刊号, アジア現代女性史研究会(CAWA), 2005.

運動家たちもまた、米軍政の初期の右翼強化政策に後押しされて右翼女性団体の組織化に努力するようになる。

建国婦女同盟は結成されて一月もたたないうちに左右の女性運動に分裂した。客観的に建国婦女同盟脱退者の経歴を見れば、ほとんどすべて日帝時代に親日派だった経歴を持つ者たちだった。特に日帝時代末に、政府よりの女性団体に多く参与し皇国臣民化政策に順応したキリスト教女性運動家たちだった。このような経歴は、解放後の彼女らの女性団体組織結成と活動を規定する重要な要因として作用した。

(2) 賛託・反託の対立と独立促成中央婦人団の結成

1945年末頃の南韓の政局は政府樹立に対する本格的な論議がまだ始まってはいない状況だった。しかし1945年末のモスクワ三相会議は、朝鮮半島問題についての国際的な合意を遂げることで政府樹立問題を本格的に論議できる契機を提供した。ここからモスクワ決定をめぐり、南北、そして国内の政治勢力は賛託・反託陣営に二分されると同時に両者のあいだで激烈な対立が引き起こされた。

モスクワ決定が国内に知られるや右翼政治勢力は信託統治問題について強く反発した。一番はじめに反託運動を組織しはじめた金九の臨時政府勢力は12月28日午後、緊急国務会議を開催して信託統治反対を決議した。その日の夜、信託統治反対「国民総動員委員会」を設置した。31日には人共の「統一委員会構成」提案を拒否し、全国的なゼネストを指示する一方で、国字1，2号を発表して政府接収さえ企図しようとした。[17] 李承晩と韓民党も反託の立場をとったが、米軍政との関係を考慮して金九ほどは積極的でなかった。このような状況で、米軍政はモスクワ決定の当事者だったが右翼勢力の反託運動に対してあいまいな態度を取った。[18] このようにモスクワ決定の信託問題をめぐって国内政治勢力は大きく信託統治賛成と反対とに二分された。南韓の右翼勢力は信託統治反対の共同目標の下に結集した。他方、左翼勢力はモスクワ決定支持というもう一つの目標の下に結集した。[19]

韓国愛国婦人会と女子国民党もこのような目標の下に多様な政治活動を展開した。主に反共産党・反朴憲永の活動を繰り広げた。反託デモにも参加したが、さしあたり1945年12月31日に金九の国民総動員委員会の動員で市民のデモが行われたとき、韓国愛国婦人会と女子国民党は多くの右翼女性指導者たちとともに「信託統治絶対反対」のスローガンを叫んでデモを行った。1946年1月1日「全国婦女大会」を開いて反託の立場を宣言したこともある。[20] 大会で信託統治問題は全民族の結合で排撃できるという要旨の李承晩の激

---

17) 『東亜日報』1946.1.2.

18) 『中央新聞』1946.1.1；『ソウル新聞』1946.1.3. 米国務長官バーンズは、場合によっては韓国民は信託統治を避けることもできるという声明を発表し、米軍政のホッジ中将はデモの自制を促しつつも自分は個人的に信託統治に反対していると言及して二重の態度を示した。

19) 一方、北韓の場合は反託を主張していた曺晩植が軟禁されたことで、その当時まで維持されていた左翼勢力と民族主義勢力の連帯が崩壊した。その後北韓の民族主義勢力は弱化、あるいは越南することとなる。チョン・ヘグ，前掲論文，1995，46-47頁.

20) 『朝鮮日報』1946.1.2.

励メッセージが朗読された。大会は関係当局に信託統治反対メッセージを送ることを決定した。[21]

モスクワ決定の発表を契機として展開された賛託・反託の対立は、南韓で左右の勢力が別途の統一戦線体を結成することにつながった。南韓の右翼勢力は1946年2月14日「大韓民国代表民主議院」（以下、民主議院）、左翼勢力は同年2月15日全左派勢力の結集体としての「民主主義民族戦線」（以下、民戦）を結成した。このような政局の展開は米ソ共同委員会開幕以前から政府樹立の可能性を暗くさせていた。

1946年1月10日の「独立促成中央婦人団」（以下、独促中央婦人団）の結成[22]はまさにこのような政局の産物であった。右翼女性運動指導者たちは、非組織的な反託デモではなく組織的で強力な反託運動を展開しようと強調しつつ独促中央婦人団を組織した。[23] 反託運動の強い意志を表明した右翼女性諸団体は、独促中央婦人団を組織し初代会長に黄基成[24]、副団長に朴順天をそれぞれ選出した。このほかにも李淑鐘、兪珏卿、黄信徳、朴承浩、宋今璇、玄鳳惠、車福實、イ・ギョンチェ(李瑄根の姉)、李淳定（尹潽善の弟嫁）、安美生（金九の嫁）、ナム・ドンスンなどが参加した。韓国愛国婦人会の委員長である兪珏卿、女子国民党の党首である任永信などの独促中央婦人団への参加に見られるように、独促中央婦人団は反託運動のための右翼女性団体の共同活動の臨時の組織体として結成されたものと見られる。さらにこのように解放後の右翼女性運動家は多くの団体や政党に重複加入することもあった。

このように反託運動の高まりのなかで独促中央婦人団が結成され、韓国愛国婦人会、女子国民党、独促中央婦人団は信託統治反対「全国女性総決起大会」を開いた。この場で信託統治反対声明が発表された。そしてホッジを訪問して反託メッセージを手渡した。[25] 右翼系各団体の緊急協議会である「売国賊懲治緊急協議会」の構成団体としても参加し、朝鮮共産党排撃決議大会を開催したこともある。[26] ホッジに会った後も右翼女性団体は米軍政庁前で大々的な反託デモを行った。1946年1月17日、鐘路キリスト教青年会館で婦女時局講演会を開催したり、1月18日に太極旗と信託統治絶対反対の旗を掲げて午前中いっぱいデモ[27]をするなど、以降の韓国愛国婦人会、女子国民党、独促中央婦人団の活動は主に軍政庁前で反託デモを展開したり、反託声明書の発表、また反託講演会などの政治活動を行うことであった。

2. 右翼女性団体の統合と独立促成愛国婦人会の結成

---

21) 韓国婦人会総本部,『韓国女性運動略史：1945－1963年まで人物中心』, ハンバメソリサ, 1986, 18頁.
22) 『東亜日報』1946.1.12.
23) 『ソウル新聞』1946.1.13.
24) 黄基成は大韓独立促成国民会の婦人部長をしたこともあった。『朝鮮日報』1946.2.2.1, 4.12, 6.15.
25) 『東亜日報』1946.1.13.
26) ビラ 1946.1.16.
27) 『朝鮮日報』1946.1.19.

信託統治問題で対立した政局において右翼政治勢力は反託を中心に結集しはじめた。臨時政府派が中心となった「非常政治会議準備会」と李承晩中心の「独立促成中央協議会（以下、独促中協）」は、ともに「非常国民会議」を発足させた。ただちに1946年2月8日、独促中協は「大韓独立促成国民会（以下、独促国民会）」に改称した。[28] 他方、左翼政治勢力は中道左翼を含めて民戦を2月15日に結成した。これによって右翼は反託を中心に、左翼はモスクワ三相決定の総体的支持を中心に連合するとともに左右対立が高まった。

右翼女性諸団体は1946年3月20日、米ソ共同委員会1次会議のとき、協議対象問題で論争が起こる過程で統合を成し遂げた。米ソ共同委員会の展開過程で米国とソ連は協議対象政党・社会団体の資格問題をめぐって対立した。結局、妥協を見ないまま第1次米ソ共同委員会は1946年5月に中断されてしまう。そして南北は自分たちの地域で独自の政治体制を構築しはじめた。[29] 右翼女性団体もこのような独自の政治体制構築過程に合流していった。

この時期の右翼政治勢力の連帯組織である独促国民会の主たる活動は、地方レベル、特に道単位で左翼の指導力に取って代わり、統合された右翼戦線を構築して米ソ共同委員会に対処することであった。[30] 独促国民会結成の後、独促国民会傘下団体は第1次米ソ共同委員会の開催期間に組織を改編した。女性団体も改編されたが、1946年4月5日韓国愛国婦人会と独促中央婦人団が統合して「独立促成愛国婦人会」になったのである。委員長は朴承浩、副委員長は黄基成、朴順天だった。[31] このように1946年初頭、韓国愛国婦人会と独促中央婦人団という二団体の統合は、独促国民会の地方レベルの指導力確保とそれを通じた米ソ共同委員会への対処という目標の延長線上に行われた。他方、政党に関する規則を明示した米軍政法令第55号[32]「政党登録法」も右翼女性団体の組織拡大に役立った。[33] 二つの右翼女性団体はソウル中心の活動から抜け出して地方組織化に乗り出しつつ統合を模索した。韓国愛国婦人会と独促中央婦人団は1946年4月5日、二つの団体名からそ

---

28) キム・スジャ，『李承晩の執権初期権力基盤研究』，景仁文化社，2005，57-87頁.

29) この時期の詳しい南北の独自の政治体制構築過程は、チョン・ヘグ，前掲論文，1995，45-61頁を参照のこと。

30) 『朝鮮日報』1946.12.8.

31) 独立促成愛国婦人会の幹部名簿に、委員長に兪珏卿、副委員長に朴順天と紹介されている場合がある（キム・スジャ，前掲論文，2005，69頁）。しかし独促婦人会創立当時の委員長は朴承浩、副委員長は黄基成、朴順天である（『漢城日報』1946.6.23）。そして独促婦人会が後に建国女性団体総連盟に改称したというが（キム・スジャ，前掲論文，2005，69頁）これも事実と異なる。独促婦人会は建国女性団体総連盟の構成団体であり、独促婦人会は政府樹立後の1948年8月大韓愛国婦人会に団体名を改称する。その後、ソウル市婦女会と統合して1949年2月大韓婦人会に再組織される。『婦人新報』1948.8.19；『東亜日報』・『京郷新聞』1949.2.25.

32) 『朝鮮日報』1946.2.24.

33) 政党登録法は政党の法的・物的基礎を当局に正確に報告させて主に左翼政党の秘密活動に対する規制を強化した。米ソ共同委員会に備えて右翼政党および社会団体の組織形成を合法化しようとする内容を持っていた同法の制定で多くの団体が結成された。独促婦人会の組織活動も、そのような条件のもとで可能であった。

れぞれ名前を取って「独立促成愛国婦人会」（以下、独促婦人会）[34]という名称で統合大会を開催した。[35]

統合された独促婦人会は組織を改編して右翼女性運動勢力を結集した。これは米ソ共同委員会開催を前後して南韓の右翼を統一させようとした試みの一つであった。[36] 独促婦人会が独促国民会の傘下団体であるため、独促婦人会結成の目的は独促国民会と同様に信託統治反対であり、国民大会開催などの方法を通じてその目的を実現しようとした。[37] 独促婦人会はこの時期のもっとも強力な反託右翼女性団体であった。

独促婦人会は1946年6月18日から20日まで「全国婦女団体代表者大会」を開催することで本格的な出発を告げ知らせた。[38] 朴承浩は『わが領土、わが同胞の興亡盛衰の一大危機に直面して、われわれ女性も解放だけを叫びたてるときではなく、一歩前進して朝鮮の自主独立の促成にあらん限りの努力をしよう』という要旨の開会辞を朗読した。李承晩は『女性も個人主義の主張を捨て、一つに団結して韓国を取り戻すことのほかには何もないと考える』と語った。金九も『国を建てるのに男女の区別はない、一つに団結して祖国の光復の柱になるべきだ』と祝辞を残した。[39] 参加者名簿と祝辞を通じて知りうるように、独促婦人会は李承晩、金九を初めとした右翼陣営と緊密に密着していた。すでに米軍政の支援も受けていた。

大会初日は、臨時執行委員選挙、本部経過報告、本部規約採択の後、綱領まで採択された。[40] 大会は『婦人の権利も祖国光復があった後にあるのだから、まず女性の血と力と汗で独立を戦い取り、豊かな経済を建設しよう』というスローガンを最後に締めくくられた。女性の基本権実現は国家建設以降に可能になるという認識は左翼女性運動団体である婦総の認識とは差があるものだった。親日派の剔抉（訳注：てっけつ＝抉り出して暴くこと）、および女性の民主主義的な基本権を擁護することを、今すぐ解決すべき問題と見ていなかったのだ。[41]

独促婦人会第1回全国婦人大会の2日目は、同じ場所で兪珏卿の司会で継続された。南朝鮮各道の代表者から地方の状況が報告された。独促婦人会全国大会の最終日は朴仁徳の司会で組織の拡大強化、経済振興、新生活運動、啓蒙事業など各種議案が処理された。そして左翼女性団体の婦総に統合を勧める代表を派遣することを決定した。[42] 同大会は最後にメッセージと決議文を採択して3日間の大会日程を終えた。[43]

---

34) 現在、独立促成愛国婦人会はよく独促愛婦と略称される。しかし当時は独促愛婦ではなく独促婦人会と呼ばれた。本論文でも独促愛婦に代わり独促婦人会と呼びたい。ただし、独促婦人会に統合される前の独促中央婦人団も当時は時に独促婦人会と呼ばれた。

35) 『ソウル新聞』1946.4.4；『朝鮮日報』1946.4.6.

36) ブルース・カミングス,『朝鮮戦争の起源：解放と単独政府の樹立 1945-1947』, 1986, 青史, 47頁.

37) 『京郷新聞』1947.2.9.

38) 『東亜日報』・『朝鮮日報』・『ソウル新聞』1946.6.17, 6.19, 6.20, 6.21.

39) 『朝鮮日報』・『ソウル新聞』・『東亜日報』1946.6.19.

40) この日採択された独促婦人会の綱領は、民戦編, 前掲書, 1946, 294頁参照。

41) 『朝鮮日報』・『ソウル新聞』1946.6.19.

42) 信託統治をめぐる対立が極限に達する状況で独促婦人会と婦総の統合は期待し難かった。実際に独促婦人会の代表数名は以降、婦総委員長の劉英俊の事務室を訪問する。この

建国婦女同盟から脱退し韓国愛国婦人会と独促中央婦人団を結成した右翼女性運動家たちは、このように二団体を統合して独促婦人会を結成することで右翼陣営の戦列を整えた。以降、独促婦人会は1948年8月「大韓愛国婦人会」に改名し[44]、1949年2月に官製のソウル市婦人会と統合して「大韓婦人会」に改編される[45]まで南韓の代表的な右翼女性団体として活動した。独促婦人会は、特に李承晩の独促国民会議の傘下団体として李承晩の政治的立場に追従し、1946年には反託運動、1947年には単独政府樹立運動に総力を傾注した。

Ⅲ. 独立促成愛国婦人会の組織と構成員

1. 独立促成愛国婦人会の組織体系

独促婦人会は反託運動を契機として組織体系と組織構成員を徐々に拡大し、右翼陣営の戦列を整えていく。独促婦人会の全国支部と会員数は今まで正確に明らかにされたことがない。1946年6月第1回全国大会に131の支会が参加したという記録はある。[46] 1948年6月第3回全国大会には300余りの支部の支部長が参加したという。[47] 米国側資料によれば1946年7月現在、独促婦人会全国支部および会員数は、<表1>のように伝えられている。

場で李承晩、金九、金奎植の指導者推戴など多くの問題を討議しようと提案した。しかし婦総は彼らが反民族的人物だという理由で独促婦人会の提案を拒絶した。『朝鮮人民報』1946.6.23.

43) 『東亜日報』1946.6.21. 採択されたメッセージは『朝鮮日報』1946.6.21 参照。決議文は『東亜日報』1946.6.23 参照。他方、独促婦人会第2回全国大会は1947年5月2～3日の両日にわたって開かれた。特に全国大会地方代表報告では10月人民抗争の収拾に独促婦人会の諸会員が協力したという内容が報告された。大会は委員長に朴承浩を留任させ、副委員長に新たに崔以權と朴順天（留任）をそれぞれ選出して終了した。崔以權は、延喜大学校総長である白樂濬の夫人であり、独促婦人会の副委員長、基督教青年会会長、民族青年団女子部部長を歴任した。朴順天は日帝時代の槿友会運動と解放直後の建国婦女同盟を経て独促婦人会副委員長、そして政府樹立後、婦人新聞社長、大韓婦人会創立会長などを歴任した（『新生活』第1巻第7号，1947，20-25頁）。そして独促婦人会第3回全国大会は1948年6月15日に開催された。第3回全国大会は独促婦人会結成以降、もっとも多くの幹部が参加したようだ。大会で現副委員長の崔以權に代わり兪珏卿を新たに選出した（『婦人新報』1948.6.17；『東亜日報』1948.6.16）。第3回全国大会後、2週間ほど過ぎた1948年6月27日、独促婦人会ソウル市支部大会が開催された。大会は独促婦人会ソウル市支部委員長に黄愛徳、副委員長に文仁順とオ・インシルをそれぞれ選出した（『婦人新報』1948.6.27）。

44) 『婦人新報』1948.8.19.

45) 『東亜日報』・『京郷新聞』1949.2.25.

46) 『漢城日報』1946.6.23.

47) 『婦人新報』1948.6.17.

＜表１＞独立促成愛国婦人会 全国支部および会員数（1946年7月基準）

全国支部	会員数	総会員数
京義道	ソウル(8628), 仁川(2530), 開城(3500), 富川(500), 始興(1800), 烏山(2300), 水原(1500), 平澤(1270), ヨンジン(950), 徳沼(1500), 坡州(1300), 抱川(1200), 驪州(1250), 素砂(1250), 梧柳洞(1598), 白川(604), 論山(2500), 龍山(1(?)), 保寧(2500), 果川(1850)	38,530
忠清北道	忠州(5000), 鎭川(500), 陰城(2300), 堤川(2250), 槐山(900), 忠州(1500), 永同(1300), 公州(3200)	16,950
忠清南道	ソンファ(1900), 青陽(1400), 禮山(5000), 瑞山(1700), 唐津(1500), 屯浦(1102), 牙山(2700), 天安(3400), 清州(3800), 大田(5000)	27,502
慶尚北道	善山(1450), 聞慶(730), 尚州(1634), 金泉(1595), 義城(1600), 安東(1900), 慶山(1402), 慶州(1502), 大松(?)	11,613
慶尚南道	大邱(1566), 盈德(1320), 榮州(780), 奉化(710), 釜山(20500), 馬山(16820), 新馬山(1558), 晉州(14200), 宜寧(2500), 蔚山(2212), 金海(1300), 昌原(1728), 統榮(1275), 固城(2500), 咸陽(2160), 居昌(2800)	73,929
全羅北道	全州(?), 益山(1500), 三禮(2300), 新泰仁(?), 金提(1280), 群山(2300), 裡里(2300), 南原(4832), 木浦(3869), 寶城(1800), 求禮(2500), 麗水(2641), 順天(2500), 唐津(4820)	32,642
江原道	春川(3200), 洪川(3000), 江陵(3500), 原州(4984), 平昌(1500), 平康(1300)	17,484
総支部		総計 218,850

*出典: Reports Concerning the Membership, Relations with North Korea, and Attitude towards Trusteeship, the Moscow Decision, and the Joint Commission of Rightist Organization, (8.September.1945-31.March.1947), 1947.4.25. by Philip C. Rowe

米国側資料によれば1946年7月5日現在、独促婦人会の成員は237,965人と報告されているが、上記の表では総支部成員は218,850人で多少の差が見られる。米国側資料はおそらくその差と同じくらいの成員15,115人がまだ支部行政の下に所属できていない数字だろうと伝えている。他方、米国側資料は1947年1月1日現在の独促婦人会の全国支部と成員数も伝えているが、それは＜表２＞のようになる。

＜表２＞独立促成愛国婦人会 全国支部および会員数（1947年1月基準）

全国支部	支部数	会員数
ソウル	37	23500
京義道	25	536,550
忠清北道	10	323,670
忠清南道	18	456,950
慶尚北道	24	412,150

慶尚南道	21	517,650
全羅北道	16	352,410
全羅南道	24	421,250
江原道	9	257,690
黄海道	3	3350
		計 3,305,170

*出典: Reports Concerning the Membership, Relations with North Korea, and Attitude towards Trusteeship, the Moscow Decision, and the Joint Commission of Rightist Organization, (8.September.1945-31.March.1947), 1947.4.25. by Philip C. Rowe

上の表で見るように1947年1月現在の成員数は3,305,170名であった。つまり1946年7月5日から47年1月1日のあいだに237,965名から3,305,170人に増加したのだ。独促婦人会が、組織成員が3,305,170人にもなるほどに広範な組織活動をしたかどうかは非常に疑わしいと米国側資料はいう。そのうえそれを証明するに足る証拠もないというのだ。特にこの資料は、独促婦人会が米国内組織と関連する米国内会員6万人を含んでいるが、その点は注目に値すると指摘している。さらに独促婦人会が李承晩の立場に追従するだろうと見ている。

しかし上記の米国側資料が引用している独促婦人会の全国支部と会員は、米ソ共同委員会の共同声明第11号に依拠して、南北の各政党・社会団体が米ソ共同委員会質疑書についての答申案を作成し、共同委員会協議への参加を申請するときに提出した内容を根拠としている。ところが共同委員会協議への参加申請の締め切り後、請願書を提出した団体およびその会員数の結果は途方もない数字になっている。左右のすべての団体が会員数をふくらませていたのである。[48] それゆえ正確な独促婦人会の組織状況についての情報というには限界がある。

独促婦人会は全国に4百万近い会員がいると主張した。[49] しかしその会員数がどれほど正確なのかは知り得ない。上で指摘したように組織規模を誇張したこともあり、また解放直後から1946年まで右翼政治勢力はほとんど大衆的基盤をもてないままソウルと地方のいくつかの都市に微弱な勢力しか持つことができなかった。[50] 独促婦人会の機関紙『婦人新報』1947年12月28日に掲載された女性界の動向に関する記事には『もっぱら苦労されたのは代表の数人だけで、一般責任者たちはその責任を履行したことが無い』[51]と述べてもいる。他方、独促婦人会総本部の組織編成は<表3>の通りである。[52]

---

48) その結果を見れば、南北の全467団体7千5百万人、そのうち南韓が425団体で6千2百万人を占めた。北韓は38団体で1千3百万人を占めた。FRUS 6, 679-680頁. しかしこの会員数は、当時の南韓の人口が約2千万人、北韓人口が約1千万人だったことを考え合わせるととんでもない数字だった。もちろん左右ともその会員数を水増ししていたのだが、特にその程度がひどかったのは南韓の右翼勢力であった。

49) 『婦人新報』1948.6.27.

50) ブルース・カミングス, 前掲書, 1986, 47頁.

51) 『婦人新報』1947.12.28.

52) 1947年朝鮮年鑑に見られる各本部長名簿は少し異なる。総務：パク・ウォノ、文芸：

＜表３＞独立促成愛国婦人会 組織編成と幹部名簿（1946年6月現在）

地位	幹部名簿
委員長	朴承浩（パク・スンホ）
副委員長	黄基聖（ファン・ギソン），朴順天（パク・スンチョン）
総務部長	朴奉愛（パク・ポンエ）
財政部長	李珍求（イ・ジング）
企画調査部長	李淑鐘（イ・スクチョン）
情報部長	朴仁徳（パク・インドク）
外交部長	キム・メレ
政治部長	黄信徳(ファン・シンドク)
組織部長	宋今璇（ソン・グムソン）
地方部長	兪珏卿（ユ・ガクキョン）
生活情報部長	黄愛徳（ファン・エドク）
厚生部長	韓小濟（ハン・ソジェ）
勤労部長	李京愛（イ・ギョンエ）
産業部長	キム・ヨンスン
文芸部長	金貞玉（キム・ジョンオク）
出版部長	崔以權（チェ・イグォン）
宣伝部長	許永淳（ホ・ヨンスン）
常務幹事	朴永福（パク・ヨンボク）

*出典:『漢城日報』1946.6.23を参照して整理。

総本部の幹部は毎年少しずつ改編された。1947年5月8日独促婦人会第2回全国大会で委員長の朴承浩[53]は留任したが、副委員長の朴順天と黄基聖は朴順天と崔以權[54]に代わった。1948年6月17日の独促婦人会第3回全国大会では副委員長に朴順天と崔以權に代わり朴順天と兪珏卿が選出された。[55]

1946年6月18日から20日まで「全国婦女団体代表者大会」を開催することで[56]本格的な出発をした独促婦人会は、ただちに地方組織の強化に着手した。これによって1946年中頃には各道支部が結成された。しかし1946年末まで右翼陣営は地方でまともな政党組織さえもつことができずにいた。[57]独促婦人会は、1946年5月第1次米ソ共同委員会閉会後に行われた米軍政の左翼勢力弾圧、そして1946年9月ゼネストと10月人民抗争で左翼女性運動団体である婦総組織が瓦解していることを契機に組織結成を加速させた。独促国民会傘下の大衆団体の大部分が同じ時期に組織力を強化した。[58]

キム・メレ、外交：金活蘭、宣伝：キム・ヘギョン。

53) 独促婦人会初代会長の朴承浩は東京留学の頃からの朴順天の旧い友人であった。東亜日報女性記者として働いているとき朴順天とともに京城家政女塾を経営した。後に保健社会部初代婦女局長を歴任、昌徳女学校校長をしていた朝鮮戦争時に北に拉致された。『新生活』第1巻第7号，1947，20-25頁；チェ・ジョンスン，『朴順天の政治リーダーシップ研究』，国民大政治外交科博士論文，2007，57頁.

54) 『東亜日報』1947.5.8.

55) 『婦人新報』1948.6.17.

56) 『東亜日報』・『朝鮮日報』・『ソウル新聞』1946.6.17，6.19，6.20，6.21.

57) ブルース・カミングス，前掲書，1986，79頁.

58) 右翼青年団体の地方組織拡大も9月ゼネストと10月人民抗争以降、左翼に対する本格的な検挙と破壊などによって左翼活動が極度に制限された時点で急激に行われた。オ・ユ

独促婦人会の各道組織は、建準婦女部内で右翼女性団体の影響下にあった各道支部が韓国婦人会と独促中央婦人団中央組織の統合の動きの影響を受けて独促婦人会支部に転化したケースがほとんどだ。慶尚南道、全羅南道は建準婦女部が独促婦人会に変化したケースだ。全羅南道の場合、1946年4月22日、全南建準婦女部で活動していた人たちが女子国民党光州支部を組織し、同年4月28日独促中央婦人団と韓国愛国婦人会を統合して独促婦人会光州支部に改編する。[59] 全羅北道、忠清北道、京義道の場合は、若干名の女性が建準に参加して活動していて、その後独促婦人会を結成する。そのほか慶尚北道は「キリスト教建国婦人会」が独促婦人会に転化したケースだ。[60] ＜表4＞は各道支部の結成時期および幹部名簿である。

＜表4＞独立促成愛国婦人会 各道支部の結成時期と幹部名簿

各道支部	結成時期	支部長	備考
仁川支部	1946.6	支部長：アン・イネ 副支部長：ファン・ヒスン 総務：ペ・ミョンソン	★ファン・ヒスン(1906)：京義女高卒(1925)，大韓愛国婦人会 仁川市副支部長(1945)，独促婦人会 仁川市支部長(1947)，大韓婦人会 仁川市支部長(1951)
全北支部	1946.春	支部長：チャ・ヨンミン 副支部長：チョン・ユテク 総務：イム・ヨンジャ	★チャ・ヨンミン(1890)：貞信女塾卒，独促婦人会全北会長(1946)，大韓婦人会全北道本部長(1949)，朝鮮戦争時死亡.
全南支部	1946.5	支部長：キム・ジョンヒョン 副支部長：ヒョン・ドクシン 総務：チョ・アラ	★ヒョン・ドクシン(1896)：梨花学堂卒，東京女子医専卒，光州YWCA会長(1933)，建国準備委員会副会長(1945)，独促婦人会副会長，大韓婦人会 全南道本部会長(1949) ★チョ・アラ(1913)：須彼亞女高卒，光州YWCA 再建，大韓婦人会総務，聖貧女舎設立，全南婦女係長(1948-54)，湖南女塾設立.
慶北支部	1946.5	支部長：金喆安 幹部：キム・ソニン，イ・ミョンドゥク，ハン・シンドク，イ・ミョンスク，キム・ダンギョ，スン・オクファン，キム・ヒャンラン等	★金喆安(1912)：日本明治大学校外生，独促婦人会慶北道会長(1946)，大韓婦人会最高委員(1956) ★キム・ソニン(1909)：大邱信明女学校卒，東京女子医学専門学校卒業(1938)，慶北安東道立病院内科勤務(1938)，ソニン医院開院(1940)，女子国民党慶北道党委員長(1945)，大韓婦人会慶北道本部会長(1949-59) ★イ・ミョンドゥク(1899)：達城女学校卒，大韓婦人会大邱市支部会長(1950) ★ハン・シンドク (1910)：大邱普通学校，大邱高等ミョンド学校修了，基督教建国婦人会救護部長(1945)，大韓婦人会慶北道本部副会長
慶南支部	1946.5	支部長: チョン・ボングム 総務: キム・クモク	★チョン・ボングム(1905)：東京女子医科大学卒，

ソク，前掲書，1988，60頁.

59) 全羅南道編，前掲書，2003，135頁.

60) ムン・ギョンラン，前掲書，1989，72頁.

			独促婦人会慶南道支部会長(1946), 大韓婦人会慶南道本部長(1949)
京義支部	1947.4	支部長: 朴順天	★朴順天(1898) : 釜山信一女学校卒(1917), 日本女子大学社会学部卒(1917), 独促婦人会副会長(1946), 大韓婦人会総本部会長(1949), 馬山義信女学校教員(1917), 朝鮮金剛精機工場女工監(1939), 中央女中副校長(1940), 初代監察委員(1948), 婦人新聞社創立社長(1948), 国民会中央総本部委員長(1949), 第2代国会議員(1950)

*出典 : 韓国婦人会総本部,『韓国女性運動略史』, 韓国婦人会総本部, 1986 ;『東亜日報』1947.4.9 を参考に整理した。

道支部以下、市、郡の支部は主に 1947 年後半、南韓だけの総選挙が予想される時期を前後して組織拡大が行われた。『婦人新報』1947 年 9 月 25 日付『総選挙前夜に各細胞組織を強化拡大しようと各洞分会組織に拍車をかける』(訳注 : 洞は地方行政区域の末端機構で日本の町・村にあたる) という記事がみられる。[61]

2. 独立促成愛国婦人会の構成員

独促婦人会の構成員のうち主要幹部は、下の表に見るように女子国民党などその他右翼女性団体の幹部を兼ねている場合が多かった。独促婦人会の主要幹部の学歴と活動経歴は<表5>のようである。

<表5>独立促成愛国婦人会 主要幹部の学歴と活動経歴

氏名(出生年度)	学歴	活動経歴	その他の活動
兪珏卿(1892)	貞信女中卒(1910), 中華民国北京協和女専卒	YWCA 会長(1923), 朝鮮女子基督教節制会連合会長(1935), 朝鮮 YWCA 総務(1936), 朝鮮愛国婦人会再建会長(1945), 大韓婦人会副会長(1949)	京城貞信女学校 教師(1914), 大韓赤十字社創立委員及び中央執行委員(1947), 大韓赤十字社副総裁(1949), 社会部婦女局長(1950)
黄愛徳(1892)	平壌正進女学校, 梨花女中, 梨花女子大, 米国コロンビア大学教育科	大韓愛国婦人会組織(1919), 全国女性団体連合会会長を 10 年歴任(1946)	平壌崇義女子中学校教員(1911), 松竹同志会結成(1913)
朴賢淑(1896)	崇義女学校卒	己未独立運動家として刑務所収監(1919), 社会事業平壌女子館長(1941), 民族統一総本部婦女部長(1946), 大韓婦人会最高委員(1953)	平壌崇義女学校教頭(1924), 過渡立法議院議員(1946), 監察委員会委員(1948), 選挙法規起草委員会(1949), 国会選挙委員会委員(1949)
崔錦鳳(=崔メジ)(1896)	梨花女中卒(1913), 日本広島高等女学校卒(1923), 日本	3.1 女性同志会理事(1934)	平壌鎭南浦三崇小学校教員(1918), ソウル市歯科医師会理事(1931),

61) 『婦人新報』1947.9.25: 記録にあらわれた支部および分会結成は以下を参照。『独立新報』1947.6.4-1948.1.16.

	東京女子歯科医学専門学校卒(1928)		学校法人仁徳学園理事(1932), 朝鮮歯科医院開業(平壌市)
朴承浩 (1897)	東京津田女子大卒	独促婦人会会長, 大韓婦人会副会長	東亜日報記者, 京城家政女塾教師, 社会部婦女局長, 昌徳女高校長, 朝鮮戦争時拉致、死亡.
朴順天 (1898)	釜山信一女学校卒(1917), 日本女子大学社会学部卒(1917)	独促婦人会副会長(1946), 大韓婦人会総本部会長(1949)	馬山義信女学校教員(1917), 朝鮮金剛精機工場 女工監 (1939), 中央女中副校長(1940), 初代監察委員(1948), 婦人新聞社創立社長(1948), 国民会中央総本部副委員長(1949), 第2代国会議員(1950)
任永信 (1898)	全州紀全高等女学校卒(1928), 米国カリフォルニア大学大学院卒(1930), 同大学名誉文学博士学位(1957)	女子国民党党首(1945)	梨花学堂教師(1922), 中央保育学校設立(1932), 中央女子専門学校設立(1945), 民主議院国連代表(1946), 初代商工部長官(1948), 初代民議院議員(1949,安東), 第2代民議員当選(1950,錦山)
黄信徳 (1898)	海州懿貞女学校卒(1917),京城女子高等普通卒(1919),日本東京女子大学校社会事業学部 3年(1925)修了	独促婦人会創立中央委員(1946), 全国女性団体総連合会委員長(1946), 大韓婦人会政治部長(1949)	時代日報,中外日報記者(1926), 東亜日報記者(1934), 京城家政女塾創設(1940), 財団法人秋溪学校設立理事長(1951)
韓小濟 (1898)	貞信女学校 日本東京女医専	独促婦人会厚生部長(1946), 大韓基督教青年連合会理事, 大韓婦人会ソウル市本部長, 大韓少女団委員会理事, 韓国基督教連合会家庭生活委員会委員長, 大韓基督教節制会理事(1949)	産婦人科, 小児科医師, 大韓基督教信者女医師会会長, 日本東京女医大ソウル同窓支会会長(1949)
金活蘭 (1899)	梨花学堂卒, 米国コロンビア大哲学博士	世界YWCA実行委員, 韓国女博士協会長	国際連合派遣特使(1948), 中央教育委員会委員(1950), 公報処長(1950), 国連韓国協会理事, 梨花女子大総長
金信實 (1899)	米国オバリン大学、ミシガン大学校特殊学課程	大韓基督教青年会学生部長, 世界親善委員会委員長(1930), 大韓体育会理事(1938), 韓国少女団会長(1946)	梨花女子大教授(1930), 梨花女子大教授兼体育学部長(1945)
金誠實 (1899)	梨花高女, 梨花女子大, 米国マサチューセッツ・マウントホリオーク女子大学	女子基督教青年連合会総務(1929), 平北宜川女子基督教青年会理事(1949), 女子基督教青年会連合会理事, 大韓赤十字婦女部長(1949)	梨花女中教員(1930), 泰和女子館社会部勤務(1932), ソウル市厚生局長期顧問補佐官(1946), ソウル市厚生局婦女課長(1947)
李淑鐘 (1905)	東京女子美術専門学校西洋画科卒, 日本東京帝大文学部修了, 梨花女子大名誉文学博士	独促婦人会企画調査部長, 韓国女性団体協議会会長, 汎女性家族法改正促進会会長	誠信女学校設立及び校長(1922), 誠信女中設立及び校長(1936), 誠信学園設立及び理事長(1945), ソウル市教育会理事(1948), 米国教育制度視察団員(1948)

宋今璇 (1905)	淑明女高卒,東京女子高等師範家事科卒	独促婦人会組織部長	淑明女高教師, 梨花女専教授, 徳成高女校長, 徳成実業校長,徳成実業女中校長及び徳成大学長,
崔以權 (1905)	梨花女専卒	独促婦人会出版部長(1946), 独促婦人会副委員長	基督青年会会長, YWCA 文芸部長, 韓国少女団理事, 民族青年団女子部部長
朴瑪利亞 (1906)	梨花女専卒(1928), 米国マウンティホーリー大学, スカーレット大学修学	朝鮮女子基督青年会幹事及び総務(1934), 大韓 YWCA 文化部長(1948)	大田好壽敦高等女学校教師, 梨花女子専門学校教授(1932), 梨花女子大学校副総長(1954)
趙賢景 (1906)	梨花女専英文科卒, 九州帝大史学科卒	女性問題研究院調査部長	梨花女子大史学科教授兼学生監, 淑明女子大, 中央大教授
朴奉愛 (1908)	培花女子高等学校卒(1925), 中央保育学校卒(1928)	独促婦人会総務部長(1946), 大韓婦人会理事及び総務(1949-54)	中央保育学校教師(1932), 梨花女子専門学校教授(1937)
毛允淑 (1909)	開城好壽敦女高卒(1928), 梨花女専英文科卒(1933)	世界 YWCA 大会 (ニューヨーク) に韓国代表として出席(1948), 大韓婦人会宣伝文化部長(1950), 漢陽女性クラブ会長(1950), 大韓女子青年団総本部団長(1950.9)	第 3 次国連総会韓国代表(1948), 梨花女子大学文理大講師(1951)
朴仁德	梨花学堂卒,	緑旗連盟婦人部指導委員(1941), 独促婦人会情報部長(1946)	徳和女塾設立(1941)
朴恩惠 (1904)	貞信女学校卒, 梨花女専英文科卒, 米国 University of Dubuque 卒, 米国ニューヨーク聖書神学校社会宗教学卒	独促婦人会委員.	京城日曜学校連合会勤務(1931), 梨花女専生徒課程(1946), 京義女子中学校校長(1946), 京義高女校長

*出典：『韓国女性運動略史』, 韓国婦人会総本部, 1986；キム・ソギョン, 『女流名士 30 人選集－人物評判記』, 崇文社, 1953；ハン・チョリョン, 『韓国の人物：第 1 選 50 人選』, 文化春秋社, 1954；チョン・ヒョンジュ, 『大韓民国第 1 共和国の女性政策研究』, 梨花女子大博士論文, 2004 などを参照して整理。

独促婦人会幹部の一般的な特性を見てみると、第一に総本部の幹部のなかには日帝の下で女性運動に参加した経歴を持つ人物が多い。第二に彼らはほとんどがキリスト教徒だった。多くがキリスト教信者であるか、両親が篤実なキリスト教信者である。このような点は、彼らの運動が日帝下から続いてきたキリスト教女性運動の特徴である教育啓蒙、文化運動路線を帯びるのに影響を及ぼしたと思われる。第三に彼らは地主階級や富農出身者が多かった。また両親や夫が、いわゆる開化された知識人であり、夫は大韓民国政府樹立以降に高級官僚や高位職を持った場合が多かった。[62] 第四に右翼女性運動指導者の大多数が

62) 兪珏卿の場合、父の兪星濬は普成専門学校校長であった。韓末開化派の代表的人物である兪吉濬は兪珏卿の伯父であった。また米軍政の学務局長だった兪億兼とはいとこの関係であった。そして朴順天（夫：卞熙瑢、成均館大総長を歴任）、朴承浩（夫：崔承萬、済州道知事歴任）、朴瑪利亞（夫：李起鵬、自由党治下の副大統領）、趙賢景（夫：黄鍾律、財

大卒以上のインテリ階層であった。特に日本や米国への留学生が多かった。多くの右翼女性運動指導者は西欧諸国を訪問したのち、体験文、紀行文、報告書などを数多く残している。その内容は大部分が米国の政治体制および社会文化的環境に対する羨望と憧憬に関するものだった。彼らは職業としては医者、教授、記者など専門職に属する職業を持っており、労働者や農民出身は見られない。第五に彼らのなかには植民地化の初期過程では3.1運動やその他の独立運動に身を投じ投獄された者もあったが、日帝末期にいたって自己意思であろうとそうでなかろうと親日の経歴を持った者が多かった。[63] 親日残滓の剔抉が第一の課題として強調されていた解放直後、彼らが親日清算問題についてまったく言及しなかったり、あるいは反対する姿勢を見せたりした理由はここにあった。独促婦人会の綱領には親日派問題を含む日帝残滓の清算や土地問題解決についての綱領や宣言文は存在していない。[64]

以上、反託運動を契機として拡大した独促婦人会の組織状況を概観した。独促婦人会結成を経て、右翼女性団体は組織体制が準備されはじめた。初期の右翼女性団体と比較してみるとき、独促婦人会は組織構成の要件を完備していった。そして左翼に対する対抗団体としての性格をはっきりさせていった。

Ⅳ. 独立促成愛国婦人会の活動

1. 南朝鮮過渡立法議院への参加と立法活動

(1) 独促婦人会女性指導者の南朝鮮過渡立法議院官選議員への任命

第1次米ソ共同委員会休会の後に、米軍政は一方で婦女局・女子警察を新設して女性団体と行政官僚組織を癒着させてゆき、[65] もう一方では少数の右翼女性団体指導者を議会政治圏内に参加させていく方式を通じて右翼女性団体を支援した。独促婦人会女性運動家たちが議会政治に参加する背景と、米軍政が実施した選挙法と選挙手続き・方式の問題点、そして女性の政治参加の実際について概観してみよう。

米軍による初期の占領統治は、米軍民政長官を通じた直接的な統治だった。しかし直接統治が難しく、北韓のソ連軍政が人民委員会を通じた間接統治をするや、米軍は南韓を代表するもう一つの政治集団を構成してこれを中心にして間接統治を企画した。これを政務

務部長官歴任)、毛允淑(夫:安浩相、文教部長官歴任)、崔以權(夫:白樂濬、延喜大総長歴任)、朴恩惠(夫:張徳秀、韓民党)などの例からも彼女らの階層的位置をかいまみることができる。

63) キル・ジニョン,『歴史に再び問う』, 三民社, 1984;イム・ジョングク編,『親日論説選集』, 実践文学社, 1987.

64) 『毎日新報』1945.9.10, 9.14.

65) 婦女局についての詳しい内容は、ファン・ジョンミ, 前掲論文, 2002;チョン・ヒョンジュ, 前掲論文, 2004. 女子警察についての内容は、梁東淑, 前掲論文, 2009を参照。

委員会[66]という。一時これを、金九をはじめとした臨時政府勢力に担当させようという構想があった。しかし1946年初めの信託統治政局を経て臨時政府勢力と米軍政は正面から対立した。以降、米軍政は金九勢力と朝鮮共産党勢力ではない政治勢力を中心にした政治集団の構成を推進した。[67] これが「南朝鮮代表民主議院」（以下、民主議院）である。[68] 女性として黄賢淑と金善の2名が含まれた民主議院は、1946年3月18日臨時政策大綱を発表した。全27項で構成されたが、このうち女性参政権と関連したものは2項の「正式政府は可及的速やかに普通選挙制度による国民議会を通じて建立し、普通選挙では男女満20歳以上の者は選挙権があり、満25歳以上の者は被選挙権がある」であった。[69]

しかし政治的に中道的性向を持っている政治勢力を結集して間接統治に活用しようとした米軍政の意図にもかかわらず、呂運亨などの政治勢力が参加を拒否し、ソ連が民主議院を反託団体と見て代表性を認めないとなると、[70]米軍政はこのような政治状況において民主議院と歩みを共にすることができなかった。結局民主議院は米軍政の諮問機構としての役割に満足し、解散するまではっきりとした業績を残すことができなかった。このように民主議院の実際の姿は黄賢淑と金善による女性法律案の制定を主張するに値するものではなかった。

とくに1946年春から実行された米軍政の本格的な左翼弾圧に対する大衆の抵抗、そして1946年10月大邱を中心にした労働者の大規模蜂起は米軍政の占領統治の根幹を揺さぶった。[71] このような激変する政治情勢に対応するために米軍政は朝鮮人による臨時政府と臨時立法機構を構成し、これを通じた間接的な統治構想を新たに打ち立てた。それは左右の政治勢力を網羅せねばならないというものだった。その結果、臨時立法機構が構成されたが、それが「南朝鮮過渡立法議院」（以下、過渡立法議院）であった。

互いに異なる観点で立法機構の位相を設定していた初期の過渡立法議院設立過程の対立状況は、過渡立法議院の開院以降、数ヶ月のあいだ続いた。このような情勢で過渡立法議院創設とともに右翼女性運動指導者たちの過渡立法議院進出活動が活発に行われた。しかし過渡立法議院の議員は45名の民選議員と45名の官選議員で構成されており、このうち女性代議員は45人の官選議員のうち約十分の一にも満たない4人が割り当てられた。女子官選議員は黄信徳（独促婦人会）、朴承浩（独促婦人会）、辛義卿（女子基督教青年会）、朴賢淑（女子国民党）である。[72]

民選議員では一人の女性議員も選出されなかったが、それは民選議員の選挙過程と方法において大部分の女性有権者に実質的な選挙参加資格が与えられていなかったためである。婦女局機関誌『新生活』に文章を寄稿した朴正淑は、『選挙方法において選挙権を世帯主

---

66) FRUS 6, 1132頁.
67) キム・ヨンミ,『米軍政期の南朝鮮過渡立法議院の成立と活動』, ソウル大修士学位論文, 1993, 8頁.
68) 『東亜日報』1946.2.15.
69) 『朝鮮日報』1946.3.19.
70) チョン・ヨンウク,『解放直後の米国の対朝鮮政策』, ソウル大学校出版部, 2003, 231頁.
71) 詳しい内容は次の論文を参照のこと。チョン・ヘグ,『10月人民抗争研究』, ヨルムサ, 1988.
72) 『東亜日報』1946.12.12.

単位としたことは女性の進出をひどく抑圧し、解放とともに男女同等権を獲得したわが婦女たちをしてその福利のために勇敢に闘ってくれる代弁人を導き選出できなかった遺憾な状態をもたらしました。もっぱら一部指導部クラスの婦人の役割にだけ限定され、一般婦人にあっては全くその動きが封鎖されているので天佑の選挙機会を獲得したわが朝鮮婦女としてあまりにも無能力で恥辱的ではありませんか』と政治の現実を伝えた。[73] 江原道春川婦女局主催の座談会が開催されたときも、独促婦人会会員の朴寅順は『今回男女同権と女子参政権を云々しながらも過渡立法議院の民選代議員投票も世帯主にだけ投票権を与え、われわれ女性たちは権利がないのでその不満は実に少なくありません』と嘆いた。[74]

過渡立法議院の選挙方法は、規定に従い男女の区別無しに普通選挙を実施し、法令制定時まで被選議員は軍政長官が樹立した「選挙手続き」に依って選挙[75]するというものであるが、各道別に実施された実際の選挙では、選挙権者資格を世帯主に限定した日帝時代の選挙規定が適用された。世帯主が女性になっている場合は非常に例外的な稀なケースであったため、ほとんど男性だけに選挙権が付与された選挙だった。米軍政は118号の規定が男女の区別なしに普通選挙を実施するという内容であり、これは世帯主ではなく20歳以上の男女すべてに選挙権が与えられたという意味だと強調した。しかし実際の選挙過程では、速やかな選挙実施のために世帯主選挙を黙認した。米軍政は各地方軍政長官に秘密裏に世帯主選挙を命令した。[76]

結果的に米軍政の速やかな選挙施行方針によって、ほとんどの地域では選挙法の規定とは異なり世帯主だけが選挙に参加し、その上40%が棄権した。このような選挙方式によって有権者の大部分が男性である世帯主選挙において最終的に女性代議員が選出される可能性は少なかった。ゆえに4名の女性たちが官選議員として任命されたのみであった。官選議員に女性が進出した背景には、当時の独促婦人会を中心とした右翼女性団体の活動があった。1946年4月、独促婦人会が結成され組織を整備・強化した。[77] 米軍政が過渡立法議院設置案を正式に公布した後には、右翼女性運動家たちは上記の女性団体を中心にして、乱立していたその他の女性団体を統一させた。[78] 同年11月18日、8つの団体の代表が集まったなかで「全国女性団体総連盟」（以下、女総）が結成されたのである。このとき決定した事項の一つが、過渡立法議院に多くの女性が参加できるように米軍政当局に陳情しようということであった。[79] このような結果として過渡立法議院官選議員に4名の女性が女性代表として選定され得たのであった。

(2) 普通選挙法制定と女性割当制論争

---

73) パク・チョンスク，「立法議院に対する婦人の大望」，『新生活』創刊号，1947，21-22頁.
74) 『新生活』創刊号，1947，44-45頁.
75) 「立法議院設置に関する法令118号第8条」；キム・ヨンミ，「米軍政期過渡立法議院の成立と活動」，『韓国史論』32集，1994，251-305頁；キム・ヨンミ，「1946年立法議員選挙」，『国士館論叢』75集，1997，127-159頁.
76) キム・ヨンミ，前掲論文，1993，21頁.
77) 『東亜日報』1946.4.4.
78) 『東亜日報』1946.11.13，11.16.
79) 『東亜日報』1946.11.22.

米軍政法令 118 号規定で過渡立法議院が創設されると、独促婦人会はこれに積極的に参加しようとした。しかし男女の区別なしに普通選挙を実施するという選挙法の内容とは異なり、実際の選挙手続きと方式において世帯主選挙を黙認し、秘密裏に世帯主選挙を要求した米軍政の方針によって、女性有権者の投票権は制限されてしまった。その結果、独促婦人会および右翼女性団体指導者たちは女性民選議員に選出されないまま、4 名だけが官選議員に任命され過渡立法議院に参加することになった。陣痛の果てに開院された過渡立法議院で「普通選挙法」（以下、普選法）が制定されるが、普選法もまた女性の政治参加の権利を代弁するには限界を持っていた。したがって独促婦人会の黄信徳議員を初めとした女性官選議員は女性の政治参加拡大のための女性割当制を要求するようになる。女性割当制論争の過程とその意味を見てみよう。

開院した過渡立法議院を通じて米軍政は準代表機構である過渡立法議院を構成してここで普選法を準備した後、国家全体を代表する国会を構成するという計画をもっていた。これによって 1946 年 10 月、民選議員選挙を実施し、12 月初めに官選議員を任命して同年 12 月 12 日過渡立法議院が出帆した。ローチ軍政長官は過渡立法議院のもっとも重要な課題は普選法の可決だと発表した。[80]

米軍政は立法議院に早いうちに普選法を完成させることを促した。[81] 普選法は通過過程で年齢基準、自書投票、居住制限などの問題をめぐり米軍政側の立場と中道派および右翼立法議員の立場に違いがあった。特に投票用紙に候補者名を自筆で書く自書制は読み書きのできない人を排除する措置だった。女性の大部分は読み書きができなかったため、それは女性を排除する規定でもあった。

他方、先に周知したように民主議院および過渡立法議院を通じて女性大衆の政治勢力化が進む可能性や、それを代議する女性政治家が選出される可能性は非常に少なかった。はじめからそれらの諸機構が民意によって構成されたというよりは米軍政政策の正統性を付与する看板機構として設置されたため[82]代議機構としての性格は弱かった。のみならず解放後初の選挙で世帯主選挙方式によって女性有権者はほとんど排除され、女性民選議員が選出される可能性は薄かったし、官選議員はホッジによって任命された。大部分の女性大衆は議会政治体の形成過程のスタートから排除された。したがって過渡立法議院の女性官選議員進出は女性界全体を代表しているとは見難いものであった。それゆえ普選法をめぐって展開された女性参政権運動は、左右の女性運動の尖鋭な対立を引き起こした。左翼女性団体は過渡立法議院の限界を批判した。女性参政権、男女平等権などは過渡立法議院を通じて実現することはできないと考えた。また限界が明らかな普選法撤廃をはっきりと要求した。[83] しかし過渡立法議院に参加した右翼女性代議員および右翼女性諸団体は普選法制定過程に参加して女性割当制という主張を提起した。[84]

---

80) 『農民週報』 1946.11.16.
81) 1947 年 6 月末までに普選法を制定できない場合、軍政庁法令で司法部に選挙実施のための法令案を要請するという書簡を立法議院に送った。『婦女日報』 1947.4.1.
82) ブルース・カミングス，前掲書，1986，91 頁.
83) 『大衆新報』 1947.3.19.
84) 南朝鮮過渡立法議院速記録第 41 号，1947.3.25.

普選法制定過程に参加して女性割当制を主張した女性官選議員たちの主張をもう少し具体的に見てみよう。普選法は1946年12月12日に開かれた過渡立法議院で通過させたもっとも重要な法律の一つである。普選法制定過程での核心問題は、選挙年齢と被選挙権資格制限条項だった。これは利害関係が尖鋭にかかった問題だった。このような状況で女性官選議員たちは女性の代表性確保のための措置をとることを主張し始めた。女性界の立場を代弁する4人の女性代議員は、1947年3月25日第37次会議の普選法審議過程で女性割当制である女性「便法」を主張した。女子代議員の参与を保障する特別扱い案の実施を主張したのである。[85]

米軍政が作成した『過渡立法議院報告書』によれば、第37次本会議の選挙法審議過程で黄信徳議員の女性のための特別便法要求は拒否された。[86] 女性関連特別措置である便法要求はそれ以降、法制司法委員会の修正案作成過程では具体的な条項として挿入された。しかし激論の末に結局法制司法委員会に修正案を出すように決定、これによって法司委は1947年5月13日修正案を提出した。ところがこの修正案には総議席266席のうち女性議席22席以上（8%）の特別条例が入っていた。[87] この22議席はソウル市5席と各道別2

---

85) 立法議員たちの選挙法案論議過程では、辛義卿と黄信徳議員が男性議員を相手に発言しているが、ここから黄信徳議員の発言内容だけを抜粋すると以下のようである。

◇黄信徳議員：先ほどある議員がおっしゃったことにお答えしますと、普選法を実施するにあたって女子の権利を剥奪したのではないから今回の運動をよく進めていくのがよいとおっしゃいましたが、それは原則です。しかしながら改めて考えてみるとき、この普通選挙法を実施する原因がどこにあるかといえば民主主義を実施しようというところにあるのです。**ならばこの選挙法に依拠してこれが実施されるとき果たして女子代議員が何人かでも出てくるのかということを私たち自身が非常に疑います。**ならば3千万の半数にもなる1千5百万の朝鮮女性が参政権を持てるようにしてくれと、決して無理に要求するのではありませんが、現段階にあって1千5百万女性を代表できる代議員を1人も出せず、ふたたび昔のような男性だけが政治に参与するようになればその結論はいったいどうなるでしょうか？だからこれに対して一言申し上げますと、現在のような過渡期であるのでこれに対して何らかの便法で、仮に50人なら、その2割くらいは女子を出すことが出来るという、こういう方法を工夫するのがよいのではないかと思います。たとえば前回の赤十字社議員もそうでしたが、何らかの便法で、仮に四分の一は女子代議員にするというような便法があったらよいと思います。そのようにして朝鮮民族全体がそれこそ民主主義原則にのっとって平等な権利を享有できるようにしてくださるよう希望します（南朝鮮過渡立法議院速記録第41号，1947.3.25）。

ところでユ・スクランの論文では本文のなかで黄信徳議員の発言のうち濃く表示した部分を省略して引用している。この部分は、普選法に基づいて選挙をする場合、多数の女性代議員が女性大衆によって選ばれる可能性が少ないということを黄信徳議員が認識していたことを示している。すなわち女性大衆全体を代表する勢力として自らを押し出しながらも、自身が女性大衆によって代表される可能性は少ないということを認めているわけである。したがって女性議員が主張している「民主主義原則にのっとった平等な権利の享有」はこのような現実を認めることから出発せねばならなかった。すなわち独促婦人会および右翼女性議員が女性大衆全体と女性界を代表しているのではなく、もう一つの女性政治勢力との対立もまた認められなければならなかった。そのような対立と違いが認められる代議制を作るために努力しなければならなかったのに、右翼女性議員たちはそのような代議制を構想しなかった。

86) KILA Daily Report 1947.3.25.

87) 『朝鮮日報』1947.5.14.

席で構成されていた。[88] 辛義卿、黄信徳両議員は、「女子議員選出便法と特別選挙区」は妥当だと強調した。[89] しかし金若水議員は「韓国女性も外国女性がかつてしたように、政界に入るためには闘争して勝利しなければならない」と主張し、女性議席22席特別条例を批判した。結局、普選法の法制司法委修正案でも女性議席22席特別条例は可決されなかった。[90]

普選法制定過程で女性官選議員および右翼女性運動家たちは、自分たちは女性大衆と女性界全体を代表する勢力だと前提し、またそうする資格があると考えた。しかし他方では、自分たちが女性大衆によって代表に選ばれる可能性は少ないだろうと考えた。したがって代表に選ばれる可能性を高めるための措置として暫定的優遇措置、女性割当制の実施を主張した。[91] 女性割当制が本当に重要な問題ならば、そのような政治的な権利を守り抜こうと努力しなければならないのに、女性割当制を提案した女総代表であり独促婦人会幹部である黄信徳議員は、重要だと思っている女性割当制の主張を「民族的自尊心」によってそれ以上主張せずに放棄してしまう。[92]

いっぽう、独促婦人会、独促女子青年団、女子国民党、仏教女性総連盟、女子基督教青年連合会の5つの団体は、連名で『現在女性にとって不利な法律が多いことに照らして将来の朝鮮女性の遺憾なき発展のための至極公平な法律が制定されることを希望し、今回の立法議院には最小限度三分の一は女子の参政権が保障されねばならない』ことを要求する陳情書をローチ軍政長官に送った。女総は1947年1月立法議院に女性にとって不公平で不利な法律を即時廃止してくれという建議案を提出した。[93]

代表的な左翼女性運動団体である南朝鮮民主女性同盟（朝鮮婦女総同盟の後身、以下、南朝鮮女盟）は、普選法の限界を批判しつつ男女平等法令草案を自ら準備して軍政当局に

---

88) KILA Daily Report 1947.5.13.

89) 『朝鮮日報』1947.5.17.

90) ユ・スクラン，前掲論文，2005，287頁.

91) ユ・スクランとユン・ジョンランは、当時の右翼女性議員の「女性に対する優遇措置という便法」の要求を男女平等権実現のための事実上の平等を実現する暫定的積極的措置であり平等を促進させる正当な措置だと捉えて、右翼女性議員の議会活動を肯定的に評価する（ユ・スクラン，前掲論文，2005参照；ユン・ジョンラン，前掲論文，2006参照）。しかしまず女性界全体と女性大衆を代表できるという右翼女性議員・女性団体の判断は証明が必要な問題であった。その問題は女性割当制の要求を女性大衆の要求と決定にすることができる民主的装置と諸手続きを形成するための努力によって証明すべき問題であった。しかし右翼女性議員たちの認識と政治活動にあっては、女性大衆とともに活動すること、また女性大衆のための議会構成と立法活動の努力がよく見えない。女性大衆は諮問や嘆願、訴える機能だけを付与されるのみであった。このような問題点は公娼制廃止法の制定過程でもよく現れた。

92) 黄信徳議員は1947年6月普選法が通過した後、選挙法起草委員会と法制司法委員会の委員として活動した自分の感想を以下のように述べている。『過渡期的現実に適合する「女子特別扱い案：女子代議員最低定員数を要求する案」を多少主張してもみたが、結局女性自身の自尊心を曲げることも容易いことではなく、そのうえ国際的に朝鮮女性の程度が微弱だということを知られることは朝鮮の民度が薄いということを暴露する結果をもたらすゆえに民族的自尊心が許さず、女子特別扱い案を私個人としては放棄した。』黄信徳，「選挙法と婦人」，『新生活』第1巻第5号，1947，45-47頁.

93) 『東亜日報』1947.1.7.

建議した。南朝鮮女盟は軍政長官と司法部長の金炳魯を訪問し『選挙権のみならず経済・政治・文化部門での男女平等権および自由結婚と離婚、相続における男女平等権』を主張した。[94] これに対してローチ軍政長官は『この建議案は概ね適当であり、現在の民主主義原則に符合する』と語った。そして過渡立法議院に回付した。[95] しかし南朝鮮女盟は男女平等権法令草案が過渡立法議院に回付されることに反対した。米軍政が直接草案どおりに法令として決定・公布・施行することを要請するという談話を発表した。[96]

普選法制定過程に参加して女性割当制を主張した女性官選議員たちの要求は貫徹されないまま、1947年6月27日通過した選挙法（選挙権者満23歳、被選挙権者満25歳規定など）は軍政長官の異議提起でふたたび本会議に回付された（1947.8.12）。しかし立法議院側は本院の見解に変わりないという返答を軍政長官に送る。軍政長官は1947年9月3日、これを承認・署名して過渡政府法律5号「立法議員選挙法」として公布した。しかし実際には軍政側の主張がこめられた内容に全面改訂され、1948年3月17日軍政法令175号「国会議員選挙法」として発布されることになる。選挙権21歳、被選挙権25歳、特別選挙区の削除などの内容である。この法令によってついに1948年5月10日、制憲国会議員選挙が実施された。[97] 政府樹立以降、女性に形式的な参政権が最初に付与されるようになったのも、同法第1条規定によってである。[98]

2. 単独選挙・単独政府樹立への参加と議会進出運動

(1) 単独選挙・単独政府樹立選挙のための啓蒙運動

---

94) 『独立新報』1947.3.28.

95) 『独立新報』1947.3.30.

96) 『独立新報』1947.4.2. ユ・スクラン，前掲論文，2005では『左翼系の民主女性同盟もまた男女平等権建議案を立法議院に回付し』、『右翼と左翼を代表する女総と女盟が4人の女性過渡立法議員を通じて民主憲法が保障している基本平等権のみならず、結婚・家族・労働など広範な分野の民主的立法を試みることを建議した』と記述している。だがこれは誤った史料引用を根拠にしたものだ。訂正が必要な部分である。本文で書いたように、女盟は男女平等権建議案を過渡立法議院ではなくローチ長官に提出した。ローチ長官がそれを過渡立法議院に回付したのである。女盟はこのようなローチ長官の行動を批判した。また女総と女盟は、過渡立法議院とそれを通じた女性参政権・男女平等権に関する法制定と実施について異なる立場を持っていた。右翼と左翼の女性運動勢力がともに過渡立法議院を通じた民主憲法保障のために立法の試みをしたという説明は、それゆえ事実とは異なる陳述だ。ユ・スクラン，前掲論文，2005，289頁.

97) キム・ヒョクトン，『米軍政下の立法議院』，1970，汎友社. 立法議院で制定した法令は軍政長官が同意して合法的に署名捺印し、官報に公布するとき法律の効力があるので、実際の拘束力がない準諮問機構の役割をしたのみであった。ユ・スクラン，前掲論文，2005，285頁.

98) 過渡立法議院で制定された法律のうち、女性と関連のある条項は「国会議員選挙法」（普選法）と「公娼制廃止法令」である。しかし社会的に公娼制廃止問題だけが大きくイシュー化された。結局、過渡立法議院の女子議員たちの主張どおり実現されたのは公娼制廃止法制定だけだった。公娼制廃止法制定をめぐる過渡立法議院内の論議過程は以下の論文を参照のこと。梁東淑，前掲論文，2001.

1946年初頭に開かれた第一次米ソ共同委員会が決裂した後に、米ソ共同委員会を通じた朝鮮問題の解決の妥協の可能性は弱まった。しかしこのような可能性が第2次米ソ共同委員会の妥協の可能性を根本的に封鎖したのではなかった。国内での左右合作の試み以降強化された中道勢力をはじめとして共同委再開を望む諸勢力が徐々に増加していたためだ。米ソもまた米ソ共同委員会が政府樹立のための妥協の最後の機会だという点をよく認識していた。第2次米ソ共同委員会は1947年5月21日、徳寿宮の石造殿で再開された。第2次米ソ共同委員会を前後して南韓の各政治勢力は共同委員会に参加するか否かによって新しく改編された。しかし第2次米ソ共同委員会もまた決裂してしまう。以降、朝鮮問題は米国によって国連に移管されるが、これを背景として単独政府樹立を実現するために、李承晩政治勢力が独促国民会を中心に選挙体制を整備していった。これによって独促婦人会および女総は単独政府樹立のための総選挙体制を強化させていった。

朝鮮問題の国連への上程過程で対立した米ソの主張案を要約すると、ソ連側案は外国軍の撤収が先で政府樹立はその後であるという案であり、米国側案は政府樹立が先でその後に外国軍の撤収という案であった。[99] 結局、国連で朝鮮問題は米国側案どおりに通過させられた。11月14日付国連総会決定内容は、国連朝鮮臨時委員団の監督下で1948年3月末までに人口比例による南北朝鮮総選挙を実施し、これに基づき政府を樹立した後、この政府が国連朝鮮臨時委員団と協議して国防軍を創設し、外国軍を撤収させるようになっていた。もちろんこのような決定は外見上、南北総選挙と統一政府樹立を前提にしたものであった。しかし朝鮮問題の一つの当事者であるソ連側がこれに反対する状況において南北総選挙を通じた統一政府樹立の可能性は低いものであった。さらに国連総会の決定内容は、ソ連側が常に受け入れを拒否していた人口比例による総選挙を規定していた。そのような点から朝鮮問題についての11月14日付国連総会決定は、事実上南北分断政権の樹立を予告していた。

国連総会の決定は南北の政治勢力にとって大きな影響を及ぼした。南側単独選挙・単独政府のもっとも直接的な被害者になる南韓の左翼諸勢力は、外国軍撤収および自主的な政府樹立というソ連側案を主張し続けた。基本的には北韓と共同歩調をとる一方で、単独選挙・単独政府を阻止するための物理的な直接闘争に出るほかなかった。米ソ共同委員会の成功に期待をかけた中道陣営もまた失望せざるをえなかった。共同委が決裂した今、彼らはあまり実現性のない国連監視下での南北総選挙に期待をかけねばならなかった。いっぽう反託運動を通じて共同委に積極的に反対していた金九勢力は共同委決裂にあたって南北総選挙を通じた統一政府樹立を主張し始めた。しかしある点で反託運動の核心点な主役として共同委協議に反対していた金九が、共同委決裂の直接的な結果である南北分断政権樹立の現実に直面して南北総選挙を通じた統一政府樹立を主張し始めたことは、現実政治において至極矛盾した行動にちがいなかった。金九が南北総選挙を通じた統一政府樹立を主張するようになったことにつれて金奎植の中道派勢力と金九の右派民族主義勢力は共同の目標のために相互連帯を強化することができ、これは南北協商へつながるきっかけとなった。最後に共同委決裂と朝鮮問題が国連に移管されたことによって李承晩勢力と韓民党勢力は単独選挙・単独政府路線をはっきりと掲げられるようになった。同時に南側単独選挙・

---

99) チョン・ヘグ，前掲論文，1995，95-97頁参照。

単独政府の現実的流れのなかで自分たちの影響力を急速に拡大していった。彼らは国連総会決定のもっとも大きな恩恵を享受した人たちであった。[100]

第2次米ソ共同委員会決裂によってもっとも政治的「力」を得た李承晩と独促国民会は、自身の政治路線というべき単独政府樹立を実現させるために独促国民会の組織を総選挙体制に整備した。[101] 独促国民会は1947年10月全国各市道で時局対策国民大会の開催を決定し、南側だけの単独選挙実施を決定した。そして本格的に単独選挙・単独政府路線の活動を展開し始めた。[102]

単独選挙実施が確定して以降、一方では金九、金奎植、洪命熹などの南北協商指導勢力が台頭し、他方では1948年3月5日、68の右翼政党・右翼社会団体の代表が独促国民会を中心に国連朝鮮臨時委員団と選挙に関する諸般の事項を協議する代表として民族代表団33名を構成した。民族代表団には独促婦人会幹部の朴順天、黄愛徳、金活蘭が参加した。[103] 民族代表団は大部分が独促国民会、あるいはその傘下の大衆団体関連の人物たちであった。民族代表団の構成に続いて李承晩は総選挙を総括的に指導する最高委員を選定するが、右翼女性団体指導者の黄賢淑、黄愛徳もそこに含まれた。[104]

独促国民会は右翼団体の活動統一のために総選挙促進国民大会の開催と総選挙要請連判状運動を展開することを決定するなど、李承晩に対する絶対的な支持と単独政府樹立運動の世論形成の役割を担当した。独促国民会傘下団体である独促婦人会も単独選挙・単独政府樹立のための具体的な活動を展開した。特に独促婦人会が主導する女総は総選挙法に対する解説講演会と女性の総選挙参加を促す講演会を開催した。女総は婦女局の機関誌『新生活』を通じて選挙啓蒙運動を展開したこともある。[105] 全体的に女総は選挙の重要性を教えたり、女性の選挙参加を督励して投票手続きを啓蒙したりした。[106] 女総は女性有権者を選挙に組織的に動員するために「女性中央選挙対策委員会」を組織した。この委員会は加盟している各女性団体から選出された選挙対策委員によって構成された。各選挙区に区対策委員会を配置し、区委員－洞委員－班責任者を置いた。特に班責任者は班内の各戸訪問を通じて投票年齢内の全女性に投票参加を強力に勧め、啓蒙した。[107] 女性中央選挙対策委員会は選挙日が5月10日に確定した後の3月30日に、李承晩が右翼人士を中心に総選挙推進委員会を組織して米軍政と力を合わせて総選挙参加運動を主導していくこと

---

100) チョン・ヘグ，前掲論文，1995を参照のこと。

101) 李承晩と独促国民会の詳しい総選挙体制整備過程は、キム・スジャ，前掲論文，2003を参照のこと。

102) 『京郷新聞』・『朝鮮日報』1947.10.10.

103) 『京郷新聞』1948.3.11；『朝鮮日報』1948.3.12.

104) G-2 weekly summary No.131　1948.3.6-13.

105) 『新生活』第2巻第3号，1948，2-10頁.

106) 第2次米ソ共同委員会決裂を前後してすべての力量を国連と単独選挙問題に集中していた女総とは別個に、右翼女性団体は「愛国女性団体連合」という新たな組織を構成する。愛国女性団体連合の結成日および所属団体などは正確に知りえないが、参加人物を見るとき李承晩を支持する独促婦人会会員と女子国民党党員が中心になって活動したものと見られる。この団体の幹部名簿は以下の通りだ。会長（趙信聖、黄愛徳）、総務部（黄賢淑、鄭賢淑、崔以權、李信德）、財政部（鄭賢淑、許景信、黄賢淑）、『婦人新報』1947.11.26，1947. 12.4.

107) 黄愛徳，「総選挙と女性の役割」，『新生活』第2巻第2号，1948，3頁.

[108] と軌を一にした。選挙前の2ヶ月間、女性を選挙に参加させるための女性団体のこのような教育キャンペーンによって巨大な女性動員が最高潮に達した。

(2) 右翼女性指導者の制憲議会進出の試み

過渡立法議院に進出した女性代議員らが主張していた女性議席割当制が否決されたとの報に際して、右翼女性界には大きく女性議席割当制を支持する立場と反対する立場の2種類の見解が存在した。[109] しかし女性議席割当制はすでに否決されていたため、与えられた情況においてどのような方法をもって進むべきかがいっそう重要だという方に意見が一致した。[110] 以降、独促婦人会では何よりも5.10選挙のための宣伝と広報活動に集中した。

朴順天は1947年5月、独促婦人会の機関紙『婦人新報』を創刊した。[111] 普選の議論が始まった1947年中頃から『婦人新報』の政治啓蒙紙の性格は露骨になった。[112] 毛允淑は総選挙に備えるためには女性識字教育が急がれると力説した。[113] 具体的には毛允淑は、女性特別選挙法を施行できない困難な現実において女性は、男性中心の選挙観念を無くし、能力ある女性たちに一票を投じねばならないと強調した。能力ある女性たちとは金活蘭、朴順天、崔以權、朴承浩、黄信德、朴仁德、朴賢淑などであると推薦しつつ、彼女らの履歴を詳しく知らせた。[114] 黄信德は5回に渡る「女性と選挙問題」という試論を寄稿した。[115] 『婦人新報』は普選に備えて「国会議員選挙法施行細則」などを詳細に紹介した。[116] そして選挙が迫ってからは、投票参加は愛国であり棄権は売国であるというようなやり方で女性の選挙参加を強引に勧めた。[117]

最も多くの候補者を出した独促婦人会は女性候補者の個人プロフィールと選挙事務所訪問記、選挙公約などを紹介した。当時、総選挙が男女平等権を獲得する決定的機会だと認識していた。[118] さらに総選挙準備運動として地方巡回と女性代表会議などを開催した。

---

108) イ・テイル,「5.10 選挙の政治史的意味」, イ・スイン編,『韓国現代政治史 1－米軍占領時代の政治史』, 実践文学社, 1989, 187頁.
109) 『婦人新報』1947.8.6.
110) 『婦人新報』1947.8.29.
111) 『女性新聞』1947.6.14.
112) 『婦人新報』1947.8.23, 1947.8.24.
113) 『婦人新報』1948.8.24.
114) 『婦人新報』1947.10.7-10.8, 1947.10.11, 1947.10.14 ;『新生活』第1巻第7号, 1947, 20-25頁. ソウル地域に出馬した右翼女性指導者は龍山区から朴承浩、鐘路区から朴順天、中区は黄愛德、西大門区は金活蘭、東大門乙区は黄賢淑、麻浦区が金善であった。ところでこのような記事はほとんど婦女局機関誌『新生活』に重複掲載された。
115) 『婦人新報』1947.8.26, 1947.8.27, 1947.8.29, 1947.9.3, 1947.9.7.
116) 『婦人新報』1948.3.14, 1948.3.18, 1948.3.24, 1948.3.25, 1948.3.26, 1948.3.27, 1948.4.28.
117) 『婦人新報』1948.4.3.
118) 『婦人新報』1948.4.2, 1948.4.3. それは麻浦に出馬した金善の立候補動機にもよく現れているが、金善は『国家の道徳性の根源は家庭にあり、家庭が道徳性を、夫と妻、父

独促婦人会の朴承浩会長は地方巡回に行ってきた後、20以上の支部代表者会議を開いた。この会議で将来実施される普通選挙法に対処する女性運動の方向について討論を行った。そして次のように結論付けた。女性解放を獲得しようとすれば女性は全力を集中せねばならない。ゆえに地方代表は独促婦人会、女子国民党などを区別せず全女性の普選法実施に対処できる運動を展開しなくてはならず、代表に立てることのできる女性は少数に決定されるが女性運動に誠意と熱意を尽くすことができる人物でなければならないと結論付けた。[119] そして各界各層の女性たちを通じて世論を形成する方法も使った。[120] ほとんどの活動において、特に言論機関を通じた文章において表れた共通する立場は女性の選挙参加を訴えている点だった。女性に参政権を行使すべきことを訴えることでもあるが、女性の代表を議会に送るべきことを強調した点であった。

このような準備の末に1948年3月30日から4月9日に選挙人登録が行われ、1948年4月13日に19名の女性たちが立候補者として登録された。[121] そして1948年4月13日付の国会選挙委員会発表によれば、全有権者8,771,126名のうち8,055,295人と有権者全体の91.7%にあたる高い登録率を記録した。[122] このうち女性有権者の登録率は全体の49.4%に該当する3,903,293名であった。[123] 女性立候補者を表に整理すれば<表6>のようになる。

<表6>1948年5.10選挙における女性立候補者と選挙区

女性立候補者	所属団体	選挙区	備考
黄愛徳	女性団体総連盟	ソウル中区	55歳，梨花女子大文科卒，コロンビア大卒，全国女性総連盟委員，朝鮮女子基督青年連合会，独促婦人会生活部長
金善	無所属	ソウル中区	平壌正義女高普卒，日本奈良女子高等師範学校卒，教授
朴順天	独促婦人会	ソウル鐘路区	42歳，慶南東萊一新女学校卒， 東京日本女子大学社会学部卒，教育界，3.1運動に参加， 中央女子中学校副校長(1945-47)，婦人新報社社長，独促婦人会副委員長，独促国民会副委員長

母と子女、兄弟と姉妹の正当な地位として憲法をはじめとして建国のすべての立法に、女性として妻として母として、この正当な地位と権利が規定されねばなりません。これが私の先進国に女性が参政する所以です。』と述べた。『婦人新報』1948.4.28.

119) 『婦人新報』1947.6.7.

120) 『婦人新報』1948.4.2.『婦人新報』に女性事務員、家庭婦人、電話交換手、看護婦、女店員、女医、女性記者、幼稚園の先生、喫茶店のマダム、音楽家などの総選挙に臨む立場についての文章を載せた。

121) 『婦人新報』1948.5.15. 女性立候補者数については異なる資料が存在する。中央選挙管理委員会,『大韓民国選挙史』, 1964では18名としている。しかし当時の新聞記事の内容に倣うこととする。

122) 『婦人新報』1948.4.14.

123) Summation of U.S. Military Government Activities in Korea, Vol.32, 1948.5, p.188.
この資料では国会選挙委員会の資料を根拠に総有権者登録数を7,908,892人と見ている。

黄賢淑	女子国民党	ソウル東大門区	日本横浜共立女子神学校卒，過渡立法議院議員，乙未独立運動で服役，女子国民党総務，独促国民会婦人部長
金活蘭	無所属，梨花女子大総長	ソウル西大門区	52 歳，京城梨花学堂大学科卒(1928)，オハイオ州ウエスレアン大学及び同大学院卒，ボストン大学哲学科卒(修士学位)，コロンビア大学哲学科卒(博士学位)，梨花女子専門学校教頭(1936)，京城梨花女子専門学校校長(1939)，梨花女子大学校総長(1945)，各種国際会議に朝鮮代表として出席
金善	大韓女子国民党	ソウル麻浦区	53 歳，京義高女卒，神戸日本女子新学校卒，民主議院議員，女子国民党副委員長，朝鮮女子基督青年連合会
朴承浩	独促婦人会	ソウル龍山区	梨花学堂卒(1915)，東京津田女子大学校英文科卒(1924),(教師) 過渡立法議院議員，3.1 運動参加，東亜日報学芸部記者(1934-41)，独促婦人会委員長
イ・スヒ	独促婦人会	仁川甲区	44 歳，京城梨花女子高等普通学校，教育界(教師)， 啓明女子実業学院開院，啓明公民学校夜間部開校， 女子基督教青年会，独促婦人会仁川支部長
イ・ギジョン	独促婦人会	京義道抱川郡	淑明女子高等学校卒，校長、独促婦人会抱川支部長， 抱川基督教宣教会総務
キム・スクヒョン	独促婦人会	京義道水原甲区	
イ・チュンジャ	独促婦人会	忠北忠州郡	
パク・オクシン	独促婦人会	全南順天甲区	独促婦人会順天支部長， 婦人新報社順天支局長
キム・ソニン	無所属，医師	慶北大邱甲区	44 歳，日本下関女学校卒(1935)， 東京女子医学専門学校卒(1938)， 医師，ソニン医院開院(1940)， 大韓婦人会慶北本部長(1949-1959)
崔錦鳳(=崔メジ)	愛国婦人同志会	慶北安東甲区	ソウル梨花女子中学校卒(1904)， 東京女子歯科医学専門学校卒(1930)，医師， 3.1 運動参加(3 年服役)， 愛国婦人会安東支会支部長
金喆安	愛国婦人会	慶北金泉甲区	47 歳，日本明治大政治学科修了(1939)， 大韓女子青年団副団長(1950)
キム・ピレ	無所属	慶南釜山丁区	
チェ・ジョンソン	独促婦人会	慶南蔚山甲区	
イ・スクチョン	独促婦人会	慶南蔚山甲区	
朴寅順	婦女会	江原春川市	開城好壽敦女子高等普通学校卒(1929)， 京城梨花女子専門学校家政科卒(1933),(教師) 春川婦女会長，朝鮮赤十字社創立及び組織委員， 独促婦人会江原道支部長，婦人新聞社春川支局長， 朝鮮赤十字社春川支社婦女奉仕隊

*出典：イ・ベヨン他，「韓国女性史定立のための女性人物類型研究Ⅳ（1945－1948）」，『女性学論集』第 13 集，1999；イ・オクス，『韓国近世女性史話（下）』，奎文閣，1985 を参照して整理。

女性の参政権を主張していた右翼女性指導者たちは19名が出馬した。独促婦人会会員も9名ほど出馬した。いっぽう19名の女性候補のうち西大門から無所属で出馬した金活蘭は次点で落選し、女性は一人も当選できなかった。[124] その後、再選挙と補欠選挙に3名の女性候補が出馬し女性としては任永信が1949年の安東の補欠選挙で初めて当選して全体の0.5%を占めることとなった。任永信はこれを足がかりとして第2回総選挙で再選される。

上の表によれば、女性立候補者の大部分は独促婦人会と女子国民党の幹部で指導的位置にあった女性たちだった。全立候補者19名のうち14名に関する資料で学歴を見てみると、専門大学以上の学歴を持っている立候補者は8名だった。他方、職業別分布を見れば、教育従事者が圧倒的に多かった。活動経歴はほとんどの場合が独促婦人会、女子国民党など右翼女性団体で活動していた。[125] 当時、団体や政党での活動経験が立候補の一つの背景をなしていることを知ることができる。

右翼女性立候補者は、男性の票を期待できなかった。女性の票もまた期待しがたかった。当時女性の92%以上は読み書きができず、投票権さえ行使することが困難な実情であった。『女性新聞』では女性の識字教育がどれほど重要かを力説した。[126] しかし現実的にこれを近いうちに克服することは非常に困難なことだった。選挙戦でも、「男性は情報と宣伝などで女性より優れているが、女性は実力や権威において劣ってはいない」として女性自ら同情して必ず女性代表に票を投じよと主張することもあった。[127] 右翼女性団体は男性立候補者に対して、『女性を代表して出馬した女性立候補者の看板を盗む一方、また女性に限って立候補を自分に譲れと強要する者もいるというから本当に我が民族の恥だというほかない。自分の実力で立候補する資格がない者たちが何のために出馬して幾人もいない私たち女性の立候補者を妨害しようとしたり、またありとあらゆる謀略を尽くして悪宣伝をするのか』と非難した。[128] 女性たちが必ず女性立候補者に対して選挙権を行使せねばならないと強調した。

しかし5.10選挙は失敗に終わった。[129] 女性立候補者は1名も当選できず落選した。これに対して多様な評価が下された。まず「男性の理解不足」と「女性の無能」が指摘された。[130] しかしそれよりもっと大きな原因としては『男尊女卑と、妻は夫に従わねばならないと思いこんでいる女性が古臭い腐った慣習を完全に拒否できなかったこと』が指摘された。当時の女性運動の主要課題である女性に対する啓蒙活動をきちんと遂行できなかった点が大きな問題だというのだ。[131] さらに立候補者が女性団体の代表的運動家たちであるにもかかわらず選挙運動は個人的次元で行われた。その上、女性団体の選挙運動も地

124) 中央選挙管理委員会, 『大韓民国政党史（1945-72年）』1, 1989, 195頁.
125) 『婦人新報』1948.4.18.
126) 『女性新聞』1947.5.13.
127) 『婦人新報』1948.5.7.
128) 『婦人新報』1948.4.22.
129) 投票率は選挙人総数の95.5%にあたる7,487,649人だった。中央選挙管理委員会, 前掲文, 1964, 386頁.
130) 『婦人新報』1948.5.14, 5.15.
131) 『婦人新報』1948.5.15, 5.19, 5.21.

方の立候補者に対する支援にまでは至らなかったが、そのような経済的問題、組織的活動の欠乏などを挙げた。

他方で、落選理由について黄愛徳は『運動する時期と物質、そして女性の自覚不足』のためだと結論付けた。落選したほとんどの女性立候補者は総選挙の失敗原因を女性の啓蒙不足に求めた。[132] 黄愛徳の『私は当選するだろうとは予想もしていなかった。ただ女性の闘いを残したかった。』[133] という言葉のように、当時の女性立候補者たちも現実を直視しつつ自己反省の機会を持った。慶北の金泉で立候補して落選した金喆安は『かつてあまりにも独立運動にだけ重きを置いていたため女性啓蒙をおろそかにしてきたというところに問題を帰結させることできるだろう』[134] と語り、落選した黄愛徳は『私たち女性は過去に独立運動をしたが女性運動はしなかった。今後、女性運動を徹底的にしなくては』と覚悟を語った。[135] また金活蘭は落選の感想で『知識階級の女性と一般女性との緊密な関係を結ばねばならないことを切実に感じた』と語った。[136] 従来の右翼女性団体運動が知識階級の女性を中心に展開されたことについての自己反省であった。

このように選挙は当時の右翼女性団体の指導者レベルの諸人物が従来の活動を反省するきっかけとなった。そのなかでは女性運動の進路についての模索がなされた。総選挙は右翼女性諸団体に自省のきっかけを提供したとともに、女性の政治参加が法的には保障されたにもかかわらず、現実的にはそれがどれほど大変なことなのかを右翼女性運動家たちに確認させる契機になった。選挙活動の過程で経験した広報看板盗難事件や、女性立候補者に対する脅迫などの諸経験が、女性の政治参加が一時になしうるものではないことを悟らせる契機になった。韓国の女性たちが突然国会議員として国の運命を指示する役割を手伝えるようになるとは考えなかったとも述べた。[137] 女性運動に女性大衆の政治参加が必須であるということを悟りもした。しかし一般女性大衆の女性運動への参加のためには「愚昧な」女性大衆に対する啓蒙活動が重要だと述べた。もちろんそれは米軍政期の独促婦人会をはじめとした右翼女性団体の共通したもっとも重要な活動方向でもあった。

V. おわりに

以上、本論で独促婦人会が結成される米軍政期から独促婦人会が大韓婦人会に転化する政府樹立の初期までを対象時期とし、この時期の独促婦人会の組織結成と活動を概観した。

解放後の独促婦人会の組織結成と活動に現れた特徴を整理すれば、次のようである。米軍政期の独促婦人会の幹部陣には日帝末期の親日女性団体と一定の連続性があった。したがってそれらの組織と活動方向などには一定の連続性が見出せる。彼女らは大部分がキリ

132) 『婦人新報』1948.5.23, 5.30, 6.1, 6.2.
133) 『婦人新報』1948.5.23.
134) 『婦人新報』1948.5.21.
135) 『婦人新報』1948.5.15.
136) 『婦人新報』1948.6.17.
137) 『婦人新報』1948.5.15. Summation of U.S. Military Government Activities in Korea,Vol.32. 1948.5. p.188.

スト教女性を中心にした民族主義系列の女性たちであり、反共・国家主義的性向が濃厚であった。

独促婦人会活動は女性の地位向上と権利拡大を目標に掲げたが、彼女らの活動はむしろ反託運動、左翼勢力の弱化と右翼政治勢力の基盤構築、李承晩政権の創出と維持、そして親米・反共の統治体制の構築などにより多くの比重を置いたものであった。これは独促婦人会を中心とした右翼女性団体の指導者たちが、女性の地位向上と権利拡大のような課題は政府樹立以降に考えることができる課題であり、女性運動はまず政府樹立運動に力添えをしなければならないと考えていたためである。すなわち独促婦人会の女性運動家たちは、いまだ女性運動を民族や国家のための運動に従属させて考えていたのである。

独促婦人会は各種行政組織と準国家機構に癒着して自身の影響力を確保しようとした。右翼女性団体は自力で大衆的基盤を確保していくことにおいて非常に脆弱であった。独促婦人会は、大衆的基盤の確保よりも女性運動指導者が直接行政や立法に参加することに関心があった。それは女性の地位向上と権利拡大のためには行政や立法に直接参与することが近道だと考えたためである。その結果、独促婦人会は権力依存的・権力志向的な性格を強くあらわした。そして独促婦人会は米軍政や李承晩政府の行政組織と癒着して活動したが、立法府に女性議員を進出させることには事実上失敗した。女性大衆の支援がない状況で議員として参与することは不可能だったからだ。結局自立的な基盤を準備できなかったこの時期の独促婦人会は、政府樹立以降、国家権力によって操縦される政府側機構に転落するほかないことを予告していた。

＜参考文献＞

『婦女日報』『婦人新報』『婦人新聞』『女性新聞』『毎日新報』『解放日報』『韓国日報』『東亜日報』『大同新聞』『ソウル新聞』『国民報』『漢城日報』『独立新報』『大衆新報』『朝鮮日報』『京郷新聞』『朝鮮人民報』『中央日報』『市政日報』『新生活』『婦人』『女性公論』『女性文化』『婦人京郷』『市政月報』『大潮』『新天地』
G-2 Periodic Report (翰林大アジア文化研究所編『駐韓米軍情報日誌』1~6)
G-2 Weekly Summary(翰林大アジア文化研究所編『駐韓米軍週間情報要約』1~5巻)
OIR Report (国史編纂委員会,『米国務部情報調査局(OIR) 韓国関連報告書』)
『米軍 CIC 情報報告書(RG319)』(中央日報現代史研究所)
『解放直後の政治社会史資料集』(チョン・ヨンウク編)
南朝鮮過渡立法議院,『南朝鮮過渡立法議院速記録』1~5,(驪江出版社, 1984)
国会事務処,『制憲国会速記録』, 1948~50.
世論出版部,『朝鮮の将来を決定する各政党・各団体解説』, 世論出版部, 1945.
民議院事務処,『国会交渉団体の変遷と各主要政党・社会団体の消長、その政綱・政策・党憲』, 民議院事務処, 1957.
カン・ヘギョン,「国家形成期(1948-1950) 李承晩政権の行政機構構成と官僚充員研究」,『国史館論叢』第79集, 1998.

コン・イムスン,「スキャンダルと反共の‘女流’名士、毛允淑の親日と反共の二重奏」,『韓国近代文学研究』第 17 号, 2008.
キム・ソギョン,『女流名士 30 人選集: 人物評判記』, 崇文社, 1953.
キム・スジャ,『李承晩の執権初期権力基盤研究』, 景仁文化社, 2005.
キム・ヨンミ,『米軍政期南朝鮮過渡立法議院の成立と活動』, ソウル大修士論文, 1993.
キム・ヒョクトン,『米軍政下の立法議院』, 汎友社, 1970.
金活蘭,『その光の中の小さな生命: 又月金活蘭自叙伝』, 梨花大出版部, 1999.
リム・ヨンチョル,『パロム高凰京、その生涯と教育』, サムヒョン, 1988.
ムン・ギョンラン,『米軍政期の韓国女性運動に関する研究』, 梨花女子大修士論文, 1989.
朴順天,『私が歩いてきた道、私が歩いて行く道: 私の政治白書』, 新太陽社, 1957.
パク・チャンスン,「脱植民、解放と‘民族’‘民主主義’談論」,『民族共同体の現実と展望: 分断、ディアスポラ、アイデンティティーの社会史』, 韓国社会史学会他, 学術大会資料集, 2009.
パク・チャンピョ,『韓国の国家形成と民主主義』, 高麗大出版部, 1997.
保健社会部,『婦女行政 40 年史』, 保健社会部, 1987.
ソ・ジュンソク,『韓国現代民族運動研究』, 歴史批評社, 1991.
ソン・チュンム,『漢江は流れる: 承堂任永信の生涯』, 東亜出版社, 1972.
梁東淑,「解放後の公娼制廃止過程研究」『歴史研究』9, 歴史学研究所, 2001.
_____,「米軍政期 朝鮮婦女総同盟の組織と活動研究」,『アジア現代女性史』創刊号, アジア現代女性史研究会(CAWA), 2005.
_____,「解放後の女子警察制形成と活動に関する研究(1945~1950)」,『韓国民族運動史研究』, 韓国民族運動史学会, 2009.
ユ・スクラン,「光復後の国家建設過程での性不平等構造形成: 普通選挙法と制憲憲法作成過程を中心に」,『韓国政治学会報』夏号 第 39 集 2 号, 2005.
ユン・ジョンラン,「解放後の国家建設過程における右翼陣営女性の議会進出運動」,『歴史文化研究』第 24 集, 2006.
イ・ベヨン,「米軍政期の女性生活の変貌と女性意識, 1945-1948」,『歴史学報』150, 1996.
_____,「韓国女性史定立のための女性人物類型研究 IV(1945~1948)」,『女性学論集』第 13 集, 1999.
イ・スンヒ,『韓国現代女性運動史』, 白山書堂 , 1994.
イ・オクス,『韓国近世女性史話(上,下)』, 奎文閣, 1985.
イ・ヒョニ,『承堂任永信の愛国運動研究』, 東方図書, 1994
イム・ソンジャ,『大韓民国労働運動の保守的起源』, 先人, 2007.
任永信,『私の 40 年闘争史』, 承堂任永信博士全集編纂委員会, 1986.
チョン・ビョンジュン,『雩南李承晩研究』, 歴史批評社, 2005.
チョン・ヘグ,『南北韓分断政権樹立過程研究: 1947.5~1948.9』, 高麗大博士論文, 1995.
チョン・ヒョンジュ,『大韓民国第 1 共和国の女性政策研究』梨花女子大博士論文, 2004.
崔恩喜, 1991,『女性前進 70 年』, 秋渓崔恩喜文化事業会
チェ・ジョンスン,『朴順天の政治リーダーシップ研究』, 国民大博士論文, 2008.
韓国婦人会総本部,『韓国女性運動略史』, 韓国婦人会総本部, 1986.

韓国女性開発院,『解放後の韓国女性政治参与現況と今後の課題』, 韓国女性開発院, 2001.
韓国精神文化研究院 韓民族文化研究所編,『私が経験した解放と分断』, 先人, 2001.
ハン・チョリョン,『韓国の人物: 第1選 50人選』, 文化春秋社, 1954.
ファン・ジョンミ,「解放後の初期国家機構形成と女性, 1946~1960: 婦女局を中心に」,『韓国学報』 第28巻 第4号, 2002.

(翻訳:永谷ゆき子)

論文に登場する女性指導者たちの肖像

出典:「韓国女性運動略史」(韓国婦人会総本部、1986年)

朴順天

任永信

毛允淑

黄信德

朴賢淑

左から　崔恩喜、 劉英俊、 黄信德

朴瑪利亞

高凰京

崔錦鳳

崔恩喜

朴奉愛

兪珏卿

岩国の住民集会で発言する金貴玉さん

2011年1月22日　朝日新聞

韓国の研究者「平和共闘」

岩国市・愛宕山の米軍住宅

反対住民らの集会で発言する韓国・漢城大学の金貴玉教授

建設計画に反対する住民らが21日に開いた抗議集会に、韓国から金貴玉・漢城大学教授(48)が参加した。金教授は漢城大の研究機関「戦争と平和研究所」の所長で、朝鮮戦争の従軍慰安婦問題などを研究してきた。約50人の参加者に、日韓の市民運動の連携を呼びかけた。

初めて岩国を訪れたという金教授は「岩国は朝鮮半島に非常に近い。岩国基地が強化されれば朝鮮半島の戦争の脅威に直結すると痛感した」と述べた。

米軍再編は韓国でも問題になっているとして「基地の問題が国民一人一人の問題だと感じられないのは日韓とも同じ。アジアの平和を守るために一緒に頑張ろう」と訴えた。

2011年1月22日　中国新聞

「守る会」座り込み
韓国の教授が参加
愛宕山跡地問題

岩国市の愛宕山地域開発事業跡地の米軍住宅化に反対する住民団体「愛宕山を守る会」の座り込みに21日、韓国・ソウルの漢城大の戦争と平和研究所所長、金貴玉教授(48)が参加した。金教授は「岩国の基地問題は朝鮮半島やアジアの平和に大きく結びついている」と述べ、住民にエールを送った。

金教授は社会学が専門。在韓米軍基地の反対運動などを研究テーマとしている。昨年8月から客員研究員として1年間、同志社大に留学している。

初めて岩国を訪れた金教授は「韓国がとても近いと感じた。沖縄の基地問題に比べ、空母艦載機の移転など岩国のことは韓国で知られていない」と指摘。住民活動をメディアを通じて世界に発信することが大切と話した。

【特別寄稿】

私たちは戦争の東アジアではなく平和の東アジアを望む

金貴玉

はじめに：空がおかしい

外国人として日本生活を始めてから５ヶ月目だ。京都の美しい街を歩きながら、時々空を見上げる。見慣れない看板だらけの街とは違い、空だけを見ればここが日本なのか韓国なのかわからなくて嬉しい。秋の空が本当に青い。そんな美しい空に折々、韓国と日本を共通に感じさせるもう一つの空が広がる。

その時々に空にできる「飛行機雲」。小さい頃はあの雲にあこがれた。空に長く伸びた雲を見ながら、空を飛べるようになりたいと願った。いま東アジアの空を乱れさせているあの雲と、雲を形成する光速の戦闘機を見れば不安な気持ちになる。毎日訓練している戦闘機は、韓（朝鮮）半島と東アジアに戦争の危機を日常化させているからだ。ドイツの空でも時たまこんな戦闘機雲を見たりした。どこに行こうと戦闘機は戦雲がたちこめる韓（朝鮮）半島を忘れられなくさせる。

＜写真１＞戦闘機と戦闘機雲が日常化した日本の空

（金貴玉撮影@京都市岩倉，2010.9.29）

去年の11月20日頃から12月20日までの一ヶ月間は、戦争の不安で日本の生活が針のむしろのようだった。韓（朝鮮）半島は戦争に突き進んでいるのに、研究年（2010.9.1～2011.8.31)を日本で過ごしているのが罪を犯しているように思われた。こんな想像もした。もしも韓（朝鮮）半島にひとたび戦争が起こるなら私は祖国に帰れるだろうか？大韓民国出身であって当然大韓民国に帰らねばならないが、私は戦争している祖国を祖国として認められない。大韓民国に帰ることになったとしても、戦争に賛成してではなく戦争に反対して帰るのだと…。

こんなことを考えていたしばらくの間はとても苦しかった。空を見上げることが慰めにならず、混乱する韓（朝鮮）半島の戦争危機を見ているようで本当に苦しかった。日本から出撃する戦闘機と戦闘艦、核搭載航空母艦が韓（朝鮮）半島に突撃する悪夢も見た。

分断は韓（朝鮮）半島にだけあるのではない

2004年12月、沖縄大学で開催された『沖縄の占領と日本の復興』(プロジェクト責任者：中野敏男、東京外国語大学教授）に発表者として招請されたことがあった。3日間の学術シンポジウムを終え、4日目は米海兵隊基地である普天間基地、極東最大の米空軍基地である嘉手納基地とともにジュゴンで世界的に有名になった小さな漁村である辺野古の海洋基地予定地を訪問した。2004年、沖縄国際大学では嘉手納基地に着陸する予定だったヘリコプターが大学の建物に衝突する事件があった。当時、このヘリコプターには劣化ウラン弾が装填されていたそうだが、米軍と日本警察によって民間人の接近が統制され事件が抑えられていた。その大学の現場を見ながら惨憺たる気持ちがした。さらに辺野古では村の住民たちとともに座り込みもし、まだジュゴンが泳いでいるだろう海洋基地予定地の海の監視活動もした。韓国でも折々に米軍基地を見たが、沖縄は行く先々で膨大な規模の基地に驚かされた。また米軍基地があるところには「分断」の鉄柵があることを知った。

<写真２>辺野古の海辺にある分断の鉄柵
（金貴玉撮影@辺野古，2004.12.24）

ところで今更のように実感したのは、より一層重要な問題だった。韓（朝鮮）半島の分断と日本の分断は別個のものではなく、徹底的に結びついているという点を自覚したのだ。それぞれの地域は分断されているが、米国を主軸として韓国と日本の軍事基地は徹底的に連結されていた。まさに米・日・韓の軍事同盟は紙の上のものではなく、土地と海と空、そして人間にとって存在していたのだ。このような認識に基づいて、米軍基地拡張移転の計画がある韓国平澤（ピョンテク）の住民や、韓国の平和運動家たちが沖縄にたびたび訪問して辺野古海洋基地設置反対と辺野古基地拡張反対運動に参加してきた。9 年におよぶ反対運動によって米国と日本政府は計画を撤回した。

そんな 2006 年頃、韓国のマスコミに新しいニュースが伝えられた。米海兵隊の航空基地がある山口県の岩国で住民たちが岩国基地拡張を巡って住民投票を行い、この地の住民たちの積極的な参加とＡＷＣなど平和運動の積極的な支援のなかで基地拡張案に反対の意志が示されたというのだ。2007 年には友人の藤目ゆき先生を通じて、岩国基地の米兵によって引き起こされた性暴力事件について問題提起する声明に賛同署名をしたこともあった。韓国でも、数年間にわたる平澤基地拡張反対運動によって平澤基地移転はしばらく留保された。

風船効果を阻止できるのか

・韓国で平澤米軍基地反対運動を見ながら、平澤基地周辺の住民たちを見ながら、いつも抱く危惧があった。ソウル龍山米軍基地の撤収は本当の撤収ではなく、平澤基地への拡張移転にすぎなかった。沖縄普天間基地の撤収は真の撤収ではなく、辺野古への基地拡張計画として現れた。言い換えれば、風船のこっち側を締め付けたら向こう側が膨らみ、向こう側を締め付けたらこちら側が膨らむだけで真の変化はない。

平和運動諸団体はこの問題の終局的な解決が何かを知っている。東アジアからの米軍の撤収、さらには世界的な核兵器の撤廃と軍備縮小を通じた平和の実現だと。

韓国の場合、真の撤収ではないといえどもこれまでの政府のもとで米国が長いあいだ大言壮語してきた「軍作戦統制権」を韓国に返還させる決定をした。ところが現在の政府は涙を流して返還はしないといいながら、米国の望みどおりに「韓米ＦＴＡ」を締結するというプレゼントを与えて軍作戦統制権の返還を保留した。軍作戦統制権を返還するという意味は、現在の「韓米同盟」の性格を変える重要な出発点になるものだ。「韓米相互防衛条約」（1950 年 7 月大田条約、1953 年 10 月署名）第 6 条には『本条約は無期限に有効である。どちらの当事国であっても、もう片方の当事国に通告してから一年後に本条約を終了させることができる。』となっている。言い換えれば、韓国と米国の力関係上、米国側に条約変更の意志がないかぎり韓国での米軍基地の配置や兵力の配置は永久的だということだ。米国は他国に自分の軍事力を配置できる持続的な条件を確保せねばならない。持続的な条件を確保するためには相手国の平和と安定は脅威にほかならない。2000 年代中頃まで続いた韓（朝鮮）半島の平和的流れは米国にとって脅威ではなかったろうか？

延坪島（ヨンピョンド）砲撃事件と韓（朝鮮）半島平和の課題

1998 年金大中政府が発足し、朝鮮民主主義人民共和国に対して「太陽政策」をとった。太陽政策に対して統一なき平和的吸収政策だという批判があったが、太陽政策に助けられて 2000 年 6. 15 南北共同宣言が可能になった。南北共同宣言に続いて 2007 年 10 月 4 日には『南北関係の発展と平和繁栄のための宣言』があった。10. 4 宣言には驚くべき内容が込められていた。韓（朝鮮）半島の平和体制への転換を目標として、その転換のために南北政府とともに第 3 次・第 4 次首脳会談を行うことを明示した。さらにそれに伴う具体的な計画が含まれている。その 3 条を見てみよう。

> **3．南と北は軍事的敵対関係を終息させ、韓（朝鮮）半島で緊張緩和と平和を保障するために緊密に協力することとした。**南と北は互いに敵対視せず、軍事的緊張を緩和しつつ紛争問題を対話と協議を通じて解決することとした。南と北は韓（朝鮮）半島でのいかなる戦争にも反対し、不可侵義務を確固として遵守することとした。**南と北は西海での偶発的衝突防止のために共同漁労水域を指定**し、この水域を平和水域とするための計画と各種協力事業についての軍事的保障措置問題など、軍事的信頼構築措置を協議するために南側国防部長官と北側人民武力部部長のあいだの会談を、本年 11 月中に平壌で開催することにした。

南北の軍事的信頼を構築し、いかなる衝突をも防止するために、これまで衝突がひんぱんに発生した西海上に「共同漁労水域」を定めることとした。もちろん 2008 年に李明博政府が成立するとすぐ軍事会談を開催したのだが、韓国政府の『非核開放 3000』政策によって共同漁労水域指定等の平和体制のための議題を雲散霧消させた。これがまさに 2010 年 3 月 26 日の「天安艦事件」に続く 2010 年 11 月 23 日延坪島砲撃事件の背景原因になった。

最近、韓国政府は「非武装地帯（DMZ, Demilitarized Zone）」の平和的使用をめぐる各種の国内外会議や官製団体を作っている。非武装地帯問題は、韓（朝鮮）半島分断 65 年、朝鮮戦争 60 年が必ず解決せねばならない大きな宿題にちがいない。南北対話が断絶した状況にあって政府が DMZ 問題を世界化し議題化することで、世界の専門家たちの関心を呼び起こそうとする努力は嘉すべきだ。

しかし振り返ってみれば DMZ に関する行事や議題は新しいものではない。李明博政府の出発当時の 100 大国政課題の一つとして「非武装地帯の平和的利用」があるとしても、DMZ に関連する平和的接近はすでに金泳三政府のときから開始され、金大中政府と盧武鉉政府において具体的に論議されてきた。むしろ疑わしいのは、現政府において DMZ 問題が飛び出した背景であり、そこにはこれまでの 10 数年の南北対話が消え去り南北間の緊張ムードが作られている状況があり、逆に韓国主導の平和の議題を導き出すやり方の一つが DMZ 問題への平和的接近ではないかという気がする。本当に DMZ を平和的に使用したいというならば、DMZ を統制している停戦協定を平和協定に、停戦体制を平和体制に転換しなければならない。

分断には南北・米国・旧ソ連・日本政府の責任があり民間人の犠牲が反復されている

多くの韓国人は、現政府のもとで韓国内の政治状況や南北関係が 1970, 80 年代に後退し

たと語っている。南北関係が緊張を超えて対決局面に突き進むなかで最も具体的な被害をこうむっている人々は「離散家族」である。私は離散家族研究を通して、分断と戦争の直接的な離散の被害者である離散家族を旧離散家族と名づけ、朝鮮戦争以降に発生している離散の被害者、拉致被害者や脱北者はすべて新離散家族と名づけた。なぜならば離散の当事者だけではなく、思いがけず離散させられた家族の問題をすべて考慮せねばならないのだから離散家族の問題としてみるのが当然だ。

一例として、脱北者はもしも南北分断が起こらなかったなら国内の「移住者」に過ぎない。言い換えれば、ある地域の経済難によって他の地域に移住することであって、「脱出」が必要でない正常な社会的移動である。またこのような社会的移動をしたからといって家族とふたたび会えなくなることもない。自ら会わないことを望まない限りは。したがって脱北者問題も個人の問題を越えて南北の政権の問題、韓（朝鮮）半島分断の問題として見なければ解決策は出てこない。

さらに私は長らく離散家族を研究する過程で、朝鮮戦争期から最近まで南北の政権によって行われてきた拉致問題を数多く見た。韓国では北の政権による「拉致」問題を語っており、反対に北朝鮮は南の政権による「拉致」問題を語っている。その反面、自らの行為については反省していない。

もう一つの例として、非常に胸の痛む話ではあるが日本の横田めぐみさんの例を挙げてみよう。最近、日本のNHK放送の横田めぐみさんに関する映像（2011.1.8）が放映された。市中でもめぐみさんが生きているという噂が広まっていると聞いた。その噂の真相には、大韓航空機爆破事件の金賢姫が2009年にした「生きている」という発言があるが、2010年7月に日本を訪問した彼女は「知らない」と語った。ともかくその噂の核心には「北朝鮮の悪魔化」がある。めぐみさん事件の真相を知らない私としては、めぐみさん自身が経験しただろう苦痛や家族の痛みに対しては哀悼の意を表したいと思う。しかしそのような拉致問題に対して日本政府は本当に自由であり正当であるのか？

第一に、現実的にめぐみさん事件を含む拉致被害者問題が発生したとき、なぜ日本政府は積極的に北朝鮮政府との対話を通じてこの問題を解決しようとしなかったのか？第二に、歴史的に日本政府は朝鮮人に対して行った多くの強制動員と帰国措置についてはなぜ謝罪しないのか？さらには1945年韓国人原爆被害者については韓国への強制帰国措置をとっただけで謝罪はおろか何の被害賠償もしなかった。第三に、脱北者集団の一つである日本帰還脱北者（200人以上と推定）に対する問題の真相にも日本政府の責任が大きい。1959年国交のない状態で日本は朝鮮人の「帰国措置」の一環として北朝鮮の背を押しのけるようにして米国・中国・旧ソ連などの協力を受け、自身が責任を取りたくない朝鮮人93,039人を北朝鮮に送った。彼ら個人としては日本での絶望感と当時の北朝鮮に対する多様な期待と希望があって所謂「帰国船」に乗ったのだろうが、それが可能だった背景には日本の「棄民政策」があった。

結局、韓（朝鮮）半島の分断は、米国と旧ソ連、日本などによるマクロ構造的妥協と戦争の結果である。また南と北の政権の分断の助長と競争の結果である。その結果、すべての被害は民衆が受けてきた。離散家族のみならず、韓国内の戦時国家暴力による百万人の虐殺や、韓国内の戦争孤児10万人以上の棄民化（最小4千人以上の混血孤児）、戦時における女性に対する無差別性暴力や性売買化などの膨大な被害が国家という名によって行わ

れた。軍隊と警察組織以外にも、一部は反共組織や類似組織によって被害が加えられた。しかし反共団体などもまた李承晩政府から命令を受けて不法行為を行ったのだから国家の責任であることに間違いはない。停戦協定締結後も、被害者たちは再び連座制や監視、査察などを通じて持続的に被害をこうむってきた。このような点は韓国へと脱出した脱北者の生活もまた同様である。したがって現在まで民衆が受け続けている被害とトラウマは、治癒されないままもっぱら政争の対象になっている。

近ごろは新自由主義経済政策によって経済は拡張されるが景気浮揚はならず、青年たちの就職や未来に対する心配は並大抵ではない。反面いくつかの強大国は新冷戦ムードを助長して軍備拡張に乗り出している。景気浮揚にともなう完全雇用の時代は民衆に力を与えるので、むしろ景気浮揚は強力な国家に対する熱望を可能とする。そのような強力な国家に対する熱望、いわゆる「愛国主義」が、強力な軍隊、すなわち軍備拡張へと動員されている。そのような力の論理は結局のところ景気を不安定にさせ、青年たちの未来を蝕んでいることを忘却させようとしている。忘却させるもう一つのやり方が、悪魔化させる対象を持続的に生産することだ。いわゆる「悪魔化の政治学」とでもいおうか？

本当に北朝鮮が「悪の枢軸」になれるのか？米国・中国・日本・ロシアに取り囲まれた、あるいは壁の片隅に追いやられた「ハツカネズミ」の身の上とでもいおうか。マクロ的な猫の飽食性を見ることができないまま、死の危機に怒り震えているネズミを悪だというならば、世の中に悪はないだろう。

実際に韓（朝鮮）半島の分断は過去の冷戦体制の産物であり東アジア反共冷戦の結果である。西欧の冷戦は消え去ったが東アジアではアンバランスに残っており、それによって民衆の生命が脅かされ続けている。今日私たちはその現場に立っているのみである。だから私は『戦争の東アジアではなく、平和の東アジアを望む』。また現在は過去清算問題と冷戦的対決の場になっているが、終局的には自由で平和に暮らすことができ、交流し経済的繁栄をもたらすことができる平和の東アジアを夢見る。

〈後記〉

2011年1月20日から3日間、岩国市を初めて訪問した。大阪大学の藤目ゆきさん、AWCの活動家である永谷ゆき子さんらとともに現地を訪問して、岩国の市民社会で米軍基地問題を数十年のあいだ提起して来た岩国市会議員、田村順玄さんに会って岩国の米軍基地問題に生々しく接することができた。また1月21日には岩国住民が10日ごとに行っている座り込みに参加しながら米軍基地拡張に反対する住民たちの決意を感じることができた。21日午後からは関東学院大学の林博史さん、立命館大学の秋林こずえさん、大妻女子大学の平井和子さん、長野県立大学の兼子歩さんらとともに、岩国の米軍基地周辺を田村順玄市会議員の案内を受けてフィールドワークし、一緒に市民運動をしている岩国教会牧師の大川清さんに会った。その晩には韓国と日本、東アジアの平和問題に関して私が基調発表をして一緒に討論をする討論会を行った。そういう過程でさまざまなことを考えるようになった。

第一に、本州の南端の山口県岩国について日本の市民が意外に関心を持っていないということを発見することができた。日本の市民は日本の米軍基地問題と言えば大体沖縄に注目して来た。この点は韓国の人々も違わない。沖縄以外に有名な米軍基地としては東京の鼻先にあると言える横須賀だ。一方、本州の南端であると同時に九州と結ぶ山口県岩国の米軍基地に対してはほとんど注目していない。岩国の米軍基地こそ拡張の一途にあって韓国と日本をつなぐ要衝地であり、「対アジア攻撃拠点」になっているという。岩国の米海兵隊部隊からは戦闘機が韓国の非武装地帯までも出撃したりする。岩国の存在は沖縄とともに韓（朝鮮）半島問題と日本の問題が別個の問題ではないことを悟らせる。

このような事実に対して岩国の市民社会では憂慮の声を上げている。田村順玄市会議員や大川清牧師らの粘り強い米軍基地拡張反対運動に応えて、2006年米軍基地拡張をめぐる市民の賛否投票では圧倒的な市民たちが反対票を投じた。しかし日本政府と米軍は岩国市に対する財政補助金の問題にかこつけて基地拡張を試みている。基地拡張から派生した問題は軍事的緊張感の膨脹だけにとどまらない。漁業と農業を土台として安定した暮しをしてきた岩国の市民たちが今は自分の職業を捨て、青年たちは故郷を離れるようになり、そこは老人たちの都市になりつつある。さらに政府補助金に頼って虚しく歳月を送る中年層も増えているという。また美しかった自然も荒廃して生態系も混乱を経ている最中だ。戦闘機の飛行騒音や射撃騒音などによって人や自然の被害も増えていっているという。

第二に、海外米軍基地問題に接近する過程で、果して米軍が韓国や日本で犯して来た犯罪をどのように理解したらよいのかについて考えるようになった。韓国や日本、かつてのフィリピンなどの海外米軍基地には米軍犯罪が止むことなく発生した。日本、韓国などでは米軍犯罪の報告書が作成され続けている。藤目ゆき教授は2010年の著書である『女性史からみた岩国米軍基地−広島湾の軍事化と性暴力』で、朝鮮戦争以後に岩国の米軍が犯して来た性犯罪を10年間に渡って追跡し、性暴行の様相と問題点を詳細に提示している。また沖縄では「基地・軍隊を許さない行動する女たちの会」も、1945年 4月に米軍が沖縄を占領してから2008年までの沖縄での米軍による性犯罪を調査して報告書を提出した。

米軍による性暴行問題は、女性団体やフェミニストによって注目されてきた。戦争による女性の被害を性暴行事件とともに軍慰安婦問題を通じてよく見てきたはずだ。一方、米軍犯罪でより多くの比率を占める交通事故や一般暴力事件などはあまり関心を持たれることがなかった。しかし2002年韓国の「米軍装甲車による女子中学生轢死事件」のような交通事故に見られるように、米軍が駐屯国の市民に対してどんな態度をとってきたか、米軍当局の政策や立場は何なのかに注目してみなければならない。言い換えれば性暴行事件の性格は複合性があるが、交通事故や他の暴力事件の延長線上にあることを無視してはいけないだろう。交通事故は単純に見えるが、実はここには複雑な問題があると思われる。すなわち米軍にとっては駐屯国の交通法規は言うまでもなく、市民の生命などは考慮する価値がないと思われているし、ひいては 駐屯の意味には「支配」または「占領」の意味さえ内在しているのではないかという疑問を持たせる。

第三に、日本の岩国問題や沖縄問題、韓国の平澤問題や済州の江汀（カンジョン）村の問題を東アジア平和の観点から見るという点について、軍事的観点だけではない主体的観

点からも見る必要がある。1月21日、岩国の大川清牧師との懇談会で、2006年の市民投票の雰囲気をいろいろな角度から考えるようになった。この住民投票は米軍基地拡張を阻むために岩国市民が心を一つにしたことを示したという点で世人の注目を集めてきた。特に特別永住権を持った外国系市民(例：在日朝鮮籍・在日韓国籍の市民)に対しても投票権を付与したという点についてはさまざまな点で亀鑑になると言える。当時、旧岩国市の市議会がそのような決定をすると、地域右翼新聞や諸団体は『左翼が主導する岩国住民投票を不成立に終わらせよう!』などと日本版「色彩論（左翼攻撃・アカ攻撃)」を主導した。しかし在日外国人問題は当時、投票の主要議題になることができなかった。住民投票の結果、岩国の米軍基地拡張に反対することで圧倒的な投票が成り立った。たとえ国籍が日本籍ではないとしても在日外国人もまた日本で生まれ育って、働いて税金を払いながら市民的義務を履行している。そしてそれだけではなく、戦争が起これば日本の一般市民と等しく苦難を経験するしかない。

この点をもう少し連関づけてよく見れば、岩国の基地拡張反対運動は「基地が自分たちの領土から出て行きさえすればよい」と言うことでは解決されないということだ。韓国と日本、沖縄などの基地が互いに連結されて東アジアの平和に脅威を与えるように、戦争は東アジア全体の民衆の苦痛と死をもたらすという点を忘れてはいけない。平和運動においては、「差異」の論理を越えて、「共通」の論理、すなわち連帯の論理が基礎になる時、平和的手段による真の平和を作ることができる。

※ 本稿は2011年1月初旬に執筆を始め、7月20日に完成した。本稿を通じて、2011年1月21日に岩国で開かれた研究会に私を招待してくださった藤目ゆきさんと林さんたち、翻訳と通訳で苦労した永谷さんに感謝のあいさつを伝えようと思う。

（翻訳：金貴玉、永谷ゆき子）

執筆者紹介(50音順)

◇池田高巌(いけだ・たかね)
翻訳業

◇金貴玉(きむ・きおく)
漢城大学教授。同志社大学客員教授(2010. 9. ～2011. 8. 31)。
日本語訳のある著作に、「朝鮮戦争時の韓国軍『慰安婦』制度について」(永谷ゆき子訳、『アジア現代女性史』第4号、2008年)、『朝鮮半島の分断と離散家族』(永谷ゆき子訳、明石書店、2008年)など。

◇永谷ゆき子(ながや・ゆきこ)
翻訳業

◇藤目ゆき(ふじめ・ゆき)
大阪大学教授
近著に、『女性史からみた岩国米軍基地－広島湾の軍事化と性暴力』(ひろしま女性学研究所、2010年)、「エンパワーメントを希求する女性たち－人身売買「被害者／犯罪者」という二項対立を超えて」(中村安秀・河森正人『グローバル人間学の世界』大阪大学出版会、2011年)など。

◇松田祐子(まつだ・ゆうこ)
梅花女子大学非常勤講師
近著に、『主婦になったパリのブルジョワ女性たち－100年前の新聞・雑誌から読み解く』(大阪大学出版会、2009年)、『アニメで読む世界史』(藤川隆男編・共著・山川出版社、2011年)など。

◇南田みどり(みなみだ・みどり)
大阪大学教授
近著に「ビルマ語版『ビルマの竪琴』は何を語る?」(『世界文学』第113号、2011年7月)、「日本占領期におけるビルマ作家協会機関誌『作家』の役割について」(『大阪大学世界言語研究センター論集』第5号、2011年)、編訳『テインペーミン短編集』(大同生命国際文化基金、2010年)など。

◇梁東淑(やん・どんすく)
漢陽大学講師
日本語訳のある著作に、「米軍政期 朝鮮婦女総同盟の組織と研究活動」(永谷ゆき子訳、『アジア現代女性史』創刊号、2005年)、「『世界女性学大会』『平和のためのアジア女性会議』参観記」(永谷ゆき子訳、『アジア現代女性史』第2号、2006年)など。共著として『韓国近現代史を読む』(2010年、景仁文化社)がある。

第七号 ★
2012年2月1日発行
ISSN 1880－1102

編集者―「アジア現代女性史」編集委員会
発行者―アジア現代女性史研究会（代表：藤目ゆき）
カバーデザイン―岩見利子

〒562－8558 大阪府箕面市粟生間谷東8－1－1
大阪大学箕面キャンパス 藤目研究室気付
072－730－5397(tel/fax) fujime@hus.osaka-u.ac.jp